

中国近世の江南私家園林と士大夫の交遊

2021 年度

庄 涵淇

中国近世の江南私家園林と士大夫の交遊

2021 年度

大阪市立大学 大学院文学研究科

しょう かんき
庄 涵 淇

目次

序章 宋代園林研究の現状と課題	1
1. 園林とは何か?	1
2. 明代園林研究の方向	2
3. 宋代園林研究	4
(1) 園林の公共性	4
(2) 園林構造、造園手法、造園思想	6
(3) 園林生活に関する研究	10
(4) その他	12
4. 本研究の課題	13
(1) 史料	13
(2) 士大夫の交遊活動	13
(3) 宋代園林空間の機能	14
(4) 宋、明の園林の比較	14
第1章 宋代湖州園林と士大夫の交遊	17
1. はじめに	17
2. 湖州園林の概況	18
(1) 湖州について	18
(2) 園林の概況	19
3. 湖州園林の空間と交遊	26
(1) 葉夢得と葉氏石林	26
(2) 牟氏と牟端明園	30
(3) 趙氏園林	34
4. おわりに	36
第2章 宋代蘇州園林と士大夫の交遊	42

1. はじめに.....	42
2. 両宋蘇州園林の概況.....	44
(1) 平江図から見る蘇州私家園林の分布.....	45
(2) 著名な園林が集中.....	49
(3) 士大夫とその私家園林.....	54
3. 蘇州園林と士大夫の交遊.....	56
(1) 蘇州出身士大夫の園林生活とその交遊.....	56
(2) 蘇州に移住してきた園林主とその交遊.....	63
4. おわりに.....	68
第3章 宋代紹興園林と士大夫の交遊.....	77
1. はじめに.....	77
2. 宋代紹興の概況.....	79
(1) 政治経済の背景.....	79
(2) 自然文化の背景.....	79
3. 私家園林の概況.....	81
(1) 本章の研究対象について.....	81
(2) 園林の分布とその特徴.....	82
4. 園林生活.....	84
(1) 紹興城内の名園——沈園.....	84
(2) 会稽、山陰の私家園林.....	86
(3) 新昌の私家園林.....	92
5. おわりに.....	96
第4章 明代紹興園林と士大夫の交遊 ——山陰祁氏の寓園を例として——	101
1. はじめに.....	101
2. 明代園林研究の概況.....	101

(1) 建築史.....	101
(2) 園林史・園林文化.....	102
(3) 園林の機能.....	103
(4) 園林生活.....	103
3. 紹興私家園林の概況.....	104
(1) 私家園林の分布.....	105
(2) 私家園林の特徴.....	107
4. 祁氏家族と寓園.....	110
(1) 祁氏の家系.....	111
(2) 造園の経緯.....	112
5. 祁氏の日常空間と園林生活.....	117
(1) 祁氏の寓園における園林生活.....	117
(2) 寓園空間の変遷.....	120
(3) 祁彪佳のいない寓園.....	129
6. おわりに.....	132
終章.....	141
1. 本論のまとめ.....	141
2. 総合的考察.....	144
3. 元代の江南私家園林.....	146
4. 今後の課題.....	149
(1) 異なる時代における江南私家園林の分布.....	149
(2) 周辺社会における私家園林の発展.....	150
(3) 史料の発掘、活用.....	150

【圖表目次】

圖 1：湖州府城內私家園林分布圖	20
圖 2：湖州府城外私家園林分布圖	20
圖 3：弁山圖	20
圖 4：湖州宗室簡略世系圖	25
圖 5：石林構想圖	27
圖 6：北宋蘇州私家園林分布圖	46
圖 7：南宋蘇州私家園林分布圖	46
圖 8：宋代紹興私家園林分布圖	83
圖 9：明代紹興私家園林分布圖	106
圖 10：寓山圖	114
圖 11：寓園空間利用圖 A	123
圖 12：密園、柯園、寓園、彤園分布圖	124
圖 13：寓園空間利用圖 B	127
圖 14：寓園空間利用圖 C	129
表 1：宋代湖州私家園林表	37
表 2：宋代蘇州私家園林表	70
表 3：宋代紹興私家園林表	97
表 4：祁彪佳交遊表	119
表 5：明代紹興私家園林表	133
表 6：元代蘇州私家園林表	151

序章 宋代園林研究の現状と課題

1. 園林とは何か？

袁守愚（2014）は園林について次のように述べている。

園林という言葉は後漢の班彪の『遊居賦』に最初に現れる。即ち「瞻淇澳之園林、美緑竹之猗猗」であり、竹の産地として有名な淇園を描いている。後漢から魏晋まで、「園林」という言葉は主に生産の場所を表現している。例えば「淇澳之園林」は竹の園である。両晋に、園林とは大量の樹木或いは果樹の園を指している。また、仏教の経典を翻訳する時に「園林」はよく使われ、主に世俗の園林、僧侶修行用の園林、天神世界の園林に分けられる。さらに、前代と比べて、魏晋南北朝の「園」の機能は、生産から、娯楽及び日常生活に変化する傾向があったと論及した。そして、先秦時代から魏晋南北朝までの皇家園林と私家園林の命名については、先秦以来、「囿」「苑」が皇家園林の命名にしか使えず、私家園林の名称は「園」「圃」に限られているのに対し、魏晋南北朝に至ると、文人園林の山水審美への実践及び精神世界を深めることについての影響を受けて、皇家園林の命名にも「園」を使い始めたと述べる¹。

また、早期の先行研究においても園林の概念が述べられているが、様々な定義を行っている。ただ、研究を通観すると、園林概念の範囲は次第に広がっており、次のように広義と狭義の概念も提出されている。

広義の園林は、定められた区域の中で、自然山水、地形或いは人工的に開かれた山水の地形を利用して改造し、植物の栽培と建物の配置を適合させて、人が観賞、息抜き、居住ができる環境を提供する場所のことである。それに対して、狭義の園林を定義すれば、即ち、伝統的古典園林を指す²。

園林の形態から考えれば、この定義が適切と考えられる。しかし、園林の性質や機能は時代の流れとともに変化していくため、園林の形態だけではなく、内面的要素を含めて考えると、各時代の園林を同じ定義にすることは妥当ではないかもしれない。その時代の人々は園林に対して如何に理解していたのか、どのような園林を好んでいたのか、どのように園林を利用されていたのかというような問題関心から出発して、園林を理解していきたい。

中国園林は主に皇家園林、私家園林、寺観園林に分けられる。他に、主流とは言えないが、例えば、衙署園林、祠堂園林、書院園林、公共園林などもある³。園林の造園技術が唐

代に至ると成熟する。そして宋代の園林は、唐代の園林を踏まえて、中国園林史において芸術的頂点に至ったほどの存在であると言われている⁴。さらに、造園の風潮は皇帝から士大夫層に下降し、明代中期以後、江南において士大夫の造園ブームが起こり、その園林は贅沢を極めた。

ここで強調したいことは、宋代は文人園林が繁栄し始めた時代だといえよう。宋代では科挙を通じて官僚となっていく士大夫が政治、社会、文化の担い手となり、士大夫文化が宋代社会にもたらした影響は園林にも反映されていた。士大夫たちの積極的造園活動により、文人園林が私家園林の主体的存在となり、さらに、皇家園林や寺観園林にも影響を与えていた⁵。本論が着目するのはこの文人園林である。

これまでの園林研究、特に明清園林に関する研究は、建築史（園林美学、造園手法、園林芸術、造園要素などを含む）、文化史、社会生活史など、様々な方面に及び、多くの成果が出されている。しかし、それと比べると、宋代には私家園林が繁栄していたにもかかわらず、研究はまだ十分ではない。明清の園林は中国園林の到達点を示すとは言えるものの、園林全体を代表するわけではない。また、宋代園林は明清園林の造園技術、内部構造などに大きな影響を与えている。そこで、本章ではまず、明代の園林研究の現状を述べ、それを参照した上で、時代を遡る形で宋代園林研究を整理し、新たな研究の可能性を述べることとする。

2. 明代園林研究の方向

従来の明清の園林研究の多くは、揚州、蘇州などの江南の園林を取り上げ、建築学や美学の視点から園林の空間を分析している。また、文化史及び文学の観点によって明清園林を分析する研究も見られる。更に、園林の社交的、経済的機能、及び家族が園林で行った活動についての研究成果も少なくない。本章では明代の園林研究を網羅的に紹介することは避け、宋代園林との差異を明らかにするために、代表的な研究成果を紹介する。

例えば、ジョアンナ・ハンドリン・スミス（1992）は、祁彪佳による寓園の造成を例として、祁彪佳が園林を造った動機、及び社会交際の媒介としての園林の機能を中心として論じ、明末の江南社会が迎えた経済繁栄の状況の中で出現すると指摘する。士大夫の金銭に対する態度の変化、及び、その価値観の変化を検討した。更に、園林が備えている社会的機能及び政治関係、つまり、士大夫の人間関係と社会的声望の構造について、考察を加えている。高価な花木魚石を用いて造った比類ない園林の風景は、たえず著名な文人を引き寄せることになったが、それこそが祁氏の目的であったと指摘する⁶。一方、クレイグ・

クルナス（1996）は、庭園が社会的機能を備えるだけではなく、経済的機能も持っている
と指摘するとともに、美学の観点のみから園林を分析する手法を批判し、次のように述べて
いる。「明末の庭園とは、ひとつにまとまった意味を持つものではなく、競合する意味を
もつ場所であった。すなわち、美学的に純粋な空間として、あるいはとりわけぜいたくな
ものとして、ひとまとまりの富として、多様に解釈できるものであった。この点において、
庭園は「ぜいたく」そのものというコンセプトに近いが、特定の社会環境のなかで歴史的
に発生する争いの場でもある」と。そのうえで、「ぜいたくとは文化的産物の一タイプでは
なく、取引の一タイプである。明代においては、それは市場の観念、いやより正確には商
品の観念と分かちがたいものであった」と述べて、明末の庭園を商品経済という立場から
分析するべきだと主張した⁷。巫仁恕（2013）はクレイグの見解に賛同しつつ、明清時代に
江南園林文化が繁栄した原因を検討するに際しては、社会経済の脈絡をよそにただ単純に
士大夫層と文人文化の産物とみなすのは正しくない。明清園林が出現するのは当時の社会
の風潮や都市化と密接な関係にあると主張した。また、蘇州を例として園林の位置と都市
発展の関連性を分析し、園林が開放されてから、一般庶民に影響を与え、社会経済の発展
に従って都市化が促進され、園林は都市化と社会経済の発展の象徴物として理解すべきで
あると指摘する⁸。

これらの研究は園林の機能、園林での日常生活及び園林と社会経済との関係を研究課題
としている。すなわち、従来の文学、文化、美学、建築学という枠を打ち破り、園林の社
交的、経済的機能に着目している。明清の園林研究はこのような研究によって変化を遂げ、
園林研究を新たな方向に導いたのである。

また、史料の新たな方向について触れておく。造園史料をめぐる研究成果として、例え
ば康格温（2010）は『園冶』（明の計成が著した造園技術書）を中心として、園林主の造園
的需要に応じるために造園するという立場から出発し、『園冶』に現れた園林の様子に基づ
いて、明代文人の園林生活を論じている⁹。さらに、荒井健（1994）は日記史料を用い、祁
彪佳の生涯を紹介した上で、園林内の具体的な山、建物などの配置を明らかにした。寓園
の順路に沿って49景を造った時期、場所、名前及び名前の出典、そして、各々の景勝地を
詳しく紹介し、造園計画をはじめ、寓園への進出、宿泊、そして景勝の新造、移築、命名、
造園協力者までを分析した。それとともに、『寓山志』の編集活動にも言及している¹⁰。

さらに、私家園林においての家族生活に関しては、曹淑娟（2006）は社会空間、文本空
間（親族、友人たちが書いた寓園に関する文学作品を指す）、隠喩空間の三つの側面から寓
園を分析し、祁彪佳が寓園に招待客を接待し、寓園の中で戯曲の鑑賞や詩文のやり取りな
どの社交活動を行ったことを紹介した。そして、祁彪佳の作品である『寓山志』『寓山注』

などを通じて、祁彪佳による寓園の造成を明らかにするとともに、園林というものが、園林主が作り上げた生命の一つの隠喩空間として存在し、遊覧客は園林に作り上げられた隠喩空間、つまり主人の内面的世界を訪れるのだと解釈する。また、園林の中の家族感情、女性空間を重視し、分析を行っている¹¹。

以上の研究は、明代の造園史料や士大夫の日記や園林志などの史料を巧みに利用して、士大夫の私家園林の方位、構造、各々の景勝の場所、更に家族が毎日園林でどのように過ごしていたことまで、深く掘り下げている。これらの明代の園林研究の方向性を参照しながら、宋代園林研究の現状と課題を見ていくこととする。

3. 宋代園林研究

宋代は、宮崎市定が「東洋のルネサンス」と称したように¹²、文化、芸術の隆盛期において発展し、園林もその機能が前の時代より増え、明清園林の基礎を確立していった。早期の園林著作に宋代の園林を言及するが、マクロな視点で園林の建築史、発展史を論じており、詳細な分析は少なかった¹³。宋代園林に焦点を当てる研究は、80年代に至ってようやく研究が始まり、2000年までには、周宝珠「金明池水戯与『金明池争標図』」(1984)、王鐸「北宋東京(開封)園林及其園史地位」(1992-1993)、丘剛、李合群「北宋東京金明池的營建布局与初步勘探」(1998)、何徵「宋文人山水畫對園林藝術的影響」(1998)など、北宋の園林を巡るいくつかの研究しか見出すことができない。しかもこれらは北宋園林の園林史的地位、造園手法、特徴、及び金明池を中心とする研究に留まっていて、具体的分析が少ない上、南宋園林に関する研究はほとんど確認することができない。2000年以後には、宋代園林研究は増えていき、多様な研究成果が出されるようになった。これらの園林研究成果を整理すると、主に園林の公共性、園林の構造、園林生活という三つの方面に分けられる。以下、各テーマに沿って概観する。

(1) 園林の公共性

周宝珠(1984)と丘剛、李合群(1998)は、北宋で最も「公共性」を体現している園林である金明池に着目し、そこで行われた「水戯」と呼ばれる水上戦の軍事訓練が、金明池の人気を集めた主要な理由であると述べる。さらに、竜の頭、尾を船首、船尾に飾って、真ん中に数層の殿閣を建てた大きな船を用いて「水戯」を演じたことでも、東京開封の人々に愛されることになったと論じている。また、金明池は毎年の三月から一ヶ月ほど開放さ

れ、皇帝が臨席して「水戯」を見ることが一般的であり、張擇端の『金明池争標図』に描かれた龍船のパフォーマンスによって、当時金明池の開池の盛況及び東京開封市民の文化的生活が窺えると述べている¹⁴。

また、その延長線上に、金明池の開放性、公共性を強調している研究として、董琦（2015）がある。董琦は金明池を例として、北宋皇家園林の公共性を論じた。この論文はまず、北宋開封の都市の水系、城壁、商店街などの環境を整理して北宋の経済的状況を論じながら、そこにある皇家園林への影響を分析して、公共的活動は北宋皇家園林において一般的な存在だと指摘している。また、金明池を例として、造営の経緯及びその開放性について述べて、開放された時に使用者は、観覧客と各種商業や娯楽のサービスを提供する人の二種類になるという。金明池の開放は北宋の社会経済を反映し、また、開放することによって北宋東京は繁栄、開放、平民化のイメージを示していたと論じている¹⁵。

王勁韜（2011）は、古代の公共園林が春秋時代に出現したと論じ、早期の皇家園林を造成する際に「公共」「共有」「同楽」が主題となったことを示している。北宋の園林は中国歴史上最も開放性、市民化の特徴が備わった時代であると主張し、金明池を取り上げ、民衆が金明池での観覧活動及び商業売買などを通じて、「与民同楽」（皇帝が民と共に楽しむ）の理想が宋代皇家園林によって実現された、後世の模範となる場所であると述べている。また私家園林の開放、寺院に寄付したもとの私家園林の公共化についても、論及している¹⁶。

そのほか、園林の公共性に関心を寄せる研究成果としては侯迺慧（1997）、劉禕緋（2013）、毛華松（2015）、程民生（2017）がある。

侯迺慧（1997）は、公共園林が六朝に誕生してから、唐、宋に急速な発展を遂げたため、西湖での商売、娯楽活動、郡圃を楽しむことが宋代人の生活の一部となっていたとする。しかし、唐、宋の私家園林が芸術化された文人園林の方向に発展していたのに対して、公共園林は、ただ大きさを追求する存在であった。また、宋代の書院園林は、理学の発展と呼応する形で、もう一つの公園文化、即ち、理学文化を生みだしていった。これは、唐、宋時期の公園が、多元的に発展し、各階層に浸透していたことを示すと述べる¹⁷。

劉禕緋（2013）も郡圃に着目し、郡圃は唐代から出現し、主に官員の遊樂する場所を提供したが、宋代になると、開放性を備えて、民衆とともに楽しむ場所となったことを述べる。さらに、定州の郡圃を手がかりとして、北宋園林が公共性を備えるようになったこと、それが都市生活と深く関わりを有していたことを論じ、郡圃は宋代市民のために、遊樂の場所を提供したことを指摘する¹⁸。

毛華松（2015）は建築学の視点から、名勝旧跡を研究対象として、公共園林（湖山風景区、都市の郡圃、都市の景勝地）を含む公共空間が盛んになった社会背景を分析した上で、

公共園林の分布、機能の多様化についても指摘している¹⁹。

程民生（2017）は北宋開封の園林の果たした役割及びその特徴を述べる。まず、花木の移植技術が優れ、後世に深い影響を与えたこと、そして、皇家園林はそれまでの権力者に向けられたものから、不定期的に民衆に開放する場所となり、公共性の特徴が目立つようになったと同時に、統治者が民衆とともに楽しむことを表す場所となっていたことを主張し、さらに、統治者が園林を開放することを通じて、政治と繋がらせる機能を十分に発揮したと論じている²⁰。

以上の内容をみれば、宋代の皇家園林、郡圃、私家園林は定期的に民衆に開放されていたと考えられる。ただ、これらの研究が注目しているのは金明池、郡圃などの皇家、官庁の園林の公共性であり、私家園林の公共性についてはまだ十分に論じられていない。また、公共園林と園林の公共性の区別について十分に論じる必要があると思われる。

（2）園林構造、造園手法、造園思想

多くの研究は宋代園林の構造、特徴、造園技巧などに着目している。また絵画を用いて園林を研究することも少なくない。

a 皇家園林

王鐸（1992-1993）は北宋園林の研究を行い、東京の園林の分布、構造を論じた上で、これらの園林史における地位を分析している。まず、社会機能面から見ると、北宋には観覧、娯楽活動をメインとする皇家園林が現れ、さらに艮嶽のような大型山水宮苑も出現した。また、皇家園林に畑や薬草園を設置すること、多くの珍しい動物を飼うことも、北宋から発展したと述べる²¹。

倪峰（2006）は宋代園林の種類及びその芸術的特徴をまとめている。宋代園林は主に皇家園林、文人園林、自然郊外園林、寺観園林に分けられるが、その中で最も重要なのは皇家園林と文人園林であると見做す。艮嶽を例として皇家園林の特徴を分析し、艮嶽は山、水を軸にして、景観を観覧する場所は多く室内に設置され、建物は地勢、景勝に従って建てられており、唐以前の風格とは異なっていたと述べる。それに対して文人園林には一定の枠がなく、曲がりくねった地形を選択したり造ったりし、各々の景勝地は、自然に近く、変化に満ちた空間であると論じている。また、園林に込められている儒、仏、道の思想にも言及する²²。

秦宛宛（2007）は北宋皇家園林の概況及びその造園手法を論じる。北宋の園林は隋唐の

園林と比べると規模が小さく、人工的に造られた景観が多い。また造園技術が進歩するとともに、園林の機能が多様化し、園内の建物や装飾物がより精巧に造られるようになった。また、北宋前期の皇家園林には農作物を多めに植えたが、後期になると、宴会、接待する場所を設置したほか、運動や文化的活動、さらには宗教的活動を行う場所も現れる。さらに、北宋の皇家園林が南宋及び明清の皇家園林の造園手法への影響を与えたこと、北宋の皇家園林が朝鮮及び日本の園林に影響を及ぼしたことを明らかにする²³。

朱俊青、房淑娟、段佳卉、蘇樂金（2015）は、北宋の皇家園林に文人的要素が加わり、自然風景に近いことを求める文人園林の特徴が見られること、また、景勝によって精巧な建物を建てる、園林内に農産物を植える、土と石の双方を用いて築山を造るなどの特徴を指摘している²⁴。

b 私家園林

文人園林（或いは文人化園林）を意識する研究成果について、丁林峰（2012）、董慧（2013）、王巧、余鵬、侯方堃（2015）、張希、李鑫、吳靖雪（2015）などがあるが、ここでは董慧、丁林峰と張希、李鑫、吳靖雪の論文を紹介する²⁵。

董慧（2013）は両宋の「文人化園林」に着目している²⁶。宋代の士大夫は社会的地位が高く、彼らの行為や好みは摸倣の対象となっていた。そのため、私人園林にしても、皇家園林、官庁園林、寺院園林にしても、文人化の傾向が見て取れると述べる。文人化園林の構造の特徴は、自然を臨模することである。また、造園手法、多様な社会的機能について論じ、文人化園林は文人、士大夫たちに宴会場所を提供し、公共性を有していたこと、そこに体现される禅学、理学の思想、及び文人の園林生活を論じている²⁷。

丁林峰（2012）は宋代園林の自然景観と造園理論について論じつつ、実用性と造園の原則から研究する。そして、築山、理水、花木などによって宋代園林の山水美感を分析し、宋代文人の園林生活に論及する。宋代の文人園林は観覧、宴会及び休養場所として使われただけでなく、文人が自分の精神的世界を営む場所であり、また、儒仏道の影響を受けて、宋代人は園林を通じて人と自然を調和させることができたと述べる²⁸。

張希、李鑫、吳靖雪（2015）は、宋代文人が芸術を重視したこと、経済の繁栄、科学技術の発達、詞曲の発展、などの要因によって宋代文人園林が形成されたこと、宋代文人園林が上品であり奥深い境地を有していたなどの特徴について論じている²⁹。

他の私家園林に関する研究として、程磊（2017）は園林の文化的機能を中心として論じている。園林は士大夫の本性を回復させたり、彼らの内心と社会及び自然宇宙の関係を調和させたりする機能を有していたため、士大夫が政治と道義のバランスを取ることが可能

となり、その人格、信仰が集権政治の影響を受けても崩壊することがなかったと論じている³⁰。

張瑤（2014）は、（宋）李格非の『洛陽名園記』の中に記載された私家園林を中心として研究を行っている。まず、洛陽の地理、歴史、政治、経済、文化を分析してから、北宋園林が盛んになった理由を明らかにし、さらに各々の園林の園林主、場所、規模、構造を考証し、一部の園林の復元図を描いている。その上で、園林の類型、構成の要素、園林活動、園林の機能を論じ、北宋園林の借景を主に使う造園手法及び自然風景と追求する美意識について究明している。また、北宋の園林には半開放性が備わり、自然山水と文人の趣、雄渾と優雅さを兼ねている特徴があると述べる³¹。

同じく私家園林に目を向けた成果として、徐燕（2007）は南宋の私家園林を中心として研究を展開している。私家園林が発展していた歴史的背景を分析した上で、宋代の経済、文化の盛行が造園に有利な条件を提供したこと、また、理学が南宋私家園林の造園手法に影響を与えたことを述べるとともに、園林の構造や文人が私家園林で行った日常活動について論じている³²。

c 両宋園林の比較

尹家琦（2008）、江俊浩、沈珊珊、盧山（2013）等は、北宋と南宋の園林の比較研究を行っている。

尹家琦（2008）は、宋代南北の園林の造園手法を比較しながら、主に三つの相違点を挙げる。第一に、北宋の園林の多くは皇族に使われていたのに対して南宋の場合は士大夫が造った私家園林が多数を占めていた。また、北の園林が大規模であったのに対し、南の園林は小規模であった。さらに、北の園林の重厚、全体性を求める傾向性に対して、南の園林は秀麗、優美を追求していた、と論じている³³。

江俊浩、沈珊珊、盧山（2013）は、両宋園林の変化から南宋園林の特徴を論じた。具体的には、北宋園林と比べると南宋園林は精巧になり、変化が多く、植物の栽培技術が成熟した結果、園林の花木が生い茂り誰でも鑑賞して楽しめるようになった、と論じている³⁴。

以上の研究成果を概観すると、皇家園林を重視する研究傾向が強く、私家園林及び両宋園林の比較についての研究はまだ少ない。私家園林と文人園林については重複する部分が多く、今後は文人ではない人によって造られた私家園林に目を向ける必要がある。

d 絵画史料

近年、絵画を史料として園林研究に用いる傾向が増えており、何徵（1998）、劉国勝（2006）、

王棟（2008）、牡丹妮（2011）、郭菲（2014）、程莉（2015）、許可（2016）、朱翥（2016）、毛華松、梁斐斐、張楊斑（2017）などの研究が出されている³⁵。

何徴（1998）は、山水画が園林に影響を与えた可能性を指摘する。一番の影響は、自然の形態を園林に写すことである。そして、自然を臨模しつつも、自然を超える「都市山林」を造り、絵画、美学、生態、建築などの要素を上手く組み合わせて、自然に基づく現実生活中の「仙境」を創り出したと論じる³⁶。

劉国勝（2006）は、宋画に基づき、築山、理水、植物、飾り物などの園林の要素を分析している。宋代園林の築山はいつも重要な場所に置かれて、その周りに木や花草を配置する。理水（園内に水を取り込む）は主として、①外部の水風景を園林の背景として利用する類型、②園林内部に池を造る類型、③園林内部に溪流を造る類型、の三種類に分けられること、さらに宋代園林の植物と飾り物も非常に豊富であったことを明らかにし、建物の室内の構造、家具などにも論及している³⁷。

王棟（2008）は、詩画芸術が文人園林に重要な影響を与えたととらえ、宋代人が注目していたのは造園の内核、つまり、園林の境地であったと述べる³⁸。

朱翥（2016）は、南宋の文人園林が盛んになった理由を三点挙げている。まず、士大夫層が当時社会の主流であったこと、次に、江南地域は山水が交錯し環境がよかったこと、最後に、南宋は中原文化と南方文化が融合する重要な時期であったことである。南宋時期の皇家園林、私家園林、寺観園林は次第に同じ方向を目指していて、文人園林が主流の園林形式となっていく。また、『四景山水図』に基づいて、南宋文人園林の特徴は、①園林は多く郊外の水や山に臨む場所に造られて、自然に近い、②四季の景色を重んじる、③園林空間を順々に進むように造られたことの3点であるとする。南宋文人園林の景勝構成に関しては文人の私家園林に限らず、臨安の皇家園林、寺観園林なども文人園林の特徴を備え、その造園の手法が各類型の園林に相応するものであったこと、さらには美学芸術の視点から、山水図の画風の変化が造園手法にもたらした影響について述べている³⁹。

宋代人は文学や文化、絵画に造詣が深く、絵画から園林の構造、人物の活動、建物、植物などを窺うことができるという利点があり、園林空間を分析する上で大きな役割を果たしている。しかし、宋恬恬、沈欣悦、鮑沁星（2017）は『陶淵明帰隠図巻』、『帰去来辞書画卷』、『西塞漁社図』などを例にして、これまで絵画と関連している宋代園林は発見されておらず、宋画と宋代園林の営造との関わりもはっきりしていないとしている。絵画史料の信頼性に関して宋画に描かれた園林は明画よりありのままに描くことが多いとし、絵画史料から、造園の時に園林の構造を重視し、山、水、植物、建物など各々の区域の景勝を独立させる傾向にあったことを明らかにしている⁴⁰。

e 考古学の成果

最近出された鮑沁星(2016)の著作は南宋園林を研究している。南宋園林の造園思想は、前の時代の「世と隔絶」するという思想と異なり、「観覧」を旨として、皇家園林から私家園林まで西湖の構造を模倣することが高く評価されていたと述べる。また、考古学の視点から、遺跡から園林の性質、園林主に関する情報、園林の構造、造園手法、築山、方池、方位などを明らかにしている。さらに、南宋園林の「靈隠寺飛來峯」を模倣して築山を造る現象を論じ、皇家園林が築山を重んじたことが南宋の築山文化を推進し、それらの築山の名前も「飛來峯」とした例が少なくなかったという。さらに、南宋の皇家園林、私家園林、官庁園林、寺観園林、郊外理景を全面的に整理し、園林の場所、園林主及びその園林の特徴などを詳述している⁴¹。

同じく遺跡に注目しているのは張敏霞(2015)である。張敏霞は、浙江省の石門鎮に発見された南宋の名園である張氏東園の遺跡を通じて、その園林の盛衰を究明し、東園の特徴、年代、園林主及び園林の構造について考証している⁴²。

近年、遺跡の発掘が相次いでおり、遺跡の発掘は園林の復元や、宋代人の生活を理解することにおいて、文献資料では行うことができない重要な役割を果たしている。

(3) 園林生活に関する研究

楊曉山(2009)は、中唐から北宋まで(9世紀～11世紀)、都市にある私人園林での生活を詩歌によって再現している。蘇軾を例にして、士大夫たちが互いに貴重な物品の交換を通じて交流を行ったことを論じ、邵雍と司馬光の私人園林における生活態度を比べながら、洛陽の私家園林は彼らに本心を述べさせる場所を提供したと指摘する⁴³。

侯迺慧(2010)は、宋代園林について歴史背景、社会背景、美学的背景、文学的背景から、造園手法、園林生活及びその文化的意義など様々な方面から論じており、全面的に宋代園林を分析している数少ない著作と言える。西湖、艮嶽など宋代の著名な園林及び官庁の郡圃を取り上げて論じた上で、前代の造園技巧と比べながら、宋代園林構造の発展と変化、園林で行われた活動の変化を詳しく分析し、園林が儒仏道三教合一の道場となり、自然と人文を融合させ、宋代人の心の修養、文学創作に対して豊富な空間と資源を提供したことを明らかにしている。また、宋代園林が「樂園」と見なされていたことについて、その理由を次のように述べる。①園林には豊富な物産があるため、自給自足ができる。②景色が美しく、人と争わない特質がある。③囲碁を打ち、茶を飲むなどの活動をしながら、悠々自適の生活を行うことができる。④独立の空間であり、ある程度、俗世を離れること

ができる⁴⁴。

梁建国（2012）は、士大夫の間の交際、宴会、園林の観覧、贈り物の応酬などの私人空間の面から北宋東京士大夫の宅園について考察し、士大夫の日常生活及び当時の社会文化を検討している。また、園林にある珍しい植物、ペット、蔵書、文物などについて分析を行い、士大夫たちが植物、ペットを巡って詩を作り、美しい風景を楽しむとともに、互いに感情の交流を行ったと述べている。また文物鑑賞も士大夫の遊園活動の一つであり、絵画、書籍などの貴重な収蔵品を示された人の社会的地位及び彼らと園林主との親しい関係性を読み取れると述べる⁴⁵。

曾維剛、鉄愛花（2012）は、張鎡の南湖別業を例として、園林空間が文学の生成に与えた影響を論じている。両宋時期に私家園林が盛んになるとともに、宋代文人の交遊が繰り広げられ、園林が文学活動を行う重要な場所となった。園林を中心とする詩文創作が日常の美学と繋がり、宋代詩文の発展を促し、文学史的にも独特の意義があるという。また、張鎡が園林において芸妓を招いて客をもてなす活動、友人と花を楽しみながら酒を飲んで詩を作る活動、送別会を開く活動などによって、南湖別業は張鎡の個人的休養の場所だけではなく、彼の社交的空間であり、友達と文学活動を行う場所でもあったことを指摘する⁴⁶。

章輝（2016）は、経済が発達し、官吏の余暇時間が増え、のんびりと過ごす気風が広まり、南宋園林が盛んになっていたと述べ、士大夫の園林で行った娯楽活動について論じ、南宋園林は休養空間であると同時に、美学的価値も備えていたことを明らかにしている。南宋の私人園林はただ人を楽しませる機能を備えていただけではなく、「天人合一」に代表される哲学、美学思想を表した。園林はより小さく、封鎖的な空間において、自然と交流することができる場所であった。その美学価値は建物や装飾物に工夫をし、収蔵、歌、踊りなど各々の芸術を併せ持っており、南宋園林は自然の美、人工的美、社会生活の美、文学芸術の美を体現するものであったと述べる⁴⁷。

常衛鋒（2006）は、北宋東京園林及びその周辺地域の苑、園、楼、台などの遊楽と休養ができる景勝に着目し、皇帝、官僚、士大夫、平民、外国使臣など各階層の人の遊園活動について論じ、遊園活動の具体的内容は祭祀、観賞、宴会、演出、宗教的参拝であったこと、及び北宋の園林が後世や日本の造園に与えた影響を明らかにしている⁴⁸。

以上の研究は、園林生活について目を向けており、宋代文人の生活や園林の機能を理解する上で重要な意義を有している。ただ、こうした研究はケーススタディーの積み重ねが必要であり、士大夫の園林における交遊についてはさらに具体的に検討を行う必要がある。

(4) その他

a 植物、飾り物、山、水などの園林要素に関するミクロ的視点

例えば、植物の栽培について、舒迎瀾（1989）は宋代蘇州、杭州の園林花卉の種類及びその栽培技術について論じている⁴⁹。また、張鵬、劉曉明（2016）は、宋代園林の植物の種類を研究し、薬類、経済類、さらには、宗教類の植物までもが含まれていたことを指摘する。園林主は自分の身分に従って異なる種類、用途の植物を配置し、植物の選択が観賞のためだけではなく、税金、薬用、農書、花譜などの経済的、文化的配置と関わっていたと述べる⁵⁰。齊君、郝娉婷（2016）は、植物の伝承と発展を論じている⁵¹。

また、郭東閣（2013）は、北宋洛陽の私家園林の「景題」を対象として研究を行っている。「景題」とは園林の名称、園林にある建物、景勝の名称を指し、「景題」の意味、修辞手法、そこに含意される園林主の思想などについて詳しく論じている⁵²。

そのほか、尉遲芊樹（2016）は、宋代山水園林の水の運用、及び水と園林構造の關係に着目している⁵³。王勁韜（2009）は、皇家園林の「疊山」（築山を造ること）を研究している⁵⁴。

宋代園林の要素を詳しく分析することは園林研究にとって不可欠な探究だと考えられる。しかし、ミクロな視点から行われた宋代園林をマクロな視点からの研究と比べると、数量、内容的に見劣りする。ミクロ的研究は、マクロ的な視点を同時に併せ持ちながら、園林の要素の発展や変化を掌握することが求められる。

b 宋詩、宋詞

賈鴻雁（2002）は、宋詞に現れた園林構造を分析している。宋代において園林が普及し宋詞の対象となっていたと見做し、園林の建物、装飾物、山水、花草などが宋詞の境地と主題を際立たせていたと論じている⁵⁵。

羅燕萍（2006）は、宋詞の中に言及された園林を考察した上で、園林という視角から宋詞を分析し、また園林と宋詞の相互影響について論じている⁵⁶。徐海梅、劉尊明（2009）は、宋詞から、宋代士大夫が園林を造る際の伝統的文化への追憶を見出すとともに（例えば、蘇軾は詞の中で陶淵明に言及した）、詞は、景勝の美しさより、むしろそれらの景観の文化的背景、意味及びそれにまつわる故事を伝えることを狙いとしていたと述べる⁵⁷。

朱湘、蔣曉娟（2009）は、宋代文人の思想、文学的美意識が造園活動に浸透し、造園思想や精神に影響を与えたと述べる⁵⁸。李霞（2009）は宋詞から園林の景勝及び文人の園林生活を分析し、張震英、雷艷平（2013）は宋詞に基づいて、園林における女性の日常生活を分

析している。明清園林の研究成果と異なり、宋代園林における女性の園林活動は主に精神的趣向から論じられている⁵⁹。李小奇（2016）は唐詩が宋代園林に与えた影響を分析している⁶⁰。

宋詩、宋詞と園林とは切り離すことができない関係にある。宋代人は園林において文学作品を作り、園林は文学作品によってその内実と境地をアピールされる。つまり、詩詞から園林の内面的世界を読み取ることができ、園林研究を充実させることに繋がる。

4. 本研究の課題

宋代園林研究は明清園林研究とは異なり、現存している園林が少なく、文献史料、絵画史料や遺跡に依存せざるを得ず、明清園林のように深く研究できていない。また、宋代園林を経済的機能の方面から論じることは難しく、さらに、宗族が園林で行った活動についても研究し難い。2000年以後、宋代園林研究は増加する傾向があるが、研究の視点は類似しており、使われている史料も限定されている。今後の宋代園林の研究方向について、以下の四点を指摘しておく。

（1）史料

上述のように、今までの宋代園林研究の史料の多くは園林記、宋詩、宋詞などに限られている。宋代園林を研究するには新しい史料の発見が重要となる。例えば、日記、手紙、序、題、跋などの史料の活用が必要であり、園林研究に新たな道を開くと考えられる。

（2）士大夫の交遊活動

上述の研究の中に園林における士大夫の交遊についての研究があるが、数量的には限られている。1の問題とも関わるが、2015年6月12・13日、台湾の長庚大学にて「游於芸：十一至十四世紀士人的文化活動與人際網絡」と題する国際学術研討会が開催された。この研討会で課題とされたテーマの一つが宋元期の士大夫の多彩な文化活動と交際の問題であり、そのために文集所載の多様な資料の活用が主張された。交際において、例えば、手紙が重要な史料であることは、文学、思想史などにおいてはすでに共通の認識となっているが、歴史学においても、手紙の活用が喫緊の課題となっている⁶¹。

(3) 宋代園林空間の機能

今までの研究をみれば、宋代園林の文化的、美学的、社交的、政治的な多様な機能、或いは開放的な特徴が明らかにされている。しかし、宋代は経済が発達し、政治的にも士大夫の地位が高く、彼らの文学、芸術の造詣は他の時代の比ではない。このような社会背景の中において、園林がどのように宋代人に利用されたかについて討論する必要がある。例えば、書院の発達も宋代以後の現象であり、学術、教育の機能などに目を向ける必要があろう。また「靖康の変」によって分けられた北宋と南宋の園林は形や構造だけではなく、中国の南北の地理的な環境も異にしており、その機能がどのように変化したかについても検討すべきである。

(4) 宋、明の園林の比較

宋、明の園林研究を比べれば、宋代の研究は公共園林、とりわけ皇家園林の開放性の問題に多くの研究者が注目しているのに対して、明代は私家園林に関する研究に集中している。すなわち、宋代は公共園林が発達し、明代は私家園林が盛行していた時代と言うことになる。この理解が妥当であるのか検討するとともに、明代園林が宋代園林からどのような影響を受け、変化していったのか、両者の比較によって初めて中国園林史の重要な段階が明らかとなる。

-
- ¹ 袁守愚「中国園林概念史研究：先秦至魏晋南北朝」天津大学博士学位論文、2014年12月、pp. 17-37。
- ² 曹林娣『中国園林文化』（中国建築工業出版社、2005年5月、p. 3。）「広義的園林指在一定的地段範圍内，利用並改造天然山水、地貌或者人為地開闢山水地貌，結合植物的栽植和建築布置，從而構成一個供人們觀賞、遊憩、居住的環境。狹義的園林觀念，則是專指傳統古典園林。它具有廣義「園林」的基本內涵，但又有獨特的藝術個性，即對一定的地段範圍的選擇和對該地段環境的改造，必須是通過整體的藝術構思規劃並通過藝術的手段和工程技術完成的，因而創造出來的自然環境具有審美意義。」（そのうち、「在一定的地段範圍内（中略）供人們觀賞、遊憩、居住的環境。」という部分の内容は、杜汝儉、李恩山、劉管平主編『園林建築設計』（中国建築工業出版社、1986年5月、p. 1）から引用した）。
- ³ 周維權『中国古典園林史』清華大学出版社、1990年12月、pp. 18-22。
- ⁴ 侯迺慧『宋代園林及其生活文化』三民書局、2010年3月、pp. 15-28。
- ⁵ 前掲注3周維權『中国古典園林史』を参考。
「読書人」、「士大夫」、「文人」に関する規定について、村上哲見氏は、中国における伝統的な知識人の類型を成立させている要件として、A、人文的教養、具体的には次の二つ。(1) 古典（経書）の素養、(2) 作詩文（文言の詩と散文）の能力。＜(2)は同時にCとしての面をもつ＞。B、「治国平天下」の使命感。実践としては官僚として活動すること。C、尚雅の精神。実践としてはAの(2)作詩文も含まれるが、更にそれを超えて書画音楽などの芸術に秀でること、の三つをあげ、Aは「読書人」の成立要件、必要にして十分な条件であり、「士大夫」とはAとBを備えているもの、「文人」とはAとCを備えているものと述べる。（村上哲見『中国文人論』汲古書院、1994年3月、pp. 46-47を参考）
- ⁶ Joanna F. Handlin Smith. 1992. *Gardens in Ch' i Piao-chia' s Social World: Wealth and Values in*

Late-Ming Kiangnan, *The Journal of Asian Studies* 51(1) pp. 55-81.

- ⁷ クレイグ・クルナス著、中野美代子、中島健訳『明代中国の庭園文化:みのりの場所/場所のみのり』青土社、2008年8月。(原著はCraig, Clunas. 1996. *Fruitful Sites : Garden Culture in Ming Dynasty China*, Duke University Press, Durham.)
- ⁸ 巫仁恕『優游坊廂：明清江南城市的休閒消費与空間變遷』台湾中央研究院近代史研究所、2013年3月。
- ⁹ 康格温『『園冶』与明代江南的文人園林』シンガポール国立大学博士学位論文、2010年8月。同『『園冶』与時尚 明代文人的園林消費与文化活動』広西師範大学出版社、2018年8月もある。
- ¹⁰ 荒井健「明末紹興の庭-祁彪佳と寓園について」『中華文人的生活』、平凡社出版、1994年1月、pp. 434-468。
- ¹¹ 曹淑娟『流變中的書寫-祁彪佳與寓山園林論述』里仁書局出版、2006年3月。
- ¹² 宮崎市定「東洋的近世」(『宮崎市定全集』第2巻、岩波書店、1992年3月)を参照。
- ¹³ 童寯『江南園林志』中国工業出版社、1963年11月。劉敦楨『蘇州古典園林』中国建築工業出版社、1979年10月。岡大路著、常瀛生訳『中国宮苑園林史考』農業出版社、1988年5月。周維權『中国古典園林史』清華大学出版社、1990年12月などが挙げられる。
- ¹⁴ 周宝珠「金明池水戯与『金明池争標図』」『中州学刊』第1期、1984年3月、pp. 87-91。丘剛、李合群「北宋東京金明池の營建布局与初步勘探」『河南大学学报(社会科学版)』第38巻第1期、1998年1月、pp. 12-14。
- ¹⁵ 董琦「北宋皇家園林「公共性」探究-以金明池為例」北京林業大学硕士学位论文、2015年6月。
- ¹⁶ 王勁韜「中国古代園林的公共性特徵及其对城市生活的影響-以宋代園林為例」『中国園林』第5期、2011年5月、pp. 68-72。
- ¹⁷ 侯迺慧『唐宋時期的公園文化』東大図書、1997年9月。
- ¹⁸ 劉緯緋「北宋城市園林的公共性轉向-以定州郡圃為例」『河北大学学报(哲学社会科学版)』第38巻第3期、2013年5月、pp. 23-28。
- ¹⁹ 毛華松「城市文明演變下的宋代公共園林研究」重慶大学博士学位論文、2015年9月。
- ²⁰ 程民生「北宋汴京的園林貢獻及「緑政」創舉」『河南師範大学学报(哲学社会科学版)』第44巻第1期、2017年1月、pp. 63-71。
- ²¹ 王鐸「略論北宋東京(今開封)園林及其園史地位」『華中建築』第10巻第4号、1992年12月、pp. 43-45。王鐸「略論北宋東京(今開封)園林及其園史地位(続)」『華中建築』第11巻第2号、1993年7月、pp. 47-51。王鐸「略論北宋東京(今開封)園林及其園史地位(続)」『華中建築』第11巻第3号、1993年10月、pp. 55-57。
- ²² 倪峰「宋代園林芸術探微」『湖南行政学院学报(双月刊)』第2期、2006年3月、pp. 81-82。
- ²³ 秦宛宛「北宋東京皇家園林芸術研究」河南大学硕士学位论文、2007年5月。
- ²⁴ 朱俊青、房淑娟、段佳卉、蘇樂金「北宋東京皇家園林造園芸術分析」『林業調查规划』第40巻第3期、2015年6月、pp. 127-132。
- ²⁵ 王巧、余鵬、侯方堃「一派雅致天然 -淺談宋代文人園林」『四川建築』第35巻第1期、2015年2月、pp. 11-15。
- ²⁶ ここで著者は、「文人化園林」とは文人によって經營される、或いは所有される園林を含むのみならず、文人の趣向を有するすべての園林をさす、としている。
- ²⁷ 董慧「兩宋文人化園林研究」中国社会科学院研究生院硕士学位论文、2013年5月。
- ²⁸ 丁林峰「宋代文人園林的文化意蘊」安慶師範学院硕士学位论文、2012年6月。
- ²⁹ 張希、李鑫、吳靖雪「宋代園林-文人園林的特点及借鑑意義」『北京農業』第9期、2015年3月、p. 52。
- ³⁰ 程磊「論宋人山水亭園的文化功能」『中国海洋大学学报(社会科学版)』第1期、2017年1月、pp. 122-128。
- ³¹ 張瑤「『洛陽名園記』中的園林研究」天津大学非全日制專業学位硕士学位论文、2014年12月。
- ³² 徐燕「南宋臨安私家園林考」上海師範大学硕士学位论文、2007年4月。
- ³³ 尹家琦「試比較宋代南北方的造園芸術」『安徽建築』第6期、2008年12月、p. 136、p. 197。
- ³⁴ 江俊浩、沈珊珊、盧山「從兩宋園林的变化看南宋園林芸術特徵」『中国園林』第4期、2013年4月、pp. 104-108。
- ³⁵ 杜丹妮「宋代園林詩画情趣特色探析」『晋城職業技術学院学报』第4巻第3期、2011年5月、pp. 94-96。郭菲「宋代画論中的園林觀研究」天津大学硕士学位论文、2014年12月。程莉「從宋代山水画淺析宋代造園芸術」『現代園芸』第7期、2015年7月、pp. 141。許可「宋代文人詩画对文人園林的影響」『現代園芸』第8期、2016年7月、pp. 113-115。毛華松、梁斐斐、張楊琰「宋画中的園林活動与園林空間關係研究」『西部人居環境学刊』第2期、2017年4月、pp. 32-39。
- ³⁶ 何微「宋文人山水画对園林芸術的影響」『浙江林学院学报』第15巻第4号、1998年12月、pp. 445-449。
- ³⁷ 劉国勝「宋画中的建築与環境研究」河南大学硕士学位论文、2006年5月。
- ³⁸ 王棟「螻蟻之余 便有遠韻-從宋代山水画探微文人園林造景」中国美術学院硕士学位论文、2008年5月。
- ³⁹ 朱翥「『四景山水図』中的南宋文人園林造景手法探討」『風景園林』第2期、2016年2月、pp. 102-108。
- ⁴⁰ 宋恬恬、沈欣悦、鮑沁星「略論宋画的園林史料價值-以『陶淵明歸隱図卷』、『歸去來辞書画卷』、『西塞漁社図』等宋画為例」『風景園林』第2期、2017年2月、pp. 40-46。

-
- ⁴¹ 鮑沁星『南宋園林史』上海古籍出版社、2017年4月。
- ⁴² 張敏霞、鮑沁星「南宋私家園林石門張氏東園遺址考」『中国園林』第7期、2015年7月、pp. 88-91。
- ⁴³ 楊曉山『私人領域的變形-唐宋詩歌中的園林与翫好』鳳凰出版傳媒集團、江蘇人民出版社、2009年5月。
- ⁴⁴ 侯迺慧『宋代園林及其生活文化』三民書局、2010年3月。
- ⁴⁵ 梁建国「北宋東京士大夫の宅園環境與交遊生活」『隋唐遼宋金元史論叢』、2012年4月、pp. 298-307。
- ⁴⁶ 曾維剛、鉄愛花「園林別業与宋人休閒雅集和文学活動-以杭州張鑑南湖別業為中心的考察」『浙江學刊』第5期、2012年9月、pp. 102-110。
- ⁴⁷ 章輝「南宋文士の園林休閒及其審美蘊藉」『美与時代：創意（上）』第5期、2016年5月、pp. 14-17。
- ⁴⁸ 常衛鋒「北宋東京園林景觀与遊園活動研究」河南大學碩士學位論文、2006年5月。同じ方法で陳灝「南宋臨安園林景觀及遊園活動研究」（河南大學碩士學位論文、2013年4月）は南宋臨安園林を研究している。
- ⁴⁹ 舒迎瀾「宋代蘇杭の園林与花卉栽培」『古今農業』第1期、1989年4月、pp. 62-69。
- ⁵⁰ 張鵬、劉曉明「对宋代園林植物配置的再認識」『建築与文化』第9期、2016年9月、pp. 206-207。
- ⁵¹ 齊君、郝娉婷「宋代城市及園林植物的傳承与演變」『中国園林』第2期、2016年2月、pp. 112-116。
- ⁵² 郭東閣「北宋洛陽私家園林景題的特色分析」河南農業大學碩士學位論文、2013年5月。
- ⁵³ 尉遲芊樹「水与宋代山水園林」『濰坊工程職業學院學報』第29卷第4期、2016年7月、pp. 91-92。
- ⁵⁴ 王勁韜「中国皇家園林叠山研究」清華大學博士學位論文、2009年5月。
- ⁵⁵ 賈鴻雁「宋詞園林意境美探微」『東南大學學報（哲学社会科学版）』第4卷第5号、2002年9月、pp. 75-79。
- ⁵⁶ 羅燕萍「宋詞与園林」蘇州大學博士學位論文、2006年4月。
- ⁵⁷ 徐海梅、劉尊明「淺談宋詞与宋代園林文化」『古典文学知識』第4期、2009年7月、pp. 73-82。
- ⁵⁸ 朱湘、蔣曉娟「論中国文人和文学对園林的影響」『山西建築』第35卷第33期、2009年11月、pp. 350-351。
- ⁵⁹ 李霞「從宋詞看中国文人園林的意境」河北大學碩士學位論文、2009年5月。張震英、雷艷平「閨閣園林間的淺吟低唱-從宋詞看宋代閨閣的園林情調」『學術論壇』第2期、2013年2月、pp. 73-83。
- ⁶⁰ 李小奇「唐詩对宋代園林空間芸術建構的影響-以宋代園記散文為考察中心」『暨南學報（哲学社会科学版）』第38卷第4期、2016年4月、pp. 64-71。
- ⁶¹ 平田茂樹「学会レポート「游於芸：十一至十四世紀士人的文化 活動与人際網絡」国際學術研討会参加記」『都市文化研究』18、2016年、pp. 107-110を参照。

第1章 宋代湖州園林と士大夫の交遊

1. はじめに

湖州園林は南宋において繁栄期を迎えた。南宋遺民の周密は『吳興園林記』を作成し、南宋の湖州府城内及びその近郊の私家園林を詳細に記録した。そこから南宋の湖州私家園林は繁栄していたことが明らかにされている。湖州で私家園林の発達した背景として、湖州は南宋において「輔郡」となり、経済、文化の発達地域であった。『吳興園林記』は園林研究において価値の高い史料であるため、童寯を始めとする初期の園林研究者は湖州私家園林に注目した¹。しかし、概説に止まっている成果も少なくなく、宋代の湖州園林に関する研究は必ずしも豊富とは言えない。より詳細に湖州園林の発展史を論及する研究成果として、章琳（2015）が挙げられる²。氏は隋から民国に至るまでの時代について各時代における湖州園林の数量を統計し、それぞれの時代の湖州園林の特徴を考察している。さらに、代表的事例の分析により、異なるパターンの湖州園林の特徴を分析している。章琳氏は歴代の湖州園林の発展史及びその特徴を論じることにより、湖州園林研究に重要な基礎的見解を提出した³。しかし、各時代の園林の特徴を究明するためには、ミクロの視点からも詳細に考察する必要があると考えられる。

一方、宋代士大夫の交遊に関する研究は枚挙に遑がない。近年の代表的な著作としては、方健氏の『北宋士人交遊録』が挙げられる。氏は宋代人の交遊群体、交遊の方式、交遊上の礼儀、交遊上の禁忌について全面的に論じた。その上で、王禹偁、范仲淹、王安石、蘇軾を北宋における四つの時期の代表として取り上げ、その交遊活動からそれぞれの時期における社会の風貌とエリートの心理的状态を分析した⁴。ただ、全体的に南宋よりも北宋に注目する研究傾向があり、南宋における士大夫の交遊に注目する必要があるとの指摘も行われている⁵。また、士大夫の交遊研究は多様な観点から考察されているものの、交遊空間についての分析が不足していると考えている。

士大夫の交遊空間に関しては、梁建国氏が『朝堂之外・北宋東京士人交遊』が論及している。氏は宴会、雅集、送別などの代表的交遊活動から、士大夫集団の開封における生活の状態を論じる。その中で、宴会について、主に寺院、園林、館閣、衙署、茶館などの公共空間及び私人の邸宅で行われた活動について考察している。また、雅集について、「戚里之家」「書香門第」「功臣之後」という三つのケースを選び、各々の私人の邸宅で行われた

書画観賞、吟詩唱和のような交遊活動を考察した。また、士大夫間の送別活動と園林などの都市空間との関連性を究明している⁶。

北宋の開封における士大夫の交遊は園林と密接な関係を持っている。しかも政治的目的を帯びる。一方、南宋臨安の交遊空間について、園林を例にすれば、臨安では数多くの皇家園林と私家園林が營造されている。私家園林の園林主は権臣、内侍、及び皇太后の一族が多く占めた⁷。私家園林における主要な交遊活動は飲酒、花見、送別、詩詞の作成などである。交遊を行う人物は政治家、道学家、文学家などに及んでいる。また、言うまでもなく、私家園林は園林主の文学作品を創作する重要な場所である⁸。南宋において園林が発達した地域といえば、臨安の他に、その周辺にある湖州などの都市もある。

よって、本章においては、湖州を事例として、南宋の中心地域にある私家園林と交遊の実態を究明する。

2. 湖州園林の概況

(1) 湖州について

南宋以後、園林が盛んになったのは、湖州、杭州、蘇州、揚州である。そのうち、湖州、杭州が名高い⁹。先行研究によれば、宋代の湖州園林の数は約 97 あった。その内訳は、私家園林 48、寺観園林 10、官署園林 31、郊外風景地 8 である¹⁰。(報告者も湖州園林の数を整理したが、次のようになる。私家園林 51、寺観園林 10、官署園林 31、郊外風景地 5)

両宋における臨安の園林数は不明とせざるを得ないが、南宋に絞ると、臨安の園林は 53 あり、そのうち、皇家園林 18、私家園林 22、寺観園林 9、官署園林 4、郊外風景地 1 (郊外風景地は西湖および西湖周辺の私家園林、寺観園林のことを指す) となる¹¹。両地域の園林数を比べてみれば、湖州園林の盛況さが窺える。

湖州，吳興郡。今理烏程縣。禹貢揚州之域。古防風氏之國也。春秋為吳地，後屬越，越為楚所滅，後屬楚……天寶元年改為吳興郡。乾元元年復為湖州，皇朝為宣德軍節度¹²。湖州は即ち、吳興のことである。江南の古城として知られている。唐宋以後、湖州は地理的に臨安と近かったことから、急速に発展した。下記の史料は、当時の湖州の繁栄ぶりを記録している。

高宗皇帝駐蹕臨安，實為行都輔郡，風化先被，英傑輩出。四方士大夫樂山水之勝者，鼎來卜居，衣冠霧合，絃誦馳聲，上齊衡於鄒魯，至如城邑墟市，精廬相望¹³。
輔郡として、湖州は地理的優位を占めており、しかも山水の風景が優美であり、文化も繁

栄していた。そのため、英傑を輩出し、各地の士大夫も集まっていた。

自唐更五季至宋渡南，而吳興去宋行都最近，苕霅兩水分貫郡城，宋諸王公鐘鳴鼎食，邸第相望，舟車往來，煙火相接，故吳興郡城突起於汀洲浦澗之上。而其版築之工、楨幹之力最爲堅完，視旁郡有所弗逮¹⁴。

湖州には京杭大運河（浙江の部分）が流れ、経済的、文化的発展を促進した。また、城内には苕水、霅水が流れ、交通の利便性が優れる。王侯貴族の家屋は次から次へと並んでいた。当時の湖州は賑やかで、建物の建築技術が先進的であった。

それと同時に、湖州の園林も宋の南遷に伴って全盛期を迎えたことは周密が記した『癸辛雜識』の記述から確認できる。

吳興山水清遠，昇平日，士大夫多居之。其後，秀安僖王府第在焉，尤爲盛觀。城中二溪橫貫，此天下之所無，故好事者多園池之勝¹⁵。

湖州は風景が優美であり、水路が発達し、多くの人々が集まったことにより、造園が流行し始めた。

湖州はこのような環境であった。そして、周密が記録した湖州園林からはその地域的特徴が見られる。例えば、湖州は太湖に臨むため、「葉氏石林」「兪氏園」などの太湖石を主要な景観とする私家園林が出現した。そのほか、移住してきた宗室、四川地方出身の士大夫なども湖州の園林文化に影響を与えたと考えられる。しかし、湖州園林に対するこれまでの研究は概況を述べるに止まり、研究する余地がある。

（2）園林の概況

園林の概況を談鑰は以下のように伝える。

都有苑囿，所以爲郡侯燕衍、邦人遊息之地也。士大夫從官，自公鞅掌之餘，亦欲舒豫，乃人之至情。方春百卉敷腴，居人士女，競出遊賞，亦四方風土所同也。故郡必有苑囿，與民同樂。囿爲亭觀，又欲使燕者款，行者憩也。故亭堂樓臺之在園囿者，宜附見焉。吳興山水清遠，城據其會，騷人墨客狀其景者，曰水晶宮，曰水雲鄉，曰極樂城。楊漢公詩曰：谿上玉樓樓上月，清光合作水晶宮。景祐中，王惟正送葉參知鄉郡詩曰：雲谿水雲鄉。元祐中，知州事林希因上地圖詩云：繞郭芙蓉拍岸平，花深蕩槳不聞聲。萬家笑語荷香裏，知是人間極樂城。一城之內觸處見山「洛陽民居見山出見山錢」觸處可以引谿流，故凡爲苑囿必景物幽雅，雖近市如在雲巖江邨，所以爲貴也¹⁶。

この史料から湖州では園林の営造が盛んになり、官署園林と私家園林が同時に発展していたことが分かる。また官署園林は地方官の公務の後に休みを取る場所であり、民衆に向か

って開放し、遊覧させる場所でもある。これを開放することは宋代の「与民同楽」という思想と密接な関係にある。そして、湖州は山水風景が優れており、文人墨客に愛されていた。城内からは至るところから山が見え、川の流れを園林に引き入れることもできた。園林の景勝が優美であり、市にいるにもかかわらず郊外の山村のように感じられる。



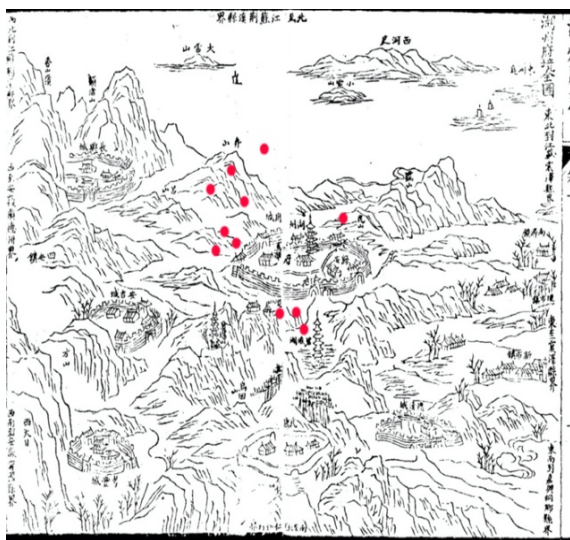
【図 1：湖州府城内私家園林分布図】

湖州園林が自然風景を求めていたことが窺える。私家園林の分布状況は【図 1】から【図 3】（同治『湖州府志』に基づいて加工）に、点で示した。城内の私家園林の多くは城壁の近くに所在し、南側の園林が北側より多くなっている。そして、城外の園林は湖州城の西にある弁山に集中する傾向がある。

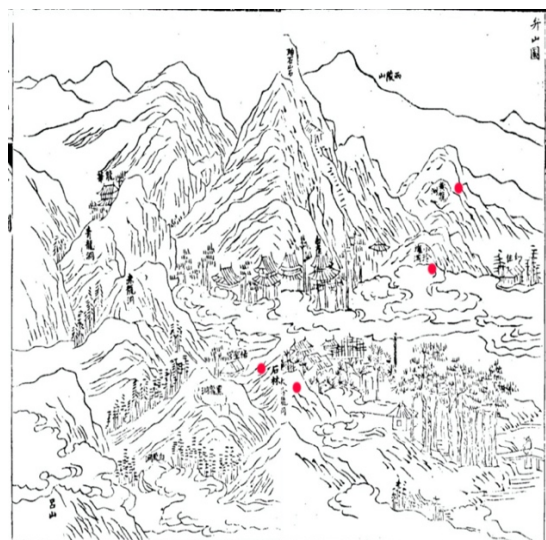
【図 1】から【図 3】に記した園林分布図は本章末に付した【表 1：宋代湖州私家園林表】（以下【表 1】と略記）に基づき、作成したものである。【表 1】に基づいて湖州私家園林の特徴について言えば、以下のように整理できる。

a 自然風景に基づき造園

苕溪、霅溪が城内を通過し、城内の私家園林の多くは川沿に作られるか、或いは園内で「方池」を掘っている。一方、城外の私家園林は多く山に沿って造られており、



【図 2：湖州府城外私家園林分布図】



【図 3：弁山図】

また、園内では果樹など数多くの植物が栽培されていた。葉夢得が『避暑録話』に、石林にある竹について以下のように記載した。

山林園圃但多種竹，不問其他景物，望之自使人意瀟然。竹之類多，尤可喜者篔簹竹，蓋色深而葉密。吾始得此山，即散植竹，畧有三四千竿，雜衆色有之，意數年後所向皆竹矣¹⁷。石林は山の中に位置している(図3で石林の場所を確認できる)。園林は石で囲まれており、多くの竹を植えた。魏晉南北朝の莊園には大量の果樹を植える例がよく見られ、しかも、竹や松を植えることが好まれた。そして、唐代の園林も竹がよく植えられていたという¹⁸。つまり、宋代の呉興園林の造園手法や造園思想は六朝時代からの影響を受けていた。

b 太湖石の流行

【表1】の「南沈尚書園」条には太湖石を巡る争いが描かれている。

池南豎太湖三大石，各高數丈，秀潤崎峭，有名於時。其後賈師憲欲得之，募力夫數百人，以大木構大架，懸巨絙，縋城而出，載以連舫，涉溪絕江，致之越第，凡損數夫。其後賈敗，官斥賣其家諸物，獨此石臥泥沙中。適王子才好奇，請買於官，募工移植，其費不貲。未幾，有指為盜賣者，省、府追逮幾半歲，所費十倍於石，遂復舁還之，可謂石妖矣¹⁹。

沈尚書の園林には三つの巨大な太湖石が立てられており、非常に有名であった。これらの太湖石を賈似道や王子才が欲した。賈似道が太湖石を紹興の邸宅に運ぶために、数百人の労働者を雇用して、多くの船を用いて運搬したが、運送するために数名の労働者が死傷した。この史料からは、太湖石を得るために金銭、人命も惜しまなかった権力者の姿が見て取れる。賈氏が衰えた後、王子才もこの太湖石を入手しようとしたが、盗んで売りとばすことを疑われたため、官府に追究され、この事件に石の費用に対して十倍にも及ぶ費用が掛かることとなった。以上のように、太湖石はこの時期大変流行し、権力者たちは競って奪い合った様子が記されており、奇石を獲得するために金銭や労働者の命も惜しまなかった事例が少なくなかったことが推測される。太湖石の流行は宋徽宗を発端としており、皇家園林である艮嶽建設の後の時期における太湖石の価値は前代と比較にならないほど高まることとなる。下記の史料からは艮嶽及び太湖石の様子を確認できる。

前世疊石爲山，未見顯著者。至宣和，艮嶽始興大役，連艫輦致，不遺餘力。其大峯特秀者，不特侯封，或賜金帶，且各圖爲譜。然工人特出於呉興，謂之山匠，或亦朱勗之遺風。蓋呉興北連洞庭，多産花石，而弁山所出，類亦奇秀，故四方之爲山者，皆於此中取之。浙右假山最大者，莫如衛清叔呉中之園，一山連亘二十畝，位置四十餘亭，其大可知矣。然余生平所見秀拔有趣者，皆莫如兪子清侍郎家爲奇絶。蓋子清胸中自有邱壑，又善

畫，故能出心匠之巧。峯之大小凡百餘，高者至二三丈，皆不事鉅釘，而犀株玉樹，森列旁午，儼如羣玉之圃，奇奇怪怪，不可名狀²⁰。

宣和年間、徽宗が艮嶽を營造し、太湖石を開封に運ぶために、「花石綱」が設けられた。艮嶽に運ばれた太湖石は爵位を与えられただけではなく、金帯まで賜り、またその形を描いた譜を作られた。太湖石の流行とともに、呉興には築山の職人が出現した。そして、特に弁山の石は優れているため、多く園林に使われた。

士大夫は書画に優れており、自ら築山を設計する。例えば、「兪氏園」の事例をみれば、蓋子清胸中自有邱壑，又善畫，故能出心匠之巧。峯之大小凡百餘，高者至二三丈，皆不事鉅釘，而犀株玉樹，森列旁午，儼如羣玉之圃，奇奇怪怪，不可名狀（中略）乃於衆峰之間，縈以曲澗，鑿以五色小石，旁引清流，激石高下，使之有聲淙淙然，下注大石潭，上蔭巨竹壽藤，蒼寒茂密，不見天日。旁植名藥奇草，薜荔、女蘿、菟絲，花紅葉碧，潭旁橫石作杠下為石藁，潭水溢，自此出焉。潭中多文龜、斑魚，夜月下照，光景零亂，如窮山絕谷間也²¹。

とあるように、兪子清は築山の間に谷川を造り、五色の石で飾る。また川から水を引いて滝を營造した。滝の下に大きな石潭を修造して、上に「竹寿藤」という植物を植えて日陰をつくった。隣に薬草を植えて、石潭に亀、魚を飼育した。築山の豊かな景勝と一体化させており、当時の士大夫の審美眼や思想を反映すると同時に、南宋の築山を造る技術が成熟したことを示している。また、衛涇（1159-1226）が蘇州に作った私家園林に存在した築山は大きなもので、特別な存在であったと考えられる。蘇州は太湖石の主要な産地であり、体積の大きい太湖石は珍重された。

また、葉夢得は太湖石の産地であった弁山に私家園林を造り、当時、名園と称された。彼の死から 24 年を経た乾道八年（1172）、范成大が中書舎人から静江知州へ赴任した際、石林を遊覧した²²。当時の葉氏の園林は既に衰えていたが、依然として文人墨客の目を引いており、葉氏の園林の影響力がうかがえる。太湖石を主要な景観とした私家園林は人気があり、湖州私家園林の特徴の一つであると考えられる。

c 蔵書を好む気風

至若吾郷故家如石林葉氏、賀氏，皆號藏書之多，至十萬卷。其後齊齋倪氏、月河莫氏、竹齋沈氏、程氏、賀氏，皆號藏書之富，各不下數萬餘卷，亦皆散失無遺。近年惟直齋陳氏書最多，蓋嘗仕於莆，傳錄夾漈、鄭氏、方氏、林氏、吳氏，舊書至五萬一千一百八十餘卷，且倣讀書志作解題，極其精詳，近亦散失。至如秀岩、東窗、鳳山三李，高氏、牟氏皆蜀人，號為史家，所藏僻書尤多，今亦已無餘矣。吾家三世積累，先君子尤

酷嗜，至鬻負郭之田以供筆札之用。冥搜極討，不憚勞費，凡有書四萬二十餘卷，及三代以來金石之刻一千五百餘種，度置書種、志雅二堂，日事校讎，居然贏金之富。余小子遭時多故，不善保藏，善和之書，一旦掃地。因考今昔，有感斯文，爲之流涕。因書以識吾過，以示子孫云²³。

宋代において、文献に明確に記載された蔵書家は 700 人に至った。それは周から唐、五代までの蔵書家の総和の三倍に近い²⁴。その中で蔵書が 1 万卷以上に至ったのは 200 人ほどであった。上記の史料では湖州の蔵書家の 14 人が紹介されている。葉氏、賀氏の蔵書は 10 万卷に至り、南宋を代表する蔵書目である『直齋書録解題』の著者として知られる陳振孫の蔵書は 5 万卷、周氏の蔵書は 4 万卷にのぼった。しかし、宋の初め、館閣蔵書は 3 万卷余りで、最も多い時は 73877 巻であった²⁵。宋代の私家蔵書の数量は朝廷に匹敵するほどであった。さらに、南宋の蔵書家の人数、蔵書の規模共に北宋を越えた。南遷以後、江西、浙江、福建、四川などの地域の私家蔵書は緩やかに発展していった²⁶。宋代の蔵書は豊富であり、上引の史料に記載されているように、秀岩（李心伝）、東窓（李道伝）、鳳山（李性伝）及び高氏、牟氏などの四川の史学者はあまり見かけない書籍の収集を好んでいた。書籍だけではなく、書画、金石なども多く収集した。例えば、周密の家族は三世代にわたり、書籍の他に、金石を 1500 種ほど収蔵していた。

そのほか、宗室の中にも、蔵書家が多く存在していた。『中国私家蔵書史』によれば、宋代宗室の中で蔵書が 1 万卷以上に至った人物は 14 人いた。これは湖州に限られるものではないが、そのうち、榮王宗綽（7 万卷）、右丞相趙汝愚（5 万卷）の蔵書が一番多く、葉夢得や魏了翁（蔵書 10 万卷）に次ぐ蔵書を有していた²⁷。宗室の人々が蔵書を好む気風を持っていたことが分かる。湖州の私家園林の中に、蔵書室や蔵書楼を設置することが多い（【表 1】「南沈尚書園」、「倪氏玉湖園」、「程氏園」）。蔵書を好む気風が私家園林の構造に影響していたと考えられる。宋代にとどまらず、湖州の蔵書文化は後世にも深く影響を与えた。例えば、清末に出現した陸心源の潜園、および「晚清四大蔵書楼」の一つの皕宋楼などの蔵書楼は、その後、その蔵書は岩崎家に購入され、静嘉堂文庫の基本蔵書となった。

また、宋代の書院と蔵書は緊密に関連している。宋代の書院は非常に繁栄している。白新良氏の研究によれば、宋代書院は 513 あった（その内、北宋 71、南宋 442（南宋に営造したのは 299 あった）、北宋の浙江に 4 あり、南宋の浙江に 82 あった）。鄧洪波氏の研究によれば、宋代書院は 711 あった（その内、浙江に 156 あった）²⁸。そして、現在の山東、河北、山西、陝西、四川、貴州、海南島に多く存在していた。特に江南地域に書院が集中しており、江西が最も多く、浙江、福建、湖南はそれに次ぐ地位にある²⁹。南宋の浙江において書院が急速に発展した。

李国鈞氏は『中国書院史』で湖州の五つの書院を列举した。沈清臣が慶暦年間(1041-1048)に造った晦岩書院(湖州)、孫覚が熙寧五(1072)年に造った安定書院(湖州)、朱弁が淳熙年間に造った長春書院(湖州)、章鑑が嘉熙年間(1237-1240)に造った東萊書院(湖州徳清)、淳祐年間(1241年-1252)に造った履齋書院(湖州徳清)である³⁰。安定書院は官署の北西に位置し、元々は胡安定先生祠であり、熙寧五年(1072)に知州の孫覚が申請を出して安定書院を建造した³¹。書院は【図1】の矢印の辺りに位置していた。そして、長春書院は1143—1144年あたりに朱熹の大叔父の朱弁(?—1144)によって営造された。朱熹(1130—1200)は淳熙年間(1174-1189)に提挙浙東常平茶塩公事を担当した際に湖州に先祖を訪ねてきたことがある。また、朱弁の住宅の旧跡で講学したため、そこに書院を建てた。朱熹の曾孫である朱潜(1194—?)は理宗宝祐年間(1253—1258)に烏程知県の時に、長春書院を造り、さらに建物を増築して、朱弁、朱熹を供養する場所として使われた³²。晦岩書院について不明であるが、東萊書院は東萊学派の学説を講じたと考えられる。

そのほか、南宋の湖州私家園林に書院と名付けられた建物が出現しており(霊寿書院、東蒲書院など)、南宋の私家園林が学術、教育の機能を備えていたことがわかる。

d 湖州に移住してきた園林主

【表1】からみれば、湖州私家園林の園林主の多くは移住してきた宗室や士大夫である。宋元戦争によって、四川の士大夫は故郷から離れて生活していた。そのような士大夫たちのうち浙江に移住した人は多い。そうしたなかで、湖州への移住者が一番多かった。魏了翁、高定子が蘇州に移住し、李心伝、李性伝、高斯得、牟子才、史繩祖、程公許、呉泳、宇文挺祖などが湖州に移住した。これらの士大夫及びその後を継いだ人が転居地で学術文化を促進していた³³。四川地域で構築されたネットワークが東南に移った後も保持されていた³⁴。同時に、彼らは積極的に湖州社会に融合し、当地の名士と交遊していた。また、彼らを敬慕し、各地から訪れる人々も少なくなかった。交遊について、平田茂樹氏が魏了翁、呉泳、洪咨夔の手紙を手掛かりとしてそのネットワークを論じた。手紙を政治、文化の情報を伝えるものと考えている。また、魏了翁と呉泳の手紙から、二人の共通のネットワークと鮮明な郷土意識を読み取り、さらに、蔵書楼をめぐるネットワークという問題を提出している³⁵。そのほか、書院と交遊について、金甲鉉氏が魏了翁と三つの鶴山書院(蒲江、靖州、蘇州)を巡って研究を展開している。三つの鶴山書院の構造、機能を分析した上、各々の書院と関連する人物について論究している³⁶。

四川の士大夫で湖州に移住した後の住所を見れば、牟子才は南門近くの「南園」に住み、そして、李心伝は弁山に自宅を建築したことが確認できる。

李舜臣子心傳、道傳、性傳。心傳官太史，游吳興，悅山水之秀，寓于郡城，即今安定書院，又相度弁峯，建宅營墓，名其灣曰太史灣，歿以道傳子獻可為嗣，遂為吳興人³⁷。李心伝は最初、後の安定書院に滞在し、その後、弁峯に住宅及び墓地を営造した。彼の蔵書はおおよそ弁峯の住宅に収蔵されたと思われる。李道伝は「李氏南園」（【表 1】参照）に居住していた。

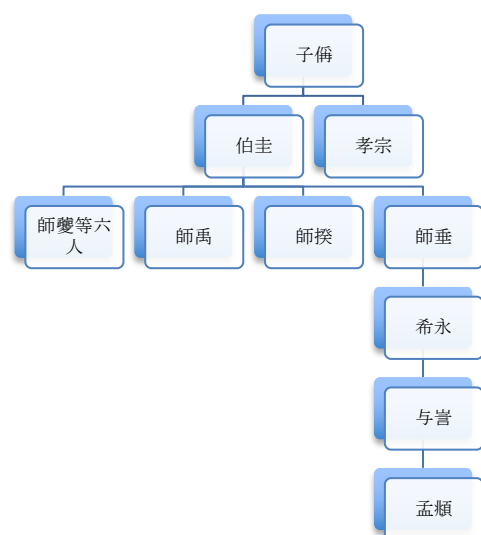
四川移民のほか、畢再遇（山東）、程大昌（徽州）も湖州に園林を購入した。程大昌は城内に園林を営造しながら、城外にも別荘を造って、中に蔵書楼を建てた。

また、南宋の宗室は湖州に数多くの園林を有していた。【表 1】に挙げられた園林の中で、趙氏所有の園林は 14 園存在している。以下では秀安僖王について見ていく。

吳興山水清遠，昇平日，士大夫多居之。其後秀安僖王府第在焉，尤為盛觀³⁸。

……宣和元年，舍試合格，調嘉興丞。是年，子伯琮生，後被選入宮，是為孝宗。子僖召赴都堂審察，改宣教郎，通判湖州，尋除直秘閣，賜五品服。孝宗既封建國公，就傳，子僖召對言「宗室之寓于外者，當聚居官舍，選尊長鈐束之。年未十五附入州小學，十五入大學，許依進士就舉，未出官者亦許入學聽讀，及一年，聽參選。」高宗納其說。遷朝奉郎祕閣修撰，知處州。已而乞祠，許之。累官左朝奉大夫。紹興十三年秋致仕，明年春，卒于秀州（中略）子僖以恩贈太子少師。既為太子，加贈太師、中書令，封秀王，諡安僖。配張氏，封王夫人。孝宗受禪，稱皇伯，園廟之制未備。紹熙元年，始即湖州秀園立廟，奉神主，建祠臨安府，以藏神貌，如濮王故事。仍班諱³⁹。

「秀安僖王」は即ち孝宗の父親の子僖である。子僖は趙德芳の五世孫であり、高宗の従兄弟である。湖州通判に任命されたことがあり、死後、湖州の秀園に葬られた。光宗が皇位を継承すると、子僖の長男である伯圭が秀王の爵位を継承し、安僖祠の側に邸宅を賜った。そののち子僖の一族が湖州で定住した。南宋の宗室の多くは両浙、福建、四川に居住していた⁴⁰。泉州、福州、臨安府、紹興府などの宗正司を設置した南宋宗室の中心地に比べれば、湖州は宗室の主要な居住地ではない。しかし、子僖は孝宗の実の父親であるため、皇帝と血縁の近い宗室として、湖州宗室の地位は特殊である⁴¹。子僖から宋末～元初の湖州における宗室の簡略世系図（脱脱『宋史』、趙孟頫『松雪齋集』卷八「先侍



【図 4：湖州宗室簡略世系図】

図（脱脱『宋史』、趙孟頫『松雪齋集』卷八「先侍

郎阡表」を参照して作成)は【図4】のようである。

既に言及したが、宗室の人々は学問を重んじる気風がある。上引史料によれば、子偁は召対した際、宗室の入学問題について意見を出しているが、これは彼が宗室の教育に関心を持っていたことを反映しているとみてよい。湖州の宗室の中で、最も知られているのが書画家の趙孟頫(1254-1322)である。「呉興八俊」として彼は書画や詩文に才能があり、多くの作品が流伝している。

湖州は風景が優美であり、水路が発達し、臨安の近くに位置し、戦乱に遭うことが殆どなかったため、経済、文化が発達し、王侯貴族、士大夫たちの集まる場所となった。そして、多くの人々が集まったことにより、造園が流行し始めた。湖州の園林は水や山に頼ることが多く、自然の美を備えている。そして、湖州は学問を重んじる気風があり、園林主は自分の園林に書院、蔵書楼を設置することも珍しくない。湖州には多くの蔵書家が集まり、そして四川からの移民も当地の文化を発展させた。また、湖州の宗室は皇帝と血縁関係が近く、湖州の地位は特別であったと言える。このように自然風景に優れ、文化が発達し、宗室、士大夫が一堂に会した湖州では、どのような交遊活動が行なわれたのであろうか。

3. 湖州園林の空間と交遊

本節では、葉夢得、牟氏及び趙氏を例として、士大夫、宗室の交遊について分析する。

(1) 葉夢得と葉氏石林

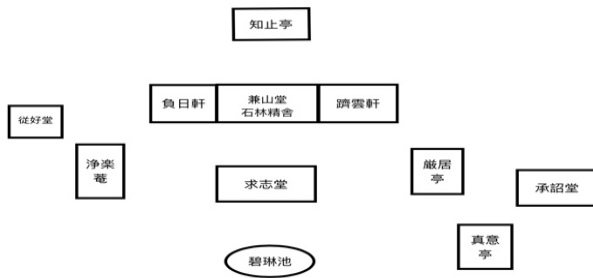
左丞葉少蘊之故居，在卞山之陽，萬石環之，故名，且以自號。正堂曰兼山，傍曰石林精舍，有承詔、求志、從好等堂，及淨樂菴、愛日軒、躋雲軒、碧琳池，又有巖居、真意、知止等亭。其鄰有朱氏怡雲菴、涵空橋、玉澗，故公復以玉澗名書。大抵北山一徑，產楊梅，盛夏之際，十餘里間，朱實離離，不減閩中荔枝也。此園在晉最古，今皆沒於蔓草，影響不復存矣⁴²。

葉夢得の園林は太湖石の産地である弁山の南麓に位置する。山中には竹、松、桐、ヤマモモが大量に植えられていた⁴³。その隣にある朱氏の園林は張文規が造った園林の旧趾にあり、造園の時、朱氏は葉夢得の意見を受け入れて、旧趾の風貌を復元した。園林の建物も葉夢得によって命名されており、「怡雲庵」はその一つである。石林は朱氏園に近く、数百歩しか離れていなかったという⁴⁴。葉夢得の筆記『玉澗雜書』も朱氏の園林の建物の名前を引用

している。両家は頻繁に往来していたことがわかる。石林の構造について、『嘉泰吳興志』では以下のように記載する。

石林在烏程縣卞山大陽隴，尚書左丞葉夢得所居也。有居一區，旁曰石林精舍，其正堂曰兼山。析廡各為軒，曰負日、曰躋雲。前有池以聚衆流曰碧琳，有東西兩巖，其東有二亭，曰巖居、曰眞意，又東有堂曰承詔堂。後有石環立，最為殊勝，上有亭據險以望太湖，曰知止。其西有菴曰淨樂，有堂在精舍之前曰求志，有堂在西山之下曰從好⁴⁵。

この史料によれば、葉氏石林内の建物の配置はおおよそ次のようになっていた。葉夢得は蔵書家として⁴⁶、石林に蔵書楼を設置していた。建物の名前からみると、「石林精舍」がその蔵書楼であった可能性が高い。



【図 5：石林構想図】

宣和五（1123）年、葉夢得は園林を作り始めた⁴⁷。造園後における彼の湖州での生活はおおよそ三つの時期に分けられる。建炎三年（1129）から紹興元年（1131）、紹興二年（1132）から紹興八年（1138）六月、紹興十六年（1146）から紹興十八年（1148）である⁴⁸。葉夢得の交遊については、姚惠蘭氏⁴⁹、王兆鵬氏⁵⁰、潘殊閑氏⁵¹などの研究者

が成果を出している。これらの成果は文学、交遊圏などの視角から論じているが、歴史学の視角からの論述は少なく、交遊空間に関する分析も不足していると考えられる。

湖州に居住したのは葉夢得が官途における挫折を味わった時期であり、苦悶の気持ちを造園に託したほか、友人とともに詩を作ったり、園林を遊覧したりしていた。

「九月二十四日陪少蘊左轄飲朱氏林亭以朱行中寄其弟詩為韻席上同賦」

蕭晨天宇澄，雲物掃氛霧。寒飈振飛藿，策策商聲中。官散無町畦，出若孤雲縱。

仰懷山中相，隱居隣二仲。駕言訪精舍，連日食指動。午坐烹茶龍，夜飲燒燭鳳……⁵²

この詩は葛勝仲が作ったものである⁵³。彼は葉夢得と一緒に朱氏林亭で宴会を開いたり、石林精舍で食事をしたり、お茶やお酒を飲んだりしていた隠遁生活を描いた。葛勝仲と葉夢得はともに紹聖四年の進士であり、同年生として交遊が非常に親密であった。

得遠祖石林居士孔耳石題名拓本敬題

石高四尺許，色黑，水紋甚細，正側有大小兩穴形如人耳，故名。背近巔左行刻十八字，曰：少蘊無言慧覺道人宣和癸卯四月辛亥同來。無言者，長興劉燾之字。無言善書，而於石林公為前輩，今名居次，當出其手。癸卯為宣和五年，即公卜居卞山石林谷之歲，蓋此石本卞山厓壁間物，卜居時偕無言閒遊題記，故有同來之語。後人見為二公遺跡，乃斷取

藏之耳。若「癸辛雜識」所記玲瓏山歸雲洞無言石林題名，雖同在癸卯歲，固別是一石也。按陶宗儀「遊志續編」采石林公『玉澗雜書』記，玲瓏山之遊在癸卯三月十六日。同遊者尚有葛魯卿，林彥振，莫彥平三人⁵⁴。

癸卯三月十六日，余在山間。葛魯卿率林彥振、劉無言、莫彥平來，相遇俾無言，書名石上云⁵⁵。

以上の二つの史料は士大夫たちが弁山で遊覧することを記載している。葉廷瑄がもらった題名の拓本は四月の活動を記録したのに対して、葉夢得が記録したのは三月のことである。こうした活動は頻繁に行われたのであろう。葉夢得がこれらの友人たちとよく交遊していたことが史料上に見られる。史料に出現する人物は以下の通りである。

劉燾は字無言、号静修、湖州長興の人である。元祐三年（1088）年に進士に合格し、秘書省正字、提点淮南東路刑獄を歴任した。書法が得意で、招かれて『閣帖』十巻を編纂したことがある⁵⁶。

林彥振は、崇寧年間に進士出身を賜った人物である。書法に優れていたが、辰砂を服用して死亡した⁵⁷。

莫砥は字彥平、莫君陳の息子である⁵⁸。莫氏は湖州の名門であった。

以上の葉夢得と交遊していた人物は、宗教者の慧覚道人については確認できないが、残りはいずれも湖州に居住した士大夫である。葉夢得が造園した際に、友人たちが訪れ、山中に記念のために題名したことが確認できる。

両宋の際に、題名を好む気風が盛んになり、清末の葉昌熾は題名について以下のように記載している。

故題名不必求古刻，考其紀年，兩宋爲多，即唐賢亦不過百一。蘇文忠笠屐所至，最好留題，以黨禁多鑿毀。南宋光堯後，士大夫渡江而南，臨安爲六飛所止，江、皖不啻左右輔。即閩、蜀、楚、粵之區，或請祠歸隱，或出守左遷，林壑徜徉，自題歲月，其詞皆典雅可誦，其書皆飄飄有凌雲之氣，每一展對，心開目明，如接前賢警效⁵⁹。

題名は両宋、特に南宋士大夫の交遊においてよく見られる活動となった。唐代以降、題名は「訪問の年月日+人名」という文体に限られず、嘗て遊覧したことを思い出して旧友を懐かしみ、或いは景色を描きながら自分の感情を述べる文体も発展していた。宋代の題名は既に叙述文の特徴を備えていた⁶⁰。

葉夢得が造園する際に、彼の友人はよく弁山を訪れた。「甲辰承詔知止亭初畢工、劉無言相過」「又南山絶頂作台新成與客賞月」「又明日與客復登台再用前韻」「又明日小雨已而風大作復晚晴遂見月與客再登」などの詞が葉夢得の詞集に残された⁶¹。これらの詞の名前だけを

みれば、園内の建物の落成が葉夢得と友人との交遊の機会となった。

劉燾だけではなく、葉夢得は劉燾の従兄弟の劉一止とも交遊していた。彼らの交遊は互いを尊重し合う雰囲気があった。以下は劉一止の詩詞である。

驀山溪 葉左丞生日

卿雲衍苒，翠壁天開就。移下小方壺，照初日、嘉林濯秀。君恩暫許，邱壑憩夔龍，開徑竹，續巖花，小試丹青手。

聲名德業，漢代誰居右。紅旆碧油幢，想今古、山中未有。霜松手種，應待茯苓生，齋釀熟，玉泉香，還上萱堂壽。

訪石林葉少蘊觀文二首

卿雲覆其上，草木爭鮮新。竹露先參差，晴曦破蕭晨。萬石紛拱揖，靜默自主賓。似中有老仙，雲霞煥精神。朝暮林壑間，搜抉出怪珍。風歛青籟笠，雨墊烏角巾。山靈指山謂，此是夔龍身。如何輕世累，蕭散與許真。了知褻衣貴，未若巖石親。功名乃棄餘，道德受咨詢。我來追步趨，且復結勝因。劇談到羲皇，愧此真天人。

又

夔龍在邱壑，神物發幽祕。森然萬瓊瑰，參錯分位置。踞地猛獸伏，拏空孤鳥厲。先後相長雄，突怒疑攫噬。各以奇自列，寧謂我獨嗜。羊酪非不珍，蓴羹有至味。鄭公信骨鯁，我但見嫵媚。種竹被嵒巒，惡木不得地。荃蘭偏九畹，蕨草慘無類。造化初何心，被物自殊志。那知此巖傍，閱世等如寄。願言賦丹青，遠近同一視⁶²。

劉一止（1078-1160）、字行簡、湖州歸安人である。宣和三年（1121）の進士であり、秘書郎に任命され、監察御史となった⁶³。秦檜に逆らったため、紹興九年に給事中をもって罷免され、その後の十数年間は自宅で過ごした⁶⁴。劉一止は建炎三年（1129）、及び紹興十六年（1146）に、上記の三つの詩詞を作った。この期間、劉一止、葉夢得の二人とも湖州に住していた⁶⁵。最初の一首は劉一止が葉夢得の誕生日を祝ったことに触れている。石林の綺麗な建物、また松、竹、花卉、薬草を観覧し、一緒にお酒を飲んだことを描いた。後半の二首は紹興十六年に作成された。劉一止は葉夢得を「夔龍」に喩え、功名を捨てて、道徳を大事にし、山中で暫く休む機会をもって園林を営造したことを述べた。この時、二人は共に政治上の挫折を経験している。よって、劉一止は単に園林の趣を味わいに来たのではなく、互いの境遇を理解し、支え合って、慰める様子も見出すことができよう。

以上、葉夢得と友人との葉氏石林をめぐる交遊活動を分析した。遊山、題名、誕生日のお祝い、月見などの活動を行なったことが分かった。

加えて城外の石林のほか、友人たちと共に城内を遊覧したこともある。

癸卯七月十二日夜，天氣稍涼，月色如霜雪。余寓居溪堂，當苕霅兩溪之會。適自山中還。葛魯卿亟相過，因同泛舟。掠白蘋亭，度甘棠橋，至魚樂亭，少留步而叩門，呼莫彥平，尚未寢。天無片雲，夜氣澄徹，星斗爛然，俯仰上下，微風時至，毛髮森動。莫居三面臨水，為城中居地之勝。夾徑老柳參天百餘尺，環以蓮蕩。人行柳影荷氣中，時聞跳魚潑刺水上。復拉彥平，刺舟逆水而上。月正午，徐行抵南郭門而還。魯卿得華亭客餉白酒，色如潼乳，持以飲我。旋呼兵以小舟吹笛相尾，道傍居人聞笛聲，亦有起而相應者。酒盡抵岸，已四鼓矣⁶⁶。

葛勝仲は葉夢得を招いて船を乗って遊覧する途中、莫彥平の園林を訪れた。三人が園中で散歩しながら、柳、蓮等を楽しんだ後、再び船を乗って、月見をしたり、お酒を飲んだり、笛を聴いたりしていた。莫彥平の園林は月河に位置した⁶⁷。月河の場所は【図1】に示したように、周りに私家園林が多く集まっていた。葉夢得はそこを城内の景勝地と称した。史料を付き合わせて考えてみると、当日に三人の遊覧するルートは【図1】の月河の左側の曲線部分と推測され、月河の左側から南の安定門方向に向かったと考えられる。

葉夢得は湖州にいる間、このように景勝地を見て回り、友人とともに楽しむ生活をしてきた。彼と交遊した士大夫の多くは湖州の名士であり、交遊相手であった莫彥平の湖州莫氏、葛勝仲の江陰葛氏は湖州の名門として知られていた。上引史料に記載されたのは宣和五年（1123）の活動であり、葉夢得は任用されたり、罷免されたりしていた時期である。そして葛勝仲は李彥から弾圧を受け、湖州の知州に左遷されており、劉燾は罷免され湖州に居住していた。各々官途で挫折を経験したことで、山水に苦悶を託し、隱遁生活をしてきたという共通点があった。さらに、葉夢得と葛勝仲は同年の間柄であり、二人の関係はより親密であったと思われる。

葉夢得と劉一止、葛勝仲などの士大夫との交遊について、研究成果は多く出されている。それゆえ贅言する必要はないが、先行研究の問題点である交遊空間の認識不足という点を補充して分析を加えた。園林は湖州の士大夫にとって不可欠な交遊場所として、士大夫の交遊に多くの機会を提供した（例えば新堂の竣工など）。そして、山石に題名することも南宋の士大夫の間で流行していた。彼らのような士大夫は官途に挫折を受け、湖州に集まった。彼らの交遊活動からは、隱遁生活に甘んじる様子が見て取れる。

（2）牟氏と牟端明園

牟端明園の主人は牟子才である。牟子才、字存安、号存齋。四川井研人である。嘗て魏了翁の門下に学んでいた。嘉定十六年（1223）年に進士合格した。四川提挙茶馬司準備差

遣、総領四川財賦所幹辦公事を歴任した後、成都において『四朝会要』を編纂していた李心伝に招かれて史官検閲となった。端明殿学士、資政殿学士で致仕した⁶⁸。著作として『存齋集』があるが、現存していない。

上述の通り、戦乱を避けるために蜀地の多くの士大夫は四川から湖州に移住した。牟氏が湖州に移住した後の交遊に関して、先行研究において言及されたように、牟子才の息子である牟巖は李心伝の外孫である鄧氏を娶っており、牟氏と李氏は姻戚関係にある。また、牟氏と趙孟頫がよく交遊していたことを確認できる。ここで牟氏と趙孟頫に関する研究について触れることはせずに、本節では、園林を手掛かりにして牟氏の交遊を考察していく。

本郡志南園，後歸李寶謨，其後又歸牟存齋。園中有碩果軒、（大梨一株）、元祐學堂、芳菲二亭、萬鶴亭、（茶蘼）、雙杏亭、桴舫齋、岷峨一畝宮，宅前枕大溪，曰南漪小隱⁶⁹。これは周密が描いた牟氏南園の景勝である。園内に軒、堂、亭、齋などの建物があり、住宅の前に川もある。また、周密は『芥東野語』に牟子才の園林を購入する経緯を記録している。

南園故址在今南門内，牟存叟端平所居是也。其地尚為張氏物，先君為經營得之，存叟大喜，亦常賦五絕句，其一云：買家喜傍水晶宮，正是南園故址中。我欲築堂名六老，追還慶曆太平風⁷⁰。

南園旧跡は今の南門内であり、牟存叟端平の住所である。当時、その地はまだ張氏のものであったが、先君（周密の父親である周晋を指す）が（牟子才のために）これを購入した。存叟は大喜びして、五つの絶句を詠んだ。その内の一つには「水晶宮の傍に家を買えたことは喜ばしいことだ。ちょうど南園の旧跡である。私は堂を築いて六老という名を付け、慶暦の太平の気風を取り戻した。」と詠んだ。

慶暦六年、呉興郡守の馬尋が南園において宴会を開き、六老をもてなした。そこで彼らは酒を飲みながら詩作を行っており、当時、湖州の州学教授であった胡瑗がこの宴会のために序を作った。六人の内、当時七十九歳の工部侍郎郎簡、八十六歳の司封員外郎范説、九十一歳の衛尉寺丞張維は皆致仕していた。そして九十二歳の劉維慶、九十五歳の周守中、七十二歳の呉琰は朝廷に任官している子弟がいた⁷¹。牟子才の詩の後ろの二句はこの件を指している。彼が慶暦の太平の気風を取り戻そうとしていたことが感じられる。

歲丙午、丁未，先君子監州太末，時刺史楊泳齋員外、別駕牟存齋、西安令翁浩堂、郡博士洪恕齋，一時名流星聚，見謂奇事。倅居據龜阜，下瞰萬室，外環四山。先子作堂曰嘯詠。撮登覽要，蜿蜒入後圃。梅清竹癯，虧蔽風月。後俯官河，相望一水，則小蓬萊在焉。老柳高荷，吹涼竟日。諸公載酒論文，清彈豪吹，筆研榘樽之樂，蓋無虛日也⁷²。

淳祐六、七（1246-1247）年、先君子=周密の父である周晋は太末監州であった。当時、湖

州には楊伯岳、牟子才、翁甫、洪勳のような名流が集まっており、素晴らしい事であると言えた。崖の傍に住み、下に見える多くの部屋を俯瞰していた。四つの山に取り囲まれており、先子は堂を建設して嘯詠と名付けたという。淳祐六（1246）年に牟子才は居住地を決め、翌年に引越しをした。この時期における牟子才と周晋及び他の士大夫との交遊活動が上記の史料から窺える。即ち、諸公は酒を飲みながら文章を作り、楽器を演奏して、一日として文、琴、酒を楽しまないことがなかったという。

題施東皋南園圖後

先父存齋翁以淳祐丙午卜居雪川定安門之裏，馬公橋之旁，乃慶厯間郡守馬尋宴六老於南園處也。越明年丁未冬，先父以言事忤時宰，謁告來歸，始奠居焉（中略）門人馬君廷鸞大書南園二字揭焉，直齋陳貳卿與先父有同朝好，今跋此圖，乃庚戌七月五日後六年丙辰中秋後所書⁷³。

牟子才が引っ越しをした際、その門人の馬廷鸞が「南園」という字を書いて牟氏に贈った。施東皋が南園図を描いて、また、牟子才と「同朝好」（中央官界での同僚関係）である陳振孫が淳祐十（1250）年に南園図のために跋文を作った。牟氏の園林を巡って一連の文学活動が展開されていたことが分かる。

また、牟子才と周晋の交遊に戻ると、周晋はよく牟氏園林を訪れた。

點絳脣・訪牟存叟南漪釣隱

午夢初回，捲簾盡放春愁去。晝長無侶，自對黃鸝語。絮影蘋香，春在無人處。

移舟去，未成新句，一研梨花雨⁷⁴。

「南漪釣隱」は即ち牟端明園のことである。周晋が昼寝の後、寂しさに耐えかね、牟子才の園林を訪問した。園林の景勝を味わいながら春の息吹を感じる。船で帰るまで、新句はできなかったが、園林の梨花の美しさだけは忘れられなかった。詩に二人の交遊活動については記されていないが、飲酒作詩や政治見解の交換などをしていたと想像できる。このような描写は周晋と牟子才との親密関係を表している。

牟子才の文集は現存しておらず、具体的な交遊状況を考察するのは難しいが、園林空間を巡る彼の交遊の分析を試みた。園林は移居した牟子才にとって、生活空間、交遊空間であっただけでなく、理想を実現できる場所でもあると言えよう。そして、湖州に移住してから、いかに当地の社会に馴染んでいったのかを少しうかがうことができる。また、一緒に湖州に移した蜀地の士大夫との交流は少なくないと思われる。上述の如く、彼は蔵書家としても有名であり、その息子である牟巖とともに学を修めて、学問の発展に貢献していた。牟巖も士大夫の尊敬を受けていた。彼の『陵陽集』を見ると交遊範囲はかなり広く、その影響力がうかがえる。

牟巖（1227-1311）字獻之、号は陵陽である。四川井研人であるが、父の牟子才に従って湖州に移住した。大理寺直に務めたが、南宋が滅亡した後、元朝には仕えず、36年の隠居生活をしてきた。子の応龍と経学、道義を磨き合い、国内の学者は皆、彼を師と仰いで尊敬した⁷⁵。牟巖の交遊について、陳彦池⁷⁶、郝青萍⁷⁷による研究成果がある。牟巖と交遊した人物は多く湖州及びその周辺地域に居住していた。その中でも彼と周密の交遊に注目すべきである。

周君公謹以世舊夙厚余，間不見且久。梅潦被道，吾廬無來跡，君忽披蓬藿相就談。始予見太末時，如川方至之意氣，視一世何如也？歲星四環天，余固早衰，君亦華皓，能不為興慨者耶？君晚更號“弁陽老人”，刻石自銘，出其詞似予……⁷⁸

藏書萬卷居饒臺榭，弁陽山水清峭，遇好景佳時，載酒肴浮扁舟窮旦夕，賦詠於其間⁷⁹。周密（1232-1298）、字公謹、曾祖祕から済南から呉興に移住した。周密に至るまで、四世代に渡った。ここには周氏の蔵書を好む気風や周密の文人としての洒脱した様子が読み取れる。牟氏と周氏は代々にわたる付き合いと言える。遅くとも、二人の父親の時代から親しく交遊していたことが確認できる。周密も牟巖と親密であった。この史料に描かれた交遊活動は、しばらく顔を合わせていない中、跋文を作ってもらうために牟巖の居宅に周密が訪問したというものであった。久方ぶりの再会で牟巖は二人の初対面の時を思い出し、また、今の衰えている二人の様子を心に深く感じた。このような話は二人の厚い友情を表すことにほかならない。「始予見太末時」からみると、上述した周晋、牟子才が太末で行った宴会に周密だけでなく、牟巖も参加していた。牟巖は周密の『齊東野語』に序文を寄せており、このように文章を依頼することが二人の交遊の機会の一つと言えよう。

牟巖の園林生活について、主に息子の応龍と共に学問を研鑽したが、後輩との唱和も行っていた。

空庭兩犀株，吹香滿前軒。頗疑顧虎頭，幻此金粟繁。
或是乘鸞女，月窟分天根。更與瀉浩露，盡洗蜂蝶喧。
若無好事者，為我載一尊。而我子張子，古誼夙所敦。
肯將新詩句，到我羅雀門。何殊小山賦，欲招楚客魂。
犀首纍佩印，陋矣不足論。老我罕出戶，東墻甘曝暄。
應同花下醉，式副我願言⁸⁰。

この詩は牟巖と張栻が唱和していた様子を表す。張栻は字仲実、南宋名将張俊の五世孫である。「老我罕出戶」という表現からは、牟巖の隠居生活をしたため、殆ど自宅で毎日を過ごしていたと考えられる。牟巖の園林は鑑賞より、学問を研鑽する場所という性格が明らか

かである。彼の息子の応龍は「吳興八俊」の一人に数えられたが、それは学問を重視する牟氏の姿勢と無関係とは言えないだろう。

(3) 趙氏園林

前文で言及したが、36箇所の湖州園林のうち宗室趙氏に属するのは14箇所に至った。その中に趙與憲と趙與嘗（1175—1231）は各々二つ以上の園林を所有していた。

趙與憲、字徳淵、太祖の十世孫で、湖州に住んでいた。嘉定十三年（1220）の進士で、知大宗正兼樞密院検詳諸房文字、直宝章閣、両浙転運判官を加えた。知慶元府兼沿海制置副使、浙西提點刑獄を任命された後、知臨安府、権戸部尚書、兼浙西提挙常平加端明殿学士を歴任した。景定元年（1260）八月に亡くなり、少師を贈られた。『宋史』では「所至急於財利，幾於聚斂之臣」と評価された⁸¹。

趙與嘗、景定五年に転運使となり、十一月に戸部尚書に任命され、臨安府知府となった⁸²。

この二人は同じく侍従官⁸³に任命されたことがあり、当時の政界において重要な人物であった。趙與憲は湖州において五つの園林を所有した。それはその政治権力と関連していると思われる。湖州だけではなく、淳祐中、趙與憲は臨安の常甘氏園を購入した記載が確認できる。そして、亭台楼閣を再建し、四時の花木を植えて、湖曲園と命名した。いつも園林の中で宴会を開き、園林の景勝を楽しんでいた⁸⁴。

趙氏にとどまらず、湖州では一人の園林主が城内に園林を買い入れつつ、城外にも別荘を所有することが珍しくない。例えば、倪思、程大昌は皆蔵書のために城外に別荘を営造した。宗室の趙與懃も城外に別荘を購入して、書法を収蔵していた。

趙與懃、号蘭坡、処州青田に居住した。正恵公希暉の息子であり、嘉熙年間（1237—1265）に臨安府知府となり、右文殿修撰をもって奉祠⁸⁵した。その兄の與憲とともに適切に事務を処理できることで称賛された。古画を臨模することが得意であり、特に墨竹が得意であった⁸⁶。

こうした宗室の中で、趙孟頫は一番有名であるかもしれないが、彼の父である趙與嘗（1213—1265）と従兄弟の趙孟堅（1199—）も趙孟頫と比べても遜色ない人物であると言える。

趙孟堅字子固，號彝齋居士。居海鹽廣陳鎮，寶慶二年進士。修雅博識，人比米南宮，東西游適，一舟橫陳，僅留一榻偃息地，餘皆所挾雅玩之物。意到，左右取之吟弄，忘寢食。過者望而知為趙子書畫船也。善水墨、白描，水仙花、梅、蘭、山礬、竹石，清而不凡，秀而雅淡，有梅譜傳世。官至朝散大夫，嚴州守⁸⁷。

趙孟堅は字が子固で、号は彝齋居士である。宝慶二年の進士である。才気にあふれ、人は彼を米芾に喩えていた。洒脱であり、些細なことにこだわらない性格であった。書画を船に載せて、孟堅が中に身を置いて芸術品を愛でることがよくあったという。また、絵画を描くのが得意であったという。

そのほか、周密も趙孟堅との交遊を記載した。

趙孟堅字子固，號彝齋，居嘉禾之廣陳，脩雅博識，善筆札，工詩文，酷嗜法書。多藏三代以來金石名蹟，遇其會意時，雖傾囊易之不靳也。又善作梅竹，往往得逃禪、石室之妙，於山水為尤奇，時人珍之。襟度瀟爽，有六朝諸賢風氣（中略）庚申歲，客輦下，會菖蒲節，余偕一時好事者，邀子固各攜所藏，買舟湖上，相與評賞。飲酣，子固脫帽，以酒晞髮，箕踞歌離騷，旁若無人⁸⁸。

端午の節句、周密は趣味の合う人を連れて、子固を誘い、自分の収蔵品を携えて、購入した船で湖上に互いに評判、鑑賞した。趙孟堅は優れた画家であっただけでなく、詩文にも優れ、文物の収蔵や鑑賞もよく行っていた。二人は収蔵品の鑑賞をきっかけにして交遊を開始している。周密の言葉からは、趙孟堅に対する賞賛が見てとれる。

挽菊坡趙侍制二首⁸⁹

其一：貴胄才華自昔慳，如公名德世難攀。杏園新賜金花帖，荷橐高躋玉笋班。

磨節一生多浙右，詩書千載接河間。感懷空抱羊曇恨，遙望西州淚雨漣。

其二：一從弓劍鼎湖遊，有詔王孫記玉樓。天上曉班催聽覆，人閑夜壑忽移舟。

霜殘舊菊荒三徑，雨泣新松掩一丘。別墅甫成清夢斷，梅花空老水空流。

これは周密が趙與峕の為に書いた挽詩である。趙與峕の才能、徳行を賞賛すると同時に、彼が一生の多くの時間を浙右で過ごしたことに言及した。また、二番目の詩には二人で一緒に船に乗り、菊、松、そして別荘（園林）の梅を楽しんだ思い出に触れている。そして、これらの風景は趙與峕の死とともに衰えていったと詠んでいる。

もう一人の宗室として趙孟奎を例として挙げておく。趙孟奎、字文耀、号春谷、趙與箴の息子で、理宗宝佑年間進士、秘閣修撰に至った⁹⁰。画家であり、その作品は明の『画史会要』に収録されている。

和趙春谷南溪雙蓮二絶⁹¹

其一：萼仙綵袂濕銀泥，共蒂分紅照碧溪。桃葉桃根雙姊妹，未應擬入句中題。

其二：文耀祠前花滿池，花神為谷獻珍奇。會看兩兩紅蓮炬，先遣秋風瑞入詩。

この二首の詩は南宋末期の理学家である林希逸（1193-1271）が趙孟奎と唱和した作品である。唱和した場所は文耀祠で、景勝からみると「趙府北園」にある可能性が高い。また、唱和が行われたのは花をテーマとした宴会であったかもしれない。そのほか、牟巖は趙孟

奎ともよく交遊していた。「趙春谷約游北山次陳本齋韻⁹²」から、二人が嘗て一緒に北山を遊覧したことがわかる。そして、趙孟奎が亡くなった後、牟巖が挽詩を書いて友人を心にかけていた。

以上のように、趙氏宗室の湖州における交遊について分析してきた。趙孟頫を含めて、趙氏には文学、芸術に優れる人物は少なくない。彼らは文学家、史学家等と交遊し、学問を磨き合い、収蔵品の鑑賞もよく行なっていた。その中に、趙孟奎の「趙府北園」に書院と名付けた建物があり、彼が学問を重んじたことがわかる。さらに、宗室の私家園林は文人化園林へ発展していたことを反映している。

4. おわりに

本章は湖州の私家園林を手掛かりとして、園林の概況及びその空間、園林をめぐる交遊を分析した。湖州は自然風景に優れ、経済が発達し、文人墨客に愛された。南宋に入ると、宋室の南遷が湖州園林の発展を促進した。良嶽の後、太湖石が盛んになり、その産地としての湖州には、太湖石を主要な景観とする私家園林が出現した。

それと同時に、多くの蔵書家が湖州に集まったことも蔵書事業を促進し、後世に影響を与えた。

湖州文化の発展は二回の文化的交流に影響されていた。一つは北宋末から南宋の初めごろ、南に渡る詞人群体（葉夢得、葛勝仲、劉一止など）の交遊、唱和である。もう一つは宋元戦争がもたらした蜀地の士大夫の移動である。文化の発展は交流と密接に関連し、湖州のこのような文化交流は多くの有能な人材を輩出した湖州の基礎となった。また、宗室は書画、詩詞などの方面に優れており、湖州文化の発展に大きな影響を与えた。

そして、湖州園林を巡る交遊について、文学家、史学家、宗室の三つの方面から分析した。葉夢得が湖州にいるときは挫折を経験した時期である。交遊した人物たちの多くは、自身の政治的理想を実現できていない士大夫であった。牟氏も湖州に移住してから、隠遁生活をしていた。園林は彼らにとっては学術を発展させる根拠地である。また、南宋の宗室は多くの芸術家を輩出しており、その文人的気質は園林の構造と機能に影響を与えた。

本章の内容をまとめると、湖州は輔郡として、宗室や士大夫が集まって、文化や風俗などが臨安と相当に似ていたと考えられる。湖州の私家園林を事例とすると、南宋の私家園林は士大夫にとって苦悶を慰め、または理想を託す空間であった。彼らの園林生活は隠逸の雰囲気を持っており、文化活動や文学の交流に満ちていたと思われる。この点は北宋洛陽の政治的色合いを帯びた交遊と異なっていた。靖康の変を経験し、南宋の士大夫は戦争

や政治上のつらい思いを園林の景勝に託すことがよくある。両宋の間の私家園林は構造が異なるだけではなく、士大夫の感情や思想にも区別がある。北宋洛陽の士大夫は園林を通じて自分の政治的主張をするのに対して、南宋湖州の私家園林は士大夫の避難場、安楽地のような存在であった。

【表 1：宋代湖州私家園林表】

園林	園林主	出典（周密『癸辛雜識』「吳興園圃」）
南沈尚書園	沈介、字德和、湖州德清人	沈德和尚書園，依南城，近百餘畝，果樹甚多，林檎尤盛。內有聚芝堂藏書室，堂前鑿大池幾十畝，中有小山，謂之蓬萊。池南豎太湖三大石，各高數丈，秀潤奇峭，有名於時。其後賈師憲愆得之，募力夫數百人，以大木構大架，懸巨絙，縋城而出，載以連舫，涉溪絕江，致之越第，凡損數夫。其後賈敗，官斥賣其家諸物，獨此石臥泥沙中，適王子才好奇，請買於官，募工移植，其費不貲。未幾，有指為盜賣者，省、府追逮幾半歲，所費十倍於石，遂復舁還之，可謂石妖矣。
北沈尚書園	沈作賓、字賓王、世為湖州歸安人	沈賓王尚書園，正依城北奉勝門外，號北村，葉水心作記。園中鑿五池，三面皆水，極有野意。後又名之曰自足。有靈壽書院、怡老堂、溪山亭、對湖台，盡見太湖諸山。水心嘗評天下山水之美，而吳興特為第一，誠非過許也。
章參政嘉林園	章良能、字達之、麗水人、居湖州	外祖文莊公居城南，後依南城，有地數十畝，元有潛溪閣，昔沈晦岩清臣故園也。有嘉林堂、懷蘇書院，相傳坡翁作守，多遊於此。城之外別業可二頃，桑林、果樹甚盛，濠濮橫截，車馬至者數返。復有城南書院。
牟端明園	牟子才、字存安、存齋、四川井研人	本『郡志』南園，後歸李寶謨，其後又歸牟存齋。園中有碩果軒、大梨一株、元學堂、芳菲二亭、萬鶴亭、茶靡、雙杏亭、桴舫齋、岷峨一畝宮，宅前枕大溪，曰南漪小隱。
趙府北園	趙与憲、字德淵	舊為安僖故物，後歸趙德勤觀文，其子春谷、文曜葺而居之。有東蒲書院，桃花流水、薰風池閣、東風第一梅等亭，正依臨湖門之內，後依城，城上一眺，盡見具區之勝。
丁氏園		丁總領園，在奉勝門內，後依城，前臨溪，蓋萬元亨之南園，楊氏之水雲鄉，合二園而為一。後有假山及砌臺，春時縱郡人遊樂。郡守每歲勸農還，必於此饜舟宴焉。
蓮花莊	趙氏	在月河之西，四面皆水，荷花盛開時，錦雲百頃，亦城中之所無。昔為莫氏產，今為趙氏。
趙氏菊坡園	趙与嘗、字仲父、号菊坡	新安郡王之園也，昔為趙氏蓮莊，分其半為之。前面大溪，為修堤、畫橋，蓉柳夾岸，數百株照影水中，如鋪錦繡。其中亭宇甚多，中島植菊至百種，為菊坡、中甫二卿自命也。相望一水，則其宅在焉。舊為曾氏極目亭，最得觀覽之勝，人稱曰八面曾家，今名天開圖畫。
程氏園	程大昌、徽州休寧人	程文簡尚書園，在城東宅之後，依東城水濠，有至游堂、鷗鷺堂、芙蓉涇。
丁氏西園	丁注、字葆光、歸安人	丁葆光之故居，在清源門之內，前臨苕水，築山鑿池，號寒岩。一時名士洪慶善、王元渤、俞居易、芮國器、劉行簡、曾天隱諸名士皆有詩。臨苕有茅亭，或稱為丁家茅庵。

倪氏園	倪思、字正甫、湖州歸安人	倪文節尚書所居，月河，即其處，為園池，蓋四至傍水，易於成趣也。
趙氏南園		趙府三園在南城下，與其第相連。處勢寬闊，氣象宏大，後有射圃、崇樓之類，甚壯。
葉氏園	葉溥	石林右丞相族孫溥號克齋者所創，在城之東，多竹石之勝。
李氏南園	李性伝、字成之、号鳳山、四川井研人	李鳳山參政本蜀人，後居霽，因創此為游翔之地。中有傑閣曰懷岷，穆陵御書也。
王氏園		王子壽使君家，於月河之間，規模雖小，然曲折可喜。有南山堂，臨流有三角亭，茗、霽二水之所匯，茗清霽濁，水行其間，略不相混，物理有不可曉者。
趙氏園	趙師禹	端肅和王之家，後臨顏魯公池，依城曲折，亂植拒霜，號芙蓉城，有善慶堂最勝。
趙氏清華園	趙師揆、秀安僖王园令	新安郡王之家，後依北城，有秣田二頃。有清華堂，前有大池，靜深可愛。
俞氏園	俞激、字子清、号且軒、湖州人	俞子清侍郎臨湖門所居為之。俞氏自退翁四世皆未及年告老，各享高壽，晚年有園池之樂，蓋吾鄉衣冠之盛事也。假山之奇，甲於天下，詳見後
趙氏瑤阜	趙与勳、号蘭坡	蘭坡都承旨之別業，去城既近，景物頗幽，後有石洞，常萃其家法書，刊石為瑤阜帖。
趙氏蘭澤園		趙氏蘭澤園亦近世所葺，頗宏大，其間規為葬地，作大寺，牡丹特盛。未幾，寺為有力者撤去。
趙氏繡谷園	趙与憲	趙氏繡谷園舊為秀邸，今屬趙忠惠家，一堂據山椒，曰雪川圖畫，盡見一城之景，亦奇觀也。
趙氏小隱園		在北山法華寺後，有流杯亭，引澗泉為之，有古意，梅竹殊勝。
趙氏蜃洞	趙与憲	趙氏蜃洞亦趙忠惠所有，一洞杳然而深不可測，聞昔有蜃居焉。
趙氏蘇灣園	趙与峯	菊坡所創，去南關三里而近碧浪湖，浮玉山在其前，景物殊勝。山椒有雄跨亭，盡見太湖諸山。
畢氏園	畢再遇、字德卿、兗州（山東）人	畢最遇承宣所葺，正依迎禧門城，三面皆溪，其南則邱山在焉。亦歸之趙忠惠家。
倪氏玉湖園	倪思	倪文節別墅，在峴山之傍，取浮玉山、碧浪湖合而為名。中有藏書樓，極有野趣。
章氏水竹塢	章良肱（章良能兄）	章農卿北山別業也，有水竹之勝。
韓氏園	韓侂胄親族	距南關無二里，昔屬平原群從，後歸余家，名之曰南郭隱。城南讀書堂、萬松關，太湖三峰各高數十尺，當韓氏全盛時，役千百壯夫移置於此。
葉氏石林	葉夢得、字少蘊、蘇州吳縣人	左丞葉少蘊之故居，在卞山之陽，萬石環之，故名，且以自號。正堂曰兼山，傍曰石林精舍，有承詔、求志、從好等堂，及淨樂庵、愛日軒、躋雲軒、碧琳池，又有岩居、真意、知止等亭。其鄰有朱氏怡雲庵、函空橋、玉澗，故公復以玉澗名書。大抵北山一徑，產楊梅，盛夏之際，十餘里間，朱實離離，不減閩中荔枝也。此園在霽最古，今皆沒於蔓草，影響不復存矣。
黃龍洞		與卞山佑聖宮相鄰，一穴幽深，真蜿蜒之所宅。居人於雲氣中，每見頭角，但歲旱禱之輒應。真宗朝金字牌在焉。在唐謂之金井洞，亦名山福地之一也。
玲瓏山		在卞山之陰，嵌空奇峻，略如錢塘之南屏及靈隱、蕘林，皆奇石也。有洞曰歸雲，有張謙中篆書於石上。有石梁，闊三尺許，橫繞兩石間，名定心石。傍有唐杜牧題名云：「前湖州刺史杜牧大中五年八月八日來」。及紹興癸卯，葛魯卿、林彥政、

		劉無言、莫彥平、葉少蘊題名。
賽玲瓏	沈氏	賽玲瓏去玲瓏山近三里許，近歲沈氏抉剔為之。大率此山十餘里，中間皆奇石也。今亦皆蕪沒於空山矣。
劉氏園	趙与憲	劉氏園在北山，德本村富民劉思忠所葺，後亦歸之趙忠惠。
錢氏園		錢氏園在毗山，去城五里，因山為之。岩洞秀奇，亦可喜，下瞰太湖，手可攬也。錢氏所居在焉，有堂曰石居。
程氏園		程氏園文簡公別業也，去城數里，曰河口。藏書數萬卷，作樓貯之。
孟氏園	孟無菴	孟氏園在河口。孟無庵第二子既為趙忠惠婿，居霅，遂創別業於此。有極高明樓亭宇，凡十餘所。

- ¹ 童寓『江南園林志』（中国建築工業出版社、1963年11月）、岡大路『中国宮苑園林史考』（農業出版社、1988年5月）、周維權『中国古典園林史』（清華大学出版社、2008年11月）など。
- ² 章琳「湖州傳統園林調查與研究」浙江農林大学碩士學位論文、2015年6月。
- ³ 章琳のほか、湖州園林についての著作として、李彬、吳義祥、陳茂流「略論吳興園林的構造風格」（『芸術探究』第24卷第6期、2010年12月、pp.131-132）、章琳、孟勳、方舒麗、王欣、俞益武「湖州古典園林歷史沿革初探」（『中国城市林業』第13卷第5期、2015年10月、pp.63-66）、沈俊等『湖州園林史』（浙江古籍出版社、2013年1月）もある。
- ⁴ 方健『北宋士人交遊錄』上海書店出版社、2013年11月。
- ⁵ 胡珍「近十年宋代士人交遊綜述」『榆林学院学報』、第26卷第1期、2016年1月、pp.54-59。
- ⁶ 梁建国『朝堂之外：北宋東京士人交遊』中国社会科学出版社、2016年7月。
- ⁷ 鮑沁星『南宋園林史』上海古籍出版社、2016年12月。
- ⁸ 曾維剛、鐵愛花「園林別業與宋人休閒雅集和文学活動-以杭州張鑑南湖別業為中心的考察」『浙江学刊』第5期、2012年9月、pp.102-110。
- ⁹ 前掲注1童寓『江南園林志』を参考。
- ¹⁰ 前掲注2論文を参考。
- ¹¹ 前掲注7著作を参考。
- ¹² 樂史『太平寰宇記』（文淵閣四庫全書補配古逸叢書景宋本）卷九十四江南東道六、「湖州」。
- ¹³ 談鑰『嘉泰吳興志』（『宋元方志叢刊』中華書局、1990年5月）卷二十、「風俗」。
- ¹⁴ 陸心源『吳興金石記』（『地方金石志匯編』国家図書館出版社、2011年5月）卷十六、「左丞潘公政績碑」。
- ¹⁵ 周密撰、吳企明點校『癸辛雜識』（中華書局、1988年1月）前集、「吳興園圃」。
- ¹⁶ 前掲注13『嘉泰吳興志』卷十三、「苑圃」。
- ¹⁷ 葉夢得『避暑錄話』（朱易安主編『全宋筆記』第二編十、大象出版社、2003年10月）卷下。
- ¹⁸ 侯迺慧『宋代園林及其生活文化』三民書局出版、2010年3月。
- ¹⁹ 前掲注15「吳興園圃」。
- ²⁰ 『癸辛雜識』前集、「假山」。
- ²¹ 光緒『烏程縣志』光緒七年刻本影印、上海書店、1993年6月。
- ²² 范成大『騷鸞錄』（中華書局、1985年）、「十九日、將遊北山石林。薛守願同行，乘輕舟十余裏，登籃輿，小憩牛氏歲寒堂。自此入山，松桂深幽，絕無塵事。過大嶺，乃至石林，則棟宇已傾頽，西廊盡拆去，今哇菜矣。正堂無恙，亦有舊床榻，在凝塵鼠壤中。堂正面下山之高峰，層巒空翠照衣袂，畧似上天竺白雲堂所見而加雄尊。自堂西，過二小亭，佳石錯立道周。至西巖，石益奇且多。有小堂曰「承詔」。葉公自玉堂歸守先隴，經始之初，始有此堂，後以天官召還，受命於此，因以為誌焉。其旁登高有羅漢巖，石狀怪詭，皆嵌空裝綴，巧過鐫剝。自西巖回步至東巖，石之高壯口（石壘）砢。又過西巖小亭，亦頽矣。葉公好石，盡力剔山骨，森然發露若林，而開徑於石間。亦有得自他所，移徙置道傍以補闕空者。方公著書釋經於堂上，四方學士聞風仰之，如璇現景星，語：「石林所在，又如仙都道山，欲至不可得」蓋棺未幾，而其家已不能有，委而棄之灌莽叢薄間，遊子相與徘徊，嘆息之不能去，或謂「此地離人太遠，岑蔚荒虛，非大官部曲眾多者，難久處。」又云：「公沒後，山鬼搶攘，暮夜與人錯行，婦子不能安室，故諸郎去之云。」
- ²³ 周密『齊東野語』（中華書局、1985年）卷十二、「書籍之厄」。
- ²⁴ 范鳳書『中国私家藏書史』（大象出版社、2001年7月）第二編第一章、「宋代的私家藏書」、p.65。

- ²⁵ 脱脱『宋史』（中華書局、1977年）卷二百二、志第一百五十五、藝文一。
- ²⁶ 方建新『南宋藏書史』（人民出版社、2013年4月）第三章「南宋の私家藏書（上）」、pp. 153-239。
- ²⁷ 祁琛雲「宋代私家藏書述略」『歴史教学（高校版）』、2007年第7期、pp. 23-27。
- ²⁸ 白新良『中国古代書院發展史』（天津大学出版社、1995年5月、pp. 4-26）、陳谷嘉、鄧洪波主編『中国書院制度研究』（浙江教育出版社、1997年8月、pp. 354-355）。
- ²⁹ 鄧洪波、肖新華「宋代書院藏書研究」『高校図書館工作』第23卷第97期、2003年10月、pp. 45-50。
- ³⁰ 李国鈞等『中国書院史』湖南教育出版社、1994年6月、pp. 1009-1012。
- ³¹ 『(雍正)浙江通志』（文淵閣四庫全書本）卷二百二十、「胡安定先生祠、『湖州府志』在府治西北觀德坊、『歸安縣志』宋胡瑗教授湖州、熙寧五年、郡守孫覺請建安定書院。」
- ³² 陸建偉「朱熹家族與湖州長春書院考略」『湖州師範學院學報』、第24卷第5期、2002年10月、pp. 132-135。
- ³³ 胡昭曦『宋代蜀學論集』四川人民出版社、2004年6月。
- ³⁴ 小林隆道「顕隠相交—宋末元初の陵陽牟氏と「玄妙觀重修三門記」」（『宋代史から考える』、汲古書院、2016年7月、pp. 225-255）を参考。
- ³⁵ 平田茂樹「南宋周辺社会における士大夫の交流と「知」の構築—魏了翁、吳泳、洪咨夔の事例を手がかりとして—」『大阪市立大学東洋史論叢』第18号、2017年12月、pp. 1-20。
- ³⁶ 金甲鉉「蒲江・靖州・蘇州における宋元鶴山書院の比較研究」『大阪市立大学東洋史論叢』第18号、2017年12月、pp. 39-52。
- ³⁷ 『崇禎吳興備志』（文淵閣四庫全書本）卷十三。
- ³⁸ 前掲注15「吳興園圃」。
- ³⁹ 『宋史』卷二百四十四列伝第三、宗室一。
- ⁴⁰ 賈志楊著、趙冬梅訳『天潢貴胄：宋代宗室史』江蘇人民出版社、2005年10月。
- ⁴¹ 陳興吾「宋故趙司戸墳志」考略『中国文物報』第007版、2007年7月。
- ⁴² 前掲注15「吳興園圃」。
- ⁴³ 前掲注17『避暑録話』卷下。
- ⁴⁴ 葉夢得『玉澗雜書』（『全宋筆記』第二編九、朱易安主編、大象出版社、2003年10月）を参照。
- ⁴⁵ 前掲注13『嘉泰吳興志』卷十八、「事物雜誌」。
- ⁴⁶ 葉夢得(1077-1148)字少蘊、蘇州吳縣の人である。後に湖州に移住して、自ら「石林居士」と称した。紹聖四(1097)年に進士に合格し、丹徒尉となった。大觀初、起居郎に任命され、大觀二(1108)年翰林學士に昇進したが、大觀三(1109)年龍圖閣直學士汝州知州に降格となった。程なく提舉洞霄宮として祠祿官となった。政和五(1115)年蔡州知州に昇進して、その後、知穎昌府、応天府、杭州を歴任した。起用されたり、廢されたりしていた。高宗が杭州に駐蹕すると、尚書左丞に昇進したが、宰相の朱勝非と意見を違え、資政殿學士をもって弁山に隠居した。紹興の初め、江東安撫使兼建康知州、兼春寿等六州安撫使に任命されたが、翌年に罷免された。八年、江東安撫制置大使兼建康知州、行宮留守となり、十六年に崇信軍節度使をもって致仕した。紹興十八(1148)年に湖州で死亡し、檢校少保を贈られた(脱脱『宋史』卷四百四十五、列伝第二百四を参照)。また葉夢得は金石收藏家でもあり、『金石類考』、『石林詞』、『石林詩話』、『石林燕語』、『避暑録話』、『玉澗雜書』などの詩集、筆記を作成した。
- ⁴⁷ (清)葉廷珪『楸花齋詩』(清滂喜齋叢書本)卷上憶存草、「得遠祖石林居士孔耳石題名拓本敬題：癸卯為宣和五年、即公卜居卞山石林谷之歲」。
- ⁴⁸ 方建新、王晴「上海図書館蔵朱熹撰「葉夢得墓志銘」辨偽」（『宋史研究論叢』第五輯、河北大学出版社、2003年11月）による。
- ⁴⁹ 姚惠蘭「宋南渡詞人群体的地域性研究」華東師範大学博士学位論文、2009年4月。
- ⁵⁰ 王兆鵬『宋南渡詞人群体研究』鳳凰出版社、2009年4月。
- ⁵¹ 潘殊閑「葉夢得交遊考」『湘南學院學報』第28卷第1期、2007年2月、pp. 36-43。
- ⁵² 葛勝仲『丹陽集』（文淵閣四庫全書本）卷十六。
- ⁵³ 葛勝仲(1072-1144)について、字は魯卿、江蘇江陰の人である。葛氏は江陰の名門で、葛勝仲とその息子の葛立方は皆詞集が残っている。紹聖四年の進士で、杭州司理參軍に任命され、礼部員外郎となった。宣和四年に李彦の弾圧を受けたため、湖州知州となり、建炎二(1128)年に戦乱を避けるために湖州に居住した。また、建炎四年(1130)年は再び湖州知州となった。紹興元年に祠祿官を請って隠遁生活をし、紹興十四年に没した。諡は文康である(『宋史』卷四百四十五、列伝第二百四、章侗「宋左宣奉大夫顯謨閣待制致仕贈特進諡文康葛公行狀」(附『丹陽集』後、文淵閣四庫全書本)を参照)。
- ⁵⁴ 前掲注47『楸花齋詩』。
- ⁵⁵ 前掲注44「玉澗雜書」。
- ⁵⁶ 前掲注13『嘉泰吳興志』卷十七、「賢貴事實下」。
- ⁵⁷ 前掲注17『避暑録話』卷上。
- ⁵⁸ 『萬姓統譜』（文淵閣四庫全書本）卷一百二十、「莫砥字彥平君陳長子弟礪字彥輔砥嘗知永嘉為增養士之

額士多感之為立生祠」。

- ⁵⁹ 葉昌熾『語石』（中華書局、1994年4月）卷五。
- ⁶⁰ 王曉驪「宋代題名與題名記考論：緣起、新變和審美價值」『北京社会科学』第2期、2016年1月、pp. 70-75。
- ⁶¹ 葉夢得『石林詞』、文淵閣四庫全書本。
- ⁶² 劉一止『苕溪集』（文淵閣四庫全書本）卷五十三。
- ⁶³ （宋）陳思編（元）陳世隆補『兩宋名賢小集』（四庫全書珍本、台灣商務印書館）卷一百三十四、苕溪詩集上を参照。
- ⁶⁴ 陳振孫『直齋書錄解題』（中華書局、1985年）卷十八を参照。
- ⁶⁵ 方星移「劉一止与李光、葉夢得交遊考」『九江学院学報』第2期、2009年4月、pp. 75-77。
- ⁶⁶ 前掲注44「玉潤雜書」。
- ⁶⁷ 前掲注13『嘉泰吳興志』卷十七、「月河有莫郎中園」。
- ⁶⁸ 『宋史』卷四百一十一、列第一百七十。
- ⁶⁹ 前掲注15「吳興園圃」。
- ⁷⁰ 前掲注23『齊東野語』卷十五、「張氏十詠園」。
- ⁷¹ 同上。
- ⁷² 周密『蘋洲漁笛譜』卷二、「長亭怨慢」、中華書局、1985年。
- ⁷³ 牟巘『陵陽集』（文淵閣四庫全書本）卷十七、「題施東皋南園園後」。
- ⁷⁴ 周密『絕妙好詞箋』（文淵閣四庫全書本）卷三。
- ⁷⁵ 陸心源『宋史翼』卷三十四、列傳第三十四、文海出版社、1967年1月。
- ⁷⁶ 陳彥池「牟巘『陵陽集』研究」華東師範大學碩士學位論文、2012年4月。
- ⁷⁷ 郝青萍「宋代蜀籍遺民詩人研究」西南民族大學碩士學位論文、2017年5月。
- ⁷⁸ 前掲注73『陵陽集』卷十六、「跋周公謹自銘後」。
- ⁷⁹ 前掲注75『宋史翼』卷三十四、列傳第三十四を参照。
- ⁸⁰ 前掲注73『陵陽集』卷二、「次韻仲實秋夜」。
- ⁸¹ 『宋史』卷四三二、列傳一八二を参照。
- ⁸² 『咸淳臨安志』（文淵閣四庫全書本）卷五十、「秩官」八。
- ⁸³ 翰林學士、給事中、六部尚書・侍郎は内侍從官となり、諸閣學士、直學士、待制者は在外侍從官となる。（龔延明『宋代官制辭典』中華書局、1997年4月、pp. 664-665。）
- ⁸⁴ 『淳祐臨安志』（『宋元方志叢刊』中華書局、1990年5月）卷六「園館」。
- ⁸⁵ 祠祿官に任命されること。熙寧二年（1069）十二月以後、奉祠は政治的見解の異なる官僚を降格させる手段となる。祠祿官は官品が付いていないため、品位は奉祠する人の寄祿官或いは職事官によって定める。（龔延明『宋代官制辭典』、pp. 609-610を参照）
- ⁸⁶ 夏文彥『図繪寶鑒』（中華書局、1985年）卷四。
- ⁸⁷ 同上。
- ⁸⁸ 前掲注23『齊東野語』卷十九。
- ⁸⁹ 『全宋詩』（北京大學出版社、1991年）第67冊。
- ⁹⁰ 前掲注86『図繪寶鑒』卷四。
- ⁹¹ 林希逸『虜齋統集』（文淵閣四庫全書本）卷四。
- ⁹² 前掲注73『陵陽集』卷一。

第2章 宋代蘇州園林と士大夫の交遊

1. はじめに

蘇州園林は、中国古典園林において欠くことのできない存在である。蘇州園林は早く春秋時代から見えており、最初は主に皇家園林の性格を帯びている。それは時代が下るにつれ、寺観園林、私家園林などの多様な類型の園林が相次いで登場し、時代によって異なる類型の園林がそれぞれ繁栄期を迎えることとなる。宋代以後の蘇州園林は、私家園林が主流となり、特に宋の南遷にともない、私家園林が江南を中心に発展していく。現在、拙政園、留園、滄浪亭、獅子林などの園林が世界文化遺産に登録され、中国古典園林を代表する存在として蘇州園林が認められている。

蘇州園林について論及する著作は少なくないが、その多くは園林の概況、歴史背景を紹介する入門書と言っても良いものである。蘇州園林を中心に論じたものとしては、劉敦楨氏の『蘇州古典園林』があり、建築学の視点から分析した早期の著作である。また、歴史学の視点から園林を論じた著作として、魏嘉瓚氏の『蘇州古典園林史』では春秋・戦国時代から清代までの各時代における蘇州の社会、経済、政治、文化および造園状況を分析しながら、各事例を通じて蘇州園林の発展史を明らかにした¹。また、郭明友氏の「明代蘇州園林史」では明代蘇州の園林を四つの時期に分け、蘇州園林の繁栄から衰退、また復興から繁栄になるまでの歴史過程を究明し、政治的、経済的背景をも合わせて明代蘇州園林の発展史を明らかにした²。巫仁恕氏の『優游坊廂：明清江南城市的休閒消費与空間變遷』では、明・清代における社会経済の発展に伴った都市化の促進の象徴物として園林を理解すべきであると主張している。また、蘇州を例として都市空間形成の面から、園林の造られた場所と都市発展過程との関係分析している。具体的に言えば、明代の蘇州園林は蘇州西北部に集中していたのに対して、清代には東南部でまで発展していったと主張しており、園林の分布に都市経済、官庁所在地、人口数などが影響を及ぼしていたと論じている³。

一方、蘇州園林研究においては宋代に関する研究はほぼ行われてこなかった。宋代、特に南宋に入ってから、蘇州園林は数量的に増えただけではなく、次第に構造や文化的な面からも独特な風格を形成していった。宋代の蘇州の私家園林の特徴を明らかにすることによって、蘇州園林の発展史をより詳しく理解することができ、さらには明清時代の私家園林に及ぼした影響についても見えてくると考えられる。

また、宋の南渡に伴い、江南でも造園風潮が広がり、園林を中心とする有力者のネットワークも更に盛んになっていく。宋代蘇州園林と士大夫交遊活動について、鄧小南氏の「龔明之与宋代蘇州的龔氏家族——兼談南宋崑山士人家族的交遊与沈浮」が代表的な研究成果として挙げられる。鄧氏は龔氏宗族の事例を手がかりとし、崑山の士大夫宗族のネットワークを明らかにすると同時に、宗族成員間の関係、他宗族との関係、宗族と地域社会との関係など様々な関係像から当時社会の様子について分析している。また、蘇州の園林主が頻繁に変わる現象は士大夫宗族の浮き沈みを示すことであると主張している⁴。近年の研究成果を挙げると、高柯立氏の「宋代地方官與士人的唱和往来——以蘇州為中心」でも士大夫交遊について論述している。官署園林や私家園林などが地方官と地方士大夫の宴会場所として利用されており、その場での唱和活動は地方官の勤務以外の時間における重要な活動であり、地方士大夫と緊密な繋がりをつくる有効な方法でもあった。また、地方士大夫はこの唱和活動を通じて自分の社会的地位を高めようとしていたと主張する⁵。

明代の蘇州園林についての研究を見れば、許梅氏は「明清蘇州文人園林的建構与轉型——以士大夫交遊活動為視角」で、明中期から清までの交遊活動を手掛かりとし、明清時代における蘇州文人園林の発展と変遷について考察している。許氏によれば、明代中期には文壇を牛耳る人々が園会を通じてネットワークを広げながら、後輩を育てており、官僚生活を回想することや学問の交流などの交遊活動も行っていたという。明末になると園会の参加者が中下層文人まで広がり、交遊活動の功利性が高まってくる。そして、結社を結成し、権力者や朝廷を風刺して議論する風潮も形成されていく。明中期の雰囲気とは異なって園林という空間が政治的活動とも繋がっている様子が見えてくる。清代初期になってから、戦乱によって、蘇州城内の園林のほとんどは破壊され、城外の名勝地に位置して

いた園林は遺民の避難所として使われた。戦乱期の園林生活は孤独で苦しく、文人園林の様子が消えていく傾向がある。康熙年間に至っては、園林の「隠逸」の色合いが薄くなり、文人園林の時代は終わりを告げ、商人園林主の出現や園林の開放による園林の公共化、商業化が進展したという。つまり、時代の変化によって園林がどのような形態を現していたのかについて注目している⁶。

士大夫の交遊についての研究成果も少なくないが、その交遊空間に注目した研究は未だ少ない。平田茂樹氏は、交遊関係を論じる際に「空間」は留意すべき存在である。交遊関係については交遊が行われる具体的な場所とともに、その場所にての交遊にかかわる様々なモノについても目を向ける必要があると指摘する⁷。蘇州は宋代の園林が集中していたのみならず、士大夫の活動も活発であった都市として、宋代の私家園林の発展、変化及び士大夫の交遊について研究するに欠けることのできない重要な事例である。

2. 両宋蘇州園林の概況

蘇州園林は宋代に繁栄期を迎えた。その要因として、社会経済の画期的な発展や多くの士大夫が集まってきたことを挙げなければならない。その繁栄について朱長文の『呉郡図経続記』では以下のように述べている。

錢氏有吳越，稍免干戈之難。自乾寧至于太平興國三年錢俶納土，凡七十八年。自錢俶納土至于今元豐七年，百有七年矣。當此百年之間，井邑之富，過於唐世。郭郭填溢，樓閣相望，飛虹如虹，櫛比棊布，近郊隘巷，悉甃以甃。冠蓋之多，人物之盛，爲東南冠。寔太平盛事也⁸。

上記の史料によれば、錢氏が吳越国を建てたため、暫く戦乱を避けることができた。それゆえ、100年余の間に富を積み重ねた。家屋は外城にまで溢れて、楼閣が林立した。そして、高官の多さ、人物の豊かさは東南一となった。つまり、この時期の蘇州は平和で繁栄していた時代であると捉えられている。戦争がなかったことは蘇州の発展をもたらした理由の一つとなり、他の理由として、蘇州の繁栄はその地理的、人文的環境と深く関わると考え

られる。

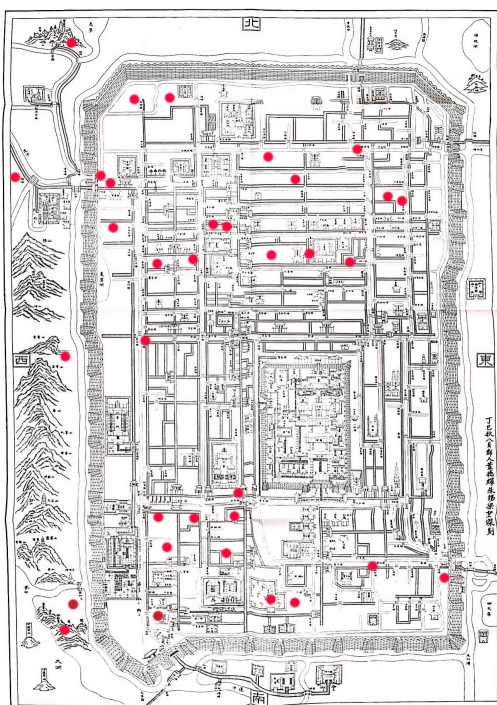
宋代蘇州の都市史について、伊原弘氏は大運河の掘削・整備事業や靖康の変などの社会背景を基にして、宋以前・以後の各時代における都市形態を論じながら水運の発達していた蘇州の過去からの歩みと現在までの発展状況を分析したのに加え、六朝以来の開発成果を受け、北宋には五代以来の開発が更に進行し、「江浙熟すれば天下足る」といわれるようになったという。人口、文化、科挙、都市整備などの面から宋代蘇州の繁栄像について論じ、宋代における江南開発によって繁栄が続いていたと主張している⁹。また、梁庚堯氏も宋元時代の蘇州を詳細に分析している。地理的環境からみれば、蘇州は城外の西・南側が大運河にとり囲まれており、西北には開封に達し、東南には臨安に通じる水運の発達していた交通・軍事の要衝であった。蘇州の水陸交通は都市内部で緊密に繋がっていただけではなく、城外において四方八方に通じていた。このような背景をもとに貿易が促進され、社会経済も発展していく。また、人口増加に伴い、農業が発達していくほか、米・豆など穀物や果物、花、薬草、野菜の取り引きも盛んになり、多種多様な手工業も発達しており、それらから蘇州経済の発達像が窺える¹⁰。

以上のように、宋代の蘇州は交通の便利さをもとに経済が発達し、自然風景も優れた景勝地であったため、著名な士大夫や官僚らの居住地として選ばれ、園林の発展を促進した。

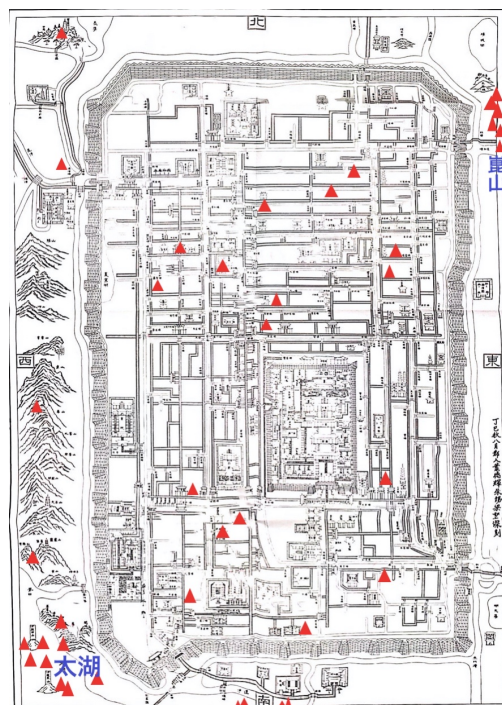
(1) 平江図から見る蘇州私家園林の分布

平江図は南宋紹定二年（1229）に作成された宋代蘇州の様子が窺える地図である。王謩氏の『宋平江城坊考』によれば、元々は石碑に刻まれたものであり、碑額の高さは76cm、石碑の本体は203cm、両者を併せて石碑の高さは279cmで、横幅は138cmである（拓本による）。また、図によると南宋の蘇州には、内外二重の城壁と水陸の五つの城門があり、坊表65個、橋314個のほかに府署、砦、学校、楼台、亭館、園第、寺観、祠廟、お墓、川、山、古跡など扁額のあるのが610余箇所あり、その多くの名称は現在まで使われている¹¹。平江図に関する研究は多く出されており、その方向性は凡そ三つにまとめることができる。そ

それぞれ平江図の作成時期¹²、地理学からの研究¹³、都市史¹⁴の視点からの研究である。その中、都市史の視点からの研究成果をみると、平江府の規模や構造に注目する傾向を有するとともに、川筋の作用と変遷に焦点を当てている。また、平江図から市坊制度の崩壊が読み取る指摘が見られる。例えば、伊原弘氏の『蘇州——水生都市の過去と現在』、『中国人の都市と空間』において平江図についての詳細な分析を加えている¹⁵。その他に、上記の梁庚堯氏も平江図に基づいて蘇州の発展を分析している。梁氏によれば、北宋中期以前は、城内の人口がまだ少なく、広々とした場所が多かったが、中期以後、次第に城内に人口が密集していき、唐代からの坊制も崩れていく。南宋以後、商業区が西北にある閶門を中心に発展していき、元々「荒涼」であった場所が徐々に繁栄を迎えていく。その概況をまとめれば、子城およびその周辺は行政区で、楽橋の東南辺りは社会福祉区域、楽橋の西南辺りは亭館が多く設置され、賓客の送迎に使われた所であった。また、学校・書院の多くは城南の南園、楽橋西南の貢院周辺に分布しており、この二つの地域が文教区に該当する。閶門以内の西北部は寺院が集中する傾向が見られ、宗教区と見なしている。更に、楽橋周辺には大きい商業区が形成されており、子城の西側にある繡錦坊には大市場が存在していた。工房は城内に散在していたが、比較的に城東辺りにその多くが集中されていた¹⁶。



【図 6：北宋蘇州私家園林分布図】



【図 7：南宋蘇州私家園林分布図】¹⁷

図6と図7に記した園林分布図は本章の最後に付している【表2：宋代蘇州私家園林表】（以下【表2】と略記）に基づき、場所の確認できる園林を取り上げて作成したものである。そして、園林の造られた時期によって北宋と南宋に分けてまとめ、二つの分布図を作成した。【表2】によれば、宋代蘇州私家園林は両宋合わせて98カ所ある。そのうち、北宋に造られたのが42カ所、南宋に造られたのが56カ所であり、数量上には大きな変化はみえない。ただし、図から園林分布を確認してみると以下のような特徴を有すると考えられる。

その一、北宋の城内私家園林は閶門を含む北部と盤門周辺に集まる傾向性が見て取れる一方で、南宋の場合は、閶門から少し離れていた。

その理由としては次のようなことが考えられる。梁庚堯氏が論じたように、北宋中期以前、城内の人口がまだ少なく、閶門周辺に空き地が多かった。それに対して、南宋になると、閶門附近は商業区が形成されるにつれ、空き地が少なくなり、園林が閶門からやや離れていったと考えられる。北宋と南宋の城内園林分布状況には少しの差異はあるが、全体的な趨勢をみれば、西北にある宗教区と西南にある賓客送迎に使われた亭館が集まっていた亭館区に園林が集中する傾向がある。閶門と盤門は運河に近く、二つの区域は交通の便利な場所であり、交通上の優位性を占めている。また、開禧三年（1207）閶門の裏に戸部百万倉を創建し、その後、一度東西の二つの倉庫に分けられるが、宝祐五年（1257）に宝祐百万倉を造り造営、閶門の裏から徳廟後に移した¹⁸。このように糧倉が頻繁に建てられたことから、食糧の運輸が多かったことが分かる。それは閶門を含む北西側、さらに蘇州全体の経済発展を促進し、私家園林がこの地区に集まっていた理由の一つと考えられる。それに加え、各地区が蘇州名所の桃花塢（城北）と南園（城南）に近いことも園林主の選択に影響を及ぼしたと思われる。

その二、南宋になると私家園林の多くは城外に集まり、特に崑山や太湖周辺に数多く分布するようになる。

その理由としてはまず、建炎の戦火を挙げなければならない。建炎四年（1130）、金朝の完顔宗弼は盤門から蘇州に入り、財物を略奪し、若い男女を捕まえて去った。また、蘇州城に放火し、その煙が百里余り離れているところからも見えていて、五日間燃え続けたと

いう¹⁹。蘇州城は 50 万人近くが亡くなり、逃げられた者は十分の一、二程度しかいなかった²⁰。つまり、南宋の蘇州城は壊滅的な打撃を受けており、このような状況の中で、園林の殆ども焼失されてしまったことが想像できる。この戦火は城内の人が城外に移動していく要因の一つである。

そして、南宋では、江南が経済や文化の中心地となり、蘇州の位相もそれと共に変わってくる。

元豊三年、戸十九萬九千、口三十七萬九千、皆有奇、號為甚盛……宣和間、戸至四十三萬、中更狄難、掃蕩流離、城中幾於十室九空。中興為輔郡、涵養生息六十年矣。淳熙十一年、戸十七萬三千四十二、口二十九萬八千四百有五²¹。

即ち、南宋における蘇州は輔郡として発展し、建炎の戦火を経て 60 年にわたる再建により、人口も北宋元豊三年の全盛期ほどにまで回復する。それに、

城内人口不斷増加、經濟活動愈來愈頻繁、空間愈來愈感狹隘、對於土地的需求也就日感迫切、於是侵佔河岸、河道的情形出現²²。

とあるように、城市の発展に伴い、人口が急増し、城内の空間が足りなくなる。土地を求め人々が城外に移住していくことも当然のことである。また、崑山や太湖が名勝地であることも園林主の目をひくもう一つの要因となる。

崑山の人口増加からも私家園林の繁栄が推測できる。

古經載祥符間主戸一萬三千七十八、客戸三千二百七十二。主丁一萬五千三百八十九、客丁三千三百零三。慶元間主戸三萬五千三百四十二、客戸三千七百、視昔已多。今主、客共四萬五千三百六十八戸、一十三萬四千五百口、較之古經蓋將數倍、生齒日繁、則邑之壯盛可見云²³。

崑山の人口は増加し続け、淳祐年間に至ると、主客戸が四万余に至り、土地開発もそれと同時に進んだと考えられる。【表 2】から見ると、南宋崑山の園林主として王儋、李衡、范成大（若い時の読書処）、呉仁傑などの人物が確認できる。鄧小南氏の研究によれば、南宋前期において王葆、李衡、范成大などの人物を中心とし、異なる世代の蘇州士大夫が集まっていたことが分かる。その中で、崑山出身として科挙及第、さらには官僚ともなった人

物としては、唐燁、唐子寿、楽備、馬先覚、呉仁傑などが挙げられる²⁴。この士大夫たちは皆、崑山で私家園林を造営し、交遊していた。

(2) 著名な園林が集中

宋代の蘇州は農業をはじめ、手工業、商業もすごく発達していた都市である。それに加えて便利な交通ルート、行政中心地であったことなどの特徴が蘇州経済の繁栄を促進し²⁵、園林はこのような社会背景をもって繁盛をむかえており、その代表例として当時にも称賛されていた蘇舜欽の滄浪亭、范成大の石湖別荘などの私家園林があげられる。これらの名園について、魏嘉璜氏は時代背景を基に私家園林の造営、発展、変遷過程に着目して論じている²⁶。蘇州の名園は少なくなく、その中には、蘇舜欽の「滄浪亭」、朱長文の「楽圃」、范成大の「石湖別荘」のように園林主の名声によって有名になったのもあれば、王份の「臞菴」など優れた風景で有名になった園林もある。

滄浪亭は蘇舜欽（1008-1049）が罷免された後、蘇州に移住して造った園林である。

蘇舜欽字子美，初以父任補太廟齋郎，調滎陽縣尉。尋舉進士，改光祿寺主簿，知長垣縣。遷大理評事，監在京店宅務。范仲淹薦其才，召試，為集賢校理，監進奏院。舜欽娶宰相杜衍女，衍時與仲淹、富弼在政府，多引用一時聞人，欲更張庶事。御史中丞王拱辰等不便其所為。會進奏院祠神，舜欽與右班殿直劉巽輒用鬻故紙公錢召妓樂，間夕會賓客。拱辰廉得之，諷其屬魚周詢等劾奏，因欲搖動衍。事下開封府劾治，於是舜欽與巽俱坐自盜除名，同時會者皆知名士，因緣得罪逐出四方者十餘人。世以為過薄，而拱辰等方自喜曰：“吾一舉網盡矣。”舜欽既放廢，寓于吳中²⁷。

蘇舜欽は政治闘争の渦巻に巻き込まれた被害者であった。「公錢を用いて妓樂を召し、賓客をもてなした」という理由で、政敵に弾劾されて失脚し、蘇州に流寓することになった。官位を失った彼は滄浪亭での苦悶を下記の「滄浪亭記」に書き残している。

一日過郡學，東顧草樹鬱然，崇阜廣水，不類乎城中。並水得微徑於雜花修竹之間，東趨數百步，有棄地，縱廣函五六十尋，三向皆水也。杠之南，其地益闊，旁無民居，左

右皆林木相虧蔽。訪諸舊老，云：錢氏有國，近戚孫承佑之池館也²⁸。

ある日、郡学を通り過ぎ、東を見ると草木が生い茂っていて、丘と流水が備わり、城中の風景とは異なっていた。ここから見れば、北宋中期の蘇州は南側が完全に開発されていないようである。蘇舜欽はこのような野趣を好み、「錢四万」でこの空き地を購入した。

前竹後水，水之陽又竹，無窮極，澄川翠榦，光影會合於四萬之間，尤與風月為相宜²⁹。前に竹があつて後ろに水があり、水の北側にまた竹がある。清めた川と緑の枝の影が扉、窓の間に集まるような叙述からみれば、滄浪亭は自然風景を中心として建物の少ない野趣のある園林であつたと見える。「清風明月は元々無価の宝であり、残念なのは四万錢しか売っていなかった³⁰。」この歐陽脩の詩文によって滄浪亭は有名になつたという。しかし、蘇舜欽は早く亡くなり、滄浪亭は建炎の難を経てから何度も園林主が変わり、後には韓世忠の所有となつた。

樂圃は雍熙寺（城西北）の西側にあつた朱長文(1039-1098)の居住地であつた。

朱長文字伯原，蘇州吳人。年未冠，舉進士乙科，以病足不肯試吏，築室樂圃坊，著書閱古，吳人化其賢。長吏至，莫不先造請，謀政所急，士大夫過者以不到樂圃為恥，名動京師，公卿薦以自代者衆。元祐中，起教授於鄉，召為太學博士，遷秘書省正字³¹。

朱長文は進士に合格したが、官途では活躍できなかったようである。学識を有していることで著名であり、それゆえに彼の居住地であつた樂圃も有名になつた。樂圃は朱長文の祖母が購入したものである。『樂圃余稿』に収録されている「樂圃記」には以下のような記載がある。

始錢氏時，廣陵王元璩者實守姑蘇，好治林圃，其諸子徇其所好，各因隙地而營之，為臺為沼。今城中遺址頗有存者，吾圃亦其一也。錢氏去國，圃為民居，更數姓矣。慶歷中，余家祖母吳夫人始購得之。（中略）熙寧之末，新築外垣盡覆之瓦，方將結宇而親年不待，既孤而歸，於是遂卜居焉。月葺歲增，今更數載，雖敝屋無華，荒庭不斲，而景趣質野，若在巖谷，此可尚也³²。

樂圃は錢氏が建てた園林の旧址に建てられた園林であり、朱長文の祖母である吳夫人が慶曆年間（1041-1048）に購入したものである。熙寧年間（1068-1077）に至り、朱長文が野

趣のある私家園林に修繕した。この事例からみれば、北宋中期の私家園林は質朴な特徴を有すると考えられる。ただし、この時期の私家園林は質朴でありながらも、多様な機能を持っていた。楽圃の内部構造を確認すれば、

圃中有堂三楹，堂旁有廡，所以宅親黨也。堂之南又為堂三楹，命之曰“邃經”，所以講論六藝也。邃經之東又有米廩，所以容歲儲也。有鶴室，所以畜鶴也。有蒙齋，所以教童蒙也。邃經之西北隅有高岡，命之曰“見山岡”，岡上有琴臺，琴臺之西隅有詠齋，此余嘗撫琴賦詩于此，所以名云見山³³。

とあり、楽圃には六藝を講論するための「邃經堂」、食糧を蓄える「米廩」、ペットを飼うための「鶴室」、子供を教育するための「蒙齋」、琴を弾いて詩を作る場所としての「詠齋」などの建物が揃えており、園林機能の多様性が確認できる。その他、池、林などもあった。ここに言及すべきなのは、楽圃が朱氏一族の居住地であったことである。鄧小南氏がかつて論述したように「敬宗収親」という親族の世話をすることは、士大夫の間ではよく確認できる。それは、蘇州に「范氏義莊」という園林を造ったことのある范仲淹からの影響が大きいと考えられる³⁴。

上記の二つの園林は呉越国時代に造られた園林の旧址に造られており、前代園林の構造を継承しながらも独自の特徴を表している。北宋中期以降、素朴で野趣のある景色を追求ながら、園林の構造や機能面において多様化が進んでいることが明らかに見えてくる。南宋時代になってから、私家園林は更に精巧になり、以下の事例からその状況が見て取れる。

就隱在華山，郡人張廷傑漢卿所葺。紹興間，漢卿自靖州推官歸，營此。搜奇選勝，垂三十年，瞰池剏亭，因阜立室，遂為一時絕境，有天池庵、臨賦亭、綠龜池、流愒亭、泓玉釣灘、綠淨亭、更好亭、宿雲庵、獨秀亭、繡屏、不夜關、大石屋、小石屋、花島俛首巖、浮槎橋、龜巢石、翠壁、釣雲臺、雲關、張公巖、觀音洞、石鼓月、觀壟石、集僊壇、龜甲井、瑞澗柳洲、曲水流觴等處，而天池為第一。且繪為圖，士大夫多賦之，周益公遊山，記云：漢卿即得華山，營墓就隱，日課童僕，剏剔巖竇，疏導泉源，負山厓，剏亭樹，環以佳花美木，四時皆有奇觀。費益不貲，為吳門絕景，然山石麤曠，殊乏秀潤耳³⁵。

就隱は華山にあり、蘇州から西に 63 里離れているところに位置していた。張廷傑については不明であるが、上記の史料をみれば、南宋の紹興年間に靖州推官から帰郷し、就隱を造営したことが見て取れる。就隱は豊富な景勝が設けられており、園林主が心を込めて造営したことが分かる。また、園林に設けられた景勝の中で「曲水流觴」があることから文人の趣が窺える。かつて周必大は就隱に遊覧に来たことがあり、その景勝の豊かさ及び高い造園費用に感服しながらも、「山石」は上品ではないと指摘している。つまり、私家園林は芸術品として文人の間で品評されていたのである。また「營墓就隱」から、就隱は張廷傑が自分のために修造した墓であることがわかり、当時の士大夫の間で流行していた園林式墓のことが窺える。

南宋蘇州の私家園林について論ずる際に范成大（1126-1193）の石湖別墅は欠かせない存在である³⁶。

石湖在縣西南十二里，盖太湖之一派，范蠡所從入五湖者。参政范成大別墅於此，因越來溪，故城隨地勢高下而為亭榭，植以名花，而梅為獨盛。別築農圃堂，對楞伽寺，下臨石湖。孝宗御賜“石湖”二大字，成大作上梁文云：吳波萬頃，偶維風雨之舟，越戍十年，因築湖山之觀。又有北山堂、千岩觀、天鏡閣、玉雪坡、錦繡坡、說虎軒、夢漁軒、綺川亭、監鷗亭、越來城等處，以天鏡閣為第一。一時名人皆為文詞以侈之³⁷。

石湖別墅は平江府城の南にある太湖の周辺に位置し、范成大的造営した私家園林である。梅などの花を植え、景色が非常に美しかった。それに加え、孝宗から「石湖」二大字を拝領したことにより、更に著名となり、当時の名士は皆、詩詞などの文学作品を作って石湖を称賛していた。

南宋蘇州の私家園林の多くは城外に造られ、自然風景とうまく融合し、珍しい花木を植えることが一般的であった。北宋と南宋の私家園林を比べてみれば、北宋の場合は質朴で野趣に溢れるのに対して、南宋の場合は人為的な加工を重視し、観賞性を大事とし、園林主が造った貴重な芸術品のような存在であった。

南宋の蘇州私家園林は精巧になったとともに、贅沢であった。上記の「就隱」の史料に「費益不貲」という言葉から分かるように、かなりのお金がかかったようである。また、

下記の史料からも、その状況が読み取れる。

石湖一帯，盡佳山水，作圃於其間頗衆，往往極侈麗之觀。春時士大夫遊賞者，獨以不到此為恨³⁸。

鄭虎臣宅在鶴舞橋東，居第甚盛，號“鄭半州”。四時飲饌各有品目，著『集珍日用』一卷，並『元夕閏燈實錄』一卷，皆言其奢侈於饜飫也³⁹。

石湖一帯は、景勝地であり、多くの人によって園林が造営された。これらの園林は華麗に造られたものであった。春に士大夫が園林を遊覧する時、ここに寄れないと後悔するほどであった。南宋に入ってから、太湖が人気の園林造営場所となる。園林は野趣を求める段階に止まらず、贅沢になる傾向がみられる。また、鄭虎臣（1219-1276）の園林は非常に華麗であり、彼の生活も非常に贅沢であった。

南宋蘇州の私家園林の贅沢さは太湖石の流行からも窺える。蘇州は太湖石の産地であり、それについて范成大は下記のように記載している。

宣和五年，郡人朱勔造巨艦載太湖石一塊入京師，以千人舁進。是日，役夫各賜銀椀，並官其四僕，皆承節郎及金帶，勔遂為威遠軍節度使，而封石為盤固侯。勔誅，餘小石未獻者，留郡西河兩傍，悉歸張循王家。比年，士大夫好石者多，山中人始以旱石加斧鑿，作玲瓏意，又剝石面贗作彈窩紋，術不識者，或得善價，其非巧石，但青白玉質可作碑碣，及甃砌塔庀者，則出湖中之鼇山，瑩潔可鑒，堅潤如金玉，亦為天下之冠。程俱所賦者是也⁴⁰。

北宋末期、蘇州人の朱勔は徽宗に太湖石を献上したことで、皇帝の寵愛を得た。それから太湖石は園林において欠かせない飾り物となり、士大夫に愛され、その価値が上昇し、太湖石の偽物を作る産業も流行するようになる。陳洙の『太湖石賦並序』が次のように記載している。

客有嗜太湖石者，圖其形示余，命為賦⁴¹。

太湖石に対する士大夫の愛好は高く買うことに止まらず、有名人の文章でその価値を高めようとする人もあった。太湖石に関する記載は多く⁴²、福本雅一氏によると、最初に太湖石に言及する史料は白居易、劉禹錫、牛僧孺らの太湖石をめぐる唱和であるという⁴³。しか

し、未だこの時点では太湖石を好む風潮は広がっていなかった。宋代に至り、次第に太湖石が流行していき、園林に飾られるようになる。その様子が北宋中期の士大夫である梅堯臣の「詠劉仲更澤州園中醜石」から確認できる。

君家太湖石，何從太湖得。太湖天東南，太行天西北。相去三千里，雖有何致力。
古人煩舟車，頑質無羽翼。竅引木蓮根，木蓮依以植。秋虵出其中，舌吐虹霓色。
君嘗夸於我，怪怪亦特特。以醜世為惡，茲以醜為德。事固無醜好，醜好貴不惑⁴⁴。

太湖石は北宋中期には沢州（山西中部）の園林からも確認できる。しかし、この時の太湖石は園林の飾り物として利用されてはいたが、盛んにはなっていなかった。南宋に入ると、原産地の蘇州では、私家園林における太湖石の利用が広まっていた。周密『癸辛雜識』から具体的事例を確認できる。

浙右假山最大者，莫如衛清叔吳中之園，一山連亘二十畝，位置四十餘亭，其大可知矣⁴⁵。
衛清叔の園内の独特な築山は極めて大きかった。その他に、葉夢得、范成大、程俱らの士大夫も皆太湖石の収蔵と鑑賞に熱中していた。湖州においても太湖石に関する記載が残っており、周密『癸辛雜識』から、賈似道が有名な太湖石を運ぶために多くの運搬人を雇用して、大量な金銭を支払ったことも確認できる⁴⁶。

後の明代になっても太湖石は相変わらず人々の愛され、太湖石をどのように使って園林を飾るのかについての基準もできてくる。計成『園冶』によれば、

此石以高大為貴，惟宜植立軒堂前，或點喬松奇卉下，裝治假山，羅列園林廣榭中，頗多偉觀也。自古至今，採之已久，今尚鮮矣⁴⁷。

とある。つまり、太湖石を建物の前や木の下に設置して園林を飾った。宋代の私家園林には太湖石がよく出てくるが、園林を飾る際にどのように使われたのかについての具体像は未だ確認できておらず、その詳細については絵画史料に注目する必要があると思われる。

（3）士大夫とその私家園林

宋代の蘇州には数多くの著名な士大夫が集まっていたことは葉夢得の記載にも見られる。

吳下全盛時衣冠所聚，士風篤厚，尊事耆老，來為守者多前輩名人，亦能因其習俗以成美意。舊通衢皆立表揭為坊名，凡士大夫名德在人者，所居往往因之以著。元參政厚之居名袞繡坊，富祕監嚴居名德壽坊，蔣密學堂居嘗產芝草，名靈芝坊，范侍御師道居名豸冠坊，盧龍圖秉居奉其親八十餘，名德慶坊，朱光祿所居有園池號樂圃，名樂圃坊。臨流亭館以待賓客舟航者，亦或因其人相近為名，褒德亭以德壽富氏也，旌隱亭以靈芝蔣氏也，蔣公蓋自名其宅前河為招隱溪，來者亦不復敢輒據。此風惟吾邦見之，他處未必皆然也⁴⁸。

蘇州が全盛期を迎えた時、高貴な人が集まって居住してきた。上記史料には、元絳（袞繡坊）⁴⁹、富嚴（德壽坊）⁵⁰、蔣堂（靈芝坊）⁵¹、范師道（豸冠坊）⁵²、朱長文（樂圃坊）⁵³などの人物が登場しており、地方志や宋史にも記載が残っている。これらの士大夫の多くは蘇州に私家園林を造営し、数多くの園林詩や園林記を残している。このような文学活動は蘇州私家園林文化の発展を促進したと考えられる。蘇州で徳行のある士大夫を尊敬する風俗はほかの史料からも追跡できる。例えば、

慶曆間，安定胡先生在吳學，蘇子美被誣退居滄浪亭，太常博士陳虞卿壯歲致仕而歸，吳中稱三賢人。胡先生以教，子美以文，虞卿以行，名動天下⁵⁴。

とあるように、慶曆年間、安定胡先生（胡瑗）、蘇子美（蘇舜欽）、太常博士陳虞卿（陳之奇）が各々の理由で蘇州に集まり、当時の人に三賢人と称された。胡先生は教育で、子美は文章で、虞卿は徳行で、名が天下に知られた。胡瑗（993-1059）は北宋の儒者であり、安定書院を創建した人物である⁵⁵。蘇舜欽は詩文をもって著名となり、梅堯臣と共に「蘇梅」に呼ばれていた。陳之奇は「丁陳范謝」の四大家族に生まれた。彼の徳行は蘇州の民衆に影響を与え、子供であっても敬愛していた⁵⁶。

蘇州の有名な園林主の多くは教育者、文学者、政治家として知られている。彼らは郷里に隠居する際に、或いは辞官後、私家園林を造った。それから私家園林と士大夫の生活は益々密接な関係を結んでいく。また、移住してきた士大夫が私家園林を造る事例はよく見られ、蘇州園林や園林文化の発展に大きい影響を与えたと考える。

3. 蘇州園林と士大夫の交遊

本章では、【表 2】のデータを基に蘇州出身士大夫と蘇州へ移住してきた士大夫の事例をそれぞれ分析し、その相違点について検討していく。

(1) 蘇州出身士大夫の園林生活とその交遊

蘇州の士大夫は退職後の生活を楽しむことで、園林で宴会を行うことがよく見られており、例えば、陳之奇（蒙圃）、程師孟（程師孟園）、元絳（袞繡坊）、叶參（七檜堂）の例が挙げられる。また、蔣堂（隱圃）、徐祐（徐祐山亭）などの移住してきた士大夫が退職後、蘇州に私家園林を造った事例も少なくない。龔明之は『中吳紀聞』に、彼の曾祖父（龔宗元）の晩年生活について下記のように記録した。

曾大父自都官員外郎分司南京謝事家居，（所居在大酒巷），取白樂天大隱住朝市，小隱入丘樊，不如作中隱，隱在留司間之詩。建中隱堂，與尚書屯田員外郎程適，太子中允陳之奇相與遊從，日為琴酒之樂，至於窮夜而忘其歸。二公皆耆德碩儒，致政於家，吳人謂之三老⁵⁷。

龔氏一族のネットワークについては、上述のように、鄧小南氏が詳細な分析を行っている。龔氏一族は龔宗元の世代までは前代と変わらずに蘇州城内に居住していたが、その後、崑山に移住し、当地では影響力のある一族であった。龔宗元は帰郷後、友人と毎日琴を弾いて酒を飲み、徹夜して帰ることを忘れるほど宴会を開いていた。このような様子は同時代の縮図であった。私家園林は退職官僚の老後生活を享受する場所であったと見なすことができる。

同時に私家園林は退職官僚の雅集を行う場所でもあった。北宋では、蘇州にて二回ほどの「九老会」が開催されたことが確認できる。一回目は仁宗の慶曆四年（1044）に、徐祐、葉参らが主催した会であり、二回目は神宗の元豊八年（1085）に開かれた雅集であり、元絳、程師孟らが参加していた。

徐祐字受天，擢進士第，為吏以清白著聲。慶歷中，屏居於吳，日涉園廬以自適。時葉公參亦退老于家，同為九老會，晏元獻、杜正獻皆寓詩以高其趣⁵⁸。

年配の士大夫が雅集を行うことは、高尚な趣味を楽しみながら老後生活を送るためだけではなく、社会地位が高く、影響力のあるエリートたちが集まって交遊することによって互いに良好な関係を強化し、社会秩序を維持するなどの目的もあった。九老会の成員は皆徳行の高い士大夫であり、地方における中心人物である。このような雅集は蘇州だけではなく、洛陽、臨安、湖州などの都市においても行われていたことが確認でき、宋代社会の一般的な現象と見做される⁵⁹。雅集の行われた場所の多くは私家園林であり、私家園林は士大夫たちの文学作品の素材として使われるなど、士大夫の優雅な趣を反映している。

また、もう一つの事例として、朱長文が挙げられる。

朱長文字伯原，未冠擢進士第，英聲振于士林。元祐初，充本州教授，入朝，除祕書省正字，樞密院編修官，後以疾解任，退居于家，所居在雍熙寺之西，號樂圃坊，地有高岡、清池、喬松、壽檜。先生以志不得達棲隱于中，潛心古道，篤意著述，人莫敢稱其姓氏，但曰樂圃先生⁶⁰。

朱長文は若い頃に進士に合格し、名声が高かった。官途は経験したが、病気で退官して家での隠居生活を始めた。その隠居地が即ち「楽圃」という園林である。朱長文の家族や交遊ネットワークについては、鄧小南氏が全面的な分析を行っている。朱長文は一生の多くの時間を蘇州で過ごした代表的な蘇州出身の人物である。彼の交遊ネットワークを見ると、范仲淹一族、林希一族などの蘇州の有力者、方惟深、楊懿如などの文人、さらに地方官などとよく交遊していたことが分かる⁶¹。朱長文は非常に尊敬されて、わざわざ楽圃に訪れる人も少なくなかった。

「詠齋偶書呈子通無隱」

夙志在蕭閒，獲此幽遁迹。喬林無冬春，蒼靄異晨夕。
旁窺疑好峯，俯瞰驚峭壁。浩然溪山興，盡在陶潛宅。
杖藜行水邊，萍際湛空碧。良魚不輕遊，弱羽猶自惜。
吟髭不禁霜，曉鑑見早白。古人已深歎，信是林園客。

遣累假禪鋒，陶情任詩格。寄聲招友人，來看亭前柏⁶²。

方子通は嘗て『楽圃十詠』を作ったことがあるが、原文が現存しておらず、具体的な内容は確認できない⁶³。方子通の娘は朱長文の息子と結婚し、友人である二人は姻戚関係も結んでいた。そのため、詩文の唱和もよく見られる。上記の詩からは、朱長文の隠遁への思いがよく感じられる。彼は官途に進みたくなかったように見える。しかし、

長吏至莫不先造，請謀政所急，士大夫過者，以不到樂圃為恥⁶⁴。

とあるように、地方官らは朱長文を訪れて政務について尋ねる。士大夫も楽圃を訪れたことのないことを恥じている。このように朱長文は地方官や地方エリートとの密接な関係を有していた。地方官との交遊は他の詩からも確認できる。例えば、

「次韻朱牧樂圃宴有感」

竊祿都無簿領迷，得錢邀客手頻携。春來佳景廻三徑，雪後晴波滿一溪。

歲月易凋青鬢色，塵埃難上白雲梯。煩君枉駕慙荒索，空種梧桐待鳳棲⁶⁵。

とあり、この詩は楽圃の景勝と飲酒、唱和の様子を描いたものである。また、「歲月易凋青鬢色，塵埃難上白雲梯」からすると、官途において挫折して苦悶していた朱長文の様子が読み取れる。地方官との交遊は単にお酒を飲みながら詩を作るわけではなく、政治問題についての意見交換もよく行われていたと考えられる。

朱長文が蘇州の士大夫と交遊していた場所は私家園林に限定されず、「重九同子通遊虎丘與祖印三首」、「奉陪太守及諸公遊虎丘」などの詩から見えるように「虎丘」などの名勝と一緒に遊覧に行く記載も少なくない。朱長文の詩から見ると、彼が客を楽圃に招くことは多くない。例えば、方子通のような親友を招いたことはあるが、多くの人は自ら訪れてくるか、一緒に名勝を遊覧する場合が多い。彼は私家園林にて宴会を開催することには興味がなかったように見える。それは楽圃の主な機能が居住にあり、個人領域としての性格が強かったからである。楽圃での居住は朱長文の家族に限らず、前述したように朱氏親族も一緒に居住していた。そのため、朱長文個人の私家園林と言うよりも朱氏一族の共有空間であったと考える。

以上の事例分析をまとめると、北宋の蘇州出身の士大夫は退職後、帰郷して私家園林を

造営して雅集を行う傾向があり、彼らの老後生活を楽しむ場所であったとみられる。そして、蘇州で一生を送った朱長文にとって、楽園は彼の社会地位を表す個人領域である。北宋の蘇州私家園林は士大夫の居住地であり、宴会を開く場所でもある。それが当時の蘇州私家園林の主要な機能であったと考えられる。

次いで、蘇州私家園林に北宋から南宋に至る間、どのような変化が生じたのか、園林生活の様子から確認していく。

北宋末期から南宋初期の間に造営された臞菴は蘇州の名園の一つと言われる。

臞菴在松江之濱，邑人王份有超俗趣，營此以居。圍江湖以入園，故多柳塘花嶼，景物秀野，名聞四方，一時名勝喜遊之，皆為題詩。園中有與閑、平遠、種德及山堂四堂，煙雨觀、橫秋閣、凌風臺、鬱戎城、釣雪灘、琉璃沼、臞翁澗、竹廳、龜巢、雲關、瀨林、楓林等處，而浮天閣為第一，總謂之臞菴。份字文孺，以特恩補官，嘗為大冶令，歸休老焉，題詩甚多，不可悉錄⁶⁶。

臞菴は城南 45 里の松江に立地し、優美な自然風景で有名であった。「雲關」、「臞翁澗」などの名前からも自然の地勢に従って園林を造ったことが想像できる。園林主の王份は著名な士大夫ではないが、臞菴を巡って詩を作った人々の中には有名人が少なくない。また、遊覧に来た士大夫である蘇庠（1065-1147）、呂本中（1084-1145）、沈與求（1086-1137）等の生きていた年代から見ると、臞菴は北宋末期から南宋初期に造られたと考えられる。これらの士大夫が残した詩をいくつか取り上げて当時の様子を分析する。

呂本中：

伊洛富山水，家有五畝園。花竹遶瀟澗，不讓桃花源。
清時足眞賞，戸門開層軒。一朝胡塵暗，故家希復存。
莽蒼走萬里，始及吳市門。庵廬據形勝，冰壺貯乾坤。
亭榭着仍穩，不見斧鑿痕。主人更超邁，雲夢八九吞。
植杖邀我坐，笑語清而溫。坐令車馬客，稍識山林尊。
十年老朝市，漸見兩目昏。求田與問舍，姑置不復論。
但願從我公，不使世諦渾。

沈與求：

地控三州界，池開十丈蓮。桑麻無杜曲，松菊有斜川。

別浦歸帆遠，他山晚照妍。江湖春水闊，幽興白鷗前。

向子諲：

仙翁五十鬢猶青，高臥柴門晝亦扃。茅舍已忘鍾鼎夢，蒲輪休過薜蘿亭。

陰森門巷先生柳，寂寞江天處士星。晚歲田家農事了，閑抄審戚相牛經⁶⁷。

これらに加え、蒙與義、蘇庠、程子山などの人物も詩を残している。上記の詩作を含め、その内容をみると、凡そ園林の景色や園林主の隠居生活を羨むことが述べられている。それに「主人更超邁，雲夢八九吞。植杖邀我坐，笑語清而温」といった園林主についての描写から見ると、園林を遊覧した後、園林主と交流し、その親切で潔い態度に感動したことが読み取れる。当時の戦乱が続いていた社会背景を考えると、このように静かで優美な園林の雰囲気は臞菴の人に好まれた理由の一つであったと考えられる。呂本中、向子諲は嘗て詩社を結んだことがある。加えて、向子諲は紹興八年（1138）に、知平江府となっており⁶⁸、紹興初に友人と一緒に臞菴を遊覧したと考えられる。臞菴は隠居地として使われただけでなく、園林主の志向性を表す空間でもあった。その美しい風景は遊覧客の目を引き、現在まで伝わっている文人墨客の作品からも臞菴の魅力を窺える。これは上述の張廷傑の「就隠」と同じく園林自体の景色をもって有名になった一例である。

その他に、蘇州の私家園林を論じる際に挙げなければならない事例として石湖別墅がある。范成大は蘇州において三カ所も居場所を設けており、それが范参政府、范村、石湖別墅である。石湖別墅は范成大的別荘であり、常住しながら日常生活を送ったわけではない。

【表2】を参考すれば、蘇州の私家園林主の中で、別荘を有するのが8例（その内、二箇所は読書処）ある。その中、北宋時代の4例に関する記載は少ないが、南宋時代においては、

【表2】の南宋の私家園林23の鄭虎臣宅、同表53の衛涇の西園のように、園林の中に多くの「美石」、「太湖奇石」が設置されていたことが記載されており、范成大的石湖別墅の場合は多くの名花が植えられていたことが記載されている。別墅は士大夫が自分自身の社会地位や財力を示すためのものであったと考えられる。これからは、彼らが如何に別墅で園

林生活を送っていたのかをしてみる。

まず、范成大の事例をしてみる。『石湖詩集』には彼と家族の石湖別荘における活動が記載されている。

「攜家石湖賞拒霜」

水上晴雲綵艸橫，許多蜂蝶趁船行。漁樵引入新花塢，兒女扶登小錦城。
艷粉發粧朝日麗，濕紅浮影晚波清。誰知搖落霜林畔，一段韶光畫不成。

「聞石湖海棠盛開亟攜家過之三絶」

東風花信十分開，細意留連待我來。開過十分風不動，更無一片點蒼苔。
家人扶上錦城頭，蜂蝶團中爛熳遊。報答春光須小醉，紅雲洞裏按伊州。

低花妨帽小攜筇，深淺臙脂一萬重。不用高燒銀燭照，煖雲烘日正春濃⁶⁹。

上記の詩のテーマからもわかるように、范成大と家族は花が咲く時期に石湖別荘に観賞に行ったが、普段は城内の范参政府に居住していたと考える。「漁樵引入新花塢，兒女扶登小錦城」「家人扶上錦城頭，蜂蝶團中爛熳遊」の句からみれば、水路を利用して石湖に至り、その場で花畑に登って花見をしていたことが分かる。花畑は湖に向かっており、花見をしながら湖水風景も楽しめるなど、当時の石湖別荘の美しさが想像できる。「一段韶光畫不成」との句に、このような美しい光景は絵画には描けないと言っているように、范成大が家族と共に園林を遊覧する一家団欒な雰囲気が表れている。別荘には多くの名花が植えられていた。それは、范成大が友人と花見をする様子を歌った詩で「閨門昨日看不足，今日婁門花更多⁷⁰」と述べているように、当時の蘇州における花の人気が高かったことを示していると考えられる。南宋になると、私家園林の機能は居住にとどまらず、園林の観賞性をも重視するようになる。范成大は嘗て乾道六年（1170）に金国に派遣されたことがあり、帰る時に揚州で芍薬の根を購入して石湖に植えている⁷¹。揚州の芍薬は非常に有名であり、わざわざそれを購入して自分の園林に植えたことから士大夫の花への熱情が見られる。太湖を眺める石湖別荘は一家の花見、そして休日を過ごす場所であったと思われる。

また、范成大の親友である周必大が石湖別荘に遊覧にきたことがあり、『石湖詩集』にそれに関する詩が残っている。詩の題目は「頃乾道辛卯歲三月望夜，與周子充内翰泛舟石湖

松江之間，夜艾歸宿農圃。距今淳熙己亥九年矣。余先得歸田，復以是夕泛湖，有懷昔遊，賦詩紀事⁷²」とあり、乾道七年（1171）に周必大と船に乗って一緒に石湖を遊覧し、その夜に石湖別荘の農圃に泊まった思い出を歌っている。また、乾道八年（1172）に周必大は范成大の誘いに応じて従兄弟の周必達と共に石湖の遊覧に来る⁷³。この集まりについて周必大も范成大も記録を残している。周必大の「乾道壬辰南歸録」には「三月己巳朔……易舟徑赴范至能石湖之招……飲酒至夜分，留題壁間云……登臨得要，甲於東南⁷⁴。」とあり、范成大『驂鸞錄』乾道九年癸巳閏月十四日紀事には「始余得吳中石湖，遂習隱焉，未能經營如意也。翰林周公子充同其兄必達子上過之，題其壁曰：登臨之勝，甲於東南。余愧駭曰：公言重，何乃輕許與如此⁷⁵！」とある。乾道年間、周、范二人は皆祠録官を請うて帰郷していたため、往来がより頻繁になっていた。上記の史料によれば、二人は少なくとも2回ほど石湖で集まって遊覧していたと見える。この際に周必大は深夜まで酒を飲み、壁に「登臨之勝，甲於東南」と題字し、石湖別荘の優れた山水風景を称賛した。紹熙四年（1193）九月、范成大が亡くなり、周必大は彼の神道碑において二人の石湖における交遊を以下のように言及した。

……某與公齊年，御史王公予外舅也，以是與公善。壬辰春，自春官去朝，過平江遊城西諸山。公訪余靈巖，同宿石湖，望夜小舟共載湖心，風露浩然，嘗有六十掛冠之約。其後或同朝，或相與於外，每以未踐言為恨……⁷⁶

二人は同年であり、王葆を通じてずっと親しい関係をもっていた。周必大が石湖の遊覧に来た際、二人は船に乗って月を鑑賞しながら、政治上或いは生活上の交流もよく行なっていたと考えられる。二人は園林の静かな雰囲気を楽しみながら、60歳になると一緒に辞官することを約束した。周必大が壁に題字したことは広く伝わり、当時のみならず後世の人でも石湖を言及する際には二人の交遊について興味深げに言及した。題名は兩宋代において盛んであり、蘇州と同様に私家園林が繁栄していた湖州においても葉夢得が友人と卞山を遊覧して題名したことなど⁷⁷、壁に題名する記載がのこっている。石湖別荘は范成最大の交遊空間であり、范・周の友情及び二人の園林における交遊活動は、石湖別荘の後世への流伝を促進したと思われる。

私家園林が有名になるか否かは、その構造や名花、太湖石などの内部の要素に関わるが、最も重要なのは人的要因、つまり、園林主の社会地位、交遊活動及び園林をめぐる文学作品の流伝などにある。范成大は友人と唱和する時にいつも「帰田楽」という表現を用いている⁷⁸。石湖は他の私家園林と同じく園林主の精神的空間を活写している。また、石湖別荘が特別なのは、上述のように、孝宗が「石湖」の御筆を范成大に賜ったことによって、石湖別荘は園林主の一家団欒、交遊活動を行う空間だけではなく、范成大の社会的地位を象徴する空間ともなったことにある。

上述のように、北宋の私家園林の主な機能は居住および老後生活を豊かにすることにあり、素朴な空間であった。士大夫は園林の景色を鑑賞するためではなく、園林主の才徳を表敬するために訪問する。この時期の蘇州私家園林は、観賞性は薄いと考えられる。それに対して、南宋の蘇州私家園林は景色を重視するようになり、自然風景と園林景勝との融合を大事にする傾向が見られる。さらに、珍しい花や石を飾り物にすることによって、私家園林は園林主の上品な趣や財力、更に社会地位を表す芸術品ともなる。私家園林の機能は次第に拡大し、士大夫の交遊に不可欠な空間となっていく。

（2）蘇州に移住してきた園林主とその交遊

【表2】によれば、有名な士大夫が少なくないことが見て取れる。その多くは蘇州出身であるが、四川（魏了翁、高定子など）、江西（徐兢など）、福建（章粦一族など）、浙江（張先、王珣など）から移住してきた士大夫もいる。四川からの士大夫は宋・元戦争の影響を受けて移住してきたとみえる⁷⁹。更に、鄧小南氏は士大夫が蘇州に移住する理由について次のように説明している。北宋中期以来、蘇州で活躍した士大夫の中で移住してきた者の数は少なくなく、その理由は後唐五代の時の状況と異なり、大凡二つのパターンがあるという。その一つは、移住者本人が嘗て蘇州で任官した経験があり、当地の風土を好んで、退職した後に移住する場合である。彼らの子孫も蘇州を起点とし、外部へと進出しており、代表例として蔣堂、徐奭、盧革などがあげられる。その二つは、祖父が蘇州に埋葬された

ことなど、祖先との関係による移住があり、代表的な例として林希兄弟、方惟深、楊懿孺などがあげられる。また鄧氏は、北宋中期の士大夫の蘇州への移住は止むを得ない理由で故郷から離れたわけではなく、本人或いは祖先の蘇州任官によって促進されており、移住の目的は紛れもなく一族の発展に有利な環境を求めることにあったと指摘している⁸⁰。

北宋の蘇州は中央政治から離れたいわば避難所であり、士大夫の老後生活を楽しむ場所でもあった。上述した蘇舜欽の事例を見てみれば、彼は罷免されてから蘇州に行き、苦悶や官界での挫折感を滄浪亭に託し、それを通じて人生の挫折を飲み込もうとした。彼は滄浪亭記で次のように書いている。即ち「私は廃されることによってこの綺麗な場所を得られて、恬淡に満足し、他人と行動をともにせず、これにより、内外の得失の根本が明らかに見え、萬世に同情されたり、嘲笑されたりしても、目に入ったものが忘れられなく、これによって超越したと思う⁸¹。」北宋の蘇州は繁栄していた都市でありながらも、政治の中心からは離れた地域であり、その美しい園林風景に官界の失意が消散されそうなところであった。蘇舜欽が滄浪亭を造ってから亡くなるまでの三年余りの間、彼は山水風景を遊覧したり、友人と唱和したりしながらも、寂しい生活を過ごしたようである。「某爲世所棄，困居於蘇，平生交遊，過門不顧。長安侍讀葉丈不以秦吳之遠高下之隔，閱此窮悴，特貺以詩，然韻險句奇，不可攀續，仰酬高誼，強挾蕪音⁸²」という詩のタイトルから、それまで交遊していた友人が蘇州に来て訪れることなく、苦悶を抱いていたとみえる。そのため、地方官が訪れた時の蘇舜欽は下記の詩のように喜びに溢れる言葉で歌っている。

「郡侯訪予於滄浪亭因而高會翌日以一章謝之」

荒亭俗少遊，遷客心自愛。繞亭植梧竹，私心亦有待。

昨朝十騎來，趁走羣擁林外。水禽駭笳鼓，野老瞻車蓋。

公餘喜靜境，賓至因高會。跋石已行廚，臨流聊褫帶。

優游鄙情通，放曠未禮殺。酒醇引易釀，肉美舉必噉。

千臠恣食雞，二螯時把蟹。開顏聞善謔，傾耳得嘉話。

暮夜歡未厭，裴回意將再。跋已見懵騰，跨鞍極倒載。

明日尚狂醒，嘉貺不違拜⁸³。

蘇州の知州が蘇舜欽を訪ねて滄浪亭にきたことで、盛大な宴会を開いた。普段、滄浪亭に訪れる人は多くないが、知州が来訪することで生気がよみがえるようになる。知州と園林を遊覧しながら、辞官の話をしていて、また美酒美食を楽しみながら、良い話を交わした。夜まで楽しい時間を過ごし、諦めきれない雰囲気の中で再び集まると約束した。知州は酔っ払い、まともに歩くことさえできなくなり、馬に乗ると転んで頭から落ちてしまうほどであったという。このような繊細な描写から蘇舜欽の喜びの気持ちが伝わる。苦悶の気分に囲まれていた彼は知州の来訪に心が慰められ、それに関する感謝の気持ちが詩文に溢れている。人間関係が金銭や権勢に左右されて熱くなったり冷たくなったりするが、蘇舜欽は罷免されても蘇州の民衆に尊敬されており、また地方官も士大夫との交遊に積極的であった。官途で失意しても、才能のある人を尊敬する蘇州の人々によって慰められたのである。

同じく官途で挫折した程俱の場合は蘇州でどのように生活していたのかを見てみよう。

程俱（1078～1144）は、字致道、号北山、衢州開化の人である。外祖父の恩蔭で蘇州呉江県主簿、監舒州太湖茶場に任命されたが、上奏して政事を論じたことで罷免された。宣和二年に上舎出身を賜わり礼部郎に任命されるが、病気で辞職した。建炎中、太常少卿、知秀州となり、紹興初、秘書少監に授けられた。紹興 14 年に亡くなり、享年は 67 歳である⁸⁴。著作として『麟台故事』、『北山小集』などが残っている。「程俱年譜」によれば、程俱は政和三年（1113）に罷免され、政和七年（1117）に至るまで、ずっと蘇州で住んでいた。蝸廬はこの時に造られたと思われる⁸⁵。

蝸廬在城北，中書舍人程俱致道所居。俱政和間自監舒州茶場上書論時政不合，來家，於吳葺小屋，號蝸廬。中有長寂光室，勝義齋。嘗賦遷居蝸廬詩。及蝸廬後隙地種植竹、菊、鳳仙、雞冠、紅菟、芭蕉、水青等⁸⁶。

程俱の園林は蘇州城北にあり、蝸廬という。「有舍僅容膝，有門不容車⁸⁷」とあるように、小さな園林であったと思われる。園林の中には竹や花を植え、それについて詩を作った。程俱は上述の蘇舜欽と同様に官途に挫折して蘇州に移住してくる。蘇舜欽が苦悶の気持ちを滄浪亭を通じて収めたのに対して、程俱の園林生活は快樂とは言えないものであった。

園居荒蕪，春至草生，日尋野蔬以供匕筋，今日枯朽間得蒸菌四五，亦取食之，自笑窮甚……⁸⁸

園林は荒蕪し、雑草が茂っており、毎日山菜を探して食糧とし、たまに枯れ木の間のきのこを見つけて食べた。このような窮屈な暮らしをしていたようである。「園林荒蕪」、「雑草群生」の語句からは程俱の憤懣が感じられる。

蘇州にいる間、程俱はしばしば葉夢得、賀鑄などと交遊していた⁸⁹。『北山小集』には程俱と葉夢得との唱和詩が多く収録されており、「山中次葉翰林韻五首」や二人と一緒に湖州遊覧に行った時の「奉陪知府内翰至卞山有詩五首」などが残っている⁹⁰。葉夢得が政和五年（1115）に知蔡州に任命される前に「落職奉祠」の経験があり、二人は同じ境遇であったため、互いのことが理解できたかもしれない。

また、程俱と賀鑄との交遊も文集から確認できる。彼は賀鑄の詩集の序を作ったことがあり、一緒に園林を遊覧したこともある⁹¹。

賀鑄字方回，本越人，後徙居吳之醋坊橋，作吳趨曲，甚能道吳中古今景物，方回有小築在盤門外十裏橫塘，常扁舟往來作青玉案詞⁹²。

賀鑄は古今の景物に精通し、詞にも上達していた。同じく葉夢得も著名な詞人であり、程俱も詩人である。三人の交遊は文学活動を巡る文学者グループの交遊と見做される。

その他、嘗て蘇州に任職し、退職後に蘇州に移住してきた事例も少なくない。例えば、『中吳紀聞』では、蔣堂と彼の建てた隱圃という園林について以下のような記載がある。

蔣堂字希魯，嘗兩守此郡，後既謝事，因家焉。自號曰遂翁，所居曰靈芝坊，作園隱圃，圃之內如巖扃，水月菴，煙蘿亭，風篁亭，香巖峰，皆極登臨之勝。公喜賓客，日為燕會，時以詩篇為樂⁹³。

蔣堂は賓客が訪れてくるのを好み、毎日宴会を開催し、詩を作った。このように蔣堂は老後生活を過ごしていた。『吳郡志』にも隱圃についての記載がある。

圃中有巖扃，水月菴，煙蘿亭，風篁亭，香巖峰，古井貪山等。堂嘗自賦隱圃十二詠，結庵池上，名水月，宅南小溪上結宇十餘柱，名溪館，又築南湖臺於水中，皆有詩⁹⁴。

蔣堂の園林詩は全て残されている。「淵魚樂且靜，庭鶴壽而閑」、「自喜歸休早，全勝賀老還」

などの詩句は園林で飼育していたペットのことや、悠々自適した生活状態を述べている。

また、魏了翁の第宅を確認する。

魏文靖公宅。宋端平間，公都督江淮，理宗賜第吳中，有高節堂、事心堂、靖共堂、讀易亭，復親書「鶴山書院」四大字賜之⁹⁵。

魏了翁の蘇州にある第宅は理宗から賜ったものである。さらに「鶴山書院」の扁額を書いて魏了翁に賜っている。第宅は南園巷南宮坊にあった。第宅を賜ったのは魏了翁が亡くなった後であり、「魏文靖公宅」と言っても彼が居住したことはなかったと考えられる。魏了翁は姑蘇高景山盆塢に埋葬され、その後、彼の子孫が蘇州に定住するようになる⁹⁶。『正徳姑蘇志』にある魏氏の園林についての記載では、

郭氏園在飲馬橋西南，本郭雲大夫所居，有池，號小滄浪，後為魏克愚太卿所得⁹⁷。

とある。魏克愚は魏了翁の息子であると述べている。郭氏園を購入したのは魏了翁が亡くなった後のことであると思われる。

『宋詩紀事補遺』巻八十四にもう一人の息子に関する記載がある。即ち、

魏近思，字求已，号已齋，臨邛人，鶴山先生之子。

魏近思の園林について以下の詩を確認できる。

「小園梅未盡放叔用府教以詩索和勉用韻以謝」

造化機緘莫恨遲，須知開謝各因時。物華未分隨春意，梅菜先饒露玉肌。

雪裏精神千萬態，水邊瀟灑兩三枝。何當攜酒澆花去，且遣詩筒高報知⁹⁸。

詩の作られた時期は確認できないが、内容をみれば園林にある梅をめぐって友人と唱和したことがわかる。

史料不足で蘇州移住後の魏氏一族の生活像についての詳細な考察は難しいが、元代に至ると、祭祀および魏氏の学問を広げるために魏了翁の曾孫が鶴山書院を建てることを請願したことが確認できる⁹⁹。『道園学古録』には鶴山書院について下記のような記載がある。

……至於延祐之歲，文治益盛，仍以四君子並河南邵氏、涑水司馬氏、新安朱氏、廣漢張氏、東萊呂氏、與我朝許文正公十儒者，皆在從祀之列。魏氏之曾孫曰起者，隱居吳中，讀詔書而有感焉。曰，此吾曾大父之志也，何幸親復見諸聖明之朝哉。今天下學校

並興，凡儒先之所經歷，往往列為學官。而我先世鶴山書院者，臨邛之灌莽，莫之翦治，其僑諸靖州者，存亦亡幾。而曾大父實塋於吳，先廬在焉。願規為講誦之舍，奉祠先君子，而推明其學¹⁰⁰。

上記の史料から、魏起が吳中で隠居していたことが分かる。つまり、魏了翁の曾孫の世代に至ると、出仕せずに、蘇州で隠遁生活をしていたと見える。しかし、先祖の学問を積極的に発揚し、学術の伝播及び四川、蘇州の両地域の文化交流に努めていたと考えられる。

移住してきた士大夫にとって、蘇州の私家園林は避難地であり、現地の士大夫と交遊するきっかけともなった。蘇舜欽、程俱の事例をみれば、蘇州で生活する時間が短かったため、官途の挫折で憂鬱であったことに加え、積極的に宴会を開いたり、或いは宴会に参加する機会も多くなかったと考えられる。しかし、蔣堂のような官僚は元々蘇州で任職した経験があり、退職してからも蘇州におけるネットワークと影響力を相変わらず有していたので、友人と園林に集まるなどして老後生活を過ごした。また、魏了翁を代表とする四川からの移住民が園林を媒介にして学問や文化の交流を促進していた。

4. おわりに

士大夫の活動と都市空間との関連性について多くの先行研究があるが、これまで以上に研究成果を積み重ねていく必要がある。梁建国氏は『朝堂之外：北宋東京士人交遊』の中で研究視角を提示している。本章は先行研究を踏まえて、詩、筆記、地方志などの史料を利用し、北宋から南宋までの蘇州私家園林の発展・変化像を分析し、園林主の交遊活動についても分析を行っている。私家園林の変化について、まず、園林の分布から見れば、北宋中期まで、蘇州城内の開発が進んでおり、空き地が多く残っていた。その時の私家園林は主に城内の閶門を含む北部地区及び盤門周辺の運河に近いところ、交通の便利な場所に分布していた。それに対して、南宋になると、戦争の影響、及び都市経済の発展、人口増加などの影響によって、私家園林の多くは城外の崑山及び太湖周辺の自然風景の優美な地域に分布するようになった。次に、有名な私家園林は蘇州に多い。北宋の私家園林は質朴

で野趣を好む傾向がある。南宋の場合、私家園林の構造が次第に贅沢で精巧になっていく。しかも珍しい花や石を飾り物として利用し、特に太湖石の利用が盛んになる。更に南宋の蘇州私家園林は人工的景勝を造るに力を注ぐようになる。蘇州の著名な士大夫の多くは私家園林を有しており、園林を基地として他の士大夫と文化的交流を行い、園林文化の発展を促進した。

蘇州の私家園林と士大夫の交遊について、本章では蘇州出身の士大夫と移住してきた士大夫とに分けて分析した。北宋の蘇州私家園林は退職官僚の老後生活を楽しむ場所であり、彼らは私家園林を造営し、宴会を開いてお酒を飲みながら詩を作るほか、「九老会」のような雅集もよく行っていた。当時の私家園林は居住と宴会の開催が主要な機能であった。私家園林を訪問する多くの者は園林主の才能を敬慕するか、その社会地位に頼ろうとする傾向にあった。しかし、南宋に至ると、蘇州私家園林は益々精緻になり、園林自体の魅力で観覧客の目を引き、園林主の上品な趣味と社会地位などを表す芸術品となり、交遊活動に不可欠な空間となる。移住して来た園林主は罷免されたり、退職したりするなどそれぞれの理由があるが、蘇州を居住地として好むケースが多い。

第1章で論じた湖州私家園林と蘇州とを比べて見れば、以下のような相違点が見えてくる。まず、類似点が多く、両者とも南宋の政治経済中心地に位置しており、山水風景の良い都市で、造園気風がある地域である。また、太湖石が流行しており、移住して来た園林主が多いなどの点が挙げられる。蘇州と湖州的私家園林の構造も類似していると考えられる。相違点としては、園林主の身分が挙げられると考える。蘇州の園林主は著名な士大夫が多いのに対して、湖州の場合は宗室の人が多く、蘇州私家園林は歴代の園林文化を踏まえて発展してきたものであるが、湖州私家園林は南宋に限っての繁栄である。孝宗の実の父親が湖州に移住したことも湖州私家園林の発展に影響を及ぼした重要な理由である。それ故に宋朝が滅亡してから、蘇州私家園林が引き続き発展していったことに対して、湖州私家園林は衰えていく。その後、湖州周辺の市鎮で私家園林の盛んになる趨勢が見られるが、蘇州とは比べものにならない。以上のように、宋代において多くの士大夫の蘇州へ移住、居住することにより、文人園林の繁栄を推し進めた。さらに、蘇州園林は歴代に絶え

ずなく存続していることから、蘇州の園林文化の深さが分かる。

【表 2：宋代蘇州私家園林表】¹⁰¹

出典：(元豊)『吳郡図経統記』、(紹定)『吳郡志』、(洪武)『蘇州府志』、(同治)『蘇州府志』						
園林	園林主	出身地	年代	場所	備考	
北宋私家園林						
1	蒙圃	陳之奇	吳縣		閶門	與蘇舜欽、胡瑗交遊、方惟深作詩
2	紅梅閣	吳感		天聖中	小市橋	後歸林少卿所有
3	隱圃	蔣堂	常州宜興		靈芝坊	范師道作詩
4	范氏義宅	范仲淹	吳縣	皇祐初	普濟橋旁、雍熙寺後	樓鑰「范氏義宅記」
5	浩然堂	曹瑛		慶曆間	閶門南	蘇舜欽撰記、梅堯臣作詩
6	梅都官園	梅堯臣	宣城		府治西南滄浪亭後	與蘇舜欽交遊
7	滄浪亭	蘇舜欽	梓州銅山	慶曆間	郡學東	歐陽修作記、後章惇、韓世忠所有
8	程師孟園	程師孟	吳縣		南園旁	
9	徐祐山亭	徐祐	揚州		胥門外	梅堯臣等人有詩、組織九老會
10	樂圃	朱長文	吳縣		雍熙寺西	『樂圃記』
11	三瑞堂	姚淳			閶門西楓橋	蘇軾有詩
12	五畝園	梅宣義		熙寧間	城西北西大營門	蘇軾有詩
13	寧極齋	姚安世	吳郡		飲馬橋	方士、與王定國交遊
14	中隱堂	龔宗元	崑山		大酒巷	與程適、陳之奇交遊
15	邊侍郎知白宅	邊知白	吳縣		金獅巷	
16	范家園	范周	吳縣		雍熙寺後	
17	企鴻軒	賀鑄	衛州		升平橋	橫塘に別墅あり
18	酉室	王伯起				江公望撰記
19	隨緣堂	黃策	吳縣			徽宗御題、策自為記、沈與求作詩
20	桃花塢別墅	章粲	浦城	紹聖間	閶門里北城下	郡人春遊賞花(五畝園舊址)
21	五柳堂	胡稷言	常熟		臨頓里	另有別墅「五柳園」在太倉
22	郭氏園	郭雲			飲馬橋西南	
23	盤隱	黃由之			盤門	別墅
24	鱸鄉亭	林肇	福州		吳江縣	

25	如歸亭	張先	烏程		吳江縣	吳感作詩
26	七檜堂	葉參	長洲		天慶觀東	范仲淹作詩
27	侍讀小園	葉清臣	長洲		城北	蔣堂作詩、郡人遊覽地
28	逸野堂	王僖	崑山		崑山	王葆從叔
29	醉眠亭	李行中	湖州		松江	蘇軾過訪
30	醒心亭	曹傑		熙寧間	葑門	
31	方惟深宅	方惟深	莆田		城東	與陳之奇交遊
32	同樂園	朱勗	蘇州		盤門內孫老橋	
33	養植園	朱勗			閶門	
34	丁謂別業	丁謂	長洲	大中祥符	丁家山下	
35	賢行齋	林慮			大雲坊	朱長文「賢行齋記」
36	章綽故宅	章綽	浦城		章家橋巷	章窠之子、獅子林前身
37	袞繡坊	元絳	吳縣		帶城橋東	與程師孟等組織九老會
38	都官書院	龔宗元			虎丘	讀書處
39	章園	章惇	浦城			滄浪亭舊址
40	蝸廬	程俱	衢州	政和間	城北	
41	張處士溪居	張處士			西郊外	王禹偁『過張處士溪居』
42	蓬齋	周沔			長洲縣東北	與方惟深為鄰
南宋私家園林						
1	千株園	趙與憲	吉州	淳祐初	消夏灣龍舌山下	讀書處
2	竹君軒	何麒	青城			汪彥章有詩
3	自覺齋	徐葳				與陸游、曾幾有詩
4	蓮樹	徐兢	信州			曾幾題詩
5	筠谷	榮蕤			西館橋西	
6	招隱堂	胡元質	長洲		畫錦坊	
7	張氏園池	張子顏	吳縣	紹興間	南園舊址	張俊之子
8	范參政府	范成大	吳縣		越來溪畔、西河上	
9	石湖別墅	范成大			城西南石湖畔	孝宗御賜「石湖」二字
10	就隱	張廷傑	吳縣	紹興間	華山	士人多賦詩
11	漫莊	顧禧	吳縣		毗村	章憲「題顧處士漫莊」
12	復軒	章憲	浦城		黃（篁）村	

13	南村（盧園）	盧瑤			越來溪西、吳山下	御書「得妙堂」有匾額
14	沈氏園亭	沈仲嘉			洞庭西山鎮下	孫覲有詩
15	善慶堂	夏元富			洞庭夏家灣	孫覲有詩
16	環谷	王珏	烏程		堯峰山東	
17	劉舍人宅	劉震孫	四川		樂圃坊西南	
18	休寓室	孫覲	常州	建炎間	洞庭西山	罷平江知府後僑居此處
19	道隱園	李彌大	吳縣		洞庭西山	「無礙居士道隱園記」
20	鄭駙馬宅	鄭釗		建炎間	洞庭東山	
21	魏文靖公宅	魏了翁	蒲江	端平間	東太平巷	理宗賜了翁之第
22	參政高定子賜第	高定子	蒲江		仰家橋	
23	鄭虎臣宅	鄭虎臣	長洲		鶴舞橋東	另有小獅林在白塔子巷，多美石
24	西園	趙思 ^[畢升]	常熟		閶門西	有宅和致堂在九勝巷
25	臞菴	王份	吳江		松江之濱	蒙與義、呂本中、蘇庠等作詩
26	樂庵	李衡	揚州		崑山	王葆
27	范公亭				崑山	范成大少時讀書寺中游息其上
28	雙清亭	錢豫		建炎間	洞庭東山	避地所居
29	何仔園亭				尹山	周必大會游、見『南歸錄』
30	北園	陳氏			漳潭	范成大書匾、東浦黃簡為記
31	玩芳亭	吳仁傑	崑山		崑山	
32	定軒	楊紹雲	吳江		震澤鎮	
33	鄭氏園	鄭竦			馬鞍山前	
34	藏春園	孟忠厚	長洲		閶邱坊	孝宗題匾
35	萬華堂	藍師稷			鈕家巷	種植洛陽名品牡丹
36	萬卷堂	史正志	潤州	淳熙間	帶城橋南	
37	閒貴堂	周虎	泗州		醋坊橋東	
38	畢園	畢叔滋				范成大「簡畢叔滋賞牡丹」
39	如是齋	黃纓	吳縣		光福聚塢	黃策之、陳長方為記
40	靜庵	上官漁西			仁美坊	
41	逍遙閣	徐深		紹興間		范成大書匾額
42	阮登炳宅	阮登炳			南星橋西	狀元坊

43	范村	范成大			范參政府南	多植花卉
44	成齋	黃雲			醋庫巷	寧宗御書賜其子
45	楊園	楊存中	山西	紹興初	和令坊	
46	存復齋	呂師孟	安徽		虎丘	
47	鄭思肖宅	鄭思肖	福建	寶祐間	條坊巷	
48	畫錦園	趙師[畢升]			府學西南	寧宗御題匾額
49	茂苑堂	石瑄		紹興間	長洲縣治東	
50	桃園（桃花源）	陸大猷		紹定間	吳江	名人往來、宴賞無虛日
51	墨莊	范良遂	吳縣		崑山	
52	依綠園	盛德輝		建炎初	崑山	
53	西園	衛涇	嘉興		崑山	別墅、園中多太湖奇石
54	止足堂	鄭竦			崑山	可容數十客
55	石澗書隱	俞琰		寶祐間	府學西	陳謙『石澗書隱記』
56	韓園	韓世忠		紹興間		滄浪亭舊址

- ¹ 魏嘉瓚『蘇州古典園林史』上海三聯書店、2005年11月。
- ² 郭明友「明代蘇州園林史」蘇州大博士学位論文、2011年9月。
- ³ 巫仁恕『優游坊廂：明清江南城市的休閒消費與空間變遷』台灣中央研究院近代史研究所、2013年3月。
- ⁴ 鄧小南「龔明之與宋代蘇州的龔氏家族——兼談南宋崑山士人家族的交遊與沈浮」『中國近世家族與社會研討會論文集』中央研究院歷史語言研究所、pp. 81-109、1998年。他に氏の成果として「北宋蘇州的士人家族交遊圈——以朱長文之交遊為核心的考察」（『國學研究』第三卷、北京大學出版社、pp. 451-486、1995年12月）がある。
- ⁵ 高柯立「宋代地方官與士人的唱和往來——以蘇州為中心」『國學學刊』第4期、2017年12月、pp. 54-67。
- ⁶ 許梅「明清蘇州文人園林的建構與轉型——以士大夫交遊活動為視角」復旦大學碩士學位論文、2013年6月。
- ⁷ 士大夫交遊について、梁建國『朝堂之外：北宋東京士人交遊』（中國社會科學出版社、2016年11月）を参照。交遊空間について、平田茂樹「史料と研究視角との間——宋代ネットワーク研究の現状を振り返って——」（『大阪市立大學東洋史論叢』第19号、2019年9月、pp. 1-9。）を参照。
- ⁸ 朱長文『吳郡閔經統記』（『宋元方志叢刊』第一冊、中華書局、1990年5月）卷上。
- ⁹ 伊原弘『蘇州——水生都市の過去と現在』講談社、1993年8月。
- ¹⁰ 梁庚堯「宋元時代的蘇州」『宋代社會經濟史論集』允晨文化、1997年4月、pp. 334-480。
- ¹¹ 王謩『宋平江城坊考』江蘇古籍出版社、1999年7月。
- ¹² 代表的な研究として、張勇堅「『平江閔』與古代蘇州」（『檔案與建設』第12期、1999年12月、pp. 33-35）、王蹇『宋平江城坊考察』（江蘇古籍出版社、1999年7月）、張維明「宋『平江閔』年代考」（『東南文化』第3期、1987年6月、pp. 109-112.）が挙げられる。
- ¹³ 汪前進「『平江閔』的地國學研究」（『自然科學史研究』第8卷第4期、1989年11月、pp. 378-386）など。
- ¹⁴ 杜瑜「從『平江閔』看平江府城的規模和布局」（『自然科學史研究』第8卷第1期、1989年2月、pp. 90-96）、王軍「融於自然山水的中國古代城市」（『新建築』第4期、2000年8月、pp. 1-4）、陳泳「古代蘇州城市形態演化研究」（『城市規劃學刊』第5期、2002年9月、pp. 55-60）、烏再榮「從『平江閔』看平江府城之市坊制度」（『建築師』第12期、2009年12月、pp. 35-40）などがある。
- ¹⁵ 伊原弘『中國人の都市と空間』原書房、1993年10月。
- ¹⁶ 前掲注10「宋元時代的蘇州」を参考。
- ¹⁷ 図6と図7は平江閔（張英霖主編『蘇州古城地圖集』古吳軒出版社、2004年6月）に基づいて加工した

ものである。

- ¹⁸ 前掲注 8『吳郡図経続記』巻上、「倉務」及び范成大『(紹定) 吳郡志』(『宋元方志叢刊』第一冊、中華書局、1990年5月)巻六、「倉庫場務」による。
- ¹⁹ 李心伝『建炎以來系年要録』巻31、建炎四年二月丁酉条「是日、午漏未盡四刻、完顔宗弼自盤門入平江、駐兵府治、擄掠金帛、子女。既盡、乃縱火燔城、煙焰見百餘里。火五日乃滅。」
- ²⁰ 『建炎以來系年要録』巻32、建炎四年三月丁未条「平江士民死者近五十萬人、得脱者十之一二。」
- ²¹ 前掲注 18『(紹定) 吳郡志』巻第一、戸口税租。
- ²² 前掲注 10「宋元時代の蘇州」を参考。
- ²³ 『淳祐玉峯志』(『宋元方志叢刊』第一冊、中華書局、1990年5月)巻上、「戸口」。
- ²⁴ 前掲注 4「曩明之与宋代蘇州の龔氏家族——兼談南宋昆山土人家族の交遊与沈浮」を参考。
- ²⁵ 前掲注 10「宋元時代の蘇州」を参考。
- ²⁶ 前掲注 1『蘇州古典園林史』を参考。
- ²⁷ 脱脱『宋史』巻四百四十二、列伝第二百一に参照。
- ²⁸ 前掲注 18『(紹定) 吳郡志』巻第十四、園亭、「滄浪亭記」。
- ²⁹ 同上。
- ³⁰ 前掲注 28「滄浪亭記」、「歐陽脩有詩「清風明月本無價、可惜祇賣四萬錢。滄浪之名、始著於此」。
- ³¹ 『宋史』巻四百四十四、列伝第二百三。
- ³² 朱長文『樂圃余稿』(文淵閣四庫全書補配清文津閣四庫全書本)巻六「樂圃記」。
- ³³ 同上。
- ³⁴ 鄧小南「朱長文家世、事歴考」『北大史学』第1期、北京大学歴史学系、1997年8月、pp.72-87。
- ³⁵ (正徳)『姑蘇志』(文淵閣四庫全書本)巻三十二、園池。
- ³⁶ 范成大字致能、吳郡人。紹興二十四年、擢進士第。授戸曹、監和劑局。隆興元年、遷正字。累遷著作佐郎、除吏部郎官。言者論其超躐、罷、奉祠。起知處州。除禮部員外郎兼崇政殿説書、中書舍人。除敷文閣待制、四川制置使。召對、除權吏部尚書、拜參知政事。以病請閑、進資政殿學士、再領洞霄宮。紹熙三年、加大學士。四年薨(『宋史』巻三百八十六、列伝第一百四十五を参照)。
- ³⁷ (洪武)『蘇州府志』(成文出版社編輯『中国方志叢書』、台湾成文出版社有限公司、1983年)巻第七、園第。
- ³⁸ (清)李銘皖、譚鈞培修(清)馮桂芬纂(同治)『蘇州府志』(『中国地方志集成』鳳凰出版社、2008年4月)巻四十五、「第宅園林一」。
- ³⁹ 前掲注 35(正徳)『姑蘇志』巻三十二、園池。
- ⁴⁰ 前掲注 18『(紹定) 吳郡志』巻第二十九、「土物上」。
- ⁴¹ 同上。
- ⁴² 外村中「明末清初以前の中國庭園における太湖石について」(『ランドスケープ研究』59(1)、1995年8月、pp.24-36)は太湖石に関する代表的文献を列挙すると同時に、太湖石の性質、産地などの問題を分析し、太湖石が流行する過程を検討した。
- ⁴³ 福本雅一『太湖石』(藝文書院、2009年12月)は詩、賦などの史料を利用し、現存する園林にある太湖石の特徴と、太湖石が唐宋及びそれ以後の時代における發展状況を分析しながら、太湖石が唐代から北宋中期に至って次第に盛んになった流れ、更に宋徽宗が艮嶽を造った以後、太湖石が全国へ広がっていた過程を詳細に論じた。
- ⁴⁴ 梅堯臣『宛陵集』(文淵閣四庫全書本)巻第二十三。
- ⁴⁵ 周密撰、吳企明点校『癸辛雜識』(中華書局、1988年1月)前集「假山」。
- ⁴⁶ 『癸辛雜識』前集「吳興園圃」：池南豎太湖三大石、各高數丈、秀潤奇峭、有名於時。其後賈師憲欲得之、募力夫數百人、以大木構大架、懸巨絙、縋城而出、載以連舫、涉溪絕江、致之越第、凡損數夫。湖州における太湖石の気風について、本論第1章で論じている。
- ⁴⁷ (明)計成著『園冶』(城市建設出版社、1957年3月)巻三、選石、「太湖石」。
- ⁴⁸ 葉夢得『避暑録話』(朱易安等主編『全宋筆記』第二編10、大象出版社、2006年1月)巻下。
- ⁴⁹ 前掲注 18『(紹定) 吳郡志』巻二十五、「人物」：元絳字厚之、居帶城橋。天聖五年進士、屢典大藩、以文章政譽名……自外召入翰林、未幾參知政事、事詳在國史、後以太子少保致仕、還吳中、與程公辟諸公為九老会。
- ⁵⁰ 『(紹定) 吳郡志』巻二十六、「人物」：富嚴、大中祥符四年進士、以刑部郎中守鄉郡……富氏本出處之青田、文忠公弼於嚴為叔父、嚴之祖始居吳、葬焉、遂為吳人。
- ⁵¹ 『(紹定) 吳郡志』巻二十五、「人物」：蔣堂、字希魯、本宜興人、徙於蘇。祥符五年進士、任侍禦史……累遷樞密直學士、歷知應天河中府洪杭益蘇州、後二十年再守蘇、遂謝事。以禮部侍郎致仕、家於靈芝坊。
- ⁵² 『(紹定) 吳郡志』巻二十六、「人物」：范師道(仲淹侄)字貫之、天聖九年進士。
- ⁵³ 『宋史』巻四百四十四、列伝第二百三。「朱長文、字伯原、蘇州吳人、年未冠舉進士乙科、以病足不肯試

- 吏，築室樂圃坊，著書閱古，吳人化其賢，長吏至莫不先造，請謀政所急，士大夫過者，以不到樂圃為恥。」
- ⁵⁴ (元)陸友仁『吳中舊事』(嚴一萍選輯『百部叢書集成』、藝文印書館、1968年。)
- ⁵⁵ 『宋史』卷四百三十二、列傳第一百九十一。
- ⁵⁶ 龔明之『中吳紀聞』(朱易安等主編『全宋筆記』第三編7、大象出版社、2008年1月)卷一、「陳君子」：公道德著於鄉，雖閭巷小兒亦知愛敬。
- ⁵⁷ 龔明之『中吳紀聞』卷二、「中隱堂三老」。
- ⁵⁸ 龔明之『中吳紀聞』卷二、「徐都官九老会」。
- ⁵⁹ 周揚波『宋代士紳結社研究』(中華書局、2008年10月)、木田知生「北宋時代の洛陽と士人達——開封との対立のなかで——」(『東洋史研究』38-1、1979年6月、pp. 51-85)が洛陽の文人士大夫の交遊を論述している。退職官僚の生活や園林で「洛陽耆英會」を開催するなどの内容を言及した。北宋洛陽園林が盛んになり、多くの退職官僚を集めて文学団体を形成させた。それは蘇州と共通点があると考えられる。
- ⁶⁰ 前掲注56『中吳紀聞』卷二、「朱樂圃先生」。
- ⁶¹ 前掲注4「北宋蘇州の士人家族交遊圏-以朱長文之交遊為核心的考察」、注34「朱長文家世、事歴考」。
- ⁶² 前掲注32『樂圃余稿』卷一。
- ⁶³ 前掲注56『中吳紀聞』卷三、「方子通，名方惟深，字子通，本莆田人，其父屯田公葬長洲縣，因家焉，最長於詩」。
- ⁶⁴ 前掲注53『宋史』「朱長文」
- ⁶⁵ 前掲注32『樂圃余稿』卷三。
- ⁶⁶ 前掲注18『(紹定)吳郡志』卷十四、「園亭」。
- ⁶⁷ 同上。
- ⁶⁸ 李心伝『建炎以來繫年要録』(文淵閣四庫全書本)卷一百二十一、紹興八年七月辛卯条「尚書戸部侍郎向子諱充徽猷閣直學士知平江府」による。
- ⁶⁹ 范成大『石湖詩集』(王雲五主編『叢書集成初編』、中華書局、1985年)卷二十九、卷三十三。
- ⁷⁰ 范成大『石湖詩集』卷二十、「與至先兄遊諸園看牡丹三日行徧」。
- ⁷¹ 范成大『石湖詩集』卷二十、「石湖芍藥盛開向北使歸過維揚時買根栽此因記舊事二首」。
- ⁷² 范成大『石湖詩集』卷二十。
- ⁷³ 前掲注38(同治)『蘇州府志』卷四十五、「第宅園林一」：乾道八年壬辰三月上巳，周益公以春官去國，與其兄必達過之，成大置酒園中，夜分留題壁間，云：吳臺越壘距盤門才十裏，而陸沓於荒煙野草者千七百年，紫微舍人始創別墅，登臨之勝，甲於東南……成大愧謝曰：公言重，何乃輕許與如此！益公曰：吾行四方，見園池多矣，如薌林、盤圃，尚乏此趣，非甲而何。
- ⁷⁴ 周必大『文忠集』(文淵閣四庫全書本)卷一七一、「乾道壬辰南歸録」。
- ⁷⁵ 范成大『騷鸞録』(王雲五主編『叢書集成初編』中華書局、1985年)。
- ⁷⁶ 周必大『文忠集』(文淵閣四庫全書本)卷六十一、「資政殿大學士贈銀青光祿大夫範公成大神道碑」。
- ⁷⁷ 第1章を参考。
- ⁷⁸ 前掲注69『石湖詩集』卷二十、「次韻同年楊使君回自毘陵同泛石湖舟中見贈」：臆說歸田樂，休歌行路難。石湖三萬頃，何處覓憂端。
- ⁷⁹ 胡昭曦「宋代蜀學的轉移與衰落」『宋代蜀學論集』、四川出版集團四川人民出版社、2004年6月。
- ⁸⁰ 前掲注4「北宋蘇州の士人家族交遊圏-以朱長文之交遊為核心的考察」。
- ⁸¹ 前掲注28「滄浪亭記」：予既廢而獲斯境，安於冲曠，不與衆驅，因之復能見乎内外失得之源，沃然有得，笑閱萬古，尚未能忘其所寓目，用是以為勝焉。
- ⁸² 蘇舜欽『蘇學士集』(四部叢刊本)卷第八。
- ⁸³ 蘇舜欽『蘇學士集』卷第四。
- ⁸⁴ 『宋史』卷四百四十五、列傳第二百四、文苑七「以外祖恩補蘇州吳江主簿、監舒州太湖茶場，坐上書論事，罷歸。宣和二年，進頌，賜上舍出身、除禮部郎，以病告老，不俟報而歸。建炎中，為太常少卿，知秀州。紹興初為秘書少監。紹興十四年卒」。
- ⁸⁵ 李欣、王兆鵬「程俱年譜」(上)『中国韻文学刊』第20卷第2期、2006年6月、pp. 97-106。
- ⁸⁶ 前掲注18『(紹定)吳郡志』卷第十四、園亭。
- ⁸⁷ 程俱『北山小集』(王雲五主編『四部叢刊續編』台湾商務印書館、1966年)卷三、「遷居城北蝸廬」。
- ⁸⁸ 程俱『北山小集』卷五。
- ⁸⁹ 前掲注85論文を参考。
- ⁹⁰ 程俱『北山小集』卷十一、卷三。
- ⁹¹ 程俱『北山小集』卷十五「賀方回詩集序」、卷五「九日塊坐無聊越州使君季野舍人見過敝廬會方回承議亦至因遊章公山林登覽甚適越州置酒暮夜乃歸作詩一首」。
- ⁹² 前掲注18『(紹定)吳郡志』卷第五十。

-
- ⁹³ 前掲注 56 『中興紀聞』卷一、「蔣密学」。
- ⁹⁴ 前掲注 18 『(紹定) 吳郡志』卷第十四、園亭。
- ⁹⁵ 前掲注 39、「園池」。
- ⁹⁶ 彭東煥『魏了翁年譜』(四川人民出版社、2003年3月)を参考。
- ⁹⁷ 前掲注 39、「園池」。
- ⁹⁸ (清)陸心源撰、徐旭、李建国点校『宋詩紀事補遺』山西古籍出版社、1997年7月。
- ⁹⁹ 金甲鉉「蒲江・靖州・蘇州における宋元鶴山書院の比較研究」(『大阪市立大学東洋史論叢』第18号、2017年12月、pp. 39-52)を参考。
- ¹⁰⁰ (元)虞集『道園学古録』(文淵閣四庫全書本)卷七「鶴山書院記」。
- ¹⁰¹ 「宋代蘇州私家園林表」の作成には『地方志』のほか、魏嘉瓚『蘇州歷代園林録』(北京燕山出版社、1992年3月)及び邵忠編『蘇州園墅勝跡録』(上海交通大学出版社、1992年4月)を参考した。

第3章 宋代紹興園林と士大夫の交遊

1. はじめに

本章では紹興の園林について考察を加える。

本章の研究対象となる紹興の私家園林は明中期以後に最盛期を迎えるが、宋代においてはそこまで繁栄していなかった。とはいえ、宋代は私家園林の重要な発展期であり、明代に最盛期を迎える基礎が固められた。この時期の紹興の私家園林の実態を明らかにすることは、後世への文化的伝承や園林の発展史を明確にすることにつながるであろう。

また、紹興は歴史文化の名城として知られており、宋代浙東地域の政治・経済・文化の中心地であった。このことは、私家園林の発展に有利な環境を提供したと思われる。紹興における園林の発展は春秋時代から始まり、六朝時代に盛んになり、明末になると最盛期を迎えた。

その発展は各々の時代背景と関わっている。春秋の范蠡が作成した一連の宮台苑囿は紹興の早期の皇家園林の雛形と見做されている。六朝時代に入ると、社会の動揺が士大夫の隠逸思想を促進させ、当時の江南の大都会であり、自然の山水風景に恵まれた紹興に、人々の眼が集まり、園林が数多く作られた。

例えば、王羲之の蘭亭においては、士大夫たちが曲水の宴を開催し、後世に至ってもしばしば模倣された。このような隠逸思想と山水風景とが融合し、それを継承したのが唐代園林である。李浩（1998）によれば、唐代の紹興の私家園林は15箇所あげられている。ちなみに、同時代の蘇州の私家園林は11箇所、杭州は8箇所、湖州は18箇所であった¹。それらの園林の構造は単純なものであり、園林主の多くも隠士であった。また唐代には、多くの詩人が浙東に遊歴のため訪れたことがあり、詩作を数多く残している。このような文化の交流が後の時代に大きな影響を与えることとなった。明末になると、紹興園林の数は蘇州と匹敵するようになり、それと同時に、祁彪佳の「寓園」のような名園が造られ、「越

中園亭記」のような紹興園林を記載する専門的著作も出現した。このような明代の紹興園林の繁栄と比べると、宋代はいささか遜色がみられる。しかし、南宋は紹興にとって重要な時代の一つであった。建炎四年（1130）、宋高宗が越州（＝紹興）に駐蹕したこともあり、越州は南宋において大都市となる。

この大都市で私家園林がどのように発展していたのか、まず先行研究を整理しておく。張斌（2011）は事例を挙げながら各時代の紹興園林の発展の特徴を分析している。即ち、先秦から春秋戦国時代は紹興園林の起源となる時期であり、越国の苑囿が紹興園林のはじまりと見做される。この時代の園林は皇家園林である。秦漢から魏晋南北朝に至ると、経済の発展と同時に紹興園林の造営が活発化する。魏晋南北朝の門閥士族が山水美景に惚れ込み、紹興の私家園林の発展を促進した。唐宋時代に紹興の私家園林がさらに発展し、私家園林が郊外から城内に発展する傾向が見える。さらに、寺院園林も多く現れた。そして、明代に造園活動が盛んになり、紹興の私家園林が最盛期を迎え、紹興は江南の園林数の最も多い都市となった。この時期に造園技術は成熟していった。しかし、清代に入ると紹興の経済・政治・文化や旅行などの面からいけば、明代より低下する。園林の発展、造園技術も前代と比べものにならない²。また、呉立威（2003）は園芸という視点から検討し、上記の研究と同じく紹興園林の発展過程を分析した上で、自然風景を重視し、花木景観が豊富で、素朴さを有する特徴を論じている。また、紹興園林に紹興の歴史・文化・民俗の反映を見出すことができると主張している³。邱志榮（2008）は紹興園林の発展史を究明した上で、山水園林が紹興園林の主なパターンであると指摘した。そして、紹興の川・湖・運河などの水資源を紹介して、紹興園林と水との深い関わりを論じている⁴。

以上の先行研究はマクロな視点から紹興の園林の発展史及び特徴を分析している。また、宋代は紹興園林が盛んになる時期と主張した。以上のように、宋代は私家園林の重要な発展期であり、この時期の園林を中心とする研究が必要と思われる。宋代の私家園林の実態を考察しなければ、次の明代に盛んになる理由が明らかにされない。宋代紹興の私家園林の特徴について山水風景に頼ることが指摘されているが、園林主の身分、分布の様子など、

さらに分析の余地がある。先行研究では園林に関するデータの整理が不十分であるため、本章では宋代紹興の私家園林を改めて整理した上、その実態を解明していくこととする。

2. 宋代紹興の概況

(1) 政治経済の背景

a 南宋浙東の中心地

駐蹕彌年，定中興之業，羣盜削平，強虜退遁。於是用唐幸梁州故事，陞州為府，冠以紀元。大駕既西幸，而府遂為股肱近藩，稱東諸侯之首。地望蓋視長安之陝洛，汴都之陳許，所命牧守，皆領浙東安撫使⁵。

(高宗の) 駐蹕から一年を経て、南宋政府は国家を復興し、群盗を平定した。そこでかつて唐徳宗が梁州に逃げた後、興元元年に改元し、梁州を興元府に変更する詔を下した事例を踏まえて、越州を紹興府に昇格させた。高宗はその後杭州へ移り、紹興府はそこで股肱の重鎮となって、浙東諸侯の首と称された。長安の陝州・洛陽や、開封の陳州・許州に準じ、知州はみな浙東安撫使を兼任していた。このように、紹興府の政治的地位は他の州府より高く、また浙東地域の軍事上の重要拠点でもあった。

b 皇陵の所在地

南宋の皇陵は紹興府東南三十五里の稽北丘陵の宝山に位置する。宋哲宗の昭慈聖獻皇后孟氏が紹興で亡くなり、そこで会稽に陵墓の場所を定めた。その後、南宋の六名の皇帝が相次いでそこに埋葬された。即ち、高宗・孝宗・光宗・寧宗・理宗・度宗であり、現在は「宋六陵」という。

(2) 自然文化の背景

a 景観と交通

紹興の山水は昔から有名であり、王羲之は「山陰の道を歩けば、まるで鏡の中を泳いでいるようである」と述べている⁶。また、顧愷之が人に会稽山を紹介する時に、「美しい山並みが競うようにそびえたち、谷川が先を争って奔流し、草木はその上を覆い、まるで雲や霞がたなびいているようである」と述べた⁷。これらの史料より紹興の山水の優美な様子が窺える。

また、紹興の河川には、曹娥江・浦陽江・錢塘江などがある。その他、浙東運河も重要な水路である。蕭山から山陰までの運河は東晋時代に修造され、上虞地区の運河は唐代後期に、会稽地区の運河は宋代に完成した。物資を運送するほか、海外貿易にあたって重要な水路となった。特に宋代になると、明州（のちの寧波）を經由して貿易を行う人々は浙東運河を利用して内陸と連絡を取っており、紹興は交通の要衝となった。

b 仏教信仰

紹興の仏教信仰は後漢に遡ることができる。南北朝時代には、数多くの寺院が造営された。その影響を受けて、後の時代にも多くの寺院が造られた。それに伴い、大量の石が採掘され、岩石が削りだされた部分は特色のある自然景観となった。例えば、著名な東湖石壁、柯岩雲骨、羊山怪石等である。

c 印刷業の発展

紹興は宋代を代表する出版文化が発達した地域である。特に南宋になると、官刻が発達した。北宋の官刻は国子監において主として行われたが、南遷後、臨安に国子監を改めて建てると共に、中央、地方の機関も積極的に書籍の印刷に参加した。当時、紹興に駐屯した両浙東路茶塩司・転運使司・提刑司などの機関、そして紹興府、府学なども多くの書籍を印刷しており、主要な刻書地域の一つとなった⁸。

また、刻書が盛んであったことに伴って、紹興には蔵書家が多かった。

越藏書有三家，曰左丞陸氏、尚書石氏、進士諸葛氏。中興，祕府始建，嘗於陸氏就傳其書。而諸葛氏在紹興初頗有獻焉。可以知其所蓄之富矣⁹。

紹興十三年，始建秘書省，於臨安天井巷之東，仍詔求遺書於天下，首命紹興府錄朝請大夫直秘閣陸宰家所藏書來上，凡萬三千卷有奇¹⁰。

先是，有布衣諸葛行仁，亦會稽人，進所藏書八千五百四十六卷¹¹。

（石氏）築堂名博古，藏書二萬卷¹²。

紹興には左丞陸氏（陸佃）、尚書石氏（石邦哲）、進士諸葛氏（諸葛行仁）の三大蔵書家がいた。紹興十三年（1143）、秘書省が天下の遺書を求める詔を下し、朝請大夫直秘閣陸宰（陸佃の息子）の蔵書を書き写して呈上することを命じたが、蔵書は一万三千卷余もあった。諸葛氏も紹興初に蔵書八千五百四十六卷を献上し、石氏の蔵書も二万卷に至り、「博古堂」という蔵書楼を造った。

d 橋梁文化

紹興は内外を水路がめぐり、橋の街とも呼ばれている。『嘉泰会稽志』に記載された宋代の橋の数は201、『万曆紹興府志』に記録された橋は382になり、『乾隆紹興府志』に載せられた橋は551にのぼった。時代を下るとともに橋の数が増加していることが分かる。

以上、宋代紹興の概況を論じた。以上を踏まえて次に、宋代紹興の私家園林の特徴を述べることとする。

3. 私家園林の概況

（1）本章の研究対象について

まず、本章で用いる園林の範囲を明らかにする。

陳從周（2007）は「中国の園林は建物、山水、花木などの要素で組み合わせた総合的芸術品である」と述べている¹³。園林の定義について、筆者は序章で論じたことがある¹⁴。つ

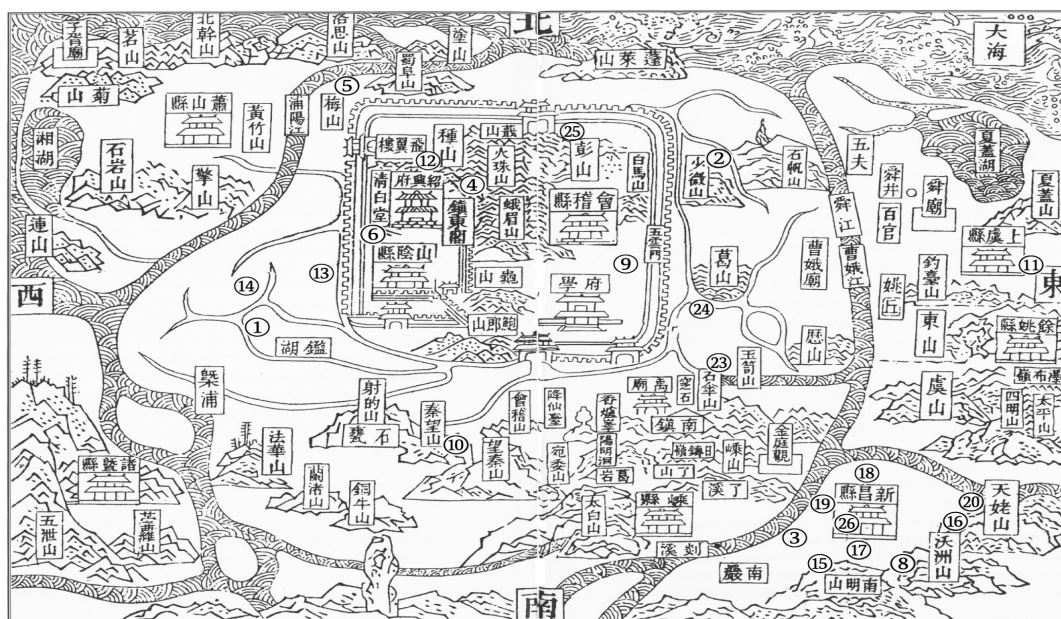
まり、初期の先行研究において園林の概念が述べられているが、ほぼ如上のような定義を行っていた。ただ、研究を通観していくと、園林概念の範囲は次第に広がっている。また、李浩（1998）は更に具体的なやり方で自分の研究対象を定めた。氏は唐代私家園林の名称を「園林、林園、別業、別墅、別館、別廬、山林、山莊、山池、山亭、山齋、山第、山邸、山園、山居、幽居、閑居、溪居、隱居、林亭、林館、園亭、水亭、溪亭、池亭、水閣、亭子、草堂、茅茨、茅堂」と列挙した¹⁵。また、李氏が園林名称の多様性を指摘している。その考えに踏まえて、筆者は一つの建物が園林になるか否かを判断する時、名称は参考になるが、それだけにこだわる必要はないと考える。その建物の内部構造、機能などの要素も、私家園林と同様に考察しなければならないと考えるからである。

以上を踏まえて、紹興園林について【表3：宋代紹興私家園林表】をまとめた（以下、【表3】と略記）。【表3】には、「石鼓書堂」「平波書堂」「平山書堂」なども収録した。それらの「書堂」は名前だけをみれば、必ずしも園林に組み入れるべきものではないかもしれないが、それぞれの史料を確認すると、書堂には亭・池・堂などの建物が配置される。また竹・柏・蓮などの花木もあり、私家園林の要素が揃っていると考えられる。そのため、これらの「書堂」も本章の研究対象の範囲とした。

（2）園林の分布とその特徴

宋代紹興の私家園林は主に会稽県、山陰県そして新昌県に分布する。【表3】によれば、会稽県が6、山陰県が7、新昌県が9、上虞県が1である。残りの三つは場所が不明である。また、紹興の私家園林分布図を見ると、城外の園林が多数を占めている。府城から離れた新昌県に私家園林が多く造られた。その理由を考察すれば、おそらく二点あると考えられる。① 有名人の足跡が残されるため、後世の人々の関心を集めた。例えば、王羲之が「剡県の鼓山に練丹した」¹⁶、謝靈運が「暮れ方に剡中の宿に泊まり、明朝には天姥の峰に登る」¹⁷、また李白は「夢遊天姥吟留別」という詩に「謝公が身をよせた宿は今もなお在り、緑に澄んだ水がゆらめいて、猿の声が聞こえてくる。謝公の木履をはき、青雲の梯子のような、

険しい道を登ってゆく」というような記録がある¹⁸。他に、孟浩然や杜甫などの詩人も遊歴したことがある。また、新昌には晋の仏教高僧の集まる修行地がある。「沃洲山は県の東から32里のところの位置する。晋の白道猷、法深、支遁は有名な僧侶であり、名門である戴氏、許氏、王氏、謝氏の18人と交遊し、風雅な境地を極めた」¹⁹とあり、これらの名僧によって新昌県の南明山（石城山）・東岵山・沃洲山は仏学の研学の中心地となった。こうした記録が残されているように、後世の人が有名人の足跡を尋ねるため、新昌県に赴いたと思われる。



【図 8：宋代紹興私家園林分布図】（宋・王十朋『会稽三賦』に基づき加工）

② 新昌県は教育事業が繁栄していた。【表 3】を参考すれば、名儒や教育家たちが自分の読書所を造る事例が多い。例えば、石鼓書堂、平山書堂などはすべて儒者の私家園林であると考えられる。詳しくはのちに述べる。

次に、紹興の私家園林は山や鏡湖のような山水風景の優美な場所に位置し、自然を追求する特徴がある。その理由として三点が挙げられる。①紹興の自然風景が優れており、借景だけで園林の景色が良くなるため、多くの装飾は必要ない。②六朝からの隠逸思想からの影響がある。③『嘉泰会稽志』巻1、「風俗」には以下のようにある。

故今之風俗，好學篤志，尊師擇友，弦誦之聲，比屋相聞，不以殖貨貨習奢靡相高。士大夫之家，占產皆其薄，尤務儉約，縮衣節食，以足伏臘，輸賦以時，不擾官府²⁰。

宋代紹興の風俗は、学を好み、師を尊敬し、友を慎重に選ぶ。読書の声が各々の部屋から聞こえる。商業や贅沢を好まない。士大夫の家は所有する田産が少なく、節約をして切り詰めて生活を支える。期日通りに税を納付し、官府を妨げない。このような風俗が私家園林の営造に影響を与えたと思われる。また、士大夫の保有する資産が少ないため、郊外のコストの低い場所を選んで園林を造った可能性もある。

さらに、すでに述べた紹興の蔵書家による私家園林を特徴としてあげることができる。

【表3】からみれば、陸氏と石氏は私家園林を所有していたことが分かる。范鳳書氏の研究によると、陸氏の蔵書は陸琮から陸佃・陸眞・陸宰・陸游・陸子適まで、百年余り積み重なり、陸游に至って集大成し最盛期を迎えた²¹。陸游は三山別業に「書巢」という蔵書室を設置した。新昌石氏も蔵書の名家である。石待旦は新昌県石溪の山水の間に、石溪義塾を創建し、新昌県の教育事業を引き受けた。また、彼は蔵書のため「万卷堂」を建て²²、同族の石邦哲も「博古堂」を造った。

宋代紹興の私家園林のもう一つの重要な特徴として、陸游と唐氏の愛情物語で知られる園林がある。それが沈園である。沈園は宋代において既に名園となり、人目を引いて多くの人が遊覧に訪れた。後に何度も園林主が変わったが、陸游の愛情物語が語り継がれていた。現在、一連の修復を経て、沈園は南宋私家園林の雰囲気を取り戻している。

4. 園林生活

(1) 紹興城内の名園——沈園

【表3】によれば城内に属する私家園林は5ある。上述の如き、南宋紹興の私家園林の中で、沈園が最も著名である。沈園は紹興府城内、禹跡寺の南に位置する。陸游と唐氏の物語に関して三つの史料が挙げられる。陳鵠『耆旧続聞』、劉克莊『後村詩話』、周密『齊

東野語』である²³。陸游と先妻は仲がとても良かったが、陸母の意に適わなかったので離婚して、先妻は別の人に嫁いだ。数年後、沈園にて二人が再会した時、陸游が「釵頭鳳」を作ったというのが物語の粗筋である。鄒志方（2008）によれば、陸游の旧邸はその祖父である陸佃の邸宅で、斜橋中正坊に位置しており、沈園より五里離れている。陸游は紹興三年（1133）に東陽から山陰に帰り、その後、雲門や城南小隱山の陸宰の別業に休暇に行ったのを除き、旧第に住んでいた²⁴。

南宋の沈園の景色は詩詞の中に数多く見出すことができる。例えば、南宋の詩人趙蕃には「黄菊花残白菊花」句があり²⁵、陸游には「桃花落、閑池閣」句があり²⁶、また「楓葉初丹榭葉黃」、「香穿客袖梅花在、緑蘸寺橋春水生」、「只見梅花不見人」の句がある²⁷。沈園には建物・池・橋があるほか、梅・菊・桃・楓・榭などの花木も揃えていた。【表3】に掲げた、会稽東南にある「昌園」、山陰県昌安門内の「朱通直荘」及び城東「五雲梅舎」も花卉によって有名になった園林である。昌園は「有梅万余株」、朱通直荘は「佳菊数十種」、五雲梅舎は「種梅百本」とある。梅と菊が紹興で流行っていた花であることが推測できる。陸游の愛情物語には、「遣遺黄封酒果饌通慙慙」、「遣致酒肴」といった、酒と食べ物を贈る記載がある。つまり、沈園は観覧客に休憩場所を提供したことが分かる。陸游が壁に詞を題するようなことは、宋代によく見られる。かつて筆者は湖州と蘇州の園林を検討した際、葉夢得と范成大の私家園林に友人による題名、題字のような記録があったことを指摘した²⁸。陸游は友人と共に沈園を遊覧した可能性がある。

史料は少ないが、沈園には亭台楼閣、小橋流水の景勝があり、花が咲き乱れていた。紹興の名園として、その景勝は蘇州などの園林と比べて、特別な所ではないが、陸游の愛情物語が現代まで伝わっている。沈園が有名になったのはその景色より、魅力的な物語が背後にあったからである。

この沈園以外、紹興城内の私家園林に関する史料は少ないため、城内における私家園林がどのように発展していたのか、どのような特徴があるのかについて詳細は不明である。しかし、

南渡初、南班宗子、寓居會稽為近屬、士家最盛。園亭甲於浙東、一時坐客皆騷人墨客²⁹。

とあるように、南宋のはじめ、南班宗子（後述）の中に、（皇帝の）血縁関係の近い人が会稽に身を寄せて、士大夫が数多く会稽に暮らしていた。紹興は浙東地域のなかでも最も園亭が盛んになった都市となり、文人墨客が皆集まってきた。南班宗子とは、南班官職を授けられる宗室子のことである。「南班官」は環衛官の官職が付く宗室の総称であり、「南班」はこれらの宗室子が朝会に際して殿の南側に位置することを指す。南班官は実際の権力を握らないのであるが、朝会に出席するというような宗室としての基本的役割を履行しなければならない。南班官には等級が14あり、昇進するために考課を受けないといけない。しかし、たとえ最低層の等級の「太子右内率府副率」であっても、収入は中級官僚に匹敵する。昇進後の優遇を受けたことは言うまでもない³⁰。つまり、上記の史料の「園亭甲於浙東」は確かなことだと考えられる。南班宗子の財力は園林の营造を十分賄えた。南宋において紹興の地位は高く、皇陵の所在地でもあったこともあり、皇族の園林は多かったはずであるが、現時点で明確な史料はまだ見いだせていない。ただ、先の「沈園」記事のうち、陳鵠『耆旧続聞』には「夫婦之情，實不忍離。後適南班士名某，家有園館之勝。務觀一日至園中，去婦聞之，遣遺黃封酒果饌通慰懃。」と記されており、陸游の前妻が再婚した相手が「南班士名某」であり、その家には「園館之勝」があったと記されており、南班宗室の園林保有を示唆的に述べてくれる。

（2）会稽、山陰の私家園林

城内に比べて、城外の私家園林に関する記載は相対的に豊富である。【表3】によればこの二県に属する私家園林は13ある。幾つかの事例を挙げて分析する。

a 齊氏家園

齊氏家園、在城東少微山，山甚小，而近湖。齊祖之分司東歸，遂家焉。引流爲沼，藝花爲圃。山之上下，有芳華亭、脩竹巖、真珠泉、石屋、嘉遯亭、樵風亭、禹穴閣、應

星亭、東山亭、釣閣。其自為家山十詠，陶寫景物，語尤閒遠。今廢為神祠，無復舊觀，惟釣閣故基猶略可識，盡湖山登覽之勝³¹。

齊氏家園は城東少微山にあり、山は小さいが、湖に近い。齊唐（字祖之、山陰の人である。天聖八年（1030）に進士に合格し、知杭州富陽縣、祕書丞太常博士となり、職方員外郎をもって致仕した。熙寧七年（1074）に亡くなり、享年 87 歳³²。）が致仕した後に営造した隠居場所であった。流水を引いて沼にし、花を植えて圃にした。山の上下には亭台樓閣が備えられている。齊唐は自ら園林の景勝をめぐって詩歌「家山十詠」を作った。景物に心持ちを託し、言葉も軽やかであった。今は廃されて神祠になり、元の姿が見えないが、ただ釣閣の旧址だけが湖山の絶景を望むことができる、と記されるように、齊氏家園は湖山の景色が見える静かな場所であったと考えられる。

b 適南亭

適南亭は梅山の山頂にある。陸佃は次のように「適南亭記」を書いている。

會稽爲越之絶，而山川之秀，甲于東南，自晉以來，高曠宏放之士多在于此。至唐，餘杭始盛而與越争勝，見元白之稱。然杭之習俗華媚，善占形勝，而丹樓翠閣，輝映湖山，如畫工小屏，細巧易好，故四方之賓客過而覽者，往往後越，夫越之美，豈至此而窮哉？意者，江山之勝雖在，而昔賢往矣。距今千歲，幽深寂寞，殆有鬱而不發者也。熙寧十年，給事中程公出守是邦，公，吏師也，所至輒治。故其下車未幾，弗出庭戶之間，而政成訟清，州以無事。乃與賓客沿鑑湖，上蔽山，以尋將軍秘監之跡。登望稍倦，未愜公意，于是有以梅山勝告公者。蓋其地，昔子眞之所居也。今其少西有里，曰梅市，其事應史。公聞，往焉。初屆佛刹，橫見湖山一面之秀，以爲未造佳境也，因至其上望之。是日也，天和景晴，竹莖尚疎，禾葉微合，峯巒如削，間見層出。公曰：此山之佳處也。已而北顧，見其煙海杳冥，風帆隱映，有魁偉絶特之觀，而高情爽氣，適相值也。夕陽在下，不得已而後去。其山之僧用和者，契公之意，因高構宇，名之曰適南。蓋取莊周大鵬圖南之義。暇日，以衆飲而賞焉。水轉挹轉清，山轉望轉碧。而俯仰之間，海氣浮樓臺，野氣墮宮闕。雲霞無定，其彩五色，少頃百變，殆詞人畫史不能寫也。于是，闔

州以爲美觀，而春時，無貴賤皆往。又其風俗潔雅，嬉遊皆乘畫舫，平湖清淺，晴天浮動。及登是亭，四眺無路，風輕日永，若在蓬萊之上，可謂竒矣。然則所謂餘杭者，未必如也³³。

適南亭は僧侶の用和が知州の程師孟（1015－1092）のために造った亭である。程公が城外において休憩や宴会を行う場所と言える。春は庶人に開放され、民衆と共に楽しむこともできる。適南亭は程公の余暇時間を充実させただけでなく、地方統治がうまくいっていることを喧伝したと考えられる。また、陸佃が長文で紹興の美しさを描き、杭州の景色と対比した。会稽は越州の絶景であり、山水の優美は東南随一である。それに対して、杭州の習俗は華麗で、風景地を占め、色鮮やかな楼閣が湖山と互いに照り映えて、まるで屏風の絵画のように精巧である。梅山の風景を見てみれば、竹林がまばらで、葉が少し重なり合い、山並みが削られたようで、その間に浮かび上がって見える。北を眺めると、海上に船がぼんやり見える。壮大な景色である。

このような壮麗な自然景色は紹興の特徴と言えよう。それも紹興の私家園林が城外に営造された重要な理由であろう。そして、晋以来、気概に満ちた人物は多くいると主張し、王羲之の足跡を尋ねようとしたという記載から、紹興の人文歴史が長く、人々は先賢の足跡を追い求める様子がわかる。この雰囲気は私家園林の発展に促進し、影響を与えたと考えられる。

c 小隱山園

小隱山園在郡城西南鏡湖中，四面皆水，舊名侯山，晉孔愉嘗居焉。皇祐中，太守楊紘始與賓從往遊，遊而愜焉，問其主王氏，山何名？對曰：有之，非佳名也。亭有名否？則謝不敢。迺使以其圖來悉與之名，山曰小隱之山，堂曰小隱之堂，池曰瑟瑟之池，命其亭曰勝奕亭、曰志歸亭、曰湖光亭、曰翠麓亭，又有探幽徑、擷芳徑，捫蘿磴，百花頂，山之外有鑑中亭、倒影亭，皆楊公所自命名。而通判軍州事錢公輔又爲刻石記之³⁴。

小隱山園は郡城南西の鏡湖中にあり、四面が水に臨み、元の名前が侯山である。晋の孔愉（268－342 東晋名臣）が嘗てここに居住していた。皇祐中（1049－1054）、知州の楊紘

(生卒不詳)が賓客と遊覧に行くと、気持ちがよく、園林図を参考して、園林及び中の建築、景勝を命名した。その後、山は小隠山とよぶようになった。そして通判軍州事の銭公輔(1021-1072)がその事を改めて石に刻んで記した。

鏡湖は有名な風景地として、多くの園林主の目を引いた。知州の楊紘が同僚及び賓客と共に小隠山園を訪ねて来たことから、小隠山園が当時の有名な私家園林であることが分かる。そして、その門を望むと、あたかも樓閣が雲や霧に浮かぶようである。その堂に入り、その亭に登ると、周囲は静かで体がこの世から離れたようである。世俗を脱した所に、緑豊かな山と谷が周りを取り囲む。珍しい花木が目の前に現れると銭公輔が記載した³⁵。そこから小隠山園が備える隠逸の雰囲気を読み取れる。また、地方官が景色の良い私家園林へ遊覧に行くという交遊する姿も確認できた。前項の適南亭と合わせて見れば、地方官が暇な時、同僚や地方士大夫とよく日帰り旅行をしたと思われる。

後且百年浸廢弗理。少師陸公幸嘗得之，以為別墅，作賦歸堂、六友堂、遐觀堂、秀發軒、放龜臺、蠟屐亭、明秀亭、拄頰亭、撫松亭，會公改築子城之東隅，今惟賦歸堂、蠟屐亭存焉，皆少師所扁也³⁶。

上記の史料のように、百年ほど小隠山園は荒廃したままであった。その時少師陸宰(1088-1148)が園林を手に入れて、別墅とした。上記の史料から園内の建物は確認できるが、園林生活に関する史料は少なく、窺うことができなかった。しかし、陸宰の息子である陸游の園林生活については、多少確認することができる。

d 三山別業

陸游(1125-1210)の住居については、鄒志方(2008)のほか包偉民(2020)が陸游の浙東郷村における生活を詳細に論じている³⁷。そこでは、当時の郷村社会の生活場면을復元すると同時に、陸游が郷民へ知識を伝播し、代筆などの文化活動を行ったことに言及している。陸游には紹興に複数の住所があるが、そのうち生活する時間が一番長いのは三山別業である。

三山別業についての研究成果は既に出されている³⁸。三山別業は山陰県から西九里、鏡湖北岸に位置する。乾道元年（1165）に造営を開始し、乾道二年（1166）から居住していた。鄒志方（2008）によれば、乾道二年（1166）から陸游が亡くなる嘉定三年（1210）まで、彼は断続的に三山別業で30年ほど生活していた。鄒志方氏は陸游が苦勞を厭わず経営した山陰の三山別業が、規模的には紹興においては優れた存在であったと指摘した。三山別業の基本的構造は次のようである。南端は「南堂」であり、四周に竹が植えられた。陸游はよく南堂で休憩していた。堂の後ろに「書巢」があり、居室兼蔵書室である。陸游「居室記」に以下のような記載がある。

陸子治室於所居堂之北，其南北二十有八尺，東西十有七尺。東、西、北皆為窓，窓皆設簾障，視晦明寒燠，為舒卷啓閉之節。南為大門，西南為小門，冬則析堂與室為二，而通其小門以為奧室，夏則合為一室，關大門以受涼風³⁹。

堂の北側に室を造り、東・西・北側に窓がある。寒暖に応じて開閉する。明るい部屋だと思われる。南に大門があり、西南に小門がある。冬に（大門を閉めて）堂と室を二つの部分に分けて、小門を奥室として使う。夏になると、合わせて一室にする。大門を開いて涼風を通過させる。このように、部屋の使いやすさがわかる。また、「書巢記」に居室の内部空間と陸游の日常生活を記載している。

吾室之内，或栖于櫺，或陳于前，或枕藉于床，俯仰四顧，無非書者。吾飲食起居，疾痛呻吟，悲憂憤歎，未嘗不與書俱。賓客不至，妻子不覲，而風雨雷雹之變，有不知也⁴⁰。本は本箱に保存されたり、目前に陳列されたり、或いは乱雑にベッドに置かれている。四周を見渡せば、本しか見えない。飲食などの日常生活を過ごす時、病気で呻く時、機嫌悪く憤慨する時、本と一緒にいない時はない。賓客が訪れず、妻と子供と会えず、悪天候であっても関係ない。このような陸游の晩年のライフスタイルの一面を確認できる。このような生活は、有名な蔵書をもつ陸氏の家柄に相応しい。

また、蔵書室に言及する詩作もある。例えば「茅屋三四間，充棟藏經史。平生喜藏書，拱壁未為寶⁴¹」は蔵書室の三、四部屋の規模を説明している。堂の東に避暑用の小室がある。堂の後ろに庭があり、庭の後ろは正堂の「漁隱堂」である。左右に室あり、子孫の居室で

ある。正室に暖閣が設置される。そのほか、これらの家屋から離れる「昨非軒」と「老学庵」がある。老学庵の周りに竹を植え、窓前に梅があり、庵の北側に築山があり、山の下に水がある。「竹間僅有屋三楹，雖號吾廬實客亭。自註：小庵才兩間⁴²」つまり、三軒の部屋のうち庵は二軒を占め、残りの一軒は「亀堂」である。亀堂も陸游の晩年の起居地である。そのほか、東南西北に四つの園林がある。西園は薬草園で、北園は菜園、東園は花園で、中に「水亭」があつて剡曲の傍にある⁴³。南園には胡麻を植え、「下鷗亭」があり、鏡湖に臨む。西山の北側の麓に「茅亭」がある。園中には小溪・池・泉・築山・盆栽などが設置されていた⁴⁴。

三山別業は機能の多い私家園林である。自然環境の良さと父親への思いと関係するかもしれないが、小隠山園と同じく鏡湖の周辺に位置していた。しかし、小隠山園とは異なつて三山別業は田園のような感を抱く。菜園や薬草園などは経済的実用性もあると考えられる。それは陸游の経済的状況と関係している。陸游の官途には挫折が多かつた。『宋史』によれば、

陸游字務観，越州山陰人。年十二能詩文，蔭補登仕郎。鎖廳薦送第一，秦檜孫埴適居其次，檜怒，至罪主司。明年，試禮部，主司復置游前列，檜顯黜之，由是為所嫉⁴⁵。

とあり、陸游の才能が秦檜の家族の利益に影響したため、秦檜に排斥され、科挙試験が合格できなかった。しかし、この記載について、「主司」は秦檜の一味であり、陸游の成績を上位に置く可能性はないと慶振軒氏が主張している⁴⁶。陸游の科挙試験の失敗は秦檜と直接に関連することがないように考えられるが、彼の文集には、よく秦檜を言及している。

李莊簡公泰發，奉祠還里，居于新河。先君築小亭曰千巖亭，盡見南山，公來必終日。嘗賦詩曰：家山好處尋難遍，日日當門只卧龍。欲盡南山巖壑勝，須來亭上少從容。每言及時事，往往憤切興歎，謂秦相曰咸陽（中略）泰發談笑慷慨一如平日，問其得罪之由，曰不足問，但咸陽終誤國家耳⁴⁷。

李莊簡（李光 1078-1159）は陸宰を訪れて、千岩亭で終日時事を討論することがよくあり、秦檜が遅かれ早かれ国を危険にさらすであろうと秦檜を批判した。当時の人は秦檜を「咸

陽」と呼び、彼の金国に媚び諂うことを風刺した。陸游の父親である陸宰は愛国思想があり、主戦派の人とよく交遊していた。陸游はこのような雰囲気の中で育てられた。

父親及びその知人の影響を受けて、官途不順であっても陸游は金と戦う主張を終生変えることはなかった。鄒志方（2008）が陸游の三山別業における生活を次のようにまとめた。即ち、詩書に理想を託し、隣人と交遊し、子孫を教育し、後輩の詩人を育成し、飲酒して琴を弾き、医薬を施し、そして道学に専心した。陸游は芸術・学術と生活をうまく融合させ、田園のような私家園林を創り上げたのである。

以上の事例を見た上でまとめれば、山陰・会稽周辺の私家園林は素朴であり、自然風景を利用し、園林建築を自然に融合させることが分かる。造園思想は六朝からの影響が大きい。三山別業は自分なりの特徴があり、陸游が詩人として、菓草園や菜園のような農園、築山、盆栽のような芸術品を違和感なく園林空間に配置するなど、南宋紹興において特別な存在であったと思われる。

（3）新昌の私家園林

前文で少し言及したが、新昌県は教育事業と蔵書文化が発達した。それについて山口智哉氏による優れた研究成果が出されている⁴⁸。新昌県において影響力が大きいエリートとして石氏と陳氏が挙げられる。石待旦（985-1042、字秀平、号石城先生）は咸平年間（998-1003）に石溪義塾を創建し、万卷堂という蔵書楼を設置した。また、程顥（1032-1085）を迎えて教鞭を取らせたこともある。石氏一族は両宋の間に、状元3人、榜眼2人、進士42人、官僚になった人は120人余という数多くの人材を輩出した。一方、陳氏義塾は南宋中期に陳祖らによって創立された。陳祖は郷里の若者を教育するために、名儒であり丞相でもある王燾（1199-1275）などの人を迎えて講学活動を行った。

南宋中期に至ると、紹興府の科挙合格者が多くなった。紹興府が管轄した8県のうち、蕭山と余姚を除き、残りの6県の及第者は合計618人、内訳は北宋185人で、南宋433人

であった。新昌県の及第者が最も多く、123人であり、その次は会稽と山陰県、合計220人である。

その上、宋代では各学派が相次いで盛んになり、紹興もその影響を受けて、著名な学者が出現した。例えば、齊唐（997-1074）、新学学者陸佃（1042-1102）、朱、陸両方の学術に関心を寄せた石整（1128-1182）、事功之学に傾く黄度（1138-1213）等がいる⁴⁹。

【表3】によれば、新昌県には「石氏山齋」、石亜之「石鼓書堂」、王燾「王家園」、黄度「愛山亭」、黄庭「黄氏山堂」、黄庚「平波書堂」、章一経「平山書堂」、石茂誠「涉趣園」、陳雷「水竹所」の9つの私家園林がある。園林主の多くは教育事業に関係する。

a 石氏山齋

石氏山齋の主人について確たる記録はないが、年代的に見れば、石待旦である可能性が高い。晏殊（991-1055）は嘗て「留題越州石氏山齋」を書いた。

書仙十閣壯儒宮，靈越山川實勢雄。岫柏亞香侵幾席，巖花回影入簾櫳。

千秋碧鎖東南竹，一水清含旦暮風。文酒雅宜頻讌集，謝家蘭玉有新叢⁵⁰。

「儒宮」は石溪義塾を指すと思われる。晏殊が石氏を南朝の謝氏になぞらえ、山の上に柏の香りが部屋に運ばれてきて、岩の上の花がカーテンに映したような風景であると紹介した上、竹・清水・蘭の間で宴会を開き、飲酒作詩の様子を描いている。石氏山齋は義塾にとどまらず、雅集をよく行った私家園林と思われる。

b 石鼓書堂

石鼓書堂は県西の石鼓山の南に位置する。太常博士石亜之の読書所である。嘗て異人に出会い、丹薬をもらった。食べずに、池に投げいれたら、蓮が咲いて魚が飛び跳ねたという道教的な色合いの強い伝説が残される⁵¹。景祐三年（1036）、朝散大夫章驤が「石鼓主人記」に以下のように記載した。

石鼓之下有井焉，井曰石井，千仞碧泉而瑞蓮飄香；有池焉，池曰硯池，半畝方塘而飛魚跳躍。左右前後，佳山秀水之盤旋，中建一堂，以為棲息藏修之所者，石公也。汲石鼓之泉以為飲，樵石鼓之木以為炊，蠶石鼓之桑柘以為衣，群石鼓之麋鹿以為友⁵²。

石鼓書堂に蓮の香りが溢れ、硯池という小池に魚が飛び跳ねる。一つの堂が山水の真ん中に建てられ、この堂を休憩しながら勉強する場所として利用した。石垂之が読書のほか、農業をしたり、蚕を飼ったり、鹿の一種であるシフゾウを飼育していた。

書堂という名前を付けたが、荘園のような存在であった。石垂之の園林生活から、隠居した士大夫たちの日常生活の一面を確認できた。

c 王家園

王家園，在縣南長潭之上，宋丞相王燾所居。中有沂春亭、蒼雪觀、答春堂、閑遠樓、鷗夷舟、康干石林。景物絶勝⁵³。

王燾字仲潜，一字伯晦，紹興新昌人。登嘉定十三年進士第，任左丞相兼枢密使，進平章軍国重事⁵⁴。

王燾（1199-1275）は宋寧宗・理宗・度宗及び恭帝時期の重臣であり、儒者としても有名である。それに、王羲之の後裔でもある。王家園は新昌県でも相当に贅沢な私家園林である。県南の長潭に位置して、中に、亭台楼閣などの建物のほか、「康干石林」という特別な景勝がある。「康干石」は拔野古（匈奴の後裔である遊牧民族の鉄勒の部族の一つ）の東北から千里余り離れる康干河に産出される樹木の化石である。松を康干河に投げ入れたら、2年を経て木が石になり、色が青く、化石になった後、松木の紋様が付くという⁵⁵。王燾はこのような松石を愛し、収集して園林に置いて、その場所を康干石林と呼んだ。また、王燾は先祖を継承するため、王家園に曲水の宴の景勝を復元した。「今廢弛之餘，尚有緩山及流觴曲水，遺跡宛然⁵⁶」とあるように、園林が荒廢になった後、曲水の宴の遺跡がまだ残っていた。

紹興の私家園林の多くが山水風景に頼った素朴な特徴をもつのと異なり、彼の私家園林は人工的な設計（康干石林・流觴曲水など）を重視することがわかる。そこから王氏の豊

富な財力や文人趣味が見えると同時に、南宋の紹興の私家園林が贅沢になり、造園技術が発展する傾向があると言えよう。すでに南宋朝廷の混乱していた時期であったから、王氏の住居の華美な様子に対して後世の人々から批判も受けた。

d 平山書堂

平山書堂，在縣西獨秀山之麓，宋儒章一經讀書之所，對石鼓山。今其子孫蕃衍，有屏山堂、耕讀園、橘軒、遯莊、竹外溪山樓、怡老堂、平山小隱、解元坊、貞愛堂、棲碧樓、拱北堂⁵⁷。

宋章一經，字清之，富于貲而能謙約，愛人好施，篤志問學。建平山書堂，聚書千卷，延文行之士，主師席，教子孫，絃誦不絕，立家規，以肅內外，其後，子孫科名相繼⁵⁸。平山書堂から見れば、園林は大きく見える。また章一經は南宋では有名な儒者として知られ、蔵書千巻とあるように、平山書堂には蔵書楼があったと考えられる。また、子孫の教育に努め、家族の規則を定めることによって、しっかりと家を治めることができた。その後、子孫も相次いで及第した。

湖州の私家園林には書院の名前が付けられる建物や蔵書楼を設置する事例が多く、子孫の教育と蔵書に執心する特徴があり、平山書堂は湖州の私家園林によく似ていると考えられる。造園、蔵書、子孫教育が南宋の士大夫の一般的生活理念になるのであろう。

以上、新昌県の園林事例を整理した。新昌県は理学の影響を受け、教育事業が発達していた。それは新昌石氏や陳氏などの地元の人々によるが、また朱熹とも密接な関係がある。朱熹は何度も新昌に来たことがある。そして、朱熹は石整（1127-1182）と交遊していた。『南明石氏宗譜』には朱熹の書いた序文があり、石整のために「克齋記」も執筆した⁵⁹。また、二人が東崑山水簾洞と一緒に遊覧したことがあり、詩作が残された⁶⁰。他に、朱熹が石宗昭や石斗文（1129-1189）としばしば理学について講論したという。教育家や儒者が交流しながら教育事業を推進すると同時に、自分の文人趣味を託す場所を探し、読書所を営造した事例が多かった。新昌県の私家園林の名前から見れば、「書堂」「山齋」という名がつけられたのは園林主の教育家としての身分に関わるほか、六朝の隠逸思想を受け継いだ

ものと考えられる。山陰、会稽の山水美景だけを重んじて追求することとは異なり、新昌県の私家園林は教育機能と文人趣味が強いものであったと見るべきである。

5. おわりに

紹興は南宋の浙東地域の中心地だけではなく、皇陵の所在地でもあり、また交通が発達し、仏教文化と蔵書文化が繁栄した都市である。自然の風景が優れているため、宋代紹興の私家園林の多数は紹興府の城外に造られ、質素な自然の山水を活かしたものである。六朝の隠逸思想は紹興園林に深く影響を与えて、自然と融合した道学思想の影響を受けた私家園林も発現する。城外の私家園林のうち、陸游の三山別業は田園の「別荘」のような存在であり、詩人としての彼は、薬草園や菜園のような農園、築山、盆栽のような芸術品を違和感なく園林空間に配置するなどして、文人趣味と農業生活を上手く融合できたと言えよう。

それに対して、紹興城内の私家園林に関する史料は少なく、特徴は不明とせざるを得ないが、愛情物語によって有名になった沈園は特別な存在と見なすことができる。沈園にある亭台楼閣と小橋流水の景勝は他の私家園林にも普通に見られるが、陸游が残した「釵頭鳳」及び唐氏との離別を残念に思う物語が語り継がれているため、沈園は現在に至っても紹興の著名な遊覧地としてよく知られる。

もう一つ注目すべきは新昌県である。宋代の紹興府内において教育に対して熱心な地域となり、この雰囲気は当地の私家園林の構造や機能に溢れている。また、新昌県には仏教や道教に関係する有名な山が多く、晋代から唐代に至って、数多くの著名な僧侶や文人の足跡が残された。宋代における仏教や道教の文化と私家園林の影響関係については、結びつきを明確に窺わせる史料を確認できなかったが、紹興の私家園林を彩る一要素である可能性は高く、今後の研究課題としておきたい。

また、北宋から南宋への歴史的転換が私家園林にどのように関わってくるのかについて最後に述べておきたい。史料の制約という問題もあるが、陸佃の「適南亭記」に書かれて

いるように、華麗にして、まるで屏風絵のように精巧な雰囲気であった杭州とは異なって、壮麗な景色は紹興の特徴であった。それ故、紹興の私家園林は自然山水に頼る場合が多かった。南宋に入ると、紹興の行政的地位が上昇し、皇族や士大夫たちの移住に伴い、私家園林の营造が盛んになったと想定できる。事例は少ないものの、沈園と王燦の王氏園からその様子を窺うことができる。城内にある沈園は南宋においてすでに名園となり、陸游や皇族がよく遊覧に来ることもあり、沈園の景色は他所の比ではない華やかな私家園林であったと思われる。一方、王氏園は明らかに贅沢な私家園林である。松石を集めて「康干石林」という奇岩景勝を園林に設置することは紹興のなかでもひときわ耳目を集めた。特殊な事例になるかもしれないが、南宋において、紹興の私家園林は次第に贅沢な方向に向かうこととなる。また、陸游、章一経などの事例を見ると、私家園林に蔵書室を設置していることから、南宋紹興の蔵書文化が私家園林の構造に影響したと考えられる。

【表 3：宋代紹興私家園林表】

	名称	時間	人物	類型	出典	場所	特記
①	小隱山園	北宋	王氏（前） 陸宰（後）	私家園林 別荘	『嘉泰会稽志』卷十三 「園池」	紹興城西南九里鏡湖 中	四面皆水、奇葩珍樹、如 樓閣之在煙雲中
②	齊氏家園	北宋	齊唐	私家園林	『嘉泰会稽志』卷十三 「園池」	城東少微山	近湖、可識江湖山登覽之 盛。後廢為神祠
③	石鼓書堂	北宋	石叵之（太常 博士）	読書処	『成化新昌縣志』卷九 「第宅」	新昌縣西石鼓山之陽	其父石待旦建有石溪義塾
④	五雲亭	北宋	章岷		『康熙山陰縣志』卷六 「古蹟志」	臥龍山東峯	面溪流、对若耶
⑤	適南亭	北宋	僧 用和		『嘉靖浙江通志』	城外梅山上	陸佃作記
⑥	陸左丞園	北宋	陸佃		『嘉泰会稽志』	臥龍山麓	三汲泉在園内
⑦	曲水園	北宋			『宋詩拾遺』卷二 賈昌朝「曲水園」		
⑧	石氏山齋	北宋			『万曆紹興府志』卷九 「古蹟志一」	新昌	晏殊有詩「留題越州石氏 山齋」
⑨	沈園	南宋	沈氏	私家園林	『万曆紹興府志』卷十 「古蹟志二」	府城内、禹迹寺南	陸遊與唐氏故事
⑩	修竹樓	南宋	王英孫（監 簿）	私家園林	『万曆紹興府志』卷九 「古蹟志一」	对秦望山	林德賜詩
⑪	不礙雲山堂	南宋	陳策（中訓 郎）	読書処	『万曆紹興府志』卷九 「古蹟志一」	上虞縣	
⑫	千岩亭	南宋	陸宰		『老学庵筆記』卷一	会稽斜川橋中正坊	
⑬	快閣	南宋	陸游		『嘉慶山陰縣志』	山陰縣西門外	

⑭	三山別業	南宋	陸游	私家園林	『詩稿』卷三十二	城西鏡湖北岸三山、山陰三山西村	妻王氏居住
⑮	王家園	南宋	王爚(丞相)	私家園林	『成化新昌縣志』卷九「第宅」	新昌縣南長潭之上	居第極盛
⑯	愛山亭	南宋	黃度(禮部尚書)	私家園林	『成化新昌縣志』卷九「第宅」	新昌縣東孟塘山	娛親之所
⑰	黃氏山堂	南宋	黃庭(教授)	私家園林	『成化新昌縣志』卷九「第宅」	新昌縣南百許步	
⑱	平波書堂	南宋	黃庚(觀察官)	讀書處	『成化新昌縣志』卷九「第宅」	新昌縣北一里	
⑲	平山書堂	南宋	章一經(儒者)	讀書處	『成化新昌縣志』卷九「第宅」	新昌縣西独秀山麓	
⑳	水竹所	南宋	陳雷(參軍)	私家園林	『成化新昌縣志』卷九「第宅」	新昌縣平壺桂山	於平壺之西一里建有義塾
㉑	姚山別業	南宋	孫子秀	私家園林	「孫炳炎題元實子秀字弟」		
㉒	壽康精舍	南宋	董伯和	私家園林	「跋舒舜侯岳祥壽康精舍記」		
㉓	昌園	南宋		私家園林	『嘉泰會稽志』卷十八「拾遺」	縣東南二十里	有梅万余株、居人以梅為業
㉔	五雲梅舍	南宋	王氏(王梅山)	私家園林	『萬曆會稽縣志』卷十五「古蹟」	城東去五雲門東南十里	林景熙有記、累土為山、種梅百本、與喬松修篁為歲寒友
㉕	朱通直莊		朱氏	私家園林	『嘉泰會稽志』卷十七「草部」	昌安門內	佳菊數十種、樹高三、四丈
㉖	涉趣園	宋	石茂誠	私家園林	『成化新昌縣志』卷九「第宅」	新昌縣西狀元坊右	

¹ 李浩『唐代園林別業考論』西北大學出版社、1998年10月。

² 張斌『紹興歷史園林調查與研究』浙江農林大學碩士學位論文、2011年6月。

³ 吳立威『紹興市園林發展與特色的研究』中南林學院環境藝術設計學院碩士學位論文、2003年6月。

⁴ 邱志榮『紹興風景園林與水』學林出版社、2008年10月。

⁵ (宋)陸游『渭南文集』(四部叢刊本)卷第十四、會稽志序。

⁶ 『兩宋名賢小集』(文淵閣四庫全書本)卷七十三、藜齋小集。「鏡湖」亦名鑑湖、任昉「述異記」、軒轅氏鑄鏡湖邊、因得名。或云黃帝獲寶鏡焉。或又云本王逸少語「山陰道上行、如在鏡中遊」故名。

⁷ (唐)房玄齡、(唐)李延壽撰『晉書』(中華書局、1974年11月。)卷九十二、列傳第六十二、文苑、「顧愷之」、千巖競秀、萬壑爭流、草木蒙籠、若雲興霞蔚。

⁸ 李永鑫主編『紹興通史』(浙江人民出版社、2012年10月)陳國燦、王遙江著第三卷第三章「宋代的紹興」、p. 455。

⁹ (宋)沈作賓修、(宋)施宿等纂『嘉泰會稽志』(『宋元方志叢刊』第7冊、中華書局、1990年5月)卷十六「藏書」。

¹⁰ 同卷「求遺書」。

¹¹ 同上。

¹² 前揭注5『渭南文集』卷第三十六、「朝奉大夫石公墓志銘」。

¹³ 陳從周『說園』中國建築工業出版社、2007年4月。

¹⁴ 以下是序章に基づく。

¹⁵ 李浩『唐代園林別業考論』西北大學出版社、1998年10月。

¹⁶ (清)王學棟纂修『新刻瑯琊王氏宗譜』乾隆五十四年本。

¹⁷ (梁)昭明太子撰、川合康三ほか訳注『文選』(岩波書店、2018年1月)詩篇四、卷二十五、「登臨海嶠」

初發疆中作與從弟惠連見羊何共和之」。

- ¹⁸ (唐) 李白『李太白集』(汲古書店、2006年2月) 卷十三、「夢遊天姥吟留別」。
- ¹⁹ 前掲注9『嘉泰會稽志』卷九、「山」。
- ²⁰ 前掲注9『嘉泰會稽志』卷一、「風俗」。
- ²¹ 范鳳書『中国私家蔵書史』(大象出版社、2001年7月) 第二編第一章「宋代的私家蔵書」、pp. 102-103。
- ²² 前掲注9『嘉泰會稽志』卷十八、「拾遺」。
- ²³ (宋) 陳鵠『耆旧統聞』(『潤泉日記・西塘集耆旧統聞』宋元筆記叢書、上海古籍出版社、1993年9月) 卷十、「余弱冠客會稽、遊許氏園、見壁間有陸放翁題詞、云「紅酥手、黃藤酒、滿城春色宮牆柳。東風惡、歡情薄、一懷愁緒、幾年離索。錯錯錯。春如舊、人空瘦、淚痕紅裏鮫綃透。桃花落、閑池閣、山盟雖在、錦書難托。莫莫莫」。筆勢飄逸、書於沈氏園辛未三月題。放翁先室內琴瑟甚和、然不當母夫人意、因出之。夫婦之情、實不忍離。後適南班士名某家有園館之勝。務觀一日至園中、去婦聞之、遣遺黃封酒果饌、通慇懃。公感其情、爲賦此詞。其婦見而和之、有「世情薄、人情惡」之句、惜不得其全闕。未幾、怏怏而卒。聞者爲之愴然。此園後更許氏。淳熙間、其壁猶存、好事者以竹木來護之。今不復有矣。」(宋) 劉克莊『後村詩話』(中華書局、1983年12月) 統集卷二、(宋) 周密『齊東野語』(唐宋史料筆記叢刊、中華書局、1997年12月) 卷一、「放翁鐘情前室」もほぼ同じような記載がある。
- ²⁴ 鄒志方『陸游研究』(人民出版社、2008年10月) 第二章「陸游住所」、pp. 55-126。
- ²⁵ (宋) 趙蕃撰『淳熙稿』(文淵閣四庫全書本) 卷十九、「步沈園」。
- ²⁶ 前掲注5『渭南文集』卷第四十九、「釵頭鳳」。
- ²⁷ 陸游『劍南詩稿』(四部備要本) 卷二十五、「禹跡寺南有沈氏小園、40年前、嘗題小園壁間、偶復一到、而園已易主、刻小闕於石、讀之悵然」。卷六十五「十二月二日夜夢遊沈氏園亭」。
- ²⁸ 第1章と第2章を参考。
- ²⁹ (宋) 陳鵠『耆舊續聞』(文淵閣四庫全書本) 卷十。
- ³⁰ (美) 賈志揚著、趙冬梅訳『天潢貴胄：宋代宗室史』(江蘇人民出版社、2005年10月、pp. 44-45) を参考。
- ³¹ 前掲注9『嘉泰會稽志』卷十三、「齊氏家園」。
- ³² (清) 陸心源『宋史翼』(中華書局、1991年12月) 卷二十六列傳第二十六による。
- ³³ (宋) 陸佃『陶山集』(文淵閣四庫全書本) 卷十一、「適南亭記」。
- ³⁴ 前掲注9『嘉泰會稽志』卷十三、「小隱山園」。
- ³⁵ (宋) 孔延之編『會稽掇英總集』(『宋元浙江方志集成』第14冊、杭州出版社、2009年6月) 卷二十、『游小隱山叙』「望其門、如樓閣之在煙雲中。入其堂、登其亭、廓然如形骸之出塵。世外山蒼、谿碧繚繞、四注皆可襟迎而袖揖。奇葩珍樹、映帶滿前。」
- ³⁶ 前掲注34、「小隱山園」。
- ³⁷ 包偉民「陸游的「鄉村世界」」『武漢大學學報(哲學社會科學版)』、第1期、2019年12月。
- ³⁸ 鄒志方『陸游研究』(人民出版社、2008年10月)、邱志榮『紹興風景園林與水』(學林出版社、2008年10月)、陳楚文、黃杉珊「陸游三山別業考」(『建築與文化』第6期、2017年6月、pp. 37-38)、包偉民「陸游的「鄉村世界」」(『武漢大學學報(哲學社會科學版)』第1期、2020年1月、pp. 46-64) 等。
- ³⁹ 前掲注5『渭南文集』卷第二十、「居室記」。
- ⁴⁰ 前掲注5『渭南文集』卷第十八、「書巢記」。
- ⁴¹ 前掲注27『劍南詩稿』卷十五、「冬夜讀書」。
- ⁴² 前掲注27『劍南詩稿』卷三十三、「題庵壁」。
- ⁴³ 剡曲は山陰三山別業の東側の韓家山(陸游詩中常稱東山)のふもとにあった小川である。(鄒志方「陸游詩地名積疑」『紹興文理學院學報』第20卷第3期、2000年9月、pp. 12-18を参考。)
- ⁴⁴ 鄒志方『陸游研究』(人民出版社、2008年10月) 第二章「陸游住所」、第四節「三山別業」、pp. 79-108。
- ⁴⁵ 『宋史』卷三百九十五、列傳第一百五十四。
- ⁴⁶ 慶振軒「陸游科考被秦檜「頭黜」考識」『西北大學學報(哲學社會科學版)』第42卷第1期、2012年1月、pp. 69-73。
- ⁴⁷ 陸游『老學庵筆記』卷一。
- ⁴⁸ 山口智哉「宋代地方都市における教育振興事業と在地エリート—紹興新昌縣を事例として—」『都市文化研究』第9巻、2007年3月、pp. 34-53。
- ⁴⁹ 李永鑫主編『紹興通史』(浙江人民出版社、2012年10月) 陳国燦、王遥江著第三卷第三章「宋代的紹興」参考。事功之学について説明しておく。南宋では、朱熹に代表される理学に対立し、「実際にあったことと実際の効果を互いに比較して評価する」、「学問は必ず国事に良い」というような特徴のある事功思想が浙東で流行した。その中、陳亮(1143-1194)を代表にする「永康之学」、唐促友(生卒不詳)を代表にする「經制之学」、薛季宣(1134-1173)、陳傅良(1137-1203)、葉適(1150-1223)を代表にする「永嘉之学」が、後世になって南宋浙東事功学派と呼ばれる。
- ⁵⁰ (宋) 孔延之編『會稽掇英總集』(『宋元浙江方志集成』第14冊、杭州出版社、2009年6月) 卷十二。

-
- ⁵¹ (明) 李楫修、(明) 莫旦纂『成化新昌縣志』(上海圖書館藏稀見方志叢刊、第 106 冊、國家圖書館出版社、2011 年 9 月) 卷九、「第宅」。「石鼓書堂，在縣西石鼓山之陽，宋太常博士石亞之讀書之所。嘗遇異人，遺以丹藥，不敢服，投之池中，隨有蓮開魚躍之異」。
- ⁵² (清) 石右軍等『南明石氏宗譜』(清乾隆五十年慶雲祠木活字本) 卷之一、「記」。
- ⁵³ 『成化新昌縣志』卷九、「第宅」。
- ⁵⁴ 『宋史』卷四百一十八、列傳第一百七十七。
- ⁵⁵ (唐) 杜佑撰、王文錦等點校『通典』(中華書局、1988 年 12 月) 卷一百九十九、边防十五、北狄六、拔野古、「拔野古者，亦鐵勒之別部。在僕骨東境，勝兵萬餘。其地豐草，人皆殷富。其酋俟利發屈利失，貞觀二十一年舉其部來降。其地東北千餘里曰康干河，有松木入水，二年乃化為石，其色青，有國人居住，其人謂之「康干石」。其松為石以後，仍似松文。人皆著木腳，冰上逐鹿。以耕種射獵為業。國多好馬，又出鐵。風俗與鐵勒同，言語稍別。」
- ⁵⁶ 前揭注 53、「第宅」。
- ⁵⁷ 同上。
- ⁵⁸ (明) 田瑄纂『萬曆新昌縣志』(天一閣藏明代方志選刊、上海古籍書店、1981 年 12 月) 卷十一、「鄉賢志」。
- ⁵⁹ (清) 石右軍等『南明石氏宗譜』卷一、「原序」、「記」。
- ⁶⁰ 前揭注 58『萬曆新昌縣志』卷三、「山川志」。

第4章 明代紹興園林と士大夫の交遊 ―山陰祁氏の寓園を例として―

1. はじめに

前章までで宋代に関して分析を加えてきたので、本章では明代の紹興園林について分析する。

はじめに、従来の明代園林に関する研究を整理しておく。園林研究は建築学、歴史学、文化学などの領域に分布している。その中、建築学の視点からの園林研究が主導的地位を握っている。歴史学領域の園林研究をみれば、各時期の園林史、園林史料の整理、歴史人物研究に分けられる。明代の園林研究は、上述の視点から展開している。

2. 明代園林研究の概況

(1) 建築史

早期の園林研究は建築学の視点、そして文献整理の方面から始まった。童寯『江南園林志』(1963)、杉村勇造『中国の庭』(1966)、劉敦楨『蘇州古典園林』(1979)が早期の代表的な建築学からの著作である。そののち、陳叢周『説園』(1984)、彭一剛『中国古典園林分析』(1986)、陳植『陳植造園文集』(1988)、岡大路『中国宮苑園林史考』(1988)、周維權『中国古典園林史』(1990)、張家驥『中国造園論』(1991)、汪菊淵『中国古代園林史』(2006年)などが提出されている¹。

文献整理に関する代表的著作として、陳植、張公弛選注、陳叢周校閲『中国歴代名園記選注』(1983)、陳叢周、蔣啓霆選編『園綜』(2004)は歴代の園林記を収録している。邵忠編『蘇州園墅勝蹟録』(1992)が地方志に基づき、各時代の蘇州園林の園林主、場所などの情報を整理している。古典園林文献、図などを整理するものであり、園林研究において、

基礎文献を提供する非常に重要な役割を占めている²。

その後、造園要素に関する研究も多く出されている。代表的研究をあげれば、王勁韜(2009)は皇家園林築山の歴史を分析し、明清が築山の成熟期と指摘している。また太湖石などの築山の原材料を研究した上で、築山の理論及び職人を研究している。顧凱(2010)は園林の要素を通じて園林と文化及び美学との繋がりを論じる。梁明捷(2012)は嶺南古典園林を手掛かりとして、各時代の建築物、築山、理水、植物配置などの風格を論じている³。

造園理論書を通じて園林美学を論じる研究成果は多い。例えば李世葵(2010)が明・計成の著作である『園冶』の園林美学思想を「自然」「如画」「尚雅」という三つの審美観にまとめて、中国古典園林の美学特徴を分析している。謝華(2010)は文化、審美、造園技術などの視点から、園林の構成について討論している。『長物志』に現れた造園思想に基づいて、中国古典園林の营造と文化伝承との関わりを述べている⁴。

(2) 園林史・園林文化

顧凱(2010)は明代を四つの時期に分けて、各時期における江南園林の特徴を論じている。初期が不景気で、中前期が次第に回復し、中期が繁栄し、晩期に入ると全盛期を迎えた。明晩期に造園の理論書が創作され、多くの造園家が集結していた。そのため、名園がより多く造られただけでなく、造園技術などの発展も中国造園史に影響を与えたという。そして、明代蘇州園林の芸術風格及びその変遷に焦点を当てる研究として、魏嘉璜(2005)は蘇州の歴史をベースにして、事例を挙げながら蘇州園林の発展史を明らかにしている⁵。

園林文化の研究成果として、王毅(1990)、曹林娣(2005)などがあげられる。園林にある建築、植物、山水などの要素に現れた中国文化(儒、釈、道など)を述べており、園林が士大夫の隠居空間として、彼らの思想や志望を託した場所であると解釈している。董雁(2012)が明中期以後、戯曲の舞台が園林などの私人領域に変えたと同時に、その風格も清新で典雅になっていく。一方、私家園林に戯曲を立てるのが珍しくなく、園林に現れた文化要素も戯曲創作に影響を与えたと主張している⁶。

建築学、美学、園林文化などの視点から園林を解説する研究が園林研究の主流となると思われるが、明清園林研究は上述の視点のほか、園林の社会的、経済的機能、及び園林生活に注目する研究成果も少なくない。また、本章が注目している寓園に関する研究の多くはこれらの成果に含まれている。この部分は「序章 2. 明代園林研究の方向」に論じたが、本章に改めて簡単にその内容を述べると以下のようなになる。

(3) 園林の機能

ジョアンナ・ハンドリン・スミス (1992) は祁彪佳による寓園の造成を例として、園林が備えている社会的機能及び政治関係に注目している⁷。クレイグ・クルナス (2008) は庭園が社会的機能を備えるだけでなく、経済的機能も持っている指摘するとともに、美学の観点のみから園林を分析する手法を批判し、明末の庭園を商品経済という立場から分析すべきだと主張した⁸。巫仁恕 (2008) はクレイグの見解に賛同しつつ、園林は都市化と社会経済の発展の象徴物として理解すべきと主張、園林と都市空間との関連性に注目する⁹。

(4) 園林生活

康格温 (2010) は、16 世紀以後、園林の生産性と観賞性が併存しているという意見を述べながら、園林において名士とともに詩を作ったり、宴会を行ったりすることを紹介した¹⁰。曹淑娟 (2006) は、社会空間 (社会活動への場所を提供)、文本空間 (寓園を巡る文学作品)、隠喩空間 (園林主の内心的世界) の三つの側面から寓園を分析し、園林の中の家族感情、女性空間を重視した¹¹。荒井健は、造園計画をはじめ、寓園への進出、泊、そして景勝の新造、移築、命名、造園協力者まで分析した¹²。

更に本章で取り上げる寓園に関する先行研究を挙げれば、趙海燕 (2016) と嚴嬌 (2020) がある。

趙海燕 (2016) は、祁彪佳が造った『寓山注』の形成過程を整理した上、祁彪佳と儒者、

僧侶及び士大夫との交遊を考察し、さらに寓園に含む園林芸術、園林への精神的寄託を分析した¹³

嚴嬌(2020)は、明末に紹興園林が盛んになった背景を検討した上で、祁氏園林を文学創作の場所として、そこで行った文学活動(演劇、宴会、作詩(詩社))に焦点を当てて、これらの活動が行われた時期、具体的な内容を詳細に論じた。更に、文学を巡る交遊や関連する人物、群体(詩社社友など)を列挙して分析した¹⁴。

祁彪佳の寓園に関する研究は少なくない。明末の紹興の私家園林の代表的事例として挙げられている。上述の研究成果の焦点をまとめてみれば、寓園の社交的機能、造園過程、園林構造、園林生活などにあり、寓園は祁彪佳が作り上げた生命の一つの隠喩空間として存在したと主張されてきた。これらの先行研究は園林そのものや園林主に注目しており非常に参考になるが、園林空間の変化や如何に寓園を利用したかについての分析は不足している。

本章はこれらの成果を踏まえて、上述の明代の私家園林の特徴を確認しながら、当時の社会背景に目を向けつつ、園林空間の変化や園林の利用を分析する。まず、明代に繁栄した紹興の私家園林に着目し、その特徴を究明した上、更に寓園を代表的事例として、園林空間が社会変動に如何に影響されたのかを明らかにする。

3. 紹興私家園林の概況

明代初期に、江南私家園林は戦争によって破壊されたものが多い。また、租税の負担が重かった。『明史』には、

初、太祖定天下官、民田賦，凡官田畝税五升三合五勺，民田減二升，重租田八升五合五勺，沒官田一斗二升。惟蘇、松、嘉、湖，怒其為張士誠守，乃籍諸豪族及富民田以為官田，按私租簿為税額。而司農卿楊憲又以浙西地膏腴，增其賦。畝加二倍。故浙西官、民田視他方倍蓰，畝税有二三石者。大抵蘇最重，松、嘉、湖次之。常、杭又次之¹⁵。

とあるように、初め、太祖が天下の田賦を定め、凡そ官田一畝の税は五升三合五勺であり、

民田は（官田より）二升減ずる。重租田は八升五合五勺であり、没官田は一斗二升である。ただ蘇州、松江、嘉興、湖州は、張士誠の勢力範囲であったため、諸豪族及び富民の田を没収して官田にし、私租簿に基づいて税額を定めた。司農卿楊憲は浙西の田地が肥沃であるため、その賦を増やし、畝ごとに二倍に増加した。故に浙西の官、民田は他地域の数倍となり、一畝の税額は二三石になる者もある。およそ蘇州が一番重く、松江、嘉興、湖州はその次であり、常州、杭州はまたその次になるとある。重い賦税の中で、豪族や富民の田を官田に変更したため、私家園林への衝撃が大きかったと考えられる。更に、

功臣宅舎之後留空地十丈，左右皆五丈。不許那移軍民居止，更不許於宅前後左右多占地，構亭館，開池塘。以資遊眺¹⁶。

とあり、功臣の宅舎の後ろに空き地十丈を置いておき、左右は皆五丈を置いておく。軍民の住所に転用してはならず、更に遊覧のために、お宅の前後左右の土地を占有して亭館、池を造ってはいけない。つまり、お宅の前後に園林を修造することが禁止されていた。このような雰囲気の中で、明初の園林は低調であった。

明代中期以後、大地主階層が自分の政治的勢力や経済的能力を頼りに、江南の官田を次第に官僚や郷紳の私物にした。そして、手工業の発達に伴い、商品経済を促進したとともに、一条鞭法の実施が「貨幣地租」をもたらし、白銀が少数の貴族や官僚地主及び富商の手に集中された¹⁷。更に、禁令が緩み、贅沢な風潮が台頭して、土地と白銀を持っている士大夫層は造園の機会と捉え、私家園林の营造がついに流行した。加えて明末に流行する、人間の心にある欲望を肯定していく陽明学からの影響も無視できない。万曆二十五年（1597）以後、朝廷では党争が激しく、多くの士大夫が退居し、自分の精神的享受を追い求めていく¹⁸。そのことも私家園林を营造する理由となった。

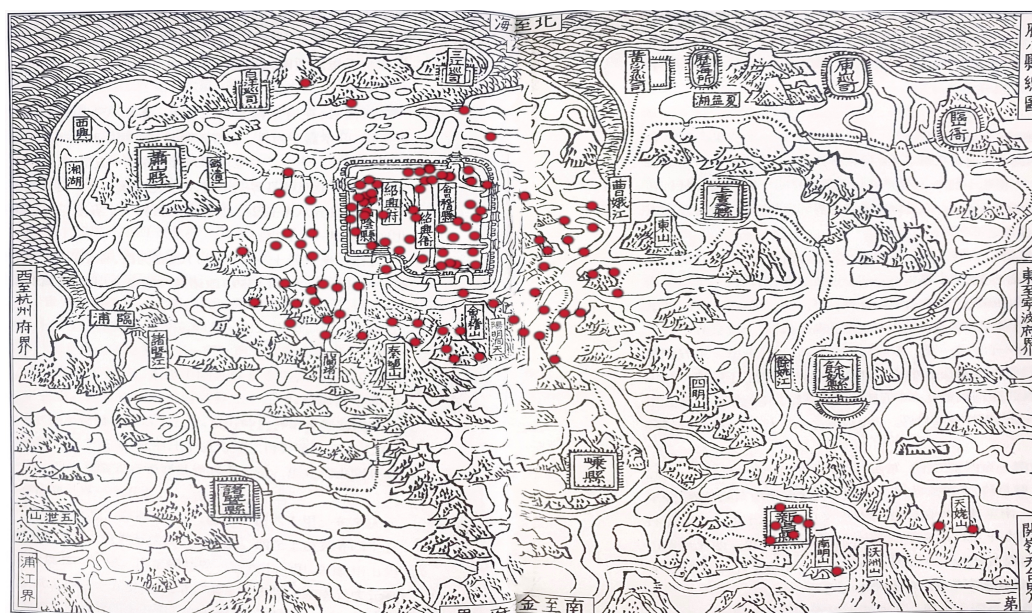
（1）私家園林の分布

明代中期以後に、紹興では人材が輩出され、文化が繁栄していた。このような背景で、明代の紹興において造園が大変盛んになり、城内、城外共に多く造営された。また、園林

に関する記述が多くなる。特に明末の著名な士大夫である祁彪佳の「越中園亭記」はよく知られており、園林研究において不可欠な史料となっている。

下記図9に記した園林分布図は本章の最後に付している【表5: 明代紹興私家園林表】(以下【表5】と略記)に基づき、場所の確認できる園林を取り上げて作成したものである。また、明代の紹興私家園林の分布について、沈超然氏は地名を考証した上、晚明紹興の園林の空間的分布を詳細に現代の地図に明示した。沈氏によれば、城内の園林は臥龍山、戴山、亀山に集中する傾向がある。臥龍山は紹興府署、城隍廟の所在地であり、東南側の麓及び山頂は官署園林に占められたのに対して、西南側の麓はほぼ状元坊張氏の園林に占居された。

戴山は王羲之が居住したことがあるため、明代に至っても人気の高い造園場所であった。また、亀山には晚明になると、山陰東武朱氏の園林が占めた。他に、東南部は水資源が豊富で、視界が広げ、景色がよい。また府学があり、多くの園林がそこに分布していた。一方、城外の園林は風景地又は旅行地である常禧門外の南塘(城西の北側、今の鑿湖水系)周辺、稽山門外の城南の炉峰・天柱周辺に多く分布する傾向が見えると述べる。更に、明末の紹興の造園家族の様子を指摘している¹⁹。



【図9：明代紹興私家園林分布図】
〔『万曆紹興府志』「紹興府図」に基づいて加工〕

簡単にまとめてみると、明代の紹興私家園林は歴史があり、風景良好な地域に集まっていた。【表 5】を確認すれば、臥龍山にある園林が一番多い。

臥龍山舊名種山，越大夫種所墓處。又曰重山，孔曄會稽記云：種訛成重也。蜿蜒奇秀。

自隋訖唐，即山爲州宅，其後亭閣崢嶸，踵起相望，與其山川暎帶，號稱僊居²⁰。

臥龍山は隋唐以来、州宅（州の官署）の所在地であり、官署園林の营造はそこから発展してきた。山水風景の非常に良い地域であるため、仙居とも称される。明代に至ると、城隍廟をはじめとする廟宇・寺観が多く建てられ、更に人気な観光遊覧地となったと思われる。

また、造園時間を詳細に確認することができないが、万暦以前と万暦以後を基準として分けてみれば、万暦以前の紹興府城内の私家園林、つまり、より早期の私家園林は臥龍山（西）、戴山（東北）、亀山（西南）に分布し、その後の私家園林はそこから城内の他地域に発展してきたと考えられる。

（2）私家園林の特徴

沈超然氏が論及したように、山陰、会稽は地理的利便性があり、また商品経済が集中しているため、有望な宗族が造園に夢中になった。そこで明代の紹興私家園林の特徴を分析してみる。

a 郷紳宗族の造園

① その理由

上記の沈氏が言及したように、晩明に造園に熱心だった宗族として陶氏、張氏、祁氏などが挙げられる（【表 5】にも確認できる）。明末に造園宗族が出現した理由は何であろうか。沈徳符『萬曆野獲編』に以下の記載がある。

嘉靖末年，海内宴安，士大夫富厚者，以治園亭、教歌舞之隙，間及古玩²¹。

嘉靖末期、天下が安定し、士大夫の裕福者は園亭の造営や歌舞に加えて、骨董品の収蔵にも及んだ。商品経済の発展に伴い、造園の風潮が明代中期以後に盛んになった。そして、

この風潮を押し進めるのが郷紳勢力である²²。【表 5】にある園林主の多くは郷紳であり、その家族はいずれも当時の名門と考えられる。例えば、陶氏は会稽を代表する科挙世家であり、明清時期において、進士 43 名、挙人 112 名、貢生 83 名を輩出している。更に、明代中期以後、在地有力者、賦役制度に特権者層である郷紳は大土地所有者と認められ、彼らの多くは、土地をはじめとする大量な不動産や動産を所有している²³。このように、郷紳宗族は科挙を通じて、エリート層の地位を保ち、園林の营造も継承することができた。

② 郷紳宗族の造園

何世代にわたって造園を続けたことと先祖の園林を後世まで継承できたことは特筆される。張岱の一族を例にすれば、張天復から張岱まで五世（張天復、張元忭、張汝霖、張耀芳、張岱）にわたった。その間、張氏の造園事業はずっと続いた。張岱の世代に至ると曾祖の張元忭の園林も継承することができた。それは明代以前にあつては珍しい現象といえるであろう。

もう一つの特徴として、ある地域に一族の園林が集中する傾向がある。例えば、上述した陶氏は陶堰に集まり、そこで多くの園林を营造した。また、張氏は臥龍山や城南に園林を多く造る一方で、下文に述べる祁氏の園林はほぼ城西に集まった。その理由を考えると、やはり園林主が郷紳勢力であったからに他ならない。寓園の事例をあげれば、祁彪佳が寓園の造園始末を紹介する時、以下のように述べた。「予家高士裏 固山陰道上也。家旁小山，若有夙縁者，其名曰“寓”。往予童稚時，季超、止祥兩兄以斗粟易之²⁴。」と。「斗粟」程度で家の傍の小山を手に入れられるのはなぜであろうか。岸本美緒氏が論じたように、十六世紀における地方社会の流動化、具体的には農村から都市への人口流入の背後には、激しい競争社会がある。郷紳への投靠・投献は、そうした社会で没落の危機にある人々が、隷属的な形式ではあれ、権勢ある郷紳と結びつくことによって身の安全を保とうとする一つの手段であった²⁵。社会秩序の変化による土地の集中、つまり、自分の土地を持つ民戸は生活環境の変化によって、自分の土地を郷紳に献上し、郷紳のもとに身を寄せることはその理由の一つになるであろう。一方、郷紳側が自分の勢力を使って、実家の近所にある土地を容易く手に入れ、園林や家屋を营造することも可能であった。

b 蔵書家と蔵書楼

紹興の有名な蔵書家として、宋代の陸氏、石氏、諸葛氏があげられる。明代に至ると、祁氏、鈕氏が蔵書活動を展開していく。次に、祁氏、鈕氏の様子を概観する。

① 祁氏

祁彪佳の父である祁承燦（1563—1628、万暦 28 年（1600）の挙人、32 年（1604）の進士である）は祁氏家族の地位を向上させた重要な人物である。彼の時代から蔵書が始まり、十万冊余りの本が収集された澹生堂（祁承燦の密園のなかの蔵書楼である）を造り、当時有数の蔵書家として知られている²⁶。「比束發就婚，即内子奩中物，悉以供市書之值²⁷。」と記されるように、結婚すると、妻の嫁入り道具を売り払って本を購入した。それほど書籍の収集にのめり込んだ。十数年を経て「合之先世頗踰萬卷²⁸。」と見えるように、祖先の蔵書と合わせて万卷を越えた。その後、「小奴不戒于火，先世所遺，及半生所購，無片楮存者²⁹」とあり、先世から残した書物及び半生で購入した蔵書は、火災により全部失われた。しかし、祁承燦は諦めず、前より二、三倍の書籍を収集した。彼が書籍を蓄えたのは、後世の子孫に読書させるためであった。その後、祁彪佳が父親の蔵書の遺志を継承し、寓園を営造すると、中に「八求楼」という蔵書楼を修造した。また、祁彪佳の息子の祁理孫も「奕慶蔵書楼」を建てた。

② 鈕氏

「越中園亭記」には以下のような記載がある。

石溪精舍：入城中○、鈕黃門石溪公建有玉蘭徑、蔵書萬卷樓、南爲芳樹園³⁰。

鈕黃門石溪公は玉蘭徑、蔵書万卷楼を建て、南には芳樹園がある。「鈕黃門石溪公」とは鈕緯のことである。

鈕緯，字仲文，会稽人。嘉靖辛丑進士，歴官給事中³¹。

吾郷黃門鈕石溪先生，鋭情稽古，廣搆窮搜，蔵書世學樓者，積至數百函，將萬卷³²。

鈕緯は会稽の出身であり、嘉靖辛丑（1541 年）の進士であった。古籍を探し集め、世学楼に収蔵した書物は数百箱にのぼり、万卷に至った。鈕緯及び彼の蔵書楼に関する記載は多くないが、世学楼を建てて蔵書規模が大きかったと考えられる。

c 仏教信仰の園林造営に与えた影響

紹興の仏教信仰は後漢に遡ることができる。明代に至ると、仏教信仰に関する活動が文集などの史料に記載される。

適適園：小菴斗大，中供大士。土人傳未菴時，大士浮水中，不知所從來，漂泛至此，數日不去。土人取視之，則泥質也。神之，遂祀焉。園依菴之左，竹木蓊然³³。

小菴は小さくて、中に大士を供養している。菴がない時、大士が水の中に浮かんでいて、どこから来たかわからないが、ここに浮かんで来たら数日たつも離れなかった。皆が取ってみれば、泥質であった。不思議に思い、そこで供養したと地元の人はい言っている。園は菴の左側にあり、竹木が繁茂している。

また、祁彪佳の一族も仏教信徒であり、寓園に「虎角菴」を修造し、大士を供養したことが確認できる。園林を修造するとき、菴を園林の中に、或いは園林を庵の傍に設置することが珍しくないようである。仏教信仰の園林の構造への影響が見える。

以上、紹興の私家園林は明代中期以後に盛んになり、城内の三山（臥龍山、戴山、龜山）及び城外の鑑湖周辺などの地域に多く分布している。また、造園を行う郷紳宗族が多く、園林内の蔵書楼や仏教信仰の建物の設置も紹興園林の特徴と言えよう。次に、具体例を挙げて紹興園林の内部空間を分析してみる。

4. 祁氏家族と寓園

祁彪佳の寓園を代表事例として挙げたのには二点の理由がある。一、寓園は明末の有名な私家園林である。祁彪佳が造園する際に「寓山注」「寓山志」を作成し、更に、「祁忠敏公日記」（以下は「日記」という）に造園の経過が詳細に記されている。二、祁彪佳が帰郷後、紹興府の園林（総計、167）を遊覧し、「越中園亭記」を作成した。中に園林主、場所、園林の特徴などの情報を記録した。つまり、寓園は紹興私家園林の優れているところを吸収して造られたと言える。そのため、寓園は明末の紹興私家園林を代表していると考えられる。

(1) 祁氏の家系

「大参祁父母夷度先生墓表」³⁴に、

譜馥於祁奚，炳炳晉乘，源深于上汴。脈脈福巖。自五傳以來，代有偉才，郡鳴義俠。
耕讀久而博士始聞，風節遙而議垣彌著。

とあるように、祁氏は祁奚を祖先として、河南の汴梁で世代を重ねた。第五世以来、有能な人材が次々と世に出て、義俠の名声が郡に鳴り響いた。その間、農業と読書によって生活を保つ在り方を継続し、その風節をたたえられた。つまり、祁氏は読書人を輩出した名家としての世評を獲得してきたのである。『祁忠敏公年譜』に³⁵、山陰祁氏は「得姓於晋大夫奚，世居汴，随宋南渡，徙浙東越。入明，卜居梅墅…」とある。すなわち、祁氏は代々河南省の汴梁に住んでいた。宋朝の南遷に従って、浙江の紹興に移動し、明に入った後、紹興府の山陰県梅墅に住んでいたという。山陰祁氏の始祖は茂興であり、12代の昌徴、曜徴まで、約400年間を経ており、祁彪佳は十代目である。

祁彪佳（1602-1645）、字は弘吉で、号は世培、自ら寓山居士と称した。浙江山陰県の人で、先祖代々清廉官吏である。天啓2年（1622）に進士となり、興化府の推官に任じられた。服喪の後、福建道御史、巡按蘇松を歴任した。当時、「宜興之變」が発生した³⁶。「宜興之變」とは、宜興の郷紳である陳一教の豪僕の横暴さに耐えかねた民衆により、陳氏の家や先祖の墓が焼き壊され、悪人がその機に乗じてその財産を奪い取った事件を指している。祁彪佳は事件を処理し、情勢を安定させた。しかし、陳一教と姻戚関係にあった周延儒は³⁷、祁彪佳の公正な処理を非難し、考覈に際して俸禄を下げられた。この事件により、祁彪佳は奉養を尽くすという理由のもと帰郷した。郷里にあつては、母の世話をし、暇があつたら静坐して性命学を研究し、また救済を行った。その後、召喚に応じて河南道事を管轄し、ついで大理寺丞、右僉都御史に昇進した。

明朝滅亡後は南京に自立した福王政府に招かれ、大理寺丞、蘇松巡撫をつとめたが、在職六ヶ月で病気を理由に辞職して故郷に帰り、弘光元年（1645）5月に南京が清兵に占領され、閏6月6日、池に身を投じて国難に殉じた。享年44歳、のちに忠敏と諡されている³⁸。

以上の事績から、祁彪佳という人物のイメージが浮かび上がる。正直で、忠誠心のある人物である。それと同時に、彼も父からの影響を受けて蔵書を相続しており、それは『祁忠敏公日記』に見える。帰郷したばかり（崇禎 8 年（1635）6 月）の祁彪佳が最初にやり始めたのは書籍を整理することであった。

（七月）初一日，予到家方兩日，屏絕諸應酬，獨與鄭九華於大樓整理書籍，值周海門之孫周先之至，以雞黍相餉去。復整理書籍³⁹。

以先子一生孜孜矻矻，青衿世繼，予不敢為他日之可勉也，庶以望之後人云耳⁴⁰。

家に着いて二日目に書籍を整理し始めた。整理する間は、交際することも少なかったということから祁彪佳の書籍を重視する気持ちが見られる。また、読書の伝統を子孫に伝えることを願ってもいた。彼が家族に影響されたのは蔵書、愛書のほかには、造園である。

『祁忠敏公年譜』には、「先生讀書於密園」のような記載が少ない。祁彪佳の父が造園に夢中して、俸給を尽くして造ったのが密園である。子供の時代から密園で読書した祁彪佳は父親から蔵書などの習慣を継承するだけでなく、園林を造る意識も継承されたと考えられる。祁彪佳は官界を嫌って帰郷し、園林をのどかな休憩場と見なして、母親の世話をしながら、読書、蔵書そして子供を教育した。これらのことは、そうした蔵書や造園の伝統の継承の発露だと考えられる。

以上のように、祁彪佳は祁氏家族、主に祁承燾から書籍を尊重し、園林への執着する思想を受け継いでいった。

（2）造園の経緯

崇禎 8 年（1635）に、祁彪佳は何度も帰郷を申請した。

乙亥四月初九日出都門。先是，予巡吳，乞歸者再，俱不獲請。去冬報命入都，正月初旬即以疾請假，至二月初十日又請假。自是惟念八日以回道趨朝謝恩，余皆不復出⁴¹。

帰郷を許可された祁彪佳は漸く 4 月 9 日に北京を出発した。

（六月）二十九日，辰刻抵家，母子兄弟權然一堂，叔父亦從柯園至。頃之，何芝田亦來，

而鄭九華則待予于小園已三日矣⁴²。

6月29日に、祁彪佳が家に着くと、親戚や友人の何芝田、鄭九華たちが彼を待ち受けて、歓待してくれた。上述のように、家についたばかりの祁彪佳は蔵書を整理しはじめ、終わってから寓山を訪れた。

(八月)初六日、天色晴霽。午後同馬元常及季兄、艾弟至叔父園中，再同止祥兄抵寓山，僧無跡守菴於其山，予頗有卜築之興。從柯山放舟晚歸⁴³。

8月6日、友人の馬元常及び季超⁴⁴、翁艾⁴⁵と一緒に叔父（祁承勳⁴⁶）の園林にいき、また止祥⁴⁷とともに寓山にいった。祁彪佳の造園の考えはこの日から始まった。

「寓山注」には、開園の始末が述べられている。

予家高士裏，固山陰道上也。家旁小山，若有夙緣者，其名曰“寓”。往予童稚時，季超、止祥兩兄以斗粟易之。剔石栽松，躬荷畚鍤，手足為之胼胝。予時亦同拏小艇，或捧土作嬰兒戲。迨後余二十年，松漸高，石亦漸古，季超兄輒棄去，事宗乘。止祥兄且構柯園為菟裘矣。舍山之陽建麥浪大師塔。餘則委置於叢篁灌莽中。予自引疾南歸，偶一過之，於二十年前情事，若有感觸焉者。於是卜築之興，遂勃不可遏⁴⁸。

祁彪佳の家の傍に寓山という小山があり、季超と止祥とがこれをただ同然で譲り受け、石を掘り起こし、松を植え、ひとしきり造園に熱中し、彪佳自分はそばでまねごとの土いじりをしていた。季超が仏門に入り、止祥が柯園に隠遁した。この度、祁彪佳が帰郷して、20年前のことが心によみがえり、ここに園林を造成しようという気持ちを押さえ切れなくなった。以上が祁彪佳の造園の経緯である。

最初は祁彪佳が華やかな園林を造ろうとしなかったが、しかし、造れば造るほど「某亭，某榭。果有不可無者」とあるように園林に不可欠な亭、榭を思い出し、次々と造成していった。

朝而出，暮而歸。偶有家冗，皆於燈下了之…祁寒盛暑，體粟汗浹，不以為苦，雖遇大風雨，舟未嘗一日不出⁴⁹。

情熱につき動かされて、朝から晩まで造園に励み、たとえ厳寒や酷暑でも、一日さえ休んだことなかった。

以故兩年以來，囊中如洗，予亦病而愈，愈而復病。此開園之癡癖也⁵⁰。

また、造園のために、金銭を使い果たし、体調管理にも気を配らなかった。

造園時期について、「寓山注」に以下のように記載している。

開園於乙亥之仲冬。至丙子春孟，草堂告成。齋與軒亦已就緒。迨於中夏，經營復始，樹先之，閣繼之。迄山房而役以竣。自此則山之頂趾鏤刻殆遍。

惟是泊舟登岸，一徑未通，意猶不慊也，於是疏鑿之功復始。於十一月自冬歷丁丑之春，凡一百余日，曲池穿牖，飛沼拂几，綠映朱欄，丹流翠壑，乃可以稱園矣。而予農圃之興尚殷，於是終之以豐莊與豳圃，蓋已在孟夏之十有三日矣。若八求樓，溪山草閣，抱甕小憩，則以其暇偶一為之，不可以時日計，此開園之歲月也⁵¹。

崇禎8年（1635）の冬に造園が始まり、10年（1637）の春まで、およそ2年間をかけて初期の造園作業が終わった。最初に完成したのは寓山草堂、齋、軒である。そして、9年の夏に、造園を再開し、樹、閣、山房も相次いで竣工したが、祁彪佳は満足せず、続いて豊莊、豳圃、八求樓、溪山草閣、抱甕小憩などを造成した。

「寓山注」によると、寓園には以下の49景がある。

水明廊、讀易居、呼虹幌、讓鷗池、踏香堤、浮影臺、聽止橋、沁月泉、溪山草閣、茶塢、冷雲石、友石榭、太古亭、小斜川、松徑、櫻桃林、選勝亭、虎角菴、袖海、瓶隱、孤峯玉女臺、芙蓉渡、迴波嶼、妙賞亭、小巒稚、志歸齋、天瓢、笛亭、酣漱廊、爛柯山房、約室、鐵芝峯、寓山草堂、通霞臺、靜者軒、遠閣、柳陌、豳圃、抱甕小憩、豊莊、梅坡、海翁梁、試鶯館、歸雲寄、即花舍、宛轉環、遠山堂、四負堂、八求樓である。



【図 10：寓山図】（潘谷西編著『中国古代建築史』第4巻「元、明建築」から転引）

寓園の景勝及び造園過程について、荒井健（1994）が「日記」に基づいて「寓山四十九景造成年表」を作成した。また、曹淑娟（2006）は荒井氏の論文を参考しながら、「日記」、『寓山志』、『寓山続志』を用いて寓山 79 景を整理し「寓山勝景施作修改年表」を作っている⁵²。本章は寓園の景勝を再整理するのではなく、「日記」でしばしば言及された讀易居、虎角菴、天瓢、四負堂に焦点を当てていく。

讀易居。……既而主人一切厭離，惟日手周易一卷，滴露研硃，聊解動躁耳。予雖家世受易。不能解易理，然於盈虛消息之道，則若有微窺者。自有天地，便有茲山。今日以前，原是崕嶺寸土，安能保今日以後，列閣層軒，長峙乎巖壑哉。成毀之數，天地不免。

図 10 を見ると、讀易居は玄関口の辺りにある。祁彪佳は家族の影響を受けて易経に触れたが、易経の道理をうまく理解できなかったものの、榮枯盛衰の道理においてやや知るところがあった。繁榮と衰退の運命は天地さえも免れないほど、人生もそうであると祁彪佳は言いたかったのであろう。情勢が不安定な時代に生きている祁彪佳は人生の不常を意識しながら、朝廷から離れて、これからの家族との生活を考えていたのではないか。

天瓢。鐵芝峰旁，一石隆起如覆盂。季超、止祥兩兄長開山時，瀦為池以蓄水，亡兄元孺顧而樂之，取蘇長公「馬上傾倒天瓢翻⁵³」之句，題之曰天瓢，作詩以紀其勝。予不忍沒舊名，復志之如此。

天瓢は鉄芝峰（寓山の最高点である。靈芝のような形の石があるため、鉄芝と名付けた）の隣にあり、盂を伏せた形で、水が溜まる石である。祁彪佳は亡くなった兄の元孺が蘇軾の詩から「天瓢」の文言を取り、大石と名付けたことを思い出した。この旧名を捨てるのに忍びなくて、景勝の名をそのままにした。祁彪佳が家族にとっての限りない感情を園林に寄せていたことが明らかに見て取れる。

虎角菴。……菴成，問名於家季超，題之以虎角，而謂余說曰，吾弟構此，奉大士，近且孜孜祖道矣。然亦嘗有意於淨土乎。

祁彪佳が造園の時に尼寺を修造して、兄の季超に寺の名前のことを相談すると、「虎角」と名づけてくれたうえ、菩薩を祭ることを喜んでくれた。季超が仏門に入ったことは前文で言及した。「日記」に「(十一月) 初五日，靜坐小齋，掃除一室，供達摩、觀音、彌勒諸像，

時持佛号，稍攝紛馳之心，然愈覺其散亂矣。」「(十一月)初八日(中略)老母偕諸媳出礼佛。」

⁵⁴などの記載も少なくないことから見ると、祁氏家族が仏教信徒だと推測できる。

四負堂。豊莊内有堂三楹，臨流翼峙，主人為蠶穀之地……時金如王先生，予所師事者。因予蔔築之癖，責之書曰，頃見尊園，蓋有四負，君處其三，弟居其一。君受國深恩，當圖稱報，即退休林下，亦宜講道論業，日思所以匡扶社稷，澤閭生民，乃今兩年於茲，不務乎此，而徒經營土木，刻鏤花石，逞一時之小慧，忘天下之大計，人盡如此，國復何頼，是謂負君。尊大人久依有道，旁通宗乘，購書萬卷，貽厥孫謀，光昭前烈，實在嗣人。今君年近不惑，位居臺諫，立身行道，豈異時事，而此志未見卓然，但能踵事增華，此豈善述之孝，是謂負親。君天姿敏達，賦性忠厚，允稱濟世之通才，堪為人道之利器，又復天假之緣，師友之樂，不出戶庭，乘此一往事心，自當立躋聖域。而乃不自珍惜，與俗上下，興茲一役，流聞四方，僅贏兒女子之詫說，不顧有道者攢眉。混明珠於瓦礫，棄良苗為稊稗，是謂負己。君墜此三負，而弟過蒙道愛，許之直言，乃不能於未發之前，絶其端芽，徒冀於已事之後，救以口舌，恨正己之功尚疏，愧悟物之誠未至，是謂負友。嗟乎，此良規也。予何幸而得聞此良規也，開園以來，皆振予過者，膏盲針砭，實惟斯言。然予即獲聞斯言矣，不能如王仲寶立毀長梁，是益其過耳。先生以予為三負，予誠負哉，而聞言未改，則所謂負友者仍在予，不在先生。名其堂四負，志予之益其過也⁵⁵。

これによれば、師でもあり、友でもある王金如の忠告を受け入れて、祁彪佳は豊莊にある堂を「四負堂」と名付けた。即ち君主、親、自分、友人の期待に背いたという意味である。

「いい忠告だ」としつつも造園の思い入れは変わらなかった。当時の祁彪佳が考えていたのは朝廷や政治ではなく、造園である。

そのほか、寓園には蔵書楼「八求樓」もある。「先子窮搜博採，凡積書十萬余卷，為約以訓子孫⁵⁶」とあるように、祁彪佳が十万巻余りの本を収蔵する父の様子を思い出し、自分も父の志を受け継ごうとしたため、「八求樓」を設置した。そして、自分が受け継いだこの読書、蔵書の志を自分の子供に相続させるために、農園である「豊莊」の近くに子供の読書する場所を設置した。

以上の分析によれば、蔵書楼の「八求樓」、菩薩を供養する「虎角菴」、農莊としての「幽圃」、「豊莊」、亡くなった兄の元孺を記念する「鐵芝峯」と「天瓢」などの景勝が設置されているように、寓園は機能が豊富で、家族への愛情が満ちる空間と考えられる。菩薩堂というべき「虎角菴」の存在には、明代の紹興私家園林の前の時代より機能的多様化が窺える。また、王金如からの造園への批評を受けながらも、祁彪佳は依然として造園を続けている。

寓園が 49 景あると書いたにもかかわらず、「日記」から「咸暢閣」、「絳雪居」などの新しい建物が後期から屢々見える。つまり、寓園の空間は絶えず変化を遂げていたのである。

5. 祁氏の日常空間と園林生活

(1) 祁氏の寓園における園林生活

(十月) 初八日、為内子誕生日、放生諸社友畢集、禪師邇密、歴然、無量俱至、自舉社以来、是会最盛。午後邇密談因果与氣質之異同、及省事收心之要。晚懸灯山中、与内子觀之為樂⁵⁷。

(四月) 二十五日、與内子及女尼谷虛、諸女婢採茶寓山。潘宗魏、王子開、董章甫先後來晤、同内子至蕭竹菴⁵⁸。

妻の誕生日に、放生社のメンバー及び僧侶は寓園に集まった。祁彪佳は放生を行い、僧侶邇密より「因果与氣質之異同」「省事收心之要」などについて講話を聴いている。官途から離れて、以前とまったく異なる新しい雰囲気身を投じている様子が窺える。祁彪佳だけではなく、妻の商景蘭⁵⁹も尼と一緒に寓園にて茶摘みをしていることから、祁氏家族が寓園にて仏教徒と密なつながりを持っていることは明らかである。そのほか、妻の誕生日に友人を誘って、賑やかな雰囲気を作り出し、夜に妻とともに灯火を見ていた。このことは夫妻が良好な関係であることを表している。

(四月) 二十日、奉老母親戲于寓山、商家姑適自城至、有来以関説免予者、峻却之。

午後觀荷花蕩記，時金大來、劉比生、鄒汝功、鄭九華皆至，舉小酌而別。晚值雨⁶⁰。

(一月)十五日，老母至寓山，予先至，掃逕以待遊人，竟日士女駢聯，喧聲如市，亦園庭未有之盛也⁶¹。

(一月)十九日……午後奉老母及諸兄弟、何家姊至寓山看燈，放花火，觀者如堵⁶²。

祁彪佳が老母、兄弟、親戚を連れて寓園にて演劇、花火、看燈をしている。さらには、祁彪佳が友達と寓園で酒を酌み交わす記載も少なくない⁶³。寓園の遊覧を契機に、家族や親族、友人と団欒している様子を見ることができる。

寓園は家族とともに一家団欒を享受した場所だけではなく、祁氏家族の読書する場所でもあった。

(二月)二十三日，因家中演戲劇⁶⁴，恐群兒觀之妨讀書工。乃同鄒汝功、沈爾肅携群兒至山讀書（中略）是日晴霽，遊人襍踏，山中如喧市⁶⁵。

(二月)二十九日……至寓山，坐爛柯山房，閱楞嚴經。遊人襍踏，予甚有悔恨卜築之意⁶⁶。

祁彪佳は家での演劇が子供達の読書に与える影響を防ぐために、子供達を連れて寓園に読書に出かけている。また、この日は園林を開放しており、たくさんの遊客がきて、寓園はまるで市場のようであった。二十九日には、祁彪佳が寓園の「爛柯山房」にて「楞嚴經」を読んでいる時にも、遊客のやかましい騒音に邪魔されており、園林の開放が静かな隠居生活を妨げることになったという後悔の念を表している。

また、寓園にひんぼ園圃という畑を作っていた。

(十月)十三日，鄭次公別去，與鄭九華出山。先至柯園候止祥兄，潘鳴岐來晤。内子與諸侄女亦出，摘香圓於園圃。数日來俱閱十六國春秋，閱至前後趙及前秦諸記⁶⁷。

(九月)二十一日，至後梅訪潘鳴岐。与内子至寓山督庄奴收荳於園圃。張道岸來晤，小憩於咸暢閣⁶⁸。

(四月)二十六日，送鄒汝厭歸，姚江晤寧方兄於修居之所。仍同内子至寓山刈油菜子。潘益儒來晤，暇坐瓶隱閱救荒書，抵暮乃歸⁶⁹。

(三月)二十日，族中有以卑幼犯尊長者，至祠堂處分。偕内子至寓山採茶⁷⁰。

祁氏夫婦は寓園にて「香圓」、「豆」、「油菜の種」、「茶」など、農産物の収穫をしていた。『寓山注』には「園圃」についてこのように紹介されている。

讓鷗池之南，有余地焉。衡可二百赤，縱不及衡者半。以五之三種桑，其二種梨橘桃李杏栗之屬……於樹下栽紫茄，白豆，甘瓜，櫻栗。又從海外得紅薯異種，每一本可植二三畝。每畝可收得薯一二車，以代粒，足果百人腹……⁷¹

園圃で桑、果物類、野菜類及び海外から輸入されたサツマイモを植えた。サツマイモの生産量が多量なので、自給自足は言うまでもなく、経済的価値もあったと考えられる。祁彪佳が妻とともに園圃で働けば、互いに親情の交換もできるし、家族の食生活を豊かにすることになったと考えられる。

(十一月) 三十日，同季超兄、鄭九華至寓山，先過柯園訪止祥兄梅巷屋式，遂定小軒三楹之址⁷²。

(一月) 十七日，偕止祥兄及齊五兄至寓山，壘石成峰，觀者幾不能辨真偽⁷³。

造園の企画や景勝を位置付けることなどに兄の季超と従兄弟の止祥が深く関与し、二人が寓園を鑑賞し、適切な意見を出していたことを推測させてくれる。

以上、祁彪佳が寓園で妻とともに家庭生活を享受したり、農産物を収穫したり、老母に孝行したり、子供と読書をし、兄弟と心を通わせるなど、祁氏家族の園林における活動に対する分析により、寓園が祁氏家族や親族の間の交流を促進し、祁氏家族の情感の深化のために架け橋の役を果たしたと同時に、読書、拝仏の場所としても使われていたということが明らかとなった。

さらに、祁彪佳の交遊関係を整理すれば、下表のようになる。

【表 4：祁彪佳交遊表】

交遊対象	出典(『祁忠敏公日記』)
兄弟、姻戚	①(二月)初七日，商家姑至，與老母及媵母至寓山，予烹泉以奉。時婦女遊觀甚盛，予避之繫珠庵中 ⁷⁴ 。 ②(八月)十四日……晚約諸兄弟全迅侯看月，舉酌於通霞臺 ⁷⁵ 。
僧侶	①(二月)十八日……午後雨甚，坐讀易居與無迹師閨楞嚴，証清淨本然，忽生大地山河業 ⁷⁶ 。 ②(十一月)十五日，至寓山，設齋延迓密、歷然、無量、無迹、一純、体量六禪師小坐 ⁷⁷ 。 ③(十二月)十九日，禮懺完二千四百佛，季父偕貌侄至山，共茹齋……体元、荆門、充符、一如諸師俱有寓山題詠，予得先後觀之 ⁷⁸ 。
官員	①(一月)初五日，得羅和陽公祖、李淡菴父母書，旋報謝之……及暮，許公祖過訪，近之于舟次，

	徑抵寓山，舉酌小起，談于溪山草閣，再舉酌于四負堂，以皆園送之，幾過于夜，雨中作別 ⁷⁹ 。
社友	①（七月）初八日……與放生社中友共飯六竹菴 ⁸⁰ 。 ②（四月）十三日，同汪照隣至山候楓社諸友……舉酌于四負堂，散憩山上，復酌舟中，與遊柯園、密園，酣飲至月上始去 ⁸¹ 。 ③（閏四月）初六日，延社中諸友至，共十有六人，社外不期而至者為江楚望、僧嬾先。皆能詩善畫，以扇頭見贈。飯後散步園中，分園中諸名為題，人各拈其一作五言律，再拈送倪康侯、懷周又新兩題，酣飲月上，燃燈照水，諸友顧而樂之，予以畫舫送之歸 ⁸² 。
その他	①（四月）二十日，與陳長耀、鄭九華至寓山巖石 ⁸³ 。 ②（七月）初二日……與方無隅、陳長耀至寓山商瓶隱為植種草花之所 ⁸⁴ 。 ③（九月）二十三日……午後出寓山，見張軼凡累石梅坡，大得畫家筆意，携小酌於溪山草閣 ⁸⁵ 。

「日記」に登場する人物を全て列挙することはできないため、概略で示すと、上記の通りである。祁彪佳の従兄弟である止祥と文載が造園に参加している。また、仏教信徒として祁氏と僧侶との交遊も少なくない。読経や拝仏に止まらず、放生、詩文唱和などの活動も寓園で行われていた。そして、祁彪佳が放生社や詩社の社友と交遊し、特に放生社の場合にはほぼ毎月8日にメンバーたちが集まっていたことが確認できる。詩社は楓社のほかに、雁社、萍社なども祁彪佳と深く関わっており、それらのメンバーと交遊し、園林で飲酒、作詩、月見、燃燈などの宴会活動を行っていた。寓園の造成に伴い、友人との遊園や観劇、作詩などが祁彪佳の主要な交遊活動になる。陳長耀、鄭九華、方無隅は造園協力者であり、祁氏家族に付き従う存在であろう。張軼凡は造園家として、寓園の修造を通じて交遊していた。他に、地方官とのやりとりは少なくなかった。祁氏のような有力な郷紳を通じて地方政務が実行されたと考えられる⁸⁶。祁彪佳は故郷にいる間に、地方官から僧侶まで幅広く交遊活動をしており、郷紳宗族の地元における影響力を窺わせてくれる。

（2）寓園空間の変遷

当時の大部分の園林主は私人園林を開放し、自由に遊覧客に出入させていたと考えられる。巫仁恕氏は江南地域の私人園林の公共化に関する分析を行っているが⁸⁷、それによれば、明代前期には贅沢な園林は多くなかった。その理由は個人の消費能力に限界があったほか、賦役制度とも関係があるという。嘉靖年間（1522-1566）になって、社会制度の変化や消費能力の向上により、江南地域の住宅が贅沢になり、園林を造るのも盛んになった。造園が風潮になって隣人の土地を強行的に徴用した事件もすくなくなかった。そのため、士大夫

の造園を風刺する著作が多く出てきた。このような世論の中で園林主が園林を開放し、一般的庶民に公共空間を提供することによって、園林主は自らの声望を高め、また世論の批判を避けることができるという利点があった。

そのほか、園林を維持するためには多額の経費がかかったので、園林を開放し、入園料を徴収して、維持費をまかなう必要があるという経済的な事情もあった。祁彪佳が寓園を開放したのも同様の事情によるものと推察される。

寓園が竣工して以来、遊覧客が絶え間なく訪問し、そのことが祁氏の生活に悪い影響を及ぼす状況も見られた。このような状況の中で、祁彪佳がどのように私人スペースを利用したのか、そして、祁彪佳が節義を守って命を捨てた後、寓園の日常空間がどのように変化したのかを本節で検証してみる。

「日記」に基づいて、時間の流れの中で、寓園は如何に利用されたのかを確認するために、以下の三つの時期に分けて分析する。

第1期：老母がなくなる前、崇禎八年（1635）——崇禎十三年（1640）

第2期：寓園の滞在時間が長くなる、崇禎十四年（1641）——崇禎十五年（1642）

第3期：紹興から離れた時期、崇禎十六年（1643）——順治二年（1645）

a 別荘として寓園

まず、第1期をみてみよう。崇禎八年（1635）10月に造園を開始してから、祁氏家族は寓園を別荘として利用し、しばらく滞在することもあったが、家はそのまま山陰県の旧宅にあった。崇禎十三年（1640）3月に祁彪佳の老母がなくなるまで、祁氏家族は園林をよく利用し、外来客もしばしば園林を訪問した。

寓園は私人園林であったが、開放の後、園林の一部は開放空間になった。祁彪佳はどのように遊覧者から家族の私人スペースを守ったのか。以下、検証してみる。

（十月）初七日、為謝父母作仁聲録序，戴君□光来晤，拜嬭母壽，薄暮携内子入山，遂宿於爛柯山房。

（三月）二十五日、招古道上人到園作静課，便道柯園同看牡丹。及入山，完璞師已待

于笛亭矣，頃之，鄒汝功偕兒侄訪季父即同之至山。午後季超兄亦至……微雨季父與季超兄先歸，予輩就宿于爛柯山房。

（四月）初九日……延醫袁六卿來診脈，予體倦就臥，寒熱如故。内子自果園⁸⁸來探病，宿於爛柯山房。

（十一月）二十一日、陳長耀、全鄒汝功入城，予出寓山，吳巡簡來候，是日老母至果園，日晚，邀内子至寓山，宿與爛柯山房⁸⁹。

妻を連れて寓山に泊まることや息子、甥たちと園林に泊まることなどを通して、祁彪佳は寓園に滞在していた。そして、宿泊の場所は「爛柯山房」が多かった⁹⁰。「爛柯山房」について以下のような描写がある。

寓園外望，山房在咫尺耳。乃從友石榭幾經曲折，始達於此，遊人往往迷所入。自約室拾級而下，意以為穴山之趾，及至，則三楹仍坐樹杪。主人讀書其中，倦則倚檻四望，凡客至，輒於數里外見之，遣童子出探。良久，一舟獨在中流也，時或高臥，就枕上看日出雲生，吞吐萬狀，昔人所為臥遊，獨借四壁圖畫，主人似較勝之⁹¹。

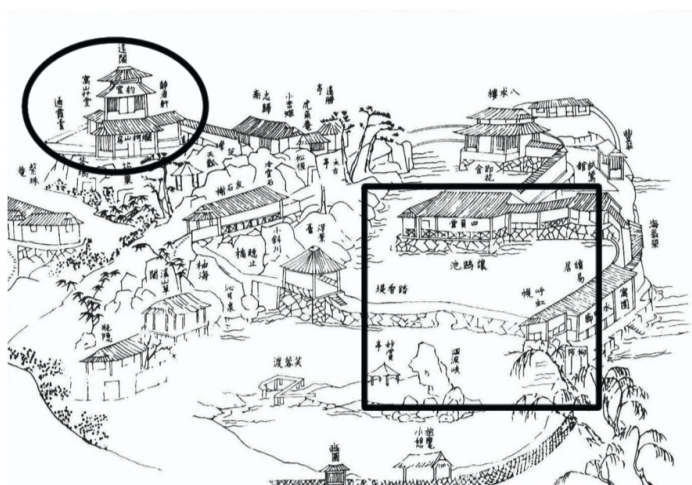
すなわち、外来客が彼方から寓山を望むと、まず目に付くのが山頂にある爛柯山房である。場所は「友石榭」から何度も曲がりくねって、「約室」から階段を降りてたどり着く。主人はそこで読書し、疲れた時は敷居にもたれていた。もし客が至ると、遠くから主人は見えた。そこには、祁彪佳の私人空間を守りたいという意識と同時に、外界からの邪魔を避け、隠遁する気持ちがうかがわれる。祁彪佳がここに泊まったのは爛柯山房が私人空間の象徴となっていたからであろう。

また、ほかの家族成員の寓園における活動に関して、以下のような記載がある。

（一月）初六、……予送老母及表娣、内子至寓山，商家姑母已先待矣，老母定居於靜者軒。予歸，延玄子、酉度小酌。陳長耀至，送玄子去，宿於山中之約室⁹²。

崇禎十二年（1639）1月6日、祁彪佳が老母、妻などの身内の女性たちを寓園に連れてきたが、この時商氏の叔母が寓園で彼らを待ち受けていた。また、「十八日，予先歸，老母携商家姑及諸媳亦自山中歸⁹³。」とあり、老母たちは二週間近く「靜者軒」に住んでいた。「與草堂若連雞然，而勢稍南，軒三楹⁹⁴。」とあることから、「靜者軒」は「寓山草堂」と繋がり、

南に面した三軒の部屋で、寓山草堂とともに山の高い所にあった。そして、祁彪佳はこの間、「約室」に泊まった。



【図 11：寓園空間利用図 A】

「爛柯山房」「靜者軒」「寓山草堂」「約室」の場所は【図 11】の楕円に示したように、入り口と遠く離れた山の裏の高い所にある。複雑に入り組む建物が観覧客を迷わせて、自分及び家族の身を隠し、清浄な空間を提供している。

一方、祁彪佳の友人の寓園での活動場所はどこであろうか。

（一月）初五日……許公祖過訪，近之於舟次，徑抵寓山，舉酌小起，談於溪山草閣，再舉酌於四負堂。

（四月）二十八日，微雨。石工午後方至，巡間吳科鸞參候，晚雨，共酌於讀易居。

（五月）十二日……至寓山，草續註數段曲，廊於是日肇工。午後，内子至，晚待月，與長耀小飲讀易居，乃歸。

（八月）十四日，秋分。舉祭於宗祠，與陳長耀、德公、止祥兩兄、文載、翁艾兩弟及金大來至寓山，邀張宗子、介子至，平子後至，舉五簋之酌，已興，同遊彤山，再至寓山，燃燈月下，月色甚皎。小酌於妙賞亭。聽介子所攜優人鼓吹，又登遠閣望月。

（十一月）十六日……與德公兄、奕遠侄至寓山，延王幾雲，王士美至，遊園罷，舉酌於四負堂⁹⁵。

史料から、「讀易居」、「四負堂」、「妙賞亭」は、祁彪佳の友人たちと会合、飲酒、世間話をする場所として使われたことが多かった。これらの建物は【図 11】中の四角の中にある。麓で入り口に近い場所であった。もちろん、祁彪佳が友人を誘って「遠閣」「靜者軒」「寓山草堂」などの祁氏家族の生活空間に入った例もあるが⁹⁶、史料から分析すると、祁氏家族

の活動場所が山頂にあるのに対して、祁彪佳と彼の友人との活動を行う場所は麓にある場合が多かった。こちらは交遊空間であったと思われる。

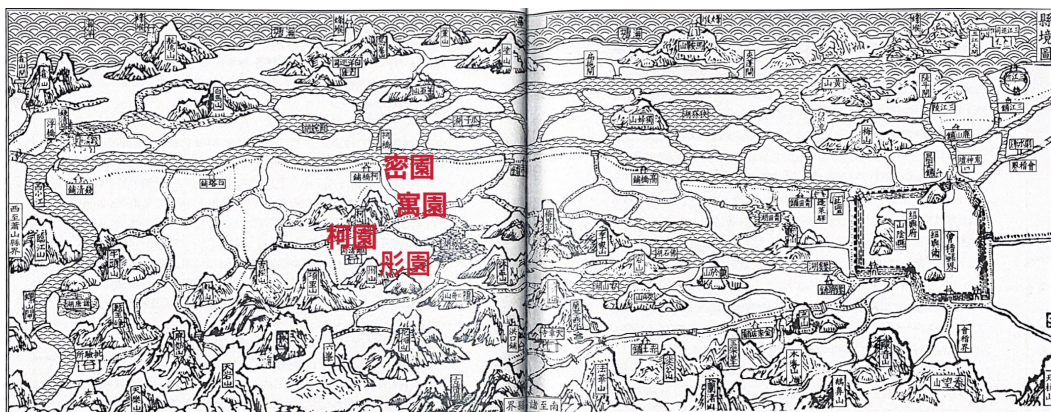
祁彪佳と寓園を訪れた人との活動地域は寓園に限らない。

（七月）初五日，偕鄭九華、王朝鑰至柯園，邀止祥兄至寓山。方披襟共話于虎角菴，適張宗子來訪，共飯於靜者軒。宗子出陳章侯所書聯扁，為予指點修築，殊為山林增勝。歸而小憩柯園，予先抵家，宗子舟遊密園乃別⁹⁷。

（二月）初七日，霽。歸省老母，即至高橋，候岳父同怡軒外叔及劉君三人。先抵新宅，後至寓山，舉酌四負堂。以小舟遊柯山及彤園，王雲岫出，設茶相餉。登舟再酌，送之抵新宅，乃別。予仍至山宿，得總戎馬冏伯書，燈下復之⁹⁸。

張宗子（張岱）が訪ねてきて、一緒に静者軒で食事した後、宗子は陳章侯が書いた扁額、対聯を出して、造園の技巧を教示してくれた。帰りに柯園で休憩して、私（祁彪佳）は先に家に帰り、宗子は船で密園を遊覧してから帰った。

七日、高橋に行って岳父（商周祚）、叔父の怡軒、劉君を待っていた。まず新宅に至り、その後寓山に行って四負堂で酒を飲んだ。小舟で柯山及び彤園を遊覧すると、王雲岫が接待してくれた。船に乗ってまた酒を飲み、彼らを新宅に送ってから別れた。私（祁彪佳）は元どおり山に泊まり、総戎馬冏伯（王士驥、万曆十七年（1589）進士、父王世貞）の手紙を受領したので、返信した。



【図 12：密園、柯園、寓園、彤園分布図】
（『嘉靖山陰県志』「山陰県境図」に基づく加工）

要するに、大事な友人や親族が訪れると、基本的には密園、柯園、寓園、彤園を遊覧させる。密園は祁彪佳の父親である祁承燝の園林（祁彪佳が継承）である⁹⁹。柯園は祁彪佳の

従兄弟である止祥の園林である¹⁰⁰。彤園は祁彪佳の親友である王雲岫の別荘である¹⁰¹。彤園は寓園の南側にあり、柯園のすぐ近くにある。祁彪佳は止祥とよく彤園に赴く一方、王雲岫の姿も寓園によく現れる。これらの園林は寓園に近く、しかも祁彪佳の親友や従兄弟の園林であるため、寓園との関係が密接である。訪問者にとって、密園、柯園、彤園は寓園空間の延長線上にある遊覧空間であろう。

次に、遊覧客が入れる開放空間及び祁彪佳の遊覧客に対する態度を論じたい。祁彪佳が残した史料には「遊人」に関する記載が少なくない。

（一月）初二日，出拜祖墓，自桐山至梅裏，訪陳介圭，歸訪王雲岫，昆季，及釀泉橋予易小舟至寓山，遊人鱗集¹⁰²。

正月2日、寓園で遊客が集まった場面が記されている。

（一月）十五日，老母至寓山，予先至，掃逕以待遊人。竟日士女駢聯，喧聲如市，亦園庭未有之盛也¹⁰³。

祁彪佳が寓園の道を掃除して観光客を待つことから、彼が積極的に「遊人」を歓迎したことがわかった。「遊人」がどこまで観覧できるかは不明であるが、祁彪佳の詩である「寓山士女春遊曲」を通して寓園の「私人空間」と「開放空間」を窺うことができる。

鶯舌初調聲一剪，隔窗喚起檀痕淺。桃花水發湖面平，魚苗風送蘭舟行。
橫塘路繞垂陽裏，畫閣朱欄天半起。十八女兒繡帶長，大堤步步印泥香。
相呼相喚鴛鴦隊，姑攜新婦姊攜妹。吹起芳蘭散作雲，暖風蹙縵湘水裙。
臨波自照芙蓉面，斜趁落花同舞燕。長松古石翠碧叢，忽見千朵萬朵紅。
青鸞尾約靈蛇髻，寶璐明璫聲細細。映竹穿花渡小橋，倚徒樓頭纖瘦招。
曲徑乍迴邏袂舉，笑靨微開如欲語。紫帽黃衫夾道來，避人側入藏春隈。
兒郎指點新妝好，錯認倡樓蘇小小，玉勒青蔥伴墮鞭，脂粉從中若個憐。
夢入名花酣量頰，願作枝頭變蛺蝶。桌歌半出綠雲間，鷗鳧驚起銀塘灣。
對面晚山銜落日，笙簫十裏猶聞溢。花外輕穿金縷聲，遊人一齊回首聽。
念奴嬌詞歌一闋，空山叫落杜鵑月。誰肯秉燭良夜過，為歡不足可奈何¹⁰⁴。

この詩は寓園へ観覧に来た女性たちの活動を紹介している。最初に、若い女性たちが船で

遠くから近づいて寓園に入った情景が描かれている。大勢の人でまがりくねった小径を歩きながら園林を遊覧していた。そして、若い男女が寓園でこっそり会う恋愛中の乙女の様子も描いている。夜になり、笙の音が鳴り、人々が次第に散らばり、静かな寓園が残っているという画面で詩を結んでいる。詩の中では園林主と客の居場所を明確に書いてはいないが、客の活動や寓園の全景を見渡せるという側面から、祁彪佳は寓園の高い所にいたと考えられる。前文で言及したように、主人が「爛柯山房」で、「凡客至，輒於數裏外見之」とあるように、すなわち、客が来たら、「爛柯山房」にいる祁彪佳の姿を遠望することができた。つまり、園林全体を一望できる祁彪佳が「爛柯山房」にいる可能性が高い。園林は開放されたが、祁彪佳に誘われた客以外の遊覧客が園林のどこにでも行けるわけではない。祁彪佳は、遊覧客と直接に接するのではなく、距離をとって第三者として遊覧客の行動を観察した。園林主が自分及び家族の「私人空間」を守っていたということがわかる。

上述のように、寓園の空間は所有者である祁彪佳の意志によって「私人空間」と「交遊空間」、「開放空間」の三種類に分けて使用されていた。まず、「私人空間」は基本的に祁彪佳及び家族、友人との活動場所を提供しているが、記載されている史料から見れば、祁彪佳本人及び家族が活動を行う範囲としては、大体「爛柯山房」「静者軒」「寓山草堂」「約室」（楹円部分）などとなる。これらの場所は山の裏の高い所にあり、複雑に入り組んだ建物が観覧客を迷わせる配置になっており、祁彪佳が家族の身を隠して清浄な居場所を確保したことが窺える。家族との「私人空間」が山頂にあるのに対して、友人と交際する「交遊空間」は麓にある「讀易居」、「四負堂」、「妙賞亭」（四角部分）である。そして、「寓山士女春遊曲」に観覧にきた淑女への緻密な観察、描写から、園林主は静かな部屋で目の前の景勝を楽しんでいた。加えて、観覧客は園林の室内に入ることはできなかつたと推測される。寓園の「開放空間」は建物以外の園林全体と考えられる。

b 第二の住宅としての寓園

崇禎十四年（1641）—崇禎十五年（1642）の間は、第1期と比べて寓山詣での回数は減っている。その代わり寓山に泊まりこみ、住むことが次第に多くなり、造園事業を絶え間なく続行する。

まず、第2期のうち寓園に居住する期間を二つに分ける。

① 崇禎十四年（1641）8月—9月

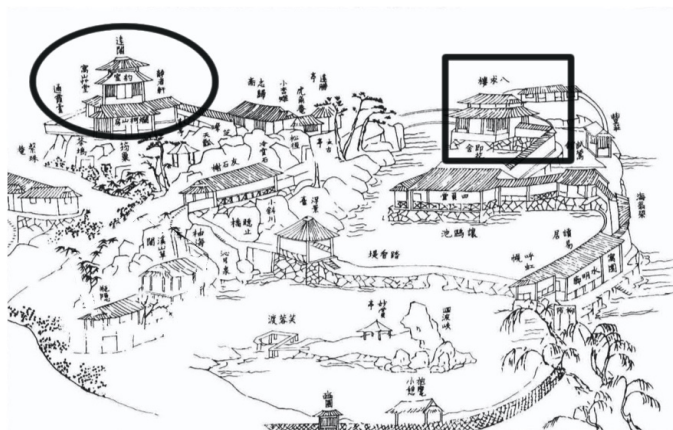
（八月）初八日，移家至寓山，兒輩讀書於静者軒，邀林燕公、陳石人與鄭季公小酌于四負堂¹⁰⁵。

（八月）十七日……午後，坐爛柯山房校閱活民書，内子後予至山。擴八求樓下臥室成，移居之¹⁰⁶。

② 崇禎十五年（1642）2月—6月

（二月）初七日，微雨。内子攜家至寓山，宿于八求樓，鄒汝功與二兒暫宿咸暢閣¹⁰⁷。

（二月）初八日……整書於爛柯山房，兒輩讀書于静者軒及約室¹⁰⁸。



【図 13：寓園空間利用図 B】

山頂の静者軒や約室は息子たちの読書室であり、爛柯山房を書房として利用していたようである。祁彪佳は麓にある八求樓に居住していた。八求樓は豊莊の後ろに位置する。山頂部分は読書所（楕円部分）として利用されていて、祁彪佳らの住居（四角部分）は麓に設置された。

（八月）二十七日，霽。翁艾弟同王宗城出，借居於溪山草閣及瓶隱¹⁰⁹。

翁艾は祁彪佳の弟である。彼は王宗城と「溪山草閣」及び「瓶隱」を借りて住んでいた。場所は西麓あたりである。そして、寓園に移住した人は上記の二人のほか、造園協力者である鄭九華と方無隅もいる。

この時期祁彪佳は「四負堂」「讀易居」よりも、新築した「咸暢閣」、「老樟硯」、「絳雪居」などの景勝で友人と交遊していた。残念ながら、これらの建物の園内における正確な位置は不明である。また、「遊人」の姿は現れておらず、崇禎十四年（1641）2月26日の日記によれば、「寓山桃花盛開，遊人以閉門謝客多徘徊而去¹¹⁰」、即ち、寓園に泊まるが増えるとともに、大門を閉じる時が多くなったようである。

c 避難所としての寓園

第3期の崇禎十六年（1643）—弘光元年・清順治二年（1645）

この時期に明朝が滅亡し、その後、福王政府が南京に自立した。清兵の南下に伴い、程なく南京の弘光政権が全滅した。潞王が監国となったが、清兵に投降したため、明朝の官兵は浙東地域に後退した。明王朝の滅亡寸前から潞王の投降までという社会状況の中で、園主不在の時期が多かった。崇禎十五年十一月初頭、祁彪佳が俄かに官命を受領して、北京へ向けて離郷した。翌年の十月十三日午前、彼は家に帰り着くが、長旅にもかかわらず、午後にはもう園に顔を出している。また、崇禎十七年三月から十二月まで、九ヶ月不在の時期があった。この時期、祁彪佳は庭師である張漣（南垣）の息子軼凡を寓園に迎えた。崇禎十六年十一月四日「張軼凡移寓志歸齋」のように、張軼凡が志歸齋に移住した¹¹¹。また、この期における寓園の変貌は相変わらず目まぐるしく、築山、移築、改造や改築などの作業が多かった。

（九月）二十七日，去踏香堤，改歸雲寄之南為樓廊，接咸暢閣。翁艾弟同孫鐵骸至山，留之宿。種冬青於寓園之門前……¹¹²

（一月）十一日，風寒。攜家眷至寓山，方無隅仿張軼凡之製，累石於歸雲寄，予與内子定居于遠山堂¹¹³。

「寓山注」によれば、遠山堂の場所は、

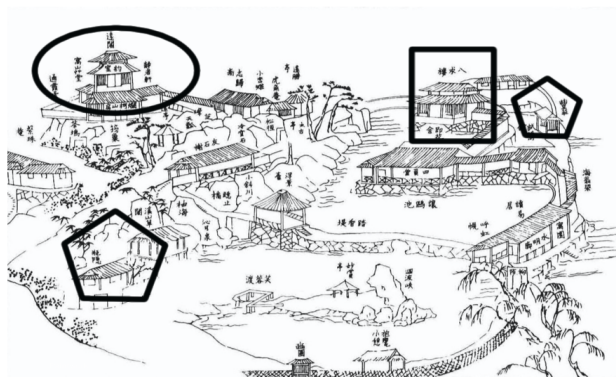
園之後，莊之前，兩堂相望，中隔一樓，在園者將以四負名矣，在莊者方以倚傍林巒為快。遠山堂は豊莊の前にあり、四負堂と一つの楼で隔てられている。この楼は八求楼と考えられる。

（二月）初一日，静者軒後墻始竣工，山之上便于關鎖，予乃移居為養病之地¹¹⁴。

最初に麓辺りに居住したが、静者軒（楯円部分）の後ろに壁が竣工すると、そこに移居した。静者軒の後ろに壁を造って、閉鎖をするのは戦乱の時に家族の安全を守る準備をしていたのであろう。

（二月）二十二日……蔣安然携家居于豊庄。孝廉俞君世擲來謁。薄暮，與諸友共酌看桃花¹¹⁵。

（四月）二十八日，霽。見日色好，先至山，供兩先人小像於虎角菴。少頃，内子携女媳至，居於咸暢閣及八求樓。徐伯調携二兒居於静者軒一帶，祝季遠亦自城中携家來，居園之西隅¹¹⁶。



【図 14：寓園空間利用図 C】

この時期に、静者軒は祁彪佳の「養病之地」として利用されていたが、基本的には息子の読書所と考えられる。また、妻は家族の女性を寓園の咸暢閣と八求楼（四角部分）に安置することや友人たちが家族を連れて城中から寓園に移住する（五角形部分）ことから、戦乱によって寓園は別荘から避難

地になったことがわかる。

なぜ寓園に避難したかという点、寓園の所在地である寓山は柯山の支脈で、西側が柯山で、残りの三面は皆水に臨む。紹興府城と水で隔てているため、より安全な地域だったからかもしれない。

（3）祁彪佳のいない寓園

祁彪佳は弘光元年（1645）、南京が陥落した後、国難に殉じた。祁彪佳のいない寓園の日常空間にはどのような変化が見られたのであろうか。

……初五日、攜子里孫出山。抵家、已絶粒三日。給家人曰：吾當至杭面辭。遂飲啖、神色怡和、舉家咸不疑有殉節事。至寓山、顧謂子理孫曰：昔文信國臨終、貽書其弟、囑以文山為寺。吾亦欲捐此為淨業地、汝其善承吾志¹¹⁷。

寓山興造是我失德……寓山山下堂樓一帶、我欲舍出作寺。可與四伯伯及請名僧酌之、稍一改作、以成道場規模。其山上及讀書一帶、仍作爾等書房……時危世亂、還以山中為穩、即不能盡棄梅市舊居、亦須在鄉日少、在山日多、可與四伯伯仔細商量。若可竟然入山、終是得策。內宅書房有欲典買者、可即典賣、以為山中之計。此非花消祖業也、時勢使然、將來子孫居山中、必返醇樸、一變豪華氣習矣¹¹⁸。

祁彪佳が寓山の「四負堂」「八求樓」の辺りを寺に寄進してほしいと遺言したのを受けて、子供たちは具体的な事務を「四伯伯」、すなわち、季超及び僧侶と相談して、寓園の麓の一带を寺院に改築し、山頂及び読書のあたりはそのまま息子の書齋にした。祁彪佳は、乱世の中で、子供たちが山中に留まって戦乱を避け、将来の子孫が山中の生活のような、本来の素朴な姿に戻るようにと遺言した。「行實」と「父臨訣遺屬付兒理孫班孫遵行」をあわせて分析すると、のちに寓園のふもとのあたりが寺院になり、祁氏家族が山頂を主な活動場所としたと推測できる。

祁彪佳が亡くなった後、祁鴻孫¹¹⁹は彪佳の志を受け継ぐため、武装蜂起したが、その際、理孫、班孫は家の財産をなげうって、鴻孫を支援する活動を行った。また理孫、班孫は朱士稚、魏畊、錢纘曾と密接に往来し、清に反抗する運動に参加したため、魏畊、錢纘曾の暴露により、二人とも逮捕された。祁氏の門客が役所に賄賂を送って、理孫は釈放されたが、弟の班孫は寧古塔に放逐された。その後、理孫は門を閉めて客を謝絶し、鬱屈のうちに死んで、詩文もほぼ散逸した。班孫は仏門に入って、馬鞍山寺の呪林明大師になった¹²⁰。

ここからみると、祁理孫と祁班孫は父親の遺志に従わず、反清運動に参加した。財産がなくなり、理孫の死、班孫の出家に伴い、寓園が祁氏家族の衰退とともに没落したと考えられる。

祁彪佳の妻である商景蘭の『錦囊集』から、衰退する寓園の様子が窺える¹²¹。

「寓園」

舊苑荒涼地，重來倍有情。滿園梅綻白，兩岸柳舒青。
芳草叢叢發，飛泉處處鳴。晚鴉催日暮，還傍月光行。

「寓山看芙蓉」

水面芙蓉紅滿舟，兩堤衰柳不勝愁。夕陽西下長天色，雙淚何時盡碧流。

「點絳脣」

春色溶溶，兩堤楊柳舒金線。韶光如電，頃刻飛花片。
金谷依然，景在人難見，閒遊遍，深深庭院，半是蠶蛸冢。

商夫人が再び寓園に行ってみると、寓園の風景は祁彪佳がいた時と変わらないにもかかわらず、「深深庭院，半是蠶蛸冢」とあるように、庭園の半分ぐらいは蜘蛛の巣が張り巡らされ、庭園は「荒涼地」に成り果て、誰も手をつけていないようである。昔の賑やかな寓園とは景色が一変していた。この時、彼女が見た寓園は、かつての老人を支え、幼児の手を引くような温かく安らぎのある空間ではなく、思い出を呼び起こして心を痛める空間に変わっていた。

以上、祁彪佳が国難に殉じたあとの寓園の日常空間の変化を分析した。祁彪佳の遺言には、家族や子孫が戦乱を避けて寓園という安全な「空間」で清逸な生活を存続することを願う心情がうかがわれる。しかし、寓園が祁彪佳の意思に従って使用されなかったのも現実である。寓園は「荒涼地」となって、昔の場所ではなかった。寓園の「空間」を支配する祁彪佳が国難に殉じて姿を消し、彼の子供たちも父親の遺志に従わず、家族の「日常空間」も祁彪佳の願いとは異なって消滅する結果を迎えたのである。

以上のように、寓園の「空間」の変化は祁彪佳や祁氏家族の活動と緊密に関わっていた。園林主である祁彪佳の計画により、寓園の「空間」は「私人空間」、「交遊空間」、「開放空間」に分けられ、祁氏家族及び彼の友人、そして遊覧客の活動に場所を提供した。また、寓園は一度祁氏家族の居住する場所、そして避難所になってしまった。その後、祁彪佳の死亡によって、寓園の麓周辺を寺院に寄進し、理孫、班孫の清に反抗する運動への参加によって「空間」が消失するという結果に至った。祁彪佳及び家族の存在は寓園の「空

間」を生み出したが、その「空間」の消滅に至る寓園の変化には祁彪佳及びその家族像がよく反映されていると理解することができよう。

6. おわりに

明代中期以後、江南地域は造園が盛んに行われた。とくに官途での挫折が士大夫造園の重要な理由となった。明代で、園林が全盛期を迎えるのはいくつかの理由が挙げられる。

まず明代末期の政治腐敗である。失意した士大夫が帰郷して造園に熱中する。そして、賦役制度や商品経済の発展が造園事業を推し進めた。更に、郷紳勢力の形成が造園宗族の出現を促進した。最後に、園林主はエリート層に留まらず、商人が官位を買うことを通じて、社会地位を高め、文人士大夫と比肩するために造園グループに入ることもその理由の一つであった。

紹興は人材輩出の土地として、私家園林の数量をみれば、蘇州と比肩される存在であった。また、「越中園亭記」のような造園を専門とする著作も誕生し、園林文化が非常に盛んになったと考えられる。

紹興の私家園林は万暦年間から流行し、城内、城外共に多く营造された。城内の早期の私家園林は「三山」からはじまり他地域へと分布したと考えられる。城外の場合は鑑湖周辺と城南に私家園林が集まる傾向が見える。明代紹興の私家園林の多くは郷紳宗族に造られ、一族の造園事業が持続的に繁栄することは郷紳の勢力を示した。

また、祁彪佳が紹興（山陰、会稽）の私家園林の調査をした上で、寓園を造ったことから、寓園は明末の紹興私家園林を代表している可能性が高いと考えられる。寓園は祁彪佳の官途失意後、思いを寄託した存在であり、家族への感情を代弁するものでもあった。寓園の修造がずっと続いていたことによって、内部空間は絶えず変更していた。また、「日記」に基づいて分析を行い、異なるそれぞれの時期に別荘、住宅、避難所として利用された寓園の多様な機能を明らかにした。そして最後には祁彪佳が自分の意志で作った寓園の空間は社会変動に伴って変化し、彼の死亡に伴って消失していくこととなった。

明清交替の中で、私家園林の内部空間の変動が確認できたが、全体的にみて紹興私家園林にどのような変動が生じたかということは今後追及すべき課題である。

【表 5：明代紹興私家園林表】

番号	名称	園林主	場所	時代	特記
出典①『成化新昌県志』卷九「第宅」					
1	沃洲耕釣処	呂昇	新昌天姥山	洪武	養親之所
2	松隱	劉文輝	新昌南明山	洪武	
3	槃齋	張世賢	新昌天姥山		
4	小小齋	呂昇	新昌県治後	明初	
5	遺安齋	丁義	新昌	明初	刑部主事
6	壑舟	陳仲初	新昌	洪武	本学訓導
7	宝慶堂	楊恭惠	新昌		左僉都御史
8	龍峰讀書処	徐志文	新昌龍峯		工部郎中
9	皆山堂		新昌		
10	耻齋	呂昌	新昌県治後	天順	陝西按察使
11	芹谷朴処	董廉	新昌		永寧学諭
12	宝台堂	俞用貞	新昌縣治東	永樂	
13	寿春堂	俞振才	新昌忠信坊内		行人
14	東溪草堂	俞欽	新昌縣治東北隅		礼部左侍郎
15	貧樂齋	何泰	新昌候仙門	成化	工科給事中
出典②『万曆紹興府志』卷九「古蹟」					
16	星宿閣		臥龍山麓城隍廟西偏		
17	中天閣	王守仁	龍泉山之半		聚徒講学
出典③『越中園亭記』					
城内					
18	表海亭		巖山之巔、即古兼山亭址		
19	洪園	呂胤筠、王業浩	巖山之脊		
20	筠芝亭	張天復、張汝懋	臥龍山右巔之下	正徳、万曆間	
21	斫園	張汝霖	臥龍山之旁	天啓	
22	蒼霞谷	張耀芳	臥龍山蓬萊閣西	万曆、崇禎間	
23	萬玉山房	張元忭、張聯芳	臥龍山	万曆、崇禎間	
24	巖花閣	張炯芳	臥龍山之南麓		
25	詠雛堂	商周祚		天啓	
26	曲池	陳海樵、朱君二儒	羅墳之西		読書処
27	快園	諸公旦、張岱	臥龍山之陰		
28	千峰閣	陳海樵、朱鼎臣	臥龍山快園之半		
29	有清園	胡青蓮	臥龍山之西偏		
30	兼霞園	趙淳卿、王業洵	巖山		
31	秋水園	朱賡	龜山	嘉靖、万曆間	
32	東武山房	朱賡	龜山	嘉靖、万曆間	
33	蜨園	王思任	居第前	万曆以後	
34	白馬山房	陳太一	白馬山之陽(巖山東北)		後為劉念台、陶石梁講学地
35	選流園	徐岱淵	城東		
36	來園	金蘭	宅後		
37	樛木園	呂本	府南二里	嘉靖、万曆間	
38	耆園	岳陽錢公			
39	天庄	兩臯黃公	宅東		
40	曲水園	祁汝森	臥龍山	嘉靖、万曆間	
41	芸圃	劉宗周	巖山	天啓、崇禎間	講学処
42	賁園	諸大綬	府庠旁	嘉靖、隆慶間	即南明書院
43	澄玉亭	葉震山	若耶溪旁		
44	躍雷館	商周初	城東		
45	趣園	董亦大	城東軍器局		
46	環翠軒	徐渭、王咸所、爾吉舅	府庠旁	嘉靖、万曆間	読書処

47	浮樹園	陳汝元、陳樹功	長橋之東		
48	不二齋	張元忬、張岱	山陰城隍廟左	嘉靖、万曆間	
49	泳澱園	張百裏	若耶溪旁		
50	王公書舍	王泮	大善寺旁	万曆以後	山陰縣東北
51	採菽園	孫如洵	臥龍山之陰		
52	竹塢	諸大綬	靜林巷	嘉靖、隆慶間	別業
53	漪園	俞友之	府庠之東		
54	王家庄		入稽山門、羅隱墳前		
55	樂志園		天庄之傍		
56	竹素園		樂志園北		
57	絃圃	王敬同、祁鳳佳	臥龍山後、快園相對		證仁社諸友居停所
58	酬字堂	徐渭		嘉靖、万曆間	
59	文漪園	林五磊	倚常慶寺後		
60	亦園	金乳生	龍門橋		
61	墨池	王生白			
62	磻園	王雲嶽、王海墨	杏花寺旁		
63	可也居	沈玉梁	西門內		
64	桔槔園	曾謙甫	郡巒東北		
65	水天閣	商小駝	龍華橋		
66	豫園	錢德輿	若耶溪內		
67	桐楓館	陳洪綬	讓簷街之後	万曆以後	
68	馬園	馬翼倩	魚化橋旁		
69	起臥山房		臥龍山雷殿之旁		
70	寶綸樓	謝遷	題扇橋（巖山下）	成化、嘉靖間	
71	今是園	邢洪瞻	巖山下		
72	西壁堂	朱箭里			
73	漁來館	朱賡	龜山	嘉靖、万曆間	
74	陳園	陳小集	草貌橋北		
75	袍園	徐仲宜			
76	嘉瓜樓	董中丞			
77	一柏園	袁雪堂			
78	讀書台	商廷試	宅後	嘉靖、隆慶間	
79	獨石軒	董祀	山陰縣北四里東中坊	弘治、嘉靖間	松化石
80	偶鹿山房	尹明經	巖山之西		課子
81	衣雲閣	倪元璐	府學之東	崇禎	
82	擁城居	鄭上舍	水神廟旁		
83	寒玉館	沈相如			
84	科蚪園	姜氏			
85	衡樓	祝氏			
86	梅花館	葉氏			
87	且巢				
88	即是山居		靜林巷		
89	蘭范園				
城南					
90	天鏡園	張汝霖	出南門里許	万曆、天啓間	
91	宜園	朱雲崢	樵風涇		
92	怡園	錢麟武	小隱山下		別業
93	南華山房	張元忬		万曆、崇禎間	遊息地
94	衆香園	張耀芳	中堰	万曆、崇禎間	常禧門外
95	柳西別業	劉淡尹	鑑湖之濱		
96	鏡圃	王業浩	三山之下		
97	阜庄	陸汝阜	稽山門外		別業
98	水鏡山房		馬家埠至爐峯間		
99	表勝菴	張汝霖	九里山、城西南	万曆、天啓間	
100	龍筠庄	呂元、姜宗伯	南山		
101	藝圃	陳明吾	在偏門外		
102	鏡波館	張天復	出南門里許	隆慶	越中園亭開創
103	淡園	王業浩	鏡圃稍北	万曆以後	
104	芝園		禹穴裏		
105	宛委山房	董懋中	禹穴之下、白馬池旁		
106	天瓦山房	張平子	表勝菴下	万曆、崇禎間	讀書處
107	菴園	王宛委	自九里出馬家埠		

108	洛如園	祝金陽	九里田間		別業
109	閒閒圃	王太学	琵琶山之南王家峯		
110	鑑園	劉墻	城南亭山趾		別業
111	謝庄		禹穴一小山下		
112	玉筍山房	金伯洪昆仲	南鎮廟前		讀書處
113	素園	葛上舍	大禹禪寺左側		
114	采菊園	朱集菴	平野中、面禹陵		
115	快閣	陸景鄴			祀放翁先生
116	遠圃	何繼洪	峽山沅溪		別業
117	何山園	何胤	出偏門南		隱居
118	果園	何繼洪	峽山前	万曆、崇禎間	靜修地
119	何園	何蘭若	近峽山		
120	章庄				
121	梅圃	馮氏	平水之下鑄浦		
122	遠偏樓	越女道坤			以丹青名於越
123	斐園	張煜芳	越之鎮神廟、香爐峰下	万曆、崇禎間	
124	松舫	馮氏	一家嶺		
125	大有庄	徐龍環	鑑湖之中		藝樹地
126	澗月亭	龔氏、胡璞完	城南謝墅村		別業
127	招鶴山房	陶文学	在謝墅山房		
128	亦在山房	張氏	蜈蚣山		
129	王庄	王戴缶	戴於山		
130	黃園	黃偉長			
131	鏡翠園	劉毅	三山下		
城東					
132	暢鶴園	陶崇政	曹山	万曆以後	
133	質園	商周祚	土城山	万曆以後	
134	土城山房	商為正、商周初	土城山		
135	少薇山房	葉繼山	出蠡城十余里		齊唐隱居處、多奇石
136	青棘園	陶崇道	石簣山房東	万曆	
137	石簣山房	陶望齡、江右李櫛	石簣山		山居此講學
138	鏡漪園	陶允嘉	陶堰下、去後樂園數十武	万曆	
139	麗澤小築	孟芬舟	未至遠門山數里		
140	瀕谷	陶崇謙	陶堰東		別業
141	後樂園	陶師賢	陶堰下	正德	別業
142	賜曲園	陶爽齡	陶堰府第中		
143	讓木園	陶允端	鏡漪之右		
144	歇菴	陶望齡			
145	叢雲閣	陶祖齡			會文於此
146	臙圃	陶履中	近白塔		別墅
147	觴濤園	錢懋士	會稽之東		
148	煙蘿洞	陶允宜	吼山	万曆	
149	遠閣	陶崇政	居第中		
150	野趣園	陸瑞亭	出都泗門不半里		別業
151	朗園	陶崇敬		万曆	別業、奉大士
152	鑑湖一曲	陶鳴埜	陶堰		
153	野芳園	陶允亨			別業
154	笑丸庄	陶養蒙	去白塔里許		
155	樵石山房	陶崇謙	去曹山五里		
156	流光堂	范雲岑	與觴濤園相望		
157	康家湖園	康天樂			
158	柳淑	周觀國	出倫塘北十余里		
159	玄對山房	陶履中			讀書處
160	修竹廬	陳紀常	上竈埠沿溪入二里		
城西					
161	密園	祁承燝		万曆	
162	彤園	王雲岫	鑑湖		
163	寓園	祁彪佳	寓山	崇禎	府城西南二十里
164	柯園	祁彥佳	梅市之西	万曆、崇禎間	
165	意園	合玄先生第三公	隣不暮軒		
166	不暮軒	沈合玄	城西數里		

167	錦浪園	朱氏	蓬萊驛後		
168	吞墨軒	王雲岫	鑑湖中		
169	棲真菴	王雲瀛	鑑湖中		
170	潘園	潘完寧	柯山		
171	柳城	孫如法	沙頭村		
172	孫庄	孫如法	江沱村		
173	胡庄	胡氏一孀婦	鑑湖之西		
174	永園	祁彪佳兄			
175	花庄	吳兌	郡山下、去洲山一二里		
176	涉園	周文学	前梅村		課子処
177	灌谿書舍	周君	从楞里西至九眼橋之南		
178	假我堂		石堰山下		
179	水竹居	王雅菴	徐山前沈家坂		
城北					
180	深柳誦書堂	季方			
181	碧園	朱士服	海塘之外		
182	硯園	趙叻仲	華舍平野中		
183	不明	趙伯章	滬後村		
184	儵游館	朱衡岳、朱仲含	去白洋數里、面金白山		
185	瓜渚湖庄	蕭氏、朱箭里	梅墅北		
186	臚園	程昆玉			
187	不明	呂胤昌	王城寺旁	万曆以後	
188	千頃庄	呂氏			
189	不明	王囟南之子静虛			誦書処
190	息園	龍泉令宋天岳			
191	似園	楊孝廉石攻	安昌之北		
192	素景園	陳君			誦書処
193	崑園	路庄王氏			誦書処
194	不明		擷頭		
195	不明	胡訖生	東鋪		
196	不明	沈大寧			
197	不明				
198	不明				
199	不明				

- ¹ 童寯『江南園林志』(中国工業出版社、1963年11月)、杉村勇造『中国の庭』(求龍堂、1966年9月)、劉敦楨『蘇州古典園林』(中国建築工業出版社、1979年10月)、陳從周『說園』(同濟大学出版社、1984年11月)、彭一剛『中国古典園林分析』(中国建築工業出版社、1986年12月)、陳植『陳植造園文集』(中国建築工業出版社、1988年6月)、岡大路著、常瀛生訳『中国宮苑園林史考』(農業出版社、1988年5月)、周維權『中国古典園林史』(清華大学出版社、1990年12月)、張家驥『中国造園論』(山西人民出版社、1991年8月)、汪菊淵『中国古代園林史』(中国建築工業出版社、2006年10月)。
- ² 陳植、張公弛選注、陳叢周校閱『中国歴代名園記選注』(安徽科学技術出版社、1983年9月)、趙厚均校訂注釈、陳叢周、蔣啓靈選編『園綜』(同濟大学出版社、2004年1月)、邵忠編『蘇州園墅勝蹟録』(上海交通大学出版社、1992年4月)。
- ³ 王勁韜「中国皇家園林叠山研究」(清華大学博士学位論文、2009年5月)、顧凱「中国古典園林史上的方池欣賞：以明代江南園林為例」(『建築師』、第145期、2010年3月、pp. 44-51)、梁明捷「嶺南古典園林風格研究」(華南理工大学博士学位論文、2012年10月)。
- ⁴ 李世葵「『園冶』園林美学」(武漢大学博士学位論文、2009年10月)、謝華「『長物志』造園思想研究」(武漢理工大学博士学位論文、2010年3月)。
- ⁵ 顧凱『明代江南園林研究』(東南大学出版社、2010年3月)、魏嘉瓚『蘇州古典園林史』(上海三聯書店、2005年11月)、他に郭明友『明代蘇州園林史』(中国建築工業出版社、2013年5月)がある。
- ⁶ 王毅『園林与中国文化』(上海人民出版社、1990年5月)、曹林娣『中国園林文化』(中国建築工業出版社、2005年5月)、董雁「明清戲曲与園林文化研究」(陝西師範大学博士学位論文、2012年5月)。
- ⁷ Joanna F. Handlin Smith. 1992. *Gardens in Ch' i Piao-chia' s Social World: Wealth and Values in Late-Ming Kiangnan*, *The Journal of Asian Studies* 51(1) pp. 55-81.
- ⁸ クレイグ・クルナス著、中野美代子、中島健訳『明代中国の庭園文化：みのりの場所/場所のみのり』、青土社、2008年8月。(原著はCraig, Clunas. 1996. *Fruitful Sites : Garden Culture in Ming Dynasty*)

China, Duke University Press, Durham.)

- ⁹ 巫仁恕「江南園林與城市社會—明清蘇州園林的社會史分析」『中央研究院近代史研究所集刊』第61期(2008年9月)。これに関する内容も『優游坊廂：明清江南城市的休閒消費與空間變遷』(台灣中央研究院近代史研究所 2013年3月)に載せられた。
- ¹⁰ 康格温『「園冶」與明代江南的文人園林』新加坡国立大学中文系博士学位論文、2010年8月。
- ¹¹ 曹淑娟『流變中的書寫—祁彪佳與寓山園林論述』里仁書局、2006年3月。同『在勞績中安居—晚明園林文學與文化』(台大人社高研院東亞儒學研究中心、2019年12月)は祁彪佳死後、寓園の變化及び祁氏家族の境遇を論じている。同『祁彪佳詩傳—遠山堂詩詞編年校釈』(聯經出版事業股份有限公司、2020年9月)は寓園に関する詩作に触れている。
- ¹² 荒井健「明末紹興の庭—祁彪佳と寓園について」『中華文人の生活』、平凡社、1994年1月。
- ¹³ 趙海燕『「寓山注」研究—圍繞寓山園林的藝術創造與文人生活』安徽教育出版社、2016年4月。
- ¹⁴ 嚴嬌「明末紹興祈氏園林與文學研究」西南大學碩士學位論文、2020年6月。
- ¹⁵ (清)張廷玉ほか撰『明史』(商務印書館、1958年12月)卷七十八志第五十四、「食貨志二」。
- ¹⁶ 『明史』卷六十八志第四十四、「輿服四」。
- ¹⁷ 李永鑫主編『紹興通史』(浙江人民出版社、2012年10月)傅振照著第四卷第二章「明代的紹興」による。
- ¹⁸ 趙素文『祁彪佳研究』(中國社會科學出版社、2011年5月。pp.17-18):王學對主體精神的肯定、影響於現實生活、便是隨著萬曆二十五年(1597)之後、朝廷中黨爭的日益加劇、士人退隱自全、將精神從治國平天下轉移到追求自我生命之受用與自我氣節之持守者漸眾、於是所有曠達恣意、猖狂自適的行為風習都變得可以理解 and 受人讚賞。
- ¹⁹ 沈超然『「越中園亭記」與晚明紹興園林研究』北京林業大學博士論文、2019年6月。
- ²⁰ (明)蕭良幹修、張元忭纂『紹興府志』(『中國方志叢書』、成文出版社、1983年3月)卷四、「山川志一」。
- ²¹ (明)沈德符『萬曆野獲編』(中華書局、1980年11月)卷二十六、「好事家」。
- ²² 郷紳について、寺田隆信『明代郷紳の研究』(京都大學學術出版社、2009年9月)は「郷紳とは、現任・賜暇・退任を問わず、官僚就任の経歴をもつ者の郷里における呼称であり、それをもたない举人以下、監生・生員などを士人として、両者を区別して扱おうとする見解がある」と述べ、また「明末当時の用語としての「郷紳」は、生員・監生・举人・進士などの身分乃至資格を持ち、郷里に居住する者の総称であった」と主張している。
- ²³ 前掲注22『明代郷紳の研究』参照。
- ²⁴ (明)祁彪佳撰『祁彪佳集』中華書局、1960年2月。
- ²⁵ 岸本美緒『明清交替と江南社会：17世紀中国の秩序問題』(東京大学出版社、1999年12月)pp.40-42参照。
- ²⁶ 吳晗『江浙藏書家史略』中華書局、1981年1月。
- ²⁷ 祁承燦『澹生堂藏書約』(『百部叢書集成』、藝文印書館、1966年)。
- ²⁸ 同上。
- ²⁹ 同上。
- ³⁰ 前掲注24『祁彪佳集』卷八、「越中園亭記」。
- ³¹ (明)凌迪知『万姓統譜』(文淵閣四庫全書本)卷八十八。
- ³² (明)商濬『稗海』「原序」。
- ³³ (清)陶際堯等纂修『会稽陶氏族譜』(清道光9年(1829)刻本)卷二十九、「祠祀坊表園亭志」。
- ³⁴ (明)陳仁錫『無夢園遺集』(上海圖書館1995年影印本)卷六、「大參祁父母夷度先生墓表」。
- ³⁵ (明)王思任編纂『祁忠敏公年譜』(『明代名人年譜』北京圖書館出版社、2006年7月)。
- ³⁶ 『祁彪佳集』卷十、「行實」、「三吳宦仆凌小民、宜興為甚。郷紳陳一教、二子皆居翰林、勢赫奕。豪僕肆毒、激地方變。焚陳氏室廬、發其祖墓、奸黠者乘機旁掠、恃罪拒捕、幾成大亂。朝議鹹推先生有定變才、先生即先巡歷、首正豪奴罪以平眾憤、次擒首亂以伸國憲、變遂定。」
- ³⁷ 『明史』卷三百五十七列傳二百八、「周延儒字玉繩、宜興人。萬曆四十一年會試、殿試皆第一。授修撰、年甫二十餘。美麗自喜、與同年生馮銓友善。天啓中、歷官右中允、掌司經局事。尋以少詹事掌南翰林院事。」
- ³⁸ 『明史』卷二百七十五、列傳一百六十三、「祁彪佳字弘吉、浙江山陰人。祖父世清白吏。彪佳生而英特、豐姿絕人。弱冠、第天啓二年進士、授興化府推官…崇禎四年、起御史…出按蘇松諸府。廉積猾四人。杖殺之。宜興民發首輔周延儒祖墓。又焚翰林陳于鼎于泰廬。亦發其祖墓。彪佳捕治如法。而於延儒無所徇。延儒憾之。回道考覈。降俸。尋以侍養歸家。居九年。母服終。召掌河南道事…遷大理寺丞。旋擢右僉都御史。巡撫江南(中略)明年五月、南都失守。六月、杭州繼失、彪佳即絕粒。至閏月四日、給家人先寢、端坐池中而死、年四十有四。唐王贈少保、兵部尚書、諡忠敏。」『祁彪佳集』卷十、「行實」、「……先是宜興之變、陳一教與罪輔周延儒姻婭也。先生定變、不稍徇情面、故周輔憾之。先生考核時、中官示意、政府不得已、擬帶降一級、蓋為周輔事也。上親易降俸。先生之忠誠、未嘗不受知於朝廷云。乙亥、

疏，得請歸養。時先生林居，奉母太夫人，朝夕色養，暇則究心性命之學，常焚香靜坐，悟萬物一體之旨。凡施濟事，知無不為」を参照。

- ³⁹ 『祁彪佳文稿』（書目文獻出版社、1991年6月）（二）「歸南快錄」p.1022。
- ⁴⁰ 前掲注24『祁彪佳集』卷七、「寓山注」。
- ⁴¹ 『祁彪佳文稿』（二）「歸南快錄」p.1013。
- ⁴² 『祁彪佳文稿』（二）「歸南快錄」p.1022。
- ⁴³ 『祁彪佳文稿』（二）「歸南快錄」p.1025。
- ⁴⁴ 『祁彪佳集』卷十「遺事（世系附）」「兄駿佳，字季超，行第四，崇禎戊辰選貢」。『浙江省紹興縣志資料第一輯』（紹興縣修志委員會輯、成文出版社、1983年3月）「見京師晏安，心竊隱憂，語諸在位，皆以為不然…取貢牒焚之，示不復進取，向大明門叩頭灑淚，馳歸家，入會稽山中築室，攜家人居之（中略）遂頓超玄悟，忘生死，齊得喪。」
- ⁴⁵ 『祁彪佳集』卷十「遺事（世系附）」「弟象佳，字翁艾，行第八，監生。」
- ⁴⁶ 『祁彪佳集』卷十「遺事（世系附）」「弟承勳，字爾雅，庠生，陝西布政司都事。」
- ⁴⁷ 『祁彪佳集』卷十「遺事（世系附）」「從兄多佳承勳長子，字止祥，行第五，天啓丁卯舉人，吏部司務。」
- ⁴⁸ 『祁彪佳集』卷七「寓山注」。
- ⁴⁹ 同上。
- ⁵⁰ 同上。
- ⁵¹ 同上。
- ⁵² 分見注12、荒井論文、p.449。注11、曹著書、pp.77-81。
- ⁵³ 『東坡全集』（文淵閣四庫全書本）卷一、「二十六日五更起行至礪溪未明」夜入礪溪如入峽，照山炬火落驚猿。山頭孤月耿猶在，石上寒波曉更喧。至人舊隱白雲合，神物已化遺蹤蜿。安得夢隨霹靂駕，馬上傾倒天瓢翻。」
- ⁵⁴ 『祁彪佳文稿』（二）「歸南快錄」p.1033。
- ⁵⁵ 讀易居、虎角菴、天瓢、四負堂の史料の出典は『祁彪佳集』卷七、「寓山注」である。
- ⁵⁶ 「寓山注」八求樓を参照。
- ⁵⁷ 『祁彪佳文稿』（二）「林居適筆」p.1063。
- ⁵⁸ 『祁彪佳文稿』（二）「小攄錄」p.1243。
- ⁵⁹ （乾隆）『紹興府志』（『中國地方志集成・浙江府縣志輯』上海書店、1993年6月）卷六十四、「商景蘭，字媚生，會稽吏部尚書周祚女，祁彪佳之配也。祁、商作配，鄉里有金童玉女之目，伉儷相重，未嘗有妾媵也。」
- ⁶⁰ 『祁彪佳文稿』（二）「山居拙錄」p.1081。
- ⁶¹ 『祁彪佳文稿』（二）「山居拙錄」p.1072。
- ⁶² 『祁彪佳文稿』（二）「自鑒錄」p.1111。
- ⁶³ 『祁彪佳文稿』（二）p.1080、p.1088、p.1090、p.1110、p.1121など。
- ⁶⁴ 『日記』の記載によれば、出てきた戯曲は「鵲橋記」、「水滸記」、「白兔記」、「連環記」、「双忠記」などである。つまり、当時に祁氏が見た戯曲とは伝奇戯曲や雑劇であったことが推測される。
- ⁶⁵ 『祁彪佳文稿』（二）「山居拙錄」p.1076。
- ⁶⁶ 『祁彪佳文稿』（二）「山居拙錄」p.1076。
- ⁶⁷ 『祁彪佳文稿』（二）「棄錄」p.1168。
- ⁶⁸ 『祁彪佳文稿』（二）「感慕錄」p.1205。
- ⁶⁹ 『祁彪佳文稿』（二）「小攄錄」p.1243。
- ⁷⁰ 『祁彪佳文稿』（二）「小攄錄」p.1235。
- ⁷¹ 『祁彪佳集』卷七、「寓山注」。
- ⁷² 『祁彪佳文稿』（二）「歸南快錄」p.1035。
- ⁷³ 『祁彪佳文稿』（二）「林居適筆」p.1041。
- ⁷⁴ 『祁彪佳文稿』（二）「山居拙錄」p.1074。
- ⁷⁵ 『祁彪佳文稿』（二）「棄錄」p.1163。
- ⁷⁶ 『祁彪佳文稿』（二）「山居拙錄」p.1075。
- ⁷⁷ 『祁彪佳文稿』（二）「林居適筆」p.1066。
- ⁷⁸ 『祁彪佳文稿』（二）「棄錄」p.1175。
- ⁷⁹ 『祁彪佳文稿』（二）「自鑒錄」p.1110。
- ⁸⁰ 『祁彪佳文稿』（二）「林居適筆」p.1056。
- ⁸¹ 『祁彪佳文稿』（二）「山居拙錄」p.1081。
- ⁸² 『祁彪佳文稿』（二）「山居拙錄」p.1083。
- ⁸³ 『祁彪佳文稿』（二）「自鑒錄」p.1120。

- 84 『祁彪佳文稿』(二)「感慕錄」p. 1197。
- 85 『祁彪佳文稿』(二)「癸未日曆」p. 1354。
- 86 前掲注 14 論文を参考。
- 87 前掲注 9「江南園林與城市社會—明清蘇州園林的社會史分析」による。
- 88 『越中園亭記』三、「予姊適何芝田，崇信佛道，於峽山前購此以為靜修地，北倚山，南亦面山，東與西若環若拱，白石清泉，坐而取之有餘也。」
- 89 『祁彪佳文稿』(二)「林居適筆」p. 1063、「山居拙錄」p. 1079、「自鑒錄」p. 1119、「棄錄」p. 1173。
- 90 「爛柯山房」以外の泊まる先について、次のように見える。「二十四日(中略)先令奴輩移器具於寓山，予與內子薄暮出，宿於八求樓下」『祁彪佳文稿』(二)「感慕錄」p. 1179、「奉老母少憩，內畫室為劉乾所草公書，日來覆閱通鑒紀事中比魏事，晚與內子出寓山宿於八求樓下」『祁彪佳文稿』(二)「感慕錄」p. 1183。
- 91 『祁彪佳集』卷七、「寓山注」による。
- 92 『祁彪佳文稿』(二)「棄錄」p. 1144。
- 93 『祁彪佳文稿』(二)「棄錄」p. 1145。
- 94 『祁彪佳集』卷七、「寓山注」。
- 95 『祁彪佳文稿』(二)分見「自鑒錄」p. 1110、p. 1121、p. 1122、p. 1131、p. 1138。
- 96 『祁彪佳文稿』(二)「二十四日，至柯園邀止祥兄過寓園，薄午，倪鴻寶，曾譙甫，柳白嶼，可一師同舟至，舉五簋於四負堂，小憩起，共酌於靜者軒」『山居拙錄』p. 1090、「初七日，奉老母於寓山乞巧，予與諸友、諸兄弟亦共集寓山，齊企之。至為止祥兄文載弟博奕角勝得來……客漸散去，獨與曾榔諸兄飯於通霞臺，乃棄月歸」『山居拙錄』p. 1091。
- 97 『祁彪佳文稿』(二)「林居適筆」p. 1056。
- 98 『祁彪佳文稿』(二)「感慕錄」p. 1183。
- 99 『祁彪佳集』卷八「越中園亭記」、「密園 先子生平有園林之好，上公車時即廢箸構此，然亦止密閣、夷軒、淡生堂數處耳。嗣後俸餘所入，盡用置園。曠亭一帶以石勝，紫芝軒一以水勝，快讀齋一帶以幽邃勝，蔗境一以軒敞勝。先子於此具有匠心焉。詳載密園前後記及行園略中。」
- 100 『祁彪佳集』卷八「越中園亭記」、「柯園 吾鄉，水國也。梅市之西，諸水畢匯。予兄止祥孝廉儉於構室，豐於取景，虛堂小閣，皆若隱現於雲濤雪浪中。遊人以畫舫過之，足奪明聖一席矣。」
- 101 『祁彪佳集』卷八「越中園亭記」、「彤園 王雲岫別駕所居，盡鑑湖之勝。左有彤山，搜剔之石質，玲瓏不減太湖、靈璧。主人蓄梅種桃，有志於構造者三十年矣，一旦取而園之，虬枝老幹，攢踞於石罅間，穴山趾為沼，削壁亭亭立水中。入門度小橋，委折而登清鑑閣，心目豁然。白閣西行，曲廊小軒，各極幽夷之致。北望寓園，褰裳可至，柯園亦近在咫尺。予與止祥兄時操小艇過之，覺魯望、襲美不能擅勝於古昔矣。」
- 102 『祁彪佳文稿』(二)「山居拙錄」p. 1072。
- 103 同上。
- 104 『祁彪佳集』卷九「寓山士女春遊曲」。
- 105 『祁彪佳文稿』(二)「小採錄」p. 1262。
- 106 『祁彪佳文稿』(二)「小採錄」p. 1263。
- 107 『祁彪佳文稿』(二)「壬午日曆」p. 1284。
- 108 同上。
- 109 『祁彪佳文稿』(二)「小採錄」p. 1264。
- 110 『祁彪佳文稿』(二)「小採錄」p. 1229。
- 111 『祁彪佳文稿』(二)「癸未日曆」p. 1355。
- 112 『祁彪佳文稿』(二)「癸未日曆」p. 1354。
- 113 『祁彪佳文稿』(二)「甲申日曆」p. 1365。
- 114 『祁彪佳文稿』(二)「甲申日曆」p. 1368。
- 115 『祁彪佳文稿』(二)「乙酉日曆」p. 1429。
- 116 『祁彪佳文稿』(二)「乙酉日曆」p. 1435。
- 117 『祁彪佳集』卷十、「行實」。
- 祁彪佳について、次のような記載がある。『祁彪佳集』卷十「遺事(世系附)」、「從弟熊佳。字文載。行第七。崇禎丙子順天舉人。庚辰進士。福建南平縣知縣。」
- 118 「父臨訣遺囑付兒理孫班孫遵行」((清)杜煦、杜春生輯『祁忠惠公遺集』道光二十二年(1842)刻本、國家図書館蔵)。
- 119 鳳佳の子、字は奕遠、廩生。
- 120 (乾隆)『紹興府志』卷五十四、人物志十四、文苑、「祁班孫，字奕喜，山陰人。明蘇松巡撫彪佳次子也。年十四而彪佳殉國。班孫性敏慧，即無意進士業，乃學為詩。時同邑朱士稚，慈溪魏畊，歸安錢纘曾

俱以詩名，班孫與之遊，館畊於家，上下其議論，由是詩日益進，自以義烈，之後亡國，餘生不敢放聲肆言，而幽怨所激，憂深思微，以會合風人之旨。順治十八年，畊纘曾俱以罪見法，班孫坐流寧古塔，至戍所數年，為沙門尋卒。所著自怡堂集三卷。愈志 案班孫兄理孫，字奕慶，以才藻自豪，後閉門謝客，詩文多散佚」。『嘉慶山陰縣志』「理孫字奕慶，以忠惠贈尚書，故得賜任，次班孫字奕喜，以詩名。忠惠死節後，祁氏群從之長曰鴻孫者，將兵江上，思以申忠惠之志，理孫兄弟罄家財餉之，又有慈谿魏耕者，善談兵。理孫兄弟曲奉之，已而大兵捕得耕並縛公子兄弟，去及獻，兄弟爭承。祁氏之客謀曰，二人並命慘矣。乃納賄賂宥理孫，而班孫戍遼左。後理孫竟以痛弟鬱鬱死，班孫後脫歸祝髮吳之堯峰，尋主毘陵馬鞍山寺，所稱呪林明大師者也。」

¹²¹ 以下史料の出典：『祁彪佳集』附編「商夫人錦囊集」。

終章

終章では、前四章の内容をまとめると共に、宋代と明代の私家園林の相違点を明らかにした上で、元代の江南私家園林の発展状況を考察し、江南私家園林の宋代から明代までの間の発展、変化を究明する。最後に今後の課題について述べる。

1. 本論のまとめ

本論は蘇州、湖州、紹興の三例のケーススタディを通じて、宋代から明代に至るまでの江南私家園林の分布、特徴及びそこで展開した交遊活動を検討した。

序章では、従来の宋代の園林の研究成果を整理し、それと同時に、明代の園林についての代表的研究成果と比較しながら、園林研究の可能性を検討した。まず、明代の園林研究の現状について述べ、それを参照した上で、時代を遡る形で、主に(1)園林の公共性、(2)園林構造、造園手法、造園思想、(3)園林生活という三つの面から宋代園林研究をまとめて整理し、現在の研究の到達点を明らかにした。つまり、宋代園林研究は明清園林研究とは異なり、現存している園林が少なく、文献史料、絵画史料や遺跡に依存するため、明清園林のように十分な研究が行われていない。また、宋代園林について経済的機能面から論じることは難しく、家族の園林での活動についても研究し難い。2000年以後、宋代園林研究は増加する傾向にあるが、研究の視点は類似しており、使われている史料も限定されている。

こうした研究の現状を踏まえて、今後の研究方向を指摘すれば、(1)日記、手紙、序、題、跋などの史料の利用、(2)多様な文集史料の使用による、士大夫の園林における多彩な文化活動の考察、(3)宋代園林の学術、教育機能についての検討、(4)宋代と明代の園林との比較という四点が挙げられる。

第一章では、宋代の湖州私家園林を事例として分析を行った。湖州は自然風景に優れ、

経済が発達し、文人墨客に愛された。南宋に入ると、宋室の南遷が湖州園林の発展を促進した。南宋遺民の周密は『呉興園林記』を作成し、南宋の湖州府城内及びその近郊の私家園林を詳細に記録した。そこから南宋の湖州私家園林は繁栄していたことが判明した。園林分布を確認すれば、苕溪、霅溪が湖州城内を流れ、城内の私家園林は多く川沿に散在した。一方、城外の私家園林は多く山に沿って造られ、湖州園林が自然風景を求める傾向が窺える。南宋に入ると、宋室の南遷が湖州園林の発展を促進した。北宋の開封の皇家園林である艮嶽が作られた後、太湖石を好む趣向が盛んになり、その産地としての湖州には、太湖石を主要な景観とする私家園林が出現した。それと同時に、多くの蔵書家が湖州に集まったことも蔵書事業を促進し、後世に影響を与えた。そして、湖州園林を巡る士大夫の交遊について、文学者、史学者、宗室の三つの人々に焦点を当てて分析した。湖州は輔郡として、宗室や士大夫が集まり、文化や風俗などが臨安と類似していたと思われる。湖州の私家園林を事例として、南宋の私家園林は士大夫にとって心痛を慰め、または理想を託す存在であった。彼らの園林生活は隠逸の雰囲気を持っており、文化活動や文学の交流に満ちていたと思われる。

第二章では、宋代の蘇州私家園林に着目し、以下のことを明らかにした。まず、園林の分布から見れば、北宋中期までに蘇州城内の開発が進んでおり、空き地が多く残っていた。その時の私家園林は主に城内の閭門を含む北部地区及び盤門周辺の運河に近く、交通の便利な場所に分布していた。それに対して、南宋になると、戦争の影響、及び都市経済の発展、人口増加などの影響によって、私家園林の多くは城外の崑山及び太湖周辺の自然風景の優美な地域に分布するようになった。そして、蘇州には著名な園林主と私家園林が多かった。蘇州の有名な園林主の多くは教育者、文学者、政治家として知られている。彼らは郷里に隠居する際に、或いは辞官後、私家園林を造った。それから私家園林と士大夫の生活は益々密接な関係を結んでいく。蘇州私家園林と士大夫の交遊について、蘇州出身の士大夫と移住してきた士大夫とに分けて分析した。北宋の蘇州私家園林は退職官僚の老後生活を楽しむ場所であり、彼らは私家園林を造営し、宴会を開いて酒を飲みながら詩を作るほか、「九老会」のような雅集もよく行っていた。私家園林に訪問して来る多くの人物は園

園林主の才能を敬慕するか、その社会地位に頼ろうとすることがあった。移住して来た園林主は罷免されたり、退職したりするなどそれぞれの理由があるが、移住者にとって、蘇州の私家園林は避難地であり、現地の士大夫と交遊するきっかけともなった。北宋の蘇州の私家園林は質朴な特徴が見られるが、南宋に至ると、蘇州私家園林は益々精緻になり、園林自体の魅力で観覧客の目を引き、園林主の上品な趣味と社会地位などを表す芸術品となり、交遊活動に不可欠な空間となっていく。

第三章では、宋代の紹興私家園林を考察し、以下のことが明らかとなった。紹興は歴史文化の名城として知られており、園林の発展は春秋時代から始まり、六朝時代に盛んになり、明末になると最盛期を迎えた。その発展は各々の時代背景と関わっている。春秋の范蠡が作成した一連の宮台苑囿は紹興の早期の皇家園林の雛形と見做されている。六朝時代に入ると、社会の動揺が士大夫の隠逸思想を促進させ、当時の江南の大都会であり、自然の山水風景に恵まれた紹興に、人々の眼が集まり、園林が数多く作られた。南宋に至ると、紹興は浙東地域の中心地だけではなく、皇陵の所在地でもあり、また交通が発達し、仏教文化と蔵書文化が繁栄した都市である。この社会背景は私家園林の营造を促進した。自然の風景が優れているため、宋代紹興の私家園林の多数は質素な自然の山水を活かしたものである。六朝の隠逸思想は紹興園林に深く影響を与えて、自然と融合した道学思想の影響を受けた私家園林も発現する。私家園林のデータを整理した結果、宋代紹興の私家園林の多数は紹興府の城外に造られた。そして、会稽県・山陰県・新昌県に多くの私家園林が集まっており、自然風景に頼ることを共通の特徴とするが、特に新昌県は宋代の紹興府内において教育の熱心な地域であり、この雰囲気や当地の私家園林の構造や機能に溢れている。一方、紹興城内の私家園林に関する史料は少なく、特徴は不明とせざるを得ないが、愛情物語によって有名になった沈園は特別な存在と見なすことができる。沈園にある亭台楼閣と小橋流水の景勝は他の私家園林にも普通に見られるが、陸游が残した「釵頭鳳」及び唐氏との離別を残念に思う物語が語り継がれているため、沈園は現在に至っても紹興の著名な遊覧地としてよく知られる。

第四章では、明代の紹興私家園林について以下のことが確認できた。明代中期以後、商

品経済の発展とともに、江南地域に造園ブームが起こり、私家園林は最盛期を迎えた。紹興は山水風景が優美であり、数多くの私家園林を造営しただけではなく、『越中園林記』のような専門的園林著作も作成された。明代の紹興私家園林分布について、城内の園林の多くは臥龍山、蕺山、龜山に集中する傾向がある。他に、東南部は水資源が豊富で、視界が開けている。また府学があるため、多くの園林がそこに分布していた。一方、城外の園林は風景地又は旅行地である常禧門外、稽山門外に多く分布する傾向が見える。また、造園宗族が多く、園林内の蔵書楼や仏教信仰の建物の設置も紹興園林の特徴と考えられる。また、本章では代表事例として寓園を考察した。早期の寓園には49景があるが、園林の修造がずっと持続的に行われ、祁彪佳の生きていた時には寓園の空間が絶えず変容していた。寓園は祁彪佳の官途失意後の寄託の場所であり、家族への感情を代弁する空間でもあった。そして、『日記』に基づいて時間の流れを見れば、崇禎八年（1635）から弘光元年（順治2年（1645））までの十年間、寓園は異なる時期にそれぞれ別荘、第二住宅、避難所として利用された。いずれの時期においても、山頂辺りは祁氏家族の私人的空間として利用されていた。四負堂、読易居を含む麓が祁彪佳の主な交遊空間であり、開放される時には家屋の内部の空間以外は全部遊覧されることとなる。また、明末の時期、避難所となった寓園は、山頂と八求楼周辺が祁氏家族の居場所となり、寓園の西側は友人に居住させた。祁彪佳が国難に殉じた後、寓園の麓あたりを寺院に寄付し、息子の理孫、班孫の清朝廷に反抗する運動への参加によって「空間」がなくなる終局を迎えることとなった。

2. 総合的考察

ここでは、本論で考察した宋代の私家園林と明代の私家園林を比較して考察を加える。宋代の湖州、蘇州、紹興の私家園林を考察した上で、これらの私家園林には以下のような特徴があると考えられる。紹興を蘇州や湖州と比べると、三者とも南宋においては首都杭州を取り囲む「京畿」に位置する重要な地域であった。また、風光明媚で、ともに蔵書文化を有する都市である。私家園林を見ると、宋代紹興の私家園林は蘇州や湖州さらには杭

州のような知名度の高い存在ではない。蘇州や湖州は太湖に近いので、太湖石に代表されるような奢侈品を追求する。しかしながら、紹興は質朴な気風で、自然風景に頼る傾向がある。また、園林主を見ると、湖州の私家園林は、皇族、四川移民であり、蘇州の私家園林は士大夫や退職官僚が多く占めていた。紹興の場合は士大夫と教育家が主体となっている。また、南班宗室が居住したという記載も見られるように、皇族が園林を築いていた可能性もある。

一方、明代の私家園林の場合、まず数量は明代が圧倒的に多い（宋代蘇州 98 箇所、紹興 26 箇所¹、明代蘇州 260 余箇所、紹興 199 箇所²）。社会経済の発展、結社の気風、陽明学の流行の影響を受けて、明代中期以後の造園風潮が盛んになった。それと同時に、商品経済の発展が商人の地位を向上させて、園林主の身分は主に上層士大夫から富民へと広がりを見せる傾向が窺える³。園林自体をみれば、宋代の私家園林は自然山水に頼るのに対して明代中期以後は人工的景勝を造ることが流行し、そして園内の建物の数が増え、祭祀、仏堂の配置も屢々見える。つまり、私家園林の機能が更に多様化していった。最後に、宋代の私家園林の私人的、単純な構造などの特徴と異なり、明代の私家園林は開放性に加えて、園林が士大夫や富民の間で売買されていくなど経済的機能を有するようになる。また、明代の造園ブームが園林の関連事業（造園師の雇用事業など）を動かし、その発展を促進したことも考えられる。

宋代においては私家園林が急速に発展し、後の明代、清代における私家園林の繁栄の基礎を固めることとなる。明代の私家園林は数量が多いだけでなく、宋代より造園の地域の広がりを見せる。現段階では、異なる時代の私家園林を比較することを通じて園林の表面的変化しか見えないが、その裏にある社会背景、政治制度、思想風潮などを考慮した上で、私家園林の発展する軌跡を明らかにすることを今後の課題にしたい。

なお、本論文では、宋代と明代の江南私家園林の事例を挙げたが、その間の元代の私家園林についても言及しておく必要がある。ここで先行研究を振り返りながら簡単に元代の江南私家園林についてまとめてみる。

3. 元代の江南私家園林

元代の園林について、大都（北京）に皇家園林の造営を確認できるが、それに対して、全国における私家園林の造営は盛んではなかった。戦争によって園林は多く破壊されており、また元朝は江南支配後から計算すると89年しか存在しなかったため、園林の発展はほぼ停滞していたと言って良い。

しかし、蘇州は例外であると魏家瓚氏が主張している。氏によれば、蘇州には優良な自然環境があり、しかも経済の発達地域であるため、王朝の交替とともに衰退したりはせず、元代になっても蘇州は相変わらず豊かな地域であり、特に、農村の豊さが目立つ。士大夫たちは官途を放棄せざるを得なく、多数の人は隠居生活を過ごした。それは元代の蘇州私家園林を発展させた重要な理由となった。官途に挫折した士大夫たちは詩や絵画にその苦悶や理想を寄せて、更に絵画にこめられた境地を園林の造営に実践するに至った⁴。章末に付した【表6：元代蘇州私家園林表】（以下【表6】と略記）によれば、魏家瓚氏の主張したように、元代の蘇州私家園林は発展し続け、それは蘇州郊外の郷村に発展していく傾向が見られる。そして、園林主として、官僚より、文人、富民などが数多く占めている。

元代に造られた蘇州私家園林として、獅子林をまず挙げなければならない。今でも獅子林は蘇州の代表的な園林の一つとして知られている。獅子林は元々寺院園林であり、本研究の研究範囲（私家園林）と異なるが、元代の代表的園林であるため、ここで簡単に紹介する。（正徳）『姑蘇志』は、獅子林について以下のように記載する。

獅子林菴在城東北隅，元至正二年僧維則建。則多聚奇石，狀類狻猊，故取佛氏語名⁵。
獅子林は至正二年（1342）に僧侶の維則によって造営された。中には数多くの太湖石、竹を設置し、景色の優美の寺院園林であった。魏家瓚によれば、獅子林は宋代の別業の旧址を基礎にして造営された園林である。元代末期に、張士誠が蘇州を十一年ほど占拠し、その時獅子林はその娘婿の潘元紹の住所となった。そののち、嘉靖年間に一度私人所有となったほかは、明代末期まで基本的に寺院園林として存在していた⁶。

ほかに、元代蘇州の有名な私家園林として、顧瑛の玉山佳処（玉山草堂ともいう）が挙

げられる。

顧瑛編『玉山名勝集』は現存し、そこから園林の風景や元代文人の雅集（文人が集まり、詩を作り、絵を画いたり、書画や骨董品を鑑賞したりする宴席）の様子を確認できる。玉山雅集に関する研究成果は少なくない。例えば、魏嘉瓚(2005)、李曉航(2008)、曾瑩(2011)、牛貴琥、顧文若(2018)、檀若曦(2018)などがある。魏嘉瓚(2005)は玉山佳処の園林主、景勝、交遊人物について簡単に考察している⁷。

李曉航(2008)、曾瑩(2011)は顧瑛について考察を行った。顧氏は昆山の豪族であり、曾祖は宋室の官僚で、祖父は元朝に帰順したため、王朝交代の中で顧氏一族は平安無事に過ごした。父は家族の経営を息子たちに委託し、毎日書画や骨董品に関心を寄せていた。それ故、顧瑛は若い頃から家業を担うようになった。元朝は北方に政治中心地があり、南方の物資に強く依存したため、海運の要衝である崑山にいた顧瑛は商業に参入し、巨額の富を築いた。後に社会地位を向上するために、学問を研鑽して園林を造営し交遊活動に身を投じた⁸。

牛貴琥、顧文若(2018)は玉山佳処での雅集に人々が積極的に参加する理由に注目している。園林主の顧瑛は商人であるが、学問にも熱心であり、崑山に24箇所の景勝を含む私家園林を造営し、そこで33年のうち182回の雅集を行った。当時の有名な文人、官僚、僧侶などと交遊した。その中には、モンゴル人や色目人も含まれる。その雅集の規模の大きさ、時間の長さ、参加者の多さは歴史上でも特筆される。優美な園林風景、便利な交通は玉山雅集がよく行われた原因といえる。さらに、園林主の顧瑛は商人として多くの人と交遊を図りながらも、文人としての素養も身に付け、官僚、士大夫、僧侶などの蘇州の著名な人々と親しい関係を保持することを企図したことが長期的に雅集の行われる理由となった。玉山雅集は非政治性、非功利性、開放性があり、また、束縛のない活動である。つまり、多種多様な人がくつろぎ、身分や社会地位を超えて享楽できる空間であった⁹。

檀若曦(2018)は玉山草堂を事例として、元代の園林と園林生活に焦点を当てている。園林主の顧瑛は商人であるが、30才頃からに読書に耽り、40才になると息子に家業を経営させて、自ら玉山草堂を造営し、雅集に力を尽くした。雅集の内容として、宴飲、賦詩、読

書、清談、月見、茶道、絵画、鑑賞、音楽、舞踊、遊覧などの活動を列挙し、その活動が行われた季節（四季）と場所をまとめた。また、園林の各々の景勝を詳細に考察し、玉山草堂の風貌を明らかにした。玉山草堂は広くて機能が多様で、純粋な文人の生活状態を現せる私家園林であると論じている¹⁰。

玉山雅集は元代の江南文人の心理状態や生活状況を反映していると考えられる。顧瑛のような元末の文人は鬱々として志が叶えられないというより、自由自在な園林生活を享受し、自分にとって理想的な生活を求めていた様子が窺える。

上記の成果を通じて、宋代、明代と比べながら、元朝の江南私家園林の特徴を述べてみたい。

まず、元代の蘇州私家園林分布について、前文に言及したように、都市郊外の郷村に発展していく傾向が見られる。その理由には、まず、多数の隠士が郊外の風景地を選んで、静かであり安価な土地で私家園林を営造したことが考えられる。そして、元代の海運は港の周辺地域の造園風潮を促進した。元代では、劉家港が江南の重要な海運港となる。この劉家港は太倉にあり¹¹、昆山にも繋がる。【表 6】を確認すれば、太倉、昆山の私家園林は少なくない。つまり、海運の発展はその周辺地域の造園事業を促進したこととなる。

そして、元代に至って、私家園林の園林主身分の範囲は富民まで拡大したことがわかった。顧瑛は唯一の事例ではない（例えば、下記【表 6】に、「梧桐園」の主人は「郷富室曹善誠」であり、「花園堂」の主人「朱清」も海商であった）。元代江南の商人について、矢澤知行が論じたように、「元代の中後期は（中略）江南とくに長江デルタ地域にあっては、諸産業の発展を背景に富民・豪民といった在地の農商諸勢力が社会経済的な実力を蓄えていた時期と見ることができる。その中でも主要な位置を占めていたのが、海運事業や海上貿易で財を成した有力な船戸や海商たち、あるいは大運河沿線の揚州や蘇州などを拠点に活動して資産を形成した塩商たちであった¹²。」海運を通じて財産を蓄えてから、私家園林を楽しむパターンは決して少なくないと思われる。この状況は、宋代の士大夫層や宗室が造園の主流となる現象とは異なりながら、明清時代の商人の造園風潮に影響したと考えられる。

さらに、造園の目的であるが、宋代と明代の場合は、主に官途挫折を受けて私家園林に志を託すか、或いは退職官僚が老後生活を楽しむために造園する事例が多かった。元代の造園においては、顧瑛の事例からみれば、自分の興味に従うことや家族の社会地位を維持、向上させる目的があったと考えられる。また、私家園林の营造を通じて、有名な文人や官僚と交遊することによって、ネットワークを広げることも可能であった。

最後に、雅集について触れておきたい。30年間に同じ場所で200回近くの雅集を行ったことは宋代ではなかなか見られない。宋代の場合は、耆老会、九老会のような集会活動はあったが、開催回数や参加者、雅集の形式など、元代と異なる点があると考えられる。具体的にどのような差異があったのかは現段階では結論を下せない。今後の課題としたい。また、元代の雅集の形式、内容、明清時代への影響についても考察すべきだと考えている。

4. 今後の課題

本論文では宋代から明代までの江南私家園林について考察を行ったが、今後の行うべき課題として以下のように考えている。

(1) 異なる時代における江南私家園林の分布

巫仁恕氏は明、清の蘇州の私家園林の分布の差異について分析している。明代は北西方向に分布していたのに対し、清代は東南方向に分布する傾向へと変化していく。この変化は蘇州城内の各々の地区の経済的発展と深く関係している。また、郊外の私家園林の多くは閶門周辺、虎邱に集中していた¹³。つまり、私家園林の分布を究明すれば、異なる時代の都市の経済的発展状況を窺うことができる。現段階では十分に考察されていない宋代の園林の経済状況に加えて、元代の江南私家園林についての考察も不十分であり、明代の事例についても対象を増やし、園林と交通、物流、経済との関係性について考察していく必要がある。さらに園林の盛衰は、政治的、社会的、文化的身分を有する園林主と深く関わっ

ており、園林主の変化から宋から明代に至る変化を展望することも不可欠となる。

(2) 周辺社会における私家園林の発展

本論文は宋代から明代までの江南私家園林に注目しているが、宋代に特に研究の焦点を当てた。特に蘇州、湖州、紹興は南宋において行在の都臨安の近く、「輔郡（首都圏）」に位置しており、いわゆる、「中心社会」にあると言って良い。平田茂樹氏は近年、これまで研究が集中してきた首都及び首都圏、さらには先進地の中心社会ではなく、宋代の周辺社会のネットワークに注目している¹⁴。この視点に従い、宋代の「周辺社会」に展開する私家園林についても考察を進めていきたい。

(3) 史料の発掘、活用

本論文では、園林詩、園林記、地方志、日記などの史料を使用している。宋代は園林に関する記載が少なく、私家園林がどのように使われたかなど具体的情報が獲得できなかった。しかし、宋代士大夫の交遊という観点に目を転じると、文集内に収められている題跋、記、序、墓誌銘、行状、詩詞など多様な史料活用が可能性として浮かび上がる。こうした史料の中では士大夫の送別、雅集、訪問の場面が多様に描かれる。さらには宋から明への移行を考えていくと、小説、戯曲、絵画、族譜などの新史料の発掘が必要となる。例えば、元雜劇や明清小説には園林はよく登場する。主人公と他の人々とのやり取りの中から、園林がどのように利用されたことを考察することも一つの可能性である。また、明末に編纂された三言二拍は宋代の時代を描写するものが多くみられ、後の時代の史料をもとに宋代園林を復元し、元、明へとつなげていく方法が一つ考えられる。

以上の課題を確認し、さらにケーススタディを積み重ねて、宋代から明代までの私家園林の発展状況を明らかにすることとしたい。

【表 6：元代蘇州私家園林表】¹⁶

番号	名称	園林主	時間	場所	備考
1	王鵬隱居	王鵬		洞庭東山、近千山嶺	
2	壽慶堂	漕府史彥章			揭趙孟頫書「白雲」二字於窗間
3	石礪書隱	隱士俞琰	至正	府學西、南園旧址、俞家橋	其孫貞木、貞木孫振宗
4	求志居	盧廷瑞		吳山下	
5	學詩齋	提舉鄭元祐			『僑吳集』有詩
6	說易樓	俞仲溫		洞庭西山	藏其父玉吾遺書、「說易樓記」
7	淶水園	陳汝秩、汝言	至正	孫老橋東	原朱勛同樂園、入春時士女遊
8	小丹丘	陳基	至正	天心里	戴良「小丹邱記」
9	漁庄別業	王雲浦	元末	姚城北	倪雲林「漁庄秋色圖」
10	清寧庵	徐処士	大德	吳興張林山西	
11	潘元紹宅	潘元紹		潘儒巷	章線旧宅、前後左右皆有別業、獅子林所在
12	香桐、香惠園	吳王張士誠		城東北、桐芳巷	
13	王鑿宅	処士王鑿		盤門內	
14	秦余杭山居	吳淳		陽山	
15	吳鈺宅	吳鈺		滸墅關鎮大樹村	
16	老相公衙	參政周伯琦		幹將坊	伯琦使吳被留、張氏構此地
17	聽雪齋	西夏鄔密公		天宮里	
18	笠澤漁隱	陸德原		昆山吳淞江	陸龜蒙九世孫
19	靜春別墅	高士袁易	元初	蛟龍浦之赭墩	
20	柯九思宅	柯敬仲		城東胭脂橋	虞集、趙孟頫友
21	張雨寓舍	処士張伯雨		虎丘西	虞集、楊載、趙孟頫友
22	南軒	山人虞堪		甫里	
23	周仲宅	隱君周仲		青丘	
24	錦春園	吳王張士誠	元末	城東桐芳巷	
25	春錦園	張士信		王府後	
26	金宏業宅	鄉賢金宏業		水東下堡村	
27	宋克宅	同知宋仲溫		南宮里	
28	壽樂堂	宋季呂		虎丘	
29	宋通宅	宋文傑		閶門外	
30	松石軒	參知政事朱廷珍	元初	蘇州城真ん中	鄭元祐「松石軒記」
31	束季博園池	束季博		文廟前	
32	耕漁軒	徐達佐		吳興光福山	
33	玉山草堂	顧瑛	至正	昆山正儀鎮	鄭元祐「玉山草堂記」
34	梧桐園	鄉富室曹善誠		常熟陸庄橋	
35	芙蓉庄			常熟	
36	谷林	參議虞似平		常熟城西虞山南麓	
37	桃源小隱	徐彥弘		常熟虞山北郭	
38	城南佳處	虞子賢	元末	常熟東偏芝溪上	
39	万玉清秋軒	江南財賦司副使寧昌言		吳江同里鎮	園極大
40	水花園	葉振宗		吳江同里鎮	張可觀為之囡
41	目瀾洲			吳江盛澤鎮	
42	小瀟湘	寧伯讓		吳江長橋南	
43	南村	隱士張璘	元末	吳江綺川	
44	南園	瞿智		太倉沙溪鎮	

45	樂隱園	瞿逢祥		太倉沙溪鎮	
46	來鶴園	張寅		太倉城外	
47	花園堂	朱清		太倉	
48	周氏園	周賢		太倉雙鳳	
49	怡園	周豫		太倉涂崧	
50	夔園	顧氏		張家港市楊舍鎮	
51	千林園	僧乘白雲		昆山	建以怡親
52	秦氏園	秦約		昆山	
53	朱氏園	朱士隆		昆山	
54	慕家園	太常卿夏氏		昆山馬鞍山	内有鶴冢
55	丘家園	丘氏		吳県馬跡山	内有義冢
56	灰堆園			吳県鳳池郷	仕婦遊樂之地
57	廬氏山園	臨安縣尹廬廷瑞		城内西南横山下	
58	程園			城内	
59	葉園			城内	
60	俞家園			城内	

¹ 第2章と第3章を参考。

² 魏嘉瓚『蘇州古典園林史』（上海三聯書店、2005年11月）、祁彪佳『越中國亭記』、『成化新昌県志』、『万曆紹興府志』などを参考。

³ 富民の概念について、林文勛が論じている。即ち、富氏は「富室」、「富戸」、「富家」、「富人」、「富姓」、「多資之家」、「大姓」、「右族」、「望族」とも称される。富氏は少数の商人を含むが、その多くは農村で土地経営によって富を積む人である。彼らは社会上の富裕者、さらに農村における富裕階層である。（林文勛等著『中国古代「富民」階層研究』雲南大学出版社、2008年2月、p.18-19）

⁴ 前掲注2『蘇州古典園林史』。

⁵ （正徳）『姑蘇志』（文淵閣四庫全書本）卷二十九。

⁶ 前掲注2『蘇州古典園林史』、郭明友「倪瓚『獅子林図』及蘇州獅子林早期興廃考」（『芸術百家』、第4期総第145期、2015年7月、pp.185-188）は獅子林を嘗て潘氏が所有していたことを否定している。

⁷ 前掲注2『蘇州古典園林史』。

⁸ 李曉航「顧瑛与玉山雅集研究」（中南大学硕士学位论文、2008年5月）、曾瑩『文人雅集與詩歌風尚研究初探：從玉山雅集看元末詩風的衍變』（広東高等教育出版社、2011年5月）。

⁹ 牛貴琥、顧文若「論玉山雅集與元後期文士群體的追求」（『江西社会科学』第8期、2018年8月、pp.87-94）。

¹⁰ 檀若曦「玉山草堂与元末江南文人園居生活研究」蘇州科技大学硕士学位论文、2018年6月。

¹¹ 2016年に太倉樊村涇で元代の遺跡が発掘された。そこから数多くの陶磁器が出土し、太倉の重要性が認識されつつある。（蘇州市考古研究所、太倉博物館『大元・倉：太倉樊村涇元代遺址出土磁器精粹』上海古籍出版社、2018年3月）を参考。

¹² 矢澤知行「元代の水運と海運—華北と江南はいかにして結び付けられたか」（櫻井智美、飯山知保、森田憲司、渡辺健哉編『元朝の歴史—モンゴル帝国期の東ユーラシア』勉誠出版、2021年5月）、p.102。

¹³ 巫仁恕『優游坊廂：明清江南城市的休閒消費与空間變遷』台湾中央研究院近代史研究所、2013年3月。

¹⁴ 平田茂樹「南宋士大夫のネットワークとコミュニケーション—魏了翁の「靖州居住」時代を手がかりとして—」（『東北大学東洋史論集』第十二輯、2016年3月、pp.215-249）、同「南宋周辺社会における士大夫の交流と「知」の構築—魏了翁、呉泳、洪咨夔の事例を手がかりとして—」（『大阪市立大学東洋史論叢』第18号、2017年12月、pp.1-20）。

¹⁵ 邵忠編『蘇州園墅勝跡録』（上海交通大学出版社、1992年4月）、魏家瓚『蘇州歴代園林録』（北京燕山出版社、1992年3月）、（同治）『蘇州府志』（『中国地方志集成』江蘇古籍出版社、1991年6月）、鄭元祐『僑吳集』（文淵閣四庫全書本）、（清）沈辰垣等編『歴代詩餘』（文淵閣四庫全書本）、（元）顧瑛編『玉山名勝集』（文淵閣四庫全書本）、（明）錢穀『呉都文粹續集』（文淵閣四庫全書補配清文津閣四庫全書本）に基づく。